



二〇二二年度桑原ゼミ卒業論文集

二〇二一年度栞原ゼミ卒業論文集

はじめに

この電子書籍は、近畿大学文芸学部文学科日本文学専攻創作・評論コースの、栞原が担当していた創作・評論演習2を二〇二一年度に受講していた学生の卒業制作と副論文をまとめたものです。栞原担当の演習の成果をまとめたものとしては十冊目となります。

卒業制作では作品と副論文を提出するわけですが、作品（小説）と副論文とが密接に関連している場合もあれば、関連していない場合もあります。小説「過ちて徒然に」と副論文「日々の暮らしのマイノリティ」は前者、小説「秋桜」と副論文「世間のイメージとホストクラブの実態」は後者ということになります。

とはいえ、「70年代若者文化」を論じた副論文と現代の若者を登場させた小説、いわゆる「メンヘラ」を取り上げた論文と恋愛に夢中になる主人公を描いた小説というように、ほのかに関連したものとして読むこともできます。同時進行で書いていたものなので、無関係ということはないでしょう。

そういう関連性も含めて、様々なことを読み取っていただけたら幸いです。

近畿大学文芸学部

栞原丈和

※近畿大学文芸学部文学科日本文学専攻では、卒業論文・卒業制作について左記のような字数規定を設けています。

〈研究論文・評論の場合〉……2万字以上（注・参考文献も含む）。

〈創作の場合〉……作品と副論文が必要です。

◆小説・戯曲等……二万〜四万字。

◆詩歌など、その他のジャンルについては教員に相談してください。

◎副論文……小説・詩歌ともに一万二千字以上。

目次

はじめに

3

△卒業制作副論文▽

小島諒太

『おやすみプンプン』から読み解く”メンヘラ“とは

6

古川美優歩

日々の暮らしのマイノリティ

31

佐藤也於

「限りなく透明に近いブルー」から始まる70年代若者文化と今

63

羽田敬史

世間のイメージとホストクラブの実態

82

△卒業制作▽

小島諒太

r o o t

98

古川美優歩

過ちて徒然に

123

・過ちて徒然に

125

・淀み切って透明の

146

佐藤也於

青い風と扉

159

羽田敬史

卒業制作

180

・秋桜

182

・夜

192

卒業制作副論文

『おやすみプンプン』から読み解くニメンヘラニとは

小島諒太

目次

| | |
|--------------------------------------|----|
| はじめに…………… | 8 |
| 第一章 ミメンヘラ _ミ の性格やイメージ…………… | 11 |
| 第二章 自意識・根底に潜むナルシシズム…………… | 16 |
| ・攻撃性について…………… | 19 |
| 第三章 ミメンヘラ _ミ は病気なのか…………… | 23 |
| おわりに 『おやすみポンポン』の魅力・作品考察…………… | 24 |
| 浅野いにおのインタビュー記事（ネットより抜粋）…………… | 24 |
| 参考文献 URL…………… | 28 |

はじめに

私は『おやすみポンポン』という漫画を高校生の時に読んだ。内容はもちろん、漫画としての表現方法に度肝を抜かれたのを今でも覚えている。

『おやすみポンポン』は、浅野いにおによる漫画。2007年から『週刊ヤングサンデー』に、同誌の休刊により、その後2008年から2013年まで『ビッグコミックスピリッツ』に連載された。単行本は全13巻。累計発行部数300万部。第13回文化庁メディア芸術祭マンガ部門の審査員委員会推薦作品に選出された。

(<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/>)

この漫画には非常に魅力的なキャラクターが登場する。その中でもヒロインの田中愛子や主人公のポンポンはメンヘラのような言動、行動をする。そもそも日常会話の中でも使うメンヘラとはなんなのか、どういった人のことを指すのか、はたまたそれは病気なのか。メンヘラについて『おやすみポンポン』の作中のキャラクターと照らし合わせながら考察していく。

メンヘラとはなにか

メンヘラという言葉聞いたことがあるだろうか。若者の間ではよく日常会話に登場するフレーズだが、病んでいる、自傷してそうな（もしくは実際に自傷跡がある）人を一括りにするものだと私は考えている。では実際にメンヘラとは何を、誰を指す言葉なのかまた、どのようにそのフレーズは生まれたのだろうか。語源についてまずはネットで調べてみた。

メンヘラという言葉は、ネットが発祥です。元々はネットの一部で使われる、いわゆるスラングでした。ネット上の掲示板にメンタルヘルス(心の健康)に関する書き込みを頻繁にする何らかの精神疾患を抱えている(もしくはそう思われる)人のことを指す言葉として使われていました。そのような人たちはメンヘラー(メンタルヘルス+er)と呼ばれ、それがメンヘラとして定着したとされています。

(<https://dime.jp/genre/972217/>)

なぜメンヘラと呼ばれる人が存在するのだろうか、どう定義づけるのが疑問になってくる。そこで『メンヘラの精神構造』の著者である加藤諦三はメンヘラを次のように定義づけている。

メンヘラとはメンタルヘルスという言葉省略した言葉である。意味は心の病んだ人ということである。心理的に問題を抱えた大人になっていくのには、大きくいえば二つの原因がある。

一つは、人は成長のそれぞれの時期の心理的課題を解決することでは生きられないのに、その課題の解決から逃避してしまうことである。課題の解決を避けると、依存症だの現実否認だの合理化だのという、偽りの満足を求めることが始まる。

unavoidable 人生の課題を解決することは、自らの心の葛藤に直面することであり、困難と直面することであり、そこから生きていく意味も満足も得られる。それなのに、その時期その時期の心理的課題の解決から逃げると、人生が次第に行き詰まっていく。その人の人生が心理的に行き詰まっている状態が、サディズムとか被害者意識等である。

心理的に問題を抱えた大人になっていく二つ目の原因は、小さい頃から与えられる破壊的メッセージをどう解決するかということである。

破壊的メッセージの例は

「存在するな」

「完全であれ」

「他人を喜ばせろ」

「成功するな」

「重要であるな」

「一生懸命やれ」

「強くあれ」

などが挙げられる。

これでもかこれでもかと執拗に襲った破壊的メッセージと命がけで戦う中で、人は自分の長所、自分の固有の素晴らしさに気がつく。この戦いから逃げて被害者意識に逃げ込むと、最高の自分、素晴らしい自分に気がつくことなく、人生が行き詰まる。この破壊的メッセージは、一つめの「それぞれの時期の人生の課題」についても最大の障害となる。要するにそれぞれの時期の人生の課題の解決ができないことが多い。

（『メンヘラの精神構造』 P3~4）

加藤諦三はメンヘラの精神構造、心理内を次のように述べている。

地獄には、現実の地獄と内面の地獄とがある。有名な精神科医カレン・ホルナイは「自己蔑視は内面の地獄」といつている。これが「メンヘラの精神構造」である。外側の環境は決して地獄ではないが、いやむしろ恵まれているが、心が地獄にいる。メンヘラの心理について、今までの心理

学の説明でいえば、社会的不能症である。社会的不能症とは、ピーターパン症候群の著者で、心理学者のダン・カイリーの言葉である。つまり、「メンヘラの精神構造」とは、今まで使い慣らされてきた言葉でいえば、女性も含めたピーターパン症候群である。

(同書、P5)

また、メンヘラを精神疾患の一つが原因であると考えるのは精神疾患治療のプロである臨床心理士の林田一だ。

インターネット上にある巨大掲示板のカテゴリの一つに「メンタルヘルス」というカテゴリがありました。このカテゴリは心の健康について扱うカテゴリだったため、ここに集まる人は心の健康に興味のある人か精神疾患を患っている人でした。

ネットの掲示板というのは、男性利用者が圧倒的に多く、女性のパーソナリティ障害や愛着障害の方にとっては実にすごしやすい環境なのです。なので、その様な環境でパーソナリティ障害や愛着障害の方が増えていき、いつの間にか「メンヘラ」というと、愛着障害やパーソナリティ障害のことを指すようになってきたのだと思います。メンヘラ

の話をするときに特に重要になってくるのが境界性人格障害です。

厳密な定義は存在しないのですが、ネットの声を聞いていると、不安定な人間関係と自傷、依存を主な症状としていえることが多いようです。本書ではメンヘラという定義を上記三つの特徴で定義したいと思います。(『ネットというメンヘラとはなにか?』P48、P16)

加藤諦三は「メンヘラ」を心の病んだ人、心理的に問題を抱えた大人と至ってシンプルに定義づけている。ピーターパン症候群は病気のように聞こえるが、実際の医学用語ではないため病気や精神疾患ではない。臨床心理士の林田一は厳密な定義は存在しないものの、愛着障害、パーソナリティ障害、不安定な人間関係、依存、自傷など精神疾患の面から「メンヘラ」を考えている。

そこで私は「メンヘラ」自体は病気(精神疾患)ではないと考えた。「メンヘラ」の精神状態がうつ病や愛着障害を引き起こすことはあるだろうが、本人の内面の地獄はあるものの周りの他人とうまくやっていける人も存在するのではないだろうか。また、自身に「メンヘラ」気質があるのを自覚するのは何らかの症状(うつ病と診断されるなど)がある

までは難しい。誰も定義することができておらず、非常に曖昧な言葉である。

私はメンヘラを病気ではなく、内面の地獄が存在し葛藤している人、または心理的に成長できなかった人と定義づけた。病気であるかどうかはこれからの章を踏まえて第三章で結論づけていく。この定義づけにおいても『おやすみプリン』に登場する上手く生きれなかった人々を参考にしながら、まずはメンヘラの世間的な一般のイメージから研究していく。

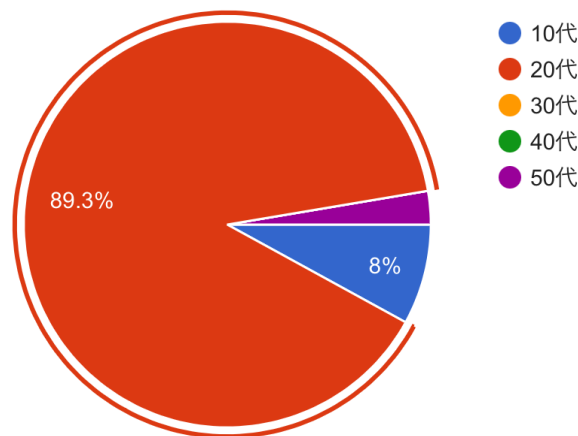
第一章

メンヘラの性格やイメージ

私が思うメンヘラの性格は寂しい、束縛が激しい、情緒が不安定などがあるが他の人はどんなイメージや性格を想像するのだろうか。主に20代を対象に10人にアンケートを取った。ネット発祥の言葉であるため、年齢が高い人はメンヘラという言葉自体を知らない人がいることも分かった。

あなたの年齢を教えてください。

75件の回答



○メンヘラの性格やイメージを教えてください。(71件の回答)

・依存…23票

(特定の人やものに対して依存。他の人に分散できない。)

・ネガティブ…20票

(マイナスに物事を捉える。消極的。自己肯定感が低い。うつっぽい。寂しがり。)

・情緒不安定…14票

(すぐに不安になる。気分の浮き沈みが激しい。感情的。気分屋。)

・自己中心的…12票

(人を巻き込む。自分が一番じゃないと嫌。承認欲求が強い。思い通りにならないと気が済まない。わがまま。)

・自傷…8票

(リストカット。自分を傷つける。自分を大切にできない。)

・その他

(趣味がない。優柔不断。繊細。おっぱいが小さい。目が死んでる、ばりエッチ上手い。ドM。めんどい。真面目。あほ。マイメロ。辛いことをもろに引き受ける。一度”落ちる”と助言はほぼ無意味。基本的に同類(メンヘラ)には極めて優しい。SNSの裏アカを作ったり、日記をつけたり、なんらかの表現行為をする傾向がある(最近のバンドマンや詩人等にメンヘラが多いのも多分同じ理屈)。辛そう。大袈裟。ゴミ。面倒くさそう。べつに決まってない、どんな性格でもなる人はなる。心に漆黒の闇を抱えている。)

以上の統計が取れた。複数回答ありにしていたので回答が重複しているところもある。やはり人それぞれ見方があり、その他に含んだ偏見のようなものもあった。依存とネガティブが20票を超えている。自傷が8票も少ないのは意外だったが、メンヘラに対してやはりプラスイメージがないのが分かった。

では、『おやすみポンポン』内に登場する人物でメンヘラ的なのは誰だろうか。名前の分かっていない登場人物を含めると数は多いが、主人公のポンポン、ヒロインの愛子、ポンポンママ、雄一（ポンポンの叔父でありポンポンママの弟）の四人の人物に焦点を当てる。

小野寺（旧姓 プン山）ポンポン

基本的にネガティブな性格をしており、内気。幼少期は無邪気な子供であったが、家庭崩壊や愛子の鹿児島に行くという約束を守れなかったことなどから心が荒んでいく。やはりポンポンが一番悩まされたのは内面の地獄の存在ではないだろうか。✦巻の中学生になったあたりからポンポンの心理描写が長くなっていき、卑屈になっていく。

「…そうです。いつだって正しくて、格好の良い先輩は数年後、結婚式の前日にきつとこんなことを愛子ちゃんに言うんでしよう。『実は中学ん時お前を取り合って部活の試合で賭をしてたんだ。…あの時負けてたら今頃どうなったのかな…ははは。憶えてるか、小野寺って奴？』忘れてもらってかまいません！！自分なんて先輩達の人生の添え物程度の存在なんですから！！」（4巻 P132）

「…この頃のポンポンはひたすらに猛勉強の子でした。…理由はありません。ただ、今はこうしているのが一番落ち着くのでした。たくさん勉強して東大の理学部がそこらに入って、原子力を研究している地下組織の一員かなんかになって…人類を皆殺しにしてやる。…なァ〜〜んてウソっ子です！！ヒイヤアアアッ！！ボウッ！！」

はじめまして中一男子です。家族構成は家庭内暴力で離婚した父と酒乱の母、深夜は隣の部屋から叔父とその彼女のやってくる声が聞こえてきます。夢はありません。彼女もいません。僕はこれからのように生きていけばいいてますか？」（4巻 P206〜207）

このように誰にも言えない内面の地獄の描写が延々と続く。また愛子のことをずっと考えており、約1年の間愛子に依存しながら生きています。また、13巻の P137 で左目をナイフで突き刺し自傷するシーンもある。

田中愛子

信仰宗教の母と二人暮らしをしている。父は中三の時に別居して以来会っていない。つかみどころのない、何を考えられているか分からないと周囲に思われる性格。内面の地獄のような心理描写はなかったが、心理的に成長しなかったタンプではないだろうか。

「…ねえ、プンプン…もし、約束やぶったら…プンプンがもし、またあたしを裏切ったら…今度は殺すから。」（1巻 P187～188）

「約束したよね。あたしを裏切ったら今度は殺すって。」（10巻 P141～142）

1巻の小学生から10巻の19歳で同じ言葉を発している。殺す。という簡単に使わないはずのフレーズを目に涙を浮かべながら真顔で言うシーンから心理的に成長していないと考えた。

「たった一人でいいから、頭のとっぺんからつま先までミミの間違いもないくらい…完全にわかり合いたい。その人と二人きりになれるなら、他には何もいらぬ。もし、その夢が叶うなら、あたしはその瞬間に死んでもいい。」（4巻 P141～142）

このセリフが叶った13巻の第139話の冒頭で本当に自殺をしてしまう。

「おしっこ。」（11巻 P203）

「ぶっ、ぶぶっ、ぶうぶう。」

「やあああっ!!ああ!!やあだあああっ!!」（12巻 P90～92）

など、子供のような口癖や人前で寝転がり手足をジタバタさせたりと19歳の女性とは思えないような幼稚な言動、行動がある。

依存、情緒不安定、自己中心的な性格であるが、自傷のシオンはなかった。

小野寺雄一（プンプンの叔父）

過去（5年前の出来事）の罪の意識に依存しながら生きていた。フリーターであり

作中でプンプンの次に心理描写が多く、荒んでいる。

「異常という名のこの日常の中でー…すでに僕も…壊れてしまっているのだとしたら…違う！！僕は僕だ！！」(3 卷 P156～157)

「五年もの間、僕の背中に重くまとわりついていたものは、過去のあやまちへの罪悪感だったのは間違いない。…けれど幾ばくかの光が見えた今、なぜか前にも増して重く、苦しい。…背筋が凍る思いだった。僕は気づいてしまったんだ。…僕は罪の意識という呪縛に生かされていた…!!? 恐ろしいほどの罪悪感に身動きひとつとれず!! ただ一人、じっと罪の意識にもがき苦しみながら、自分の生きる理由を探す行為そのものが…!!…僕が生きる理由だったとしたら…!!? 今の僕には、もう何も無い…償いは終わった…あるのはただ…無意味な生と、からっぽな未来への、恐怖。僕が唯一信じていたものは罪悪感だったのか… 寒い…苦しい…寂しい…怖い…!!…もう無理だ。」(4 卷 P85～89)

電車に飛び込み自殺を図るが、彼女に救われる。ポンポンと性格が非常に似ておりネガティブである。ポンポンと同じく過去に依存しており、内面の地獄が存在した。

ポンポンママ

ポンポンパパにDVを受け、家庭崩壊。自由奔放な性格だが母親の責任を負いきれずに癌で死亡。幼い頃にはいじめられていた。

「ふえっ、ふえっ、マー君ひどいよオ…ねえ、あたしいいコ? あたしいいコだよねエ?」(6 卷 P16～17)

「…あたしなんて誰にも必要とされず、生きる目的なんてとっくに見失って、なんとなく死ぬのもアレだからって情性で生きてるだけ…」(6 卷 P84～85)

「なんとか言えよクソダラアツ!! せめてお帰りぐれエはよオ!!」(6 卷 P176)

子供のような一面から内面に死にたいという思い、ポンポンに当たり散らす情緒不安定なシーンなどが見られた。

この四人は内面の地獄が存在し葛藤している人、または心理的に成長できなかった人たちであり、メンヘラ^{メンヘラ}だと分

かる。ポンポンと雄一は内面の地獄に悩まされ、愛子とポンポンママは心理的に成長できなかった。

第二章

自意識・根底に潜むナルシズム

『おやすみポンポン』には「神様」が度々登場する。主人公ポンポンと雄一にのみ「神様」は出現し、疑問を問いかけてくることもある。ポンポンと雄一に語りかけてくる

「神様」はおっさんのような見た目をしており、ポンポンが「神様神様チンクルホイ」と唱えると現れる。初登場は「巻P19、以後呼ばなくても勝手に出現する。一体、「神様」とは何者なのか、辻仁成の『ピアニシモ』に登場するヒカルのような存在なのかと考えながら読んでいると、「二巻で鏡に映ったポンポンの顔が「神様」の顔になっていく。そこでポンポンは「そういう事か。って感じですよ。僕は結局僕だよ。今も昔も。」（11巻P196～198）」と「神様」は自分自身であり、内面に存在する自意識だったと気づく。

「：ねえポンポン：もういい加減そんな『いい人』ごっこやめませんか？そんな我慢くらべみたいな人生で頭ん中の黒とかピンクのもんやりさんを抱えたままじゃいつか自殺か犯罪者だっつーの。だったら欲望のまま生きちゃえばいいじゃん堕ちるところまで堕ちちゃえばいいじゃん。」（4巻P148～149）

など、「神様」はネガティブ発言が多く、加藤諦三がいう内面の地獄である。では、なぜこのような内面の地獄が発生してしまったのか。第二章では自意識やナルシズムに焦点を当てる。

もともとナルシズム（自己愛）という心理学用語は、ギリシャ神話に出てくる、水面に映った美しい自分の姿に見とれて過ごすうちに現実を忘れ、自らを滅ぼしてしまったナルキッソスという青年の逸話に由来します。ナルシズムの病は、現実よりも「自分にとって自分がどう感じられるか」、「自分が他人からどう見られるか」というイメージを重要視することに起因します。ナルシズムの度合いが深いと、自分の理想から離れてしまった自分、という現実の姿を受け入れることが困難になる。すると現実を犠牲

にしても、自分の理想的イメージを守ることを優先するようになってしまいます。（『日本的ナルシシズムの罪』 P20）

もともと、ナルシシズムは誰もが多少は持っているものだが、自分の身を滅ぼすほどに自分の理想イメージを追求すると、いつかは自分が壊れてしまう。この理想と現実のギャップが完全に一致することは難しい。それゆえに内面の地獄が発生し、強いナルシシズムは自分自身を苦しめることになる。しかし、矛盾しているがナルシシズムが心の防波堤となることもある。ナルシシズムは家庭環境が円滑に行かなかった場合、心に抑圧された欲求不満を和らげる効果があると『日本的ナルシシズムの罪』で述べられている。以下は矛盾しているナルシシズムの構造についての引用である。

そもそもナルシシズムは現実を否認する一つの方法です。その発生に遡ってみます。生まれたばかりの乳幼児は、一人で生きていくことができません。お腹がすいた時、オシッコをした時、自分に何が起きているのかもわかりません。この時、乳児の内側では正体不明の不快感や衝動が高

まり、その欲求不満に圧倒され、ひたすら泣き叫ぶ。そこで誰も応えてくれないという「母親の不在」体験は、実におそろしいものです。

しかし、母親をはじめ周りの人々が事態を知って対処してくれることではじめて、周辺の状況を快適に保ってもらえ、乳児は生き続けることができます。欲求不満が強くなりすぎないうちに対処されることで乳児の心は適切に発達し、次第に「母親の不在」について考えられるようになっていくのです。子どもから見ても母親といえども常に自分だけに注意を払えないことがある。自分よりも父親やきょうだいが優先的に愛を向けられることがある。そうした現実を突きつけられるのは、乳幼児にとって非常悲しくて憂うつな体験です。

しかし、その現実を認めた上で、それに伴うつらい感情を乗り越えていくことは、母親から独立した一つの心を形作るために、不可欠な過程です。逆に、ここが円滑に進まなかった乳幼児は、母親や家族から離れることに異常なほど不安を感じるようになります。このような不安を「分離不安」と呼びます。ナルシシズムにはこの分離不安をやわらげ、それが心にもたらす破壊的な影響力を弱める防衛作用があります。

例えば、母親が常に自分よりも他を優先し、欲求不満が解消されることのない生活に適応した子どもは、「自分は可愛くないから、母親が愛してくれない」「もっと母親にかまってほしい」とは考えません。その代わりに、「自分は強いから、他の子どもみたいに甘やかされなくとも平気だ」「母親の愛情など大した意味がないから、自分には必要ない」というふうに見えるようになります。ナルシズムとは弱さや恐怖より、「自分は強い」と感じるのを好む性向ともいえます。ですから、乳幼児の頃に母親からの独立が適切に進まないと、「人に認められたい、愛されたい」という欲求は抑えこまれて隠され、表面上は、そんな願望を持たない子どもができあがります。

『「甘え」の構造』で知られる精神分析家の土居健朗は、「うつ病の精神力学」という論文の中で、「このように本来の依存欲求の不満を防御するために生じた状態こそナルシズムとよばれるべき」と述べました。土居によれば、「少なくとも表面上は甘えることがなく、相手に依存したいという意識すら伴わない」、そんな「心のクセ」を身につけると、後年になってうつ病リスクが高まるといいます。何かのきっかけで心のフタが開いてしまい、満たさ

れなかった愛情を求める強い願望が噴き出し、不器用な形で表現されるといいます。ただし、分離不安に対する反応は人によって様々で、ナルシズムはその一つにすぎません。また、うつ病の要因は複雑で、一つに限定はできません。現在では、母親を含めた環境だけに原因を求めるのは誤りだとも考えられています。

しかし、ナルシズムの問題はうつ病だけでなくメンタルヘルス全般に及ぼす影響が大きいにもかかわらず、十分な注意が向けられていないのが現状です。私は、うつ病になりやすいパーソナリティは、表面的な愛情欲求の乏しさとは裏腹に心の奥底では、自分が大切と思う人から愛されたい、認められたい、受け入れられたいという気持ちが相当に強いと考えています。

その一方で、そんな欲求を自分で認めるわけにはいかない、という苦しいジレンマに陥っている。大切な人を困らせることをしない自分の姿にナルシズムの満足を感ず、それを貫くことが、大切な対象に認められ、愛される条件だと信じているからです。ただし、ナルシズムには病的な面がある一方で、より病的で深刻な心の状態に陥らない

ための防波堤となっているのも事実です。乳幼児があまりにも強い欲求不満に晒され、絶望して自暴自棄になり、支離滅裂な心の状態になるのは避けなくてはなりません。

「母親がハマってくれないのは、自分が弱くて可愛くない、無価値な人間だからだ」という思想に陥るよりは、

「自分は強いから母親なんかいらぬ」と考えたがる。程度の差こそあれ、誰にでもこのようなナルシシズムの働きがあります。ただし、まさにその程度によっては、深刻な心の病につながるということです。（『日本的ナルシシズムの罪』P24～27）

これは、プリンにも当てはまる。母親として未熟なプリンママはプリンに対してうまく愛情を注げなかった。ある日、プリンママは不倫相手を家に泊めるので朝まで帰ってくるなどプリンに言う

「けれどプリンは、全然大丈夫でした。」（6巻P8）とプリンは心の中で強がるも、それが本音ではないことは表情などから分かる。強がる「心のクセ」を身につけてしまったプリンの内側に潜むナルシシズムは家庭環境が円満でなかったことも原因の一つであると考えた。以下は

「良い子」についての『メンヘラの精神構造』からの引用である。

フロムは性格類型の中で「需要的構え」という性格を挙げている。親が支配的な時、子どもは親に迎合する。これが従順な「良い子」である。親に本当の意味では愛されなかった人である。そうして成長すれば、肉体的、社会的には成長しても、心理的な成長はない。そこで愛情飢餓感が強く、愛の問題はいつも愛されることであって愛することではない。（『メンヘラの精神構造』P87）

愛子は信仰宗教にはまる母親にいつも従順で良い子を演じてきた。母親に殴られても足の悪い母親のために家事をしていた。これらのようにメンヘラは家庭環境の悪さが原因であるケースが多い。もちろん、原因が家庭環境だけではない。

・攻撃性について

メンヘラは情緒不安定というアンケート結果があったが、やはり人々がそう思うのは、怒りと悲しみの振れ幅が

極端という意味だ。よく笑う人は好印象だが、よく悲しむ人やよく怒る人は情緒不安な人だとマイナスな印象を与えることが多いだろう。なぜ、悲しみや怒りが人前でも爆発してしまうのか。メンヘラの持つ「攻撃性」については焦点を当てる。

悲観主義は隠された怒りである。アドラーは、悲観主義は巧妙に擬装された攻撃性であるというが、見事な洞察である。悲観主義を生み出しているのが攻撃性であり、その攻撃性を生み出しているのがナルシズムである。（『メンヘラの精神構造』P93）

意識的に感情や不満を抑制すると怒り、悲しみ、嫉妬など、自分の中の否定的な感情と向き合うのは難しくなります。自虐的世話役は、健全な自我の統制の下で、怒りの感情を意識の中にうまく統合する訓練がまったくなされていないことが往々にしてあります。それが何かのきっかけで、意識から切り離していた否定的感情が刺激されると、周囲が「あのおとなしい人がなぜ？」と驚くような言動を示すこととなります。自虐的世話役の患者の治療が進んで、忘却されていたマイナス感情や記憶が動き始めると、今度はそれを幼児的な形で他人にぶつけるようになりま

す。つまり、それまでは「いい子」であることしか許容されなかった個人が、精神療法と関わることで、「攻撃的に要求する子ども」を取り戻すのです。（『日本のナルシズムの罪』 P63～64）

つまり、無意識に心にフタをしなければならぬ環境（親が支配的な家庭など）にしていると、何かのきっかけで心のフタが開き、それが溢れ出した時に出てくるのは不満や悲観が募った攻撃性である。

「きっと僕は待っていたんだと思う。この瞬間を。おはよう、ポンポン。」（11巻P46～49）

ここでポンポンの心のフタが開き、愛子の母を刺す。11巻P140で愛子を殴るシーンや12巻P125で通りすがりの人を鉄パイプで殴るシーンなど、ポンポンの攻撃性が垣間見えた。

また、11巻P220では愛子がポンポンの眼球をフォークで突いて出血させるシーンもあった。

これらのことから、内面の地獄を生み出すナルシズムは家庭環境に原因があることもあり、抑圧された感情は攻撃性となって現れる。ナルシズムは誰もが持っているもの

である。内面の地獄を生み出しているナルシズムだが、精神がさらに病的で深刻な状況にならないためにある防衛作用もあり、矛盾している。それを乗り切るには、過去の破壊的メッセージを受け止め、前に進むなど根本から解決するしかない。

第三章

メンヘラは病気なのか

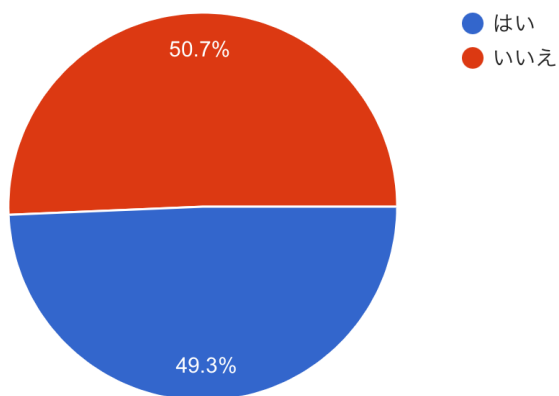
はじめに、で述べたようにメンヘラがうつ病などを併発することはあるものの私はメンヘラ自体は病気ではなく心に問題があるだけであると考えた。誰もがメンヘラになる可能性がある。それは家庭環境が大きな原因の一つだが、一概にそれだけが原因と断言することはできない。では、人々はメンヘラを病気だと考えているのだろうか。それが気になりアンケートを取った。

「メンヘラという言葉は、ネットが発祥です。元々はネットの一部で使われる、いわゆるスラングでした。ネット上の掲示板にメンタルヘルス(心の健康)に関する書き込み

を頻繁にする何らかの精神疾患を抱えている(もしくはそう思われる)人のことを指す言葉として使われていました。そのような人たちはメンヘラー(メンタルヘルス+er)と呼ばれ、それがメンヘラとして定着したとされています。これを踏まえた上でメンヘラは病気の種類だと思いますか？

Q1 メンヘラという言葉...の一種だと思いますか？

75件の回答



結果は半々になった。

○1で「いいえ」と答えた方はなぜそう思いましたか？

(例・性格や個性だと思う。など)

36件の回答

・自分も病むことはあるし、メンヘラと言われることがあるが病院に行かなくても元気で幸せな暮らしをしているので、病気ではない。

・誰しもが心の中に持っているものであるから。

・行き過ぎた行為を行う(リスカ、殺傷、あいみよんのデビユー曲)人は病気。普段の生活に支障をきたすレベルになればそれは立派な精神疾患だろう。ただし、現代では少し重いと感ずるだけで、そこまで被害も無いのにメンヘラと定義されてしまうこともある。メンヘラになる人に改善の余地はもちろんあるが、メンヘラにさせていることの自覚も持たなければならぬと感じる。個々の価値観の違いから生じる問題なので、かなり重い人であると十人中九人がそういえばその人はメンヘラになるだろうが、そうで無い限

りはメンヘラという定義にするには本来の意味合い的にも失礼である。よって、その人の個性であると認識できる。

・病気とは特定の症状に対してつく名前で、「メンヘラ」という呼称は頻繁に特定のコミュニティで見られる性格を確固とした定義なく指すものだから。

・メンタルヘルスを患うことに対しての偏見が垣間見えてしまい、ただ性格的に依存度が高い人と、本当にメンタルヘルスを患っている人の境目が消えてしまうので、あまりメンヘラという言葉でひとくくりにしたくないため。

・元々掲示板に書き込まれたスラングだという点において実際の病気であるという信憑性が薄いということ。また、仮に病気であったとしても現代社会でメンヘラという言葉や存在が定着し過ぎていて、多くの人がメンヘラを病気であると認知していないため。

・メンヘラになる対象のものがメンヘラを産んでいると考えられるから。対象のものの中身が変わるところと治る場合もあると考える。

などの回答が得られた。

病氣と病氣ではないの結果がほぼ半々だったのに驚いた。どちらかに偏るだろうと思っていたが案外病氣ではないという私の同じ考えを持つ人も多いことが分かった。それほどまでに曖昧なものだという印象も受けた。やはり、語源がスラングであったり他人の心の中を覗くことはできないので病氣と一括りにするのは失礼だという意見もあった。逆に定義が曖昧でイメージだけが先行しているため、メンヘラと関わったことがなければ病氣と断言してしまう人もいるがそれは仕方のないことだと考えた。

第一章から第四章を踏まえて、私はメンヘラ自体は病氣ではないと考える。あくまで個性であり、メンヘラの心の状態から精神病（うつ病など）を発症、誘発することはあるだろうが、メンヘラ自体は誰もが起こり得る精神状態だ。生きていく上で避けることのできない問題（破壊的メッセージ）をうまく乗り切れる人もいればそうでない人もいる。また、家庭環境の悪さなどから自分を抑圧する心のクセをつけると心理的に成長できない場合もある。メンヘラになるきっかけは意外と多く、身近なものである故、誰もがその可能性を秘めているのではないだろうか。

○以下は漫画『おやすみポンポン』に登場する人物のセリフです。あなたが一番メンヘラだと思うセリフを一つ教えてください。（複数選択可）

「たった一人でもいいから、頭のとっぺんからつま先までミミの間違いもないくらいに完全になり合いたい。その人と二人きりになれるなら、他には何もいらぬ。もし、その夢がかなうなら、あたしはその瞬間に死んでもいい。」

(31票)

「ね、ポンポン、一番大切なものって何？ これだけは絶対に信じられるものって何？」

(5票)

「アンタがアタシの人生にトドメを刺したの。だから責任とって、アタシと一緒に死んでよ。」

(49票)

「だってポンポンはあたしのがだーいすきなんだもんね？ ずう~~~~とずう~~~~と、ずう~~~~と」

とあたしの幸せだけを考えてくれるもんね？ねっ？」（30票）

アンケートを取った結果、プンプンママのセリフが49票と一位だった。

発言やセリフに違和感や恐怖感はあるものの、それだけで「病気だ。」と思う人は少ないのではないだろうか。

周囲を驚かせる、困らせる独特の言動や行動を取る「メンヘラ」だがそうなった原因を辿れば家庭環境の悪さや幼少期の乗り越えることの出来なかった出来事など他の人が経験していることと違うことを経験しているケースが多い。それゆえに「メンヘラ」は個性であり『おやすみプンプン』に登場する人物のように魅力的な人が多いのではないだろうか。

何らかの破壊的メッセージと戦い日々を葛藤する人々はそれを乗り越えたときに「メンヘラ」を自ら脱却することができるかもしれない。また、併発したうつ病などを治療する際に「メンヘラ」も同時に払拭することができるかもしれない。多少、情緒不安でもそれを個性とみなせる、あるいは許せることがこれからの時代に大切なのではないだろうか。病気という言葉で一括りにするのは一昔前の考え方であると私は思う。

おわりに

『おやすみプンプン』の魅力・作品考察

[https://www.cinra.net/article/interview-202010-](https://www.cinra.net/article/interview-202010-lixilasanojio_yzwtk)

[lixilasanojio_yzwtk](https://www.cinra.net/article/interview-202010-lixilasanojio_yzwtk)より

2020.10.09 Fri Sponsored by LIXIL 「PEOPLE & WALLS

MAGAZINE」

LIXILの壁材商品「エコカラット」のプロジェクト、

LIXIL「PEOPLE & WALLS MAGAZINE」とCINRA.NET

のコラボレーションにより、空間と人との関係にフォーカスしたインタビュー。

浅野さんの作品には、それぞれに印象的な背景が登場しますが、背景というのは浅野さんの漫画にとってどのようなものでしょうか？

漫画というのはとにかく「省略」と「記号化」を巧みに使い分けて作るものなんです。登場人物の人なりを全部説明するわけにはいかないので、なるべく言葉じゃないところの説明しなきゃいけないんです。この人は何歳くらいなのか想像できるようなセリフを入れておくのと同じように、景色や背景で、この人はどういう文化圏で生活している人なのかわかるようにしていますね。例えば東京の街に

対するイメージって、ある程度共有されているので、実在する街並みをリアルに描くことで、どんな文化圏で生活しているキャラクターなのか想像しやすい。同じ東京でも、どの区に住んでいるかによって、キャラクターの性格まで変わってきます。街だけじゃなく、電車の沿線ごとでもカラーが異なりますよね。小田急線には小田急線の、中央線には中央線のカラーがあるから、描く物語によって舞台を使い分けています。リアリティが生まれるだけでなく、僕自身もそのほうが描いていて楽しいので。

いくらリアルな漫画でも、基本的にはフィクションなんですよね。つまりウソなんです。そこでディテールを疎かにすると、ウソが増えてしまう。そうすると、作品そのものがぶれてしまう気がするんですよ。ウソの物語だからこそ、背景は正確に描きたい。生活感や空気の質感といったリアリティは、そこからしか生まれないと思っています。

どこかに深い苦しみや葛藤、あるいは卑屈さなどネガティブな部分を抱えている人。それが、浅野さんから見た人間のリアルなんでしょうか？

そうではない人ももちろんいるでしょうし、卑屈さがない人がウソっぽいということではないんです。でも、人とい

うのは掘り下げていけば、絶対にどこか変な部分があると思うんですよね。その中で僕が考える「人間らしさ」というのは、理不尽であるとか矛盾している部分だったりするので、どうしてもそういう部分を探して描いてしまうんだと思います。

僕が考える「人間らしさ」がバンバン全開で出ている人は、もしかしたら実質社会ではすごく迷惑な人なのかもしれないですが、綺麗に隠している人もいますよね。そういう人は本人で完結できているから、僕が描く意味はないなと思うんです。そうじゃなくて、やっぱり僕も入り込むような余地をもってる人。それは一般的には「間違っている」という要素を持っているということなのかもしれないけど、そこを認め合う、許し合うということで、僕の間関係には信頼関係が生まれてきたから、どうしてもそういう「人間らしい」部分を持った人にしか注目できないというか。そういう矛盾を抱えて生きている人物を主人公にしたくなってしまうのだと思います。

考察

浅野いにおが漫画の中に落とし込んだのは、リアルな社会背景や上手く生きれない「人間」だろうと考える。漫画でしか表現することのできない綿密な背景がたしかに存在す

る。そこで私が思ったのは、「人間」についての部分だ。『おやすみポンポン』の中では心理描写が極端である。というのには、主人公であるポンポンとポンポンの叔父さんは何かを発言するときに心理描写が含まれることが異常に多い。しかし、他の人物に至っては思ったことを発言したり、行動で表す、または何を考えているかは分からないが読者に委ねるように無言などの表現がされている。無言というのは現実社会に当てはめると割と上手くやれている自己完結できる人間であると解釈したので、そういった人物ももちろん登場する。

「鬱漫画」とネットで言われることが多いのもこの表現法にあるのではないだろうか。

例えば、『ドラえもん』はもちろん架空でありフィクションだ。もちろん『おやすみポンポン』も作者が言う通りフィクションである。だが、作者が描こうとした、あるいは描いたのはリアルな東京の背景でありリアルに上手く生きることができない人間だ。そのため読者は「これはフィクションなんだ。」と理解しているつもりが綿密な背景や人間味があるキャラクターなどからどこかフィクションではないという錯覚を生み出しているのではないだろうか。作品を読んでいるうちにどこか現実生きていて気分がさせられる不思議な錯覚に陥る漫画だと思う。それも、作者が

言う「記号化」された主人公であるにも関わらず、だからこそリアルさや錯覚を生み出しているのだろうか。

鹿児島へ逃避行中の二人の変化

ポンポン

- ・いつも他者に抱いていた思いや心境を愛子には伝えることができないようになる。
- ・ひよこの絵から姿や手、服装、髪などが今までより多く描かれる。

- ・鏡に神様が写り、神様は神様ではなく自意識、自分自身だと理解する。

- ・家族や友人を思い出し、人を殺した現実に悩まされる。内面の地獄は脱却するものの、取り返しのつかない現実と向き合わなければならなくなる。

愛子

- ・「おしっこ。」「おなかすいた。」などの幼稚な言動
- ・孤独感を覚える夢を三度見る。三度目には血を流した母の姿。

- ・発狂
- ・ポンポンとの未来を語る。

・子供のよなな表情、母から解放されプンポンと両思いになれはしゃぐ姿。

他人を拒絶し、約束を果たし、二人だけの世界を求めも田中愛子が行方不明というニュースなどから他者が介入する。

愛子は「もし、頭のとっぺんからつま先まで分かり合える人がいたなら、その瞬間死んでもいい。」という中学時代に言った言葉通りに、一瞬ではあるが、他者を一切排除した世界をむねに自殺する。

プンポンは呪縛から解放されたものの、生きる意味を見失い再び神様が現れる。受け入れたはずの自我、自意識を保てなくなり、拒絶。

神様「じゃあ、死ね。」

プンポン「お前が死ね。」

眼球を突き、おそらく自殺しようとした場面で南条が現れる。

南条はプンポンの父やおじさんと会い、ずっと探していた。

三村もプンポンが失踪してから高校時代の友人を訪ねている。

愛子とプンポンは「死」という形で解放されようとしたが

プンポンの場合は他者がそれを許さなかった。

南条に捕まったプンポンは過去を振り返りながら生き遂げることを決意。

「おやすみプンポン」内で言うところの「魂の解放」は「死」であり現実世界でもよく起こっていることだ。

宗教団体が集団自殺をしたことや、プンポンが内面の地獄や自意識と向き合うのを避ける方法が自殺しかなかったように、愛子と逃避行中は内面の地獄はないものの現実と向き合わなければなかったように生きている限り何かから解放されることは決していないのではないだろうか。

そして、当然他者との関わりがなく生きて行くことは不可能だ。

ラストシーンではプンポンの視点から切り替わり、突然プンポンの小学校時代の友達の視点になる。偶然、再開したシーンでは友達の目にプンポンと南条、三村が写る。そして、プンポンが他者として描かれ学校の授業のシーンで物語は終わる。

主人公はプンポンだが、あらゆる視点から描かれるため改めて他者の存在を感じたため、浅野いにおはプンポンだけ

でなく、うまく生きられない人の全体像をリアルな背景と様々な視点を変えながら描いた。

「メンヘラ」という意味では

愛子は「メンヘラ」からの脱却に失敗した。破壊的メッセージを消化せずに母を殺害するという形で取り返しがつかなくなっていたから。

ポンポンは脱却に成功した。破壊的メッセージを母と愛子の死というあまりに残酷な形で乗りきり、最後は執行猶予を受け現実と向き合い、生きて行くことを決めたから。ポンポンが愛子を思い出してさよならを告げるシーンがあるが、私はポンポンはもう「メンヘラ」ではなくなったと受け取った。しかし、読者に委ねるといふ描き方がされているため、人によって賛否両論だろう。

参考文献・URL

『メンヘラの精神構造』 加藤諦三 PHP新書

1224 2020年6月30日 第一版第一刷

『ネットでいうメンヘラとはなにか?』 林田一 10分で読めるシリーズ 2015 株式会社まんがびと

『日本的ナルシシズムの罪』 堀有信 新潮新書 2016年6月20日発行

『おやすみポンピン』1巻〜13巻 浅野いにお 『週間ビツグコミックスピリッツ』掲載作品
株式会社小学館

<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/ポンピン> Wikipedia 『おやすみポンピン』の発行部数や説明。

<https://dime.jp/genre/972217> 「メンヘラ」ってどういう意味?覚えておきたい性格や特徴と上手な付き合い方 2020.09.12

「メンヘラ」の語源を引用。

https://www.cinra.net/article/interview-202010-ixilasanoinio_yzwtk

2020.10.09 FriSponsored by LIXIL 『PEOPLE & WALLS MAGAZINE』

LIXIL の壁材商品「エコカラット」のプロジェクト、

LIXIL 『PEOPLE & WALLS MAGAZINE』と CINRA.NET

のコラボレーションにより、空間と人との関係にフォーカスしたインタビュより、インタビュ本文を一部抜粋。

ゼミ生のコメント

古川

次々と使い方も認識も変わっていく「メンヘラ」を捉えようというのは、難しいテーマだったと思います。病か性格かに重点が置かれていましたが、ネットスラング故にその移り変わる速度も早いだらうと考えます。

佐藤

曖昧ではあるが、きちんと市民権を得た言葉「メンヘラ」とは何なのか。それに対する小島さんの考えを知ることができた。皆が持つ「メンヘラ」はどんな像なのだろうか。

羽田

心を病むことを「ヘラる」と最近の若者が表現し始めてから、「メンヘラな人物」のイメージがダークなものからポップなものに移り変わってきているように以前から感じておりました。小島さんの論考でも「メンヘラ」という言葉の曖昧性が指摘されており、この言葉のつかみどころの無さを再認識しました。もしかすると、数年後には「死語」として扱われる可能性があるのではないかと考えます。

日々の暮らしのマイノリティ

古川美優歩

目次

| | | |
|--------------------|-----------|----|
| はじめに | マイノリティの昨今 | 33 |
| 第一章 前提と分類 | | 34 |
| ○前提としての定義づけ | | 34 |
| ○性を決定づけるもの | | 35 |
| ○DSDsとセクシュアルマイノリティ | | 36 |
| ○性別と性対象 | | 37 |
| 第二章 日常と差別、視線と壁 | | 38 |
| ○生活の中の苦難 | | 38 |
| ○異性愛主義の中での視線 | | 39 |
| ○制度の中の苦難 | | 40 |
| ○想定されていない性別 | | 42 |
| 第三章 性別欄と苦悩 | | 43 |
| ○性別欄と日常 | | 43 |
| ○履歴書の性別欄 | | 43 |
| ○問診票の性別欄 | | 46 |
| ○性別欄に対する人々の認識 | | 47 |
| 第四章 教育のこれから | | 54 |
| ○意識調査と効果量 | | 54 |
| ○指針と現実 | | 54 |
| おわりに | マイノリティとは | 57 |
| 添付資料アンケートの質問文 | | 58 |
| テキスト・参考文献リスト | | 59 |

はじめに マイノリティの昨今

一九九九年六月二三日、「男女平等参画社会基本法」が施行された。女性の社会進出を推進し、男女が平等に扱われるように規定されたものである。家庭を守るものとされていた女性に、社会に出て働く機会を与えるきっかけとなった。

二〇二一年六月一六日、「性的指向及び性自認の多様性に関する国民の理解の増進に関する法律案」（「LGBT理解増進法案」）が提出されないまま通常国会が閉会したことはまだ記憶に新しい。

現在では至る所で「多様性」という言葉が謳われるようになってきた。個人個人の生き方やありようを尊重する、またはするべきであるという空気感私の周りにも漂ってきている。その一方で、いわゆる典型的な役割や生き方を強要されることや、その枠に当てはめられないことも未だ少なくない。地域全員が顔見知りといったような田舎に住む私は、「やっぱり女の子はこうしないと」「いい人はいるの？」などと言われることはしょっちゅうである。この「女の子」という典型的な役割と結婚という当たり前であるとされているライフイベントは、全ての女性、人々に当てはまるものではない。女性は必ず担わなくてはならない役割があるわけでも、全ての人は必ず結婚しなくてはならないわけでもない。多様性の社会においてするもしないもその人の生き方の選択であり自由である。

そして多様性が語られる中で「LGBT」という言葉が浸透してきている。

株式会社LGBT総合研究所の調査（LGBT意識行動調査2019）によると、二〇一九年時点で「LGBT」の言葉の認知度は九割を超えた。しかし、言葉の意味についての理解度は六割にも満たないという。

「LGBT」とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーと、それぞれの頭文字をとった略称である。

JobRainbowに掲載された記事によると、「LGBT」はセクシャルマイノリティの中でも数の多い四つを指す言葉であったが、メディアで取り上げられるようになったにつれ、セクシャルマイノリティの総称として使われるようになった。しかし、セクシャルマイノリティはこの四つの性だけではなく一人一人に多様な性が存在している。四つの性のみをピックアップした総称はそれらの性を覆い隠してしまいかねない。そのため「LGBT」にクエスチョニング、クィアの頭文字である“Q”、その他にも多くのセクシュアリティがあることを表す“+”を加えた「LGBTQ+」と称される場合もある。

では、言葉として認知されつつある「LGBT」をはじめとするセクシュアルマイノリティは、その認知度合いに対してどれほど世間に受け入れられているのだろうか。多様性を重視するこの社会の中で、ジェンダーやセクシュアリティはどのような問題を抱えているのか。本論考では論者が大学三年時に取り組んだレポートに沿って日常生活でのシチュエーションを中心に、その問題について考察する。

第一章 前提と分類

○前提としての定義づけ

本論考では多様な性のあり方を取り上げる。その上で度々登場することになるであろう「セクシュアルマイノリティ」について、誰を指す言葉であるかを明確にする。

自治体の定義を参照する。ホームページや資料には、「LGB T」についての説明は見られるが「セクシュアルマイノリティ」自体の説明はなされていないものが多く見られる。そして「セクシュアルマイノリティ」よりも「性的マイノリティ（少数者）」と述べられることが多い。

その中でもセクシュアルマイノリティ／性的マイノリティについて解説がなされていたものの一例を引用する。

仙台市

また、「生物学的性と性自認が同じで、性的指向が異性に向いている」という、いわゆる「典型的」な組み合わせと異なる人たちのことを、性的マイノリティ（性的少数者）と呼ぶことがあります。

神奈川県

生物学的な性（からだの性）と性の自己意識（こころの性）が一致しない人、性的指向（人の恋愛・性愛がどういう対象に向かうのかを示す概念）が、同性や両性（男女両方）に向いてい

る人などがいます。社会的には少数派となるそうした人たちのことを「性的マイノリティ」といいます。

性的マイノリティのカテゴリーを表す言葉の一つとして「LGBT」があります。

横須賀市

性的マイノリティとは、同性が好きな人や、自分の性に違和感を覚える人、または性同一性障害などの人々のことをいいます。

「セクシュアルマイノリティ」、「性的少数者」ともいいます。「異性を愛するのが普通だ」とか、「心と体の性別が異なることなどない、性別は男と女だけである」としている人からみて少数者という意味です。

最近では、以下の表の頭文字をとって、「LGBT」とも呼ばれています。

奈良市

これまで当たり前とされてきた性に関する場面で少数派にあたる人たちを、「性的マイノリティ」といいます。

福岡市

性的マイノリティ（典型的とされていない性的指向や性自認を持つ方）

共通している点は「典型的」・「社会的」に“少数派”であるということである。この「典型的」・「社会的」は仙台市、神奈川県、横須賀市、福岡市の解説より、シスジェンダー且つヘテロセクシユアルの人物を指すと考えられる。

以上の点を踏まえるとセクシユアルマイノリティとは、“シスジェンダーかつヘテロセクシユアル以外である、例外的な一部少数の人物”を指すと理解できる。

以上のことを踏まえ、現時点では「セクシユアルマイノリティ」をこのように定める。

○性を決定づけるもの

「LGBT」といった言葉の浸透により存在を大きくしたセクシユアルマイノリティをはじめ、人間の性別やセクシユアリティはそもそも何によって決定されるのだろうか。

一人の人間には幾つかの性別が存在すると言われている。生物学的・医学的な要素である「身体の性」、性自認と呼ばれる自身の性別に対する認識である「心の性」、戸籍、性役割などの一般社会での認知である「社会的性」、性的指向と呼ばれる自身の性愛対象を指す「対象の性」の四つの性別が存在するとした概念に村田陽平(二〇〇九)はこれに「身体の性」と「社会的性」の可視的な部分を指す「外見の性」を付け加え、“日常空間で認識される性”で

性的／恋愛指向とは誰に対して性的(セクシユアル)または恋愛的(ロマンティック)に魅力を感じる／感じないか方向を定めたものであ

あると定義している。また、身体的性、性自認、性的指向と“自身がどのように振る舞うのか”によって決定される性表現の四つとする考えや、出生時に役所に届け出ることによって“法律上割り当てられた性別”を指す「法律上の性別」という性、「恋愛感情や性的欲求の程度」も構成する要素であるされるときがある。

これらを整理すると人間のセクシユアリティを構成する要素は以下の七つにまとめられる。

- ① 身体的性(身体の性) — 遺伝子や染色体、性的特徴などに基づく性別
- ② 性自認(心の性) — 自分自身に対する性別の認識
- ③ 社会的性 — 戸籍などの法律上の性別や、性役割
- ④ 外見の性 — 周囲に見た目から認識される性別
- ⑤ 性表現 — 自身の振る舞う性別
- ⑥ 性的指向 — 自身の性愛の対象
- ⑦ 恋愛指向 — 自身の恋愛の対象

この七つの要素が一人の人間の中には存在している。そしてそれらは孤立したものではない。例えば社会的性の一つの要素である戸籍の性は、出生時に性的特徴などに基づき判断された身体的性によって決定される。しかしながら、必ずしも身体的性と社会的性が一致しているわけではない。それと同様に外見の性と性表現が一致し

る。総じて性的指向とされることが多い。本論考では性的指向と恋愛指向を区別するために、総称は性対象と記す。

ない場合も存在する。外見の性によって与えられる性役割（＝社会的性）が異なることも考えられる。また、これらの要素全てにおいて、男女のどちらかに二分されるわけではない。性自認の例を挙げると男性女性の他に、両性、中性、無性など、多様なケースが存在する。この七つの要素の中でも様々なケースが存在し、多様な性別、セクシュアリティを形作っている。

この要素は全ての人間に存在しており、マイノリティだけではなく異性愛者も持ち合わせている。七つの性別はお互いに作用し合い、それぞれ交わって一人の人間の性別やセクシュアリティを決定していると言える。ただし、互いに作用しあっているとすると、なんらかの要素によって限定されることはない。

シスジェンダーの異性愛者男性を例にとると、①③が男性、⑥または⑦が女性（異性）となる。①③が男性であったとしても④、⑤が男性であるとは限らない。さらに、異性に性的／恋愛的魅力のどちらか一方を感じるものがすなわちそのもう片方の魅力を感じるということではない。このように、どれか一つの要素を取り上げて、その他全ての要素を限定することはできない。七つの要素の様々なあり方が多様性であると考えられる。

○DSDsとセクシュアルマイノリティ

七つの要素によって性別やセクシュアリティが決定される。その要素一つ一つに各個人のあり方が存在しており、そのあり方が共通している人々をシスジェンダーやバイセクシャルというようにグル

ープ化が行われている。その中で、「I」と表される存在について着目したい。

「I」はインターセックスの頭文字で、「性分化疾患」DSDs (Differences of sex development) のことを表す。その他に Hermaphrodite、両性具有・半陰陽といった差別的な呼ばれ方をすることもある。(ここではDSDsと呼ぶことにする。) DSDsとは「性染色体、性腺、内性器、あるいは外性器のいずれかが非定型的な先天的状態」を指す。

インターセックス・Hermaphrodite、両性具有・半陰陽といった用語は「男でも女でもない性別」を連想させ、使われなくなりつつある。また、「DSDs (性分化疾患／インターセックス) などの用語を自分のアイデンティティとすることは」なく、「DSDsとは、その人の体の一部分に過ぎず、その人全体の存在を決めつけるものではない」。

加えて「DSDsとは、「男女以外の性別」ではなく、「女性にも男性にも様々な体の状態がある」ということである。「DSDs に対する社会的ステレオタイプ (誤解・偏見) として、「男性・女性以外の性別」・「男性女性の両方の特徴を持った人」・「男女分けられない」・「第三の性」・「中間の体」など」があるが、「胎児期における性に関する体の発達のほんの一部が少し違った経路をたどった結果に過ぎ」ない。

「DSDs (性分化疾患) それ自体は、性自認・性別同一性 (自分のことを男性と思うか女性と思うか) や性的指向 (男性・女性どちらを好きになるか) を意味する概念ではない。「あくまで外性器の大きさ・形や、性腺の種類、染色体の構成、女性の子宮の有無

など、「これが『普通の』女性の体・男性の体」とする固定観念と一部異なる「体の性のつくり」を表す概念」であり、「DSDsを持つ人々の大多数は、自分が女性・男性であることにほとんど全く疑いを持ったことがなく、むしろ自分の体が完全な女性・男性と見られないのではないかと不安に思っている。LGBTQ等セクシュアルマイノリティの「男性・女性に分ける社会に疑問を投げかける」といった流れとは、実は全く逆という状況がほとんど」である。(nextsd[JAPAN online])

DSDsは「LGBTQ+I」として括られることもあるため、DSDsという身体的な性に関する事柄でありながら、セクシュアリティに関する事柄と混同されやすい。このことから、LGBTやマイノリティという言葉がメディアで取り挙げられるのに対し、正しい知識が行き届いていないことがわかる。

そして“生まれもった性”などと言われる「身体的性」についても、DSDsに多様な症状があることから分かるように、典型的な性以外に多様なバリエーションを含んでいる。この多様な性を男／女で分け切ることにはできないのではないかと考えた。

しかし一方で、DSDsと呼ばれる人々が「完全な女性・男性」と見られることを望んでおり、あくまでも男女の中でのバリエーションであると考えると、「身体的性」は男女の二通りであるが、含まれる範囲が広いという認識になると言える。この場合、性自認を断定しない人々にとって、性自認と反して身体的性は括られるという苦を生む可能性が生じる。そのように身体的性が男女の二通りに限定されることによって不自由を生む可能性があることは懸念すべき観点である。

○性別と性対象

七つの構成要素は自身の性別に関わる要素(①～⑤)と、自身から相手に向けられる好意の要素(⑥・⑦)の大きく二つで成り立っている。自身の性別に関わる要素はその人物の性別を自他がどのように決定づけているのかを示している。それに対して自身から相手に向けられる好意の要素は自身と相手との関係を表しており、性対象に関する要素である。「LGBT」と同様に報道される機会が増えた「SOGI」は(広義の)性的指向(性対象)と性自認のそれぞれの英訳のアルファベットの頭文字を取った、「人の属性を表す略称」であるため、これの二つの要素を端的にまとめた言葉であると言える。(「SOGI」とセクシャルマイノリティを混合する誤った認識を広めないために伝え方を配慮するべきであるということも加えて述べておく。)

繰り返しになるがこれらの性別に関わる要素と好意の要素はどちらかがもう片方を限定することはない。独立したものである。

それにも関わらず、異性愛主義やシスジェンダー中心の空間では、これらの要素は独立して理解されない。

次章ではそういった異性愛主義の視線と、日常生活で直面する問題について取り上げる。

第二章 日常と差別、視線と壁

○生活の中の苦難

セクシュアルマイノリティは日常で様々な苦難を強いられる。苦難は制度面と差別や偏見など思想や視線の面がある。まず思想や視線の面から考察する。

社会生活に密接に関わる場所で異性愛主義やシスジェンダー中心の空間として、職場があげられる。職場での振る舞いと、同僚からの対応は社会生活を送る上で大きな要素となっている。特に自身の身体や自認の性と社会的性、外見の性、性表現が複雑に混ざり合い、社会生活に置いて自分らしく過ごすことができない場合がある。また、同僚や企業の理解と対応が十分ではなく、言動や設備・環境により精神的苦痛を与えるケースが多い。

二〇二一年九月一四日に神奈川県製造業に従事するトランスジェンダー女性（以下Aさん）が、神奈川県内の労働基準監督署に身体的性や性自認に関するハラスメントによって、うつ病を発症したとして労災申請した。Aさんは性同一性障害の診断を受け、現在は女性として社会生活を送っている。入社時は差別を逃れるために男性として振る舞っていたが、性自認を隠さず女性として生きることが決意し、髪を伸ばすようになった。髪を伸ばし女性ホルモン注射治療などを受けていたため、外見の性や身体的性が女性に近づいたことで、会社側に性自認が女性であるとカミングアウトをした。その直後に移動した部署で直接の上司からSOGIハラを受けるようになったという。（スッキリ、二〇二二）

Aさんが受けたと語るハラスメントの中でも、上司による「彼」や「くん付け」で呼ばないようにと頼んだが執拗に「彼」と呼んだことが、シスジェンダー中心の視線を向けていることを明らかにしている。

Aさんはシスジェンダー男性からトランスジェンダー女性へと見せる性別を変えている。その変動は、シスジェンダーという空間の主たる存在から逸脱することであり、異性愛男性であることで絆を形成するホモソーシャルな関係を脅かす。そのため上司の繰り返し「彼」や「くん付け」で呼ぶ行為はAさんの社会生活上の性別・性表現の変化に対する拒絶反応である。

さらに、Aさんの上司は「女性としてみられたいなら今なら手術でもなんでも受ければ戸籍上女性になれるんだから、それをやってみてから言いなさい」（同番組）と発言したという。

前者の発言はsex（女性の身体）によりgender（女性としての社会的性）が決定されるといった思想に基づいており、シスジェンダー以外の存在を否定している。加えて（広義の）トランスジェンダー全員が女性／男性の身体や戸籍を手に入れたいと願っているといった誤った認識をしていることが窺える。仮にAさんが女性の身体を得たいと考えていたとしても、心身と金銭に与える負担は大きい。そのため即座に決意できるものではない。（戸籍の変更と性別適合手術については後述する。）

職場という多くの時間を過ごす場所で偏見による視線を浴びせ掛けることは、彼らの存在自体を否定することである。

○異性愛主義の中の視線

日常生活の中に存在する異性愛主義やシスジェンダー中心の空間で向けられる視線は、無意識の偏見を孕んでいる場合もある。

テレビ番組などで見られる（「外見の性」が）男性の出演者が、女性らしいと言われるような仕草や口調であった。それに対して他の出演者が「どっちなの？」や「男性が好きなんですか？」と尋ねるようなシーンを例にとる。「どっち」というのは、その人物の「性自認」がどちらなのか、という質問だと考えられる。ここでは、女性らしい振る舞いをするのは女性であり、女性が性対象とするのは男性⇨異性であるという意識が働いている。人々は無意識にこういった性を二分化する空間を作り、その存在を認めている。「外見の性」を提唱した村田陽平は同書で以下のように述べている。

「外見の性」が男性であっても、必ずしも「対象の性」が女性というわけではない。また、「外見の性」が男性であっても「心の性」が男性であるというわけでもない。

身体的性は男性で女性装を好む人は、多くの場合同性愛者だと思われるが、中には異性愛者もいる。身体的性とは違う性自認を持ち、性自認と性対象が同じという場合もある。

性表現と性自認はイコールではない。性対象もまた然りである。しかし、異性愛主義の中では、これらは一貫していると考えられて

いる。数多とあるセクシュアリティの中で、セクシャルマイノリティたちは常にそういった視線にさらされている。

また先にも述べたように、そもそも“何かを好きになるのか”という点からも、多様なセクシュアリティが想定される。誰かを魅力的に思うという前提も、偏った思想の中にある。

このような思想は、セクシュアルマイノリティだけではなく、いわゆるマジヨリテイ（多数派）も差別の対象にすると考える。

福岡放送 はブラック校則と称される不合理な校則の問題について報じた。福岡県久留米市内の中学校に通う女子生徒へ取材を行っている。その中で生徒は教師からポニーテールは禁止と指導された際のことを「首筋が見えると中学生の男子生徒が欲情しちゃうって言われた」と話している。

この指導のセクシュアリティの問題は、「中学生の男子は欲情しちゃう」という点である。男子生徒を女子生徒のうなじに性的興奮を覚える存在として認識しており、男子生徒の性的指向が女子生徒に向けられることを前提としている。反対に女子生徒は女子生徒のうなじに性的興奮を覚えない存在とされていると言える。これは前述の例と同様の偏見に晒されている。さらに、この男子生徒／女子生徒は社会的性と外見の性の二つのみから判断されるため、当人たちの認識は考慮されていないことも問題である。

このように異性愛主義やシスジェンダーの視線や空間は、当人である異性愛者やシスジェンダーをも偏見で決めつけている。こういった事象は女性専用車をはじめとして、日常の中にごく当たり前かのように存在している。

○制度の中の苦難

次に、制度における苦難について取り上げる。中でも制度の苦難として多く生活に関わってくる戸籍の性について考察する。

「社会的性」である戸籍の変更について、裁判所はホームページにて、戸籍上の性別の変更を望む場合、以下六つの要件を満たす必要があると示している。

- 1、二人以上の医師により、性同一性障害であることが診断されていること
- 2、20歳以上であること
- 3、現に婚姻をしていないこと
- 4、現に未成年の子がいないこと
- 5、生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること
- 6、他の性別の性器の部分に近似する外観を備えていること

この要件を満たした者について、性別の取り扱いの変更の審判をすることができ、審判を受けたのちに、変更が認められた場合は新戸籍が発行され、両親との続柄が変更される。

要件三については、現在日本では同性婚が認められていないため、このような条件が組み込まれていると考えられる。では、結婚

成年年齢の引き下げに伴い、二〇二二年四月一日から一八歳以上に引き下げられる。

してから性別違和を覚えた場合はどうなるのだろうか。現在のパートナーと自分らしい性を手に入れた後もパートナーとしての生活を望んでも、それらは両立しない。各自治体のパートナーシップ証明制度を使用したとしても、あくまで婚姻関係に準ずる関係である証明にすぎず、法的拘束力はない。故に、手術の同意書にサインができない、子供の親権がどちらか片方にのみ付与されるなど、それまでの通りの関係とは言い難い。

要件四は、二〇〇三年の成立時には「現に子供がいないこと」であった。それと比較すると緩和されたようにも思われるが、子供が成人するまでの期間、性別を変更できないということである。社会的性と外見の性が異なる時、就業面で不利になることがあるなどの不都合が生まれる。また、子供が未成年という自分や周囲の協力では解決しようのないことが要因で、自身らしい性別で生きることができない精神的苦痛が生じる。この要件に縛られ彼らの自由は十分とは言えない。

さらに五・六の要件を満たすには性別適合手術が必要である。

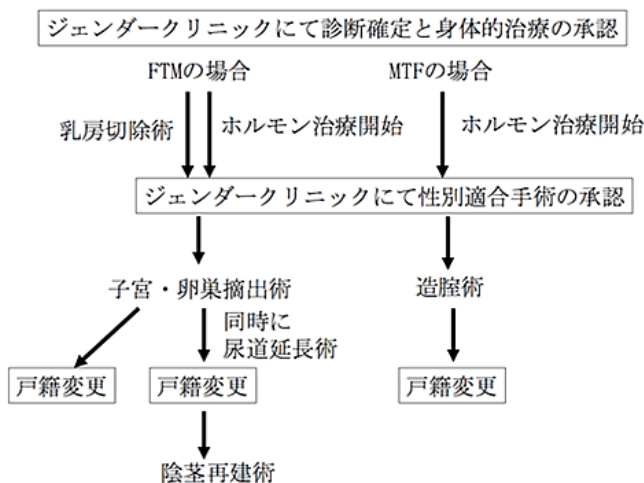
二〇一八年四月から、性同一性障害の手術治療に健康保険の適応が開始された。しかし、保険が適用されるのは、厚生労働省が定めた基準を満たした病院での手術に限り、GID（性同一性障害）学会の発表では、岡山大学病院、社会医療法人光生病院、山梨大学医学部附属病院、名古屋大学医学部附属病院、札幌医科大学附属病院、沖縄県立中部病院、医療法人明理会行徳総合病院の全七施設に

留まっている。岡山大学病院ジェンダーセンターのホームページによると、性別適合手術とは以下の通りである。

MTF（身体的に男性で、性自認が女性）↓精巣摘出、陰茎切除

FTM（身体的に女性で、性自認が男性）↓子宮卵巣摘出になります。

乳房切除術は性別適合手術にはあたりません。尿道延長術は、陰茎再建術を希望される場合に必要な手術となります。



図一 性別適合手術について(岡山大学病院ジェンダーセンター)

同院の入院預かり金の一覧を見ると、FTMの場合は乳房切除術が七十四万円、子宮卵巣摘出術が八十三万円、合計一五七万円の費用がかかる。MTFの場合は造脛術が一六〇一五六万円の費用を要する。健康保険が適応されれば患者は三割の負担となるが、施行された二〇一八年で保険が適用された事例は三件である(朝日新聞online)。これは、治療の中で自由診療であるホルモン治療を行った場合、混合診療とみなされ保険が適応されない(gid.jp online)などの原因がある。

入院預り金について
当院では自費で入院される患者様下記に該当する場合は、預り金をお支払いいただいております。
令和2年 9月 1日

| 性別適合手術 | |
|-----------------------|------------|
| [A] 乳房切除術 | 740,000円 |
| [B] 尿道延長術 | 770,000円 |
| [C] 子宮卵巣摘出術 | 830,000円 |
| [D] 腹腔鏡下子宮卵巣摘出術 | 1,110,000円 |
| [E] 腹腔鏡下子宮卵巣摘出術+乳房切除術 | 1,300,000円 |
| [F] 子宮卵巣摘出術+尿道延長術 | 1,020,000円 |
| [G] 陰茎形成術 | 2,170,000円 |
| [H] 外陰部女性化術 | 1,280,000円 |
| [I] 陰形成術+外陰部女性化術 | 1,700,000円 |
| [J] 陰形成術のみ(開腹手術) | 1,260,000円 |
| [K] 腹腔鏡下造脛術+外陰部女性化術 | 2,000,000円 |
| [L] 陰形成術のみ(腹腔鏡下手術) | 1,560,000円 |
| [M] 陰茎拳丸修正術 | 300,000円 |
| [N] のど仏形成術 | 450,000円 |
| [O] 声帯手術 | 700,000円 |
| [P] のど仏形成術+声帯手術 | 800,000円 |
| [Q] 両側精巣摘出術(全身麻酔) | 300,000円 |
| [R] 両側精巣摘出術(局所麻酔) | 280,000円 |

上記[A]～[R]と同一入院期間に下記の手術を追加する場合は、下記の預かり金が追加となります。

| | | | |
|--|----------|--------------------------|----------|
| [01] 子宮付臓器切除 | 216,700円 | [17] 局所皮弁形成術(100㎡以上、1箇所) | 102,190円 |
| [02] 尿道延長術 | 153,340円 | [18] 植皮術(25㎡未満) | 50,930円 |
| [03] 陰茎形成術(血管吻合有無を問わず) | 804,100円 | [19] 植皮術(25㎡～100㎡未満) | 91,740円 |
| [04] 陰茎神経吻合術(マイクロ) | 96,690円 | [20] 植皮術(100㎡～200㎡未満) | 127,490円 |
| [05] 助産婦採取 | 41,140円 | [21] 植皮術(200㎡以上) | 210,100円 |
| [06] 両側乳房摘出 | 153,340円 | [22] 陰囊形成術(1箇所) | 44,110円 |
| [07] 拡大乳房切除術(2余剰皮膚の切除あるいは乳輪乳頭の移動を伴うもの) | 56,210円 | [23] 陰囊拳丸修正術 | 64,020円 |
| [08] 拡大乳房切除術(2余剰皮膚の切除及び乳輪乳頭の移動を伴うもの) | 85,030円 | [24] 尿道狭窄内視鏡手術 | 146,300円 |
| [09] 乳房追加切除術(1箇所) | 34,540円 | [25] 再手術(アブドミナント) | 44,110円 |
| [10] 乳房追加切除術(2箇所) | 44,110円 | [26] 再手術(血腫除去) | 44,110円 |
| [11] 乳房・乳輪修正術(1箇所) | 30,910円 | [27] 再手術(再マイクロサージェリー) | 109,120円 |
| [12] 乳房・乳輪修正術(2箇所) | 35,090円 | [28] 陰茎切除術 | 124,080円 |
| [13] 尿道外傷形成 | 35,090円 | [29] 両側精巣摘出術 | 44,110円 |
| [14] 尿道瘻孔閉鎖術 | 44,110円 | [30] 尿道形成術(前部尿道) | 127,270円 |
| [15] 局所皮弁形成術(25㎡未満、1箇所) | 44,110円 | [31] 食陰形成術 | 140,580円 |
| [16] 局所皮弁形成術(25㎡～100㎡未満、1箇所) | 54,340円 | [32] のど仏形成術 | 83,710円 |
| | | [33] 豊胸術 | 164,560円 |
| | | [34] 声帯手術 | 313,610円 |

手術される予定日の60日前までにお支払いください。
お支払いいただかない場合は手術をキャンセルされたものと見なします。
金銭決定後に専用の振込用紙をお渡しますので、郵便局かコンビニでお支払いください。入金確認後に預り証を送付いたします。預り証は精算時に必要ですので大切に保管しておいてください。
クレジットカード・デビットカードでのお支払いを希望される方は窓口での支払をお願いします。
岡山大学病院 医事課 収入・債権・証明担当 TEL086-235-7610

図二 入金預かり金について(岡山大学病院ジェンダーセンター)

性別適合手術は、性的違和を感じている人々に心身・金銭的に負担がかかる。また性別適合手術には前段階として必要となるホルモン治療の使用により、保険が適用されないケースなど、保証も十分ではない。海外での手術を斡旋するアテンド事業も多数存在しており、日本の制度に不満のあることが窺える。

○想定されていない性別

性別の変更を審判する条件には「他の性別の性器」に似た外観をしていることが含まれていることから、現状の制度は男女の二項対立図式があることがわかる。これは人間の身体を女性／男性らしいといった概念に縛り付けることになる。そしてその女性／男性らしい身体に女性／男性の精神が依拠することが想定されている。性を決定する要素や、身体を二分することによる不具合は前章で述べた通りである。その“らしい”とされる身体を望まない人々に不遇を強いることは明白である。

性的特徴を変えるために外科手術をする人々の中には、女性／男性身体からの脱却を望んでおり、精神的にもどちらかに属するわけではない人々も存在する。吉野鞆（二〇二〇）は性同一性障害は男女という社会規範や制度を脅かすことがない存在として取り沙汰されてきたが、「性別移行の望みはあるものの着地先が曖昧な」人々は不可視化されてきたと述べている。制度や社会規範は男女という枠の中に収めることができる少数派像のみを想定し、多様に広がるグラデーションは想定していない。

人間を男女に二分して考える現状の制度において、戸籍の変更で自分らしい性を名乗れるようになるのは、性自認が男性か女性の場合のみである。戸籍やパスポートには男か女かという記載しかないため、Xジェンダーやクエスチョニングをはじめ男女のどちらかのみに属さない人々は、社会的性の自由を求めることができない。

この社会的性の不自由さが現れる日常の事象の一つに、性別欄があげられる。これは戸籍とは違い、性表現と同様に自由意思によって回答をある程度変更できる。しかし、その性別欄でも自分らしい性で振る舞うことができない。自分に決定権があるはずの性別欄における問題について考察する。

第三章 性別欄と苦悩

○性別欄と日常

性別欄は日常で性別を意識する場面の一つである。役所の書類やアンケートをはじめ、自身の情報を示す際に性別を明らかにすることを求められる。性別は個人情報と紐付けされ、自身を表す一つの要素として捉えられている。その自分自身を示す性別欄は自身の性別に関わる要素のうちの性を問われているのだろうか。性別欄に何の性を答えるべきか指示されたものは見受けられない。そういった性別を示す際に生じる問題を①履歴書②問診票の二つから考察し、性別欄に関するアンケート調査を元に人々の意識を探る。

○履歴書の性別欄

履歴書は社会生活を送る上で重要な職業に影響する書類であるため、その履歴書に書かれた性別欄は暮らしに大きく関わると言える。う。

日本規格協会が示していた履歴書様式例（JIS規格様式例）には性別欄があり、男女を選択するものであった。それに則り従来の履歴書の多くは「男・女」のいずれかに丸をつけ選択する様式であった。そこへ「心と体の性が一致しないトランスジェンダーの人たちが、就職活動で不利益を受けている」として、履歴書の性別欄の廃止を求めるおよそ1万人分の署名を、NPO法人が経済産業省に提出した。二〇二〇年七月に日本規格協会が、JIS規格の解説

の様式例から履歴書の様式例が削除（PRIDE JAPAN online）
された。 や

その後厚生労働省は二〇二一年四月一六日に履歴書の様式例を発表し、「JIS規格の履歴書と厚労省が作成した履歴書様式例の相違点」について、以下の二点を上げている。

1. 性別欄を「男・女」の選択ではなく任意記載欄に変更。

なお、未記載とすることも可能とする。

2. 「配偶者」「扶養家族数」「配偶者の扶養義務」「通勤時間」の各欄を様式内に設けない（各欄を削除する）こととする。

このように示した上で「公正な採用選考を確保する」ための様式例であるとしている。これらは性別だけでなく、配偶者の有無や出身地、居住地などによる全ての差別を解消する手助けとなるよう与えられた相違点であると言える。法的拘束力はないものの、各企業や履歴書を製作するメーカーはこの様式例を参考に個別の履歴書や応募用紙を製作することが見込まれる。

この形式に則った履歴書の利点として、男女に定められないことで、望まないカミングアウトやグライダーションに対応できる故に、自分の意思に沿った性別を選択できる。加えて自由に記載できることで、採用側はその人物がどのように接して欲しいのかわかることができる。選考時や入社後の対応について事前に準備を整えられることなどが考えられる。性別欄が無いことによって、「どのタイミング

グでどんなふうに伝えるのがいいのか」カミングアウトの仕方に悩む場合もあるため、双方にとってプラスの効果があると言える。

欠点としては、履歴書が使用される場面では求職者と採用者という力関係がある。回答によって選考が不利になるのではないかとという不安があるために、自分の思う性別を選択できないことも考えられる。後述する論者が行った性別欄に関するアンケートにはトランスジェンダー女性より「このようなアンケートなら無回答、どちらでもないを選べるが、面接など重要な機会では性別を選ぶフォームがあったら外見上の性別である男を選ばざるを得ないから」という回答があった。実際にこの女性は自身を偽った回答を強いられており、選択式から任意記載になったとしても起こり得る問題である。

性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連連合会が製作した「性的指向および性自認を理由とする私たちが社会で直面する困難のリスト」には「履歴書の性別に現在生活している性別を記載した結果、「詐称だ」と言われた」事例があり、不当な扱いを受けることが懸念される。また、未記載としたことで差別を受ける可能性も考えられる。署名運動のサポートを行った遠藤まめたさんは「就職活動の時には、基本的に性別欄は空欄にしていたのですが、企業によっては記入が求められることもあ」(BUSINESS INSIDER online) ったと述べている。任意であると記載がなされていたとしても、このような質問がなくなるとは言えない。記載していないことで不信感や先入観を与え、求職者側に不利に働くことも想定される。

採用者側に正しい知識と理解がなく不適切な対応がなされた際には、面接者が支援団体などを通して抗議することもある。企業にと

っても信頼やブランドイメージを損なう危険性がある。偏見や不正を助長するやもしれない性別欄を残すことのメリットは何だろうか。

性別欄を残す理由として、キリンホールディングス(BUSINESS INSIDER online)は女性活躍推進を掲げる中でバランスよく採用するためであると回答した。採用者の性別のバランスを揃えることが即ち女性の活躍を推進するとは言えない。均等に採用するのか、男性/女性どちらかの割合を高く採用するように操作を行うのか明らかでないため、ここで推進するべき社会的弱と想定されている女性が真に公正に扱われているのかは判断できない。同社は「採用時の男女比率を外部から聞かれることが多い」とも回答しており、「外部」からの心象を意識していることも考えられる。

そしてこの“女性”が誰を指しているのかということも重要である。女性の中にもスジェンダー女性やトランスジェンダー女性を始め、多様な性のあり方がある。企業の想定している“女性”の対象を明らかにすることで、男女の雇用格差を是正する姿勢と多様性への配慮の姿勢の両方を示すことができる。履歴書に性別欄を設置する際には、設置する側の理解する努力が求められている。

図一 履歴書の様式例の作成について(厚生労働省)

J I S規格の履歴書と厚生労働省が作成した履歴書様式例の相違点

別紙

○厚生労働省が作成した履歴書様式例(厚生労働省様式例)

| | | | | |
|-------------|---|--|---|-------|
| 履歴書 | | 年 | 月 | 日現在 |
| ふりがな 氏名 | | <small>写真貼る位置 写真貼らねばならない理由 1. 顔 2. 髪 3. 本人撮影機から上 4. 撮影時20℃以下</small> | | |
| 年 | | 月 | 日 | 生(満歳) |
| ふりがな 現住所 | | 性別 | | |
| ふりがな 連絡先 | | 電話 | | |
| 年 | 月 | 学歴・職歴(各別にまとめて書く) | | |

※「性別」欄「記載は任意です。記載しないことも可能です。」

「男・女」選択から任意記載に変更

記載内容の変更

| | | | |
|--|---|------------------|--|
| 年 | 月 | 学歴・職歴(各別にまとめて書く) | |
| 年 | 月 | 免許・資格 | |
| 志望の動機、特技、好きな学問、アピールポイントなど | | | |
| 本人希望記入欄(他に給料・職種・勤務時間・勤務地、その他についての希望などがあれば記入) | | | |

(参考)日本規格協会が示していた履歴書様式例(J I S規格様式例)

| | | | | |
|-------------|---|---|---|-------|
| 履歴書 | | 年 | 月 | 日現在 |
| ふりがな 氏名 | | <small>写真貼らねばならない理由 1. 顔 2. 髪 3. 本人撮影機から上 4. 撮影時20℃以下</small> | | |
| 年 | | 月 | 日 | 生(満歳) |
| ふりがな 現住所 | | 性別 | | |
| ふりがな 連絡先 | | 電話 | | |
| 年 | 月 | 学歴・職歴(各別にまとめて書く) | | |

※本人の希望する職種・業務内容・給与・勤務地・勤務時間・その他についての希望などがあれば記入
※希望する以外の項目は記入しない

「男・女」選択から任意記載に変更

右記4つの欄を削除

記載内容の変更

削除

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|----------|------------------|--|------|--|--------|--|---------------|---|-----|----------|------|------|
| 年 | 月 | 学歴・職歴(各別にまとめて書く) | | | | | | | | | | | |
| 年 | 月 | 免許・資格 | | | | | | | | | | | |
| 志望の動機、特技、好きな学問、アピールポイントなど | | | | | | | | | | | | | |
| <table border="1"> <tr> <td>通勤時間</td> <td></td> </tr> <tr> <td>約 時間 分</td> <td></td> </tr> <tr> <td>扶養家族数(配偶者を除く)</td> <td>人</td> </tr> <tr> <td>配偶者</td> <td>配偶者の扶養義務</td> </tr> <tr> <td>※有・無</td> <td>※有・無</td> </tr> </table> | | | | 通勤時間 | | 約 時間 分 | | 扶養家族数(配偶者を除く) | 人 | 配偶者 | 配偶者の扶養義務 | ※有・無 | ※有・無 |
| 通勤時間 | | | | | | | | | | | | | |
| 約 時間 分 | | | | | | | | | | | | | |
| 扶養家族数(配偶者を除く) | 人 | | | | | | | | | | | | |
| 配偶者 | 配偶者の扶養義務 | | | | | | | | | | | | |
| ※有・無 | ※有・無 | | | | | | | | | | | | |
| 本人希望記入欄(他に給料・職種・勤務時間・勤務地、その他についての希望などがあれば記入) | | | | | | | | | | | | | |

○問診票の性別欄

問診票を書くのは診察・治療を必要としている人々だ。治療に性別が関係するシーンとして考え得ることは、生殖器に関わる治療など身体的性特有の症状の場合や、妊娠中など患者の状態によって治療を行えない場合がある。他にもホルモンの影響が挙げられるだろう。このことから問診票で問われている性は身体的性であると考えられる。

上記で想定した症状以外では歯科医院で治療をする際にも問診票を記入する。その問診票にも性別欄がある。歯科治療と性の関係性について、京都府の歯科医院に勤務する歯科衛生士（以下Bさん）に書面にて二点質問を行った。回答は以下の通りである。

一、歯科医院において性別が関与するのはどのような場面か

↓例えば歯周病の治療に影響があります。女性特有、男性特有の持病やホルモンの影響、服薬などが関係します。

性別によって有病率が変わる事もあったり、患者さんは圧倒的に女性が多く、主婦に比べると働いてる男性の方が通院が途絶えてしまったりします。

例えば、顎関節症は女の人にかかったり、女性より男性にヘビースモーカーが多くて、歯磨きも適当などとなると虫歯も歯周病も進行します。

ただ、健康で、性格、考え方などが同じ人間なら、男性も女性もあまり関係ないです。

しかし今後のいろんな人への治療のプラスになるよう、いろんな観点で考えないといけないので、男女は区別して考えます。

二、問診票では下記（七つの要素）のうちどの性を問うているのか

↓①（身体的性）です。

※○内は論者が補足

一への回答では想定したように身体的性特有の症状やホルモンの影響が挙げられている。二への回答での身体的性を問うていることも一致している。しかし、性別によって異なる傾向があることもあり、性役割の観点で患者を見ることがわかる。その性役割を与える際に問診票へ記入した身体的性が大きく関与していると考えられる。

Bさんの回答は歯科治療における話であるため、全ての医療現場に当てはまるとは言えない。けれども、このような医療現場においてもそれぞれの性は混同して考えられることがわかる。それは“当事者”と呼ばれることもあるセクシュアルマイノリティとジェンダー医療の現場でも同じである。

吉野 鞞（二〇二〇）は自身を女性として生まれ、次第に性別に居心地の悪さを感じるようになったトランスジェンダーであると紹介している。女性として生きることには違和感はあるものの、「男性になる」ことへの執着は薄いと述べておりFTXである。吉野は

同書にて、身体改変への知識を得るための診察での出来事をこのように記している。

実際、医療側には、根深い二元論の存在を感じた。あまりにもはつきりと、物事を二つに分けてしまうのだ。性を変えたい人間とはつまり、男子に生まれた者は女子になりたくて、女子に生まれた者は男子になりたいものだ、と。女子になりたい人は男子と恋愛し、男子になりたい人は女子と恋愛すると思っっている医師も多かった。十代のとき、身体改変のきっかけをつかむため、さる高名な医師の診察を受けた。「彼女いないの？ 彼女くらい作りなよ。ほかのFTM (Female to Male) の人はもっと活発だよ」と言われて落胆した。

女性身体からの脱却に対する希望がすなわち男性身体の獲得の希望ではないことは吉野自身の述べた通りである。けれども医師の中では女性身体とは男性身体への対となる存在であり、それらの身体には典型的とされる女性あるいは男性の精神が存在すると認識されていた。各々が抱える性の問題について向き合う現場においても、過った認識や知識不足は平然と存在している。

○性別欄に対する人々の認識

ここまで履歴書と問診票を取り上げ性別欄について考察してきた。医療という学術的な事象においても、典型的とされる性役割に依拠した視線を性別欄越しに注いでいる。そして想定されている性

別が不明確な点や性別欄を設けることで得られるメリットもあるが、データを使用する側の正しい知識と理解が必要不可欠であることがわかった。

昨今では多様性への配慮として、性別欄に男女以外の選択肢を設けることがある。



性別

男性

女性

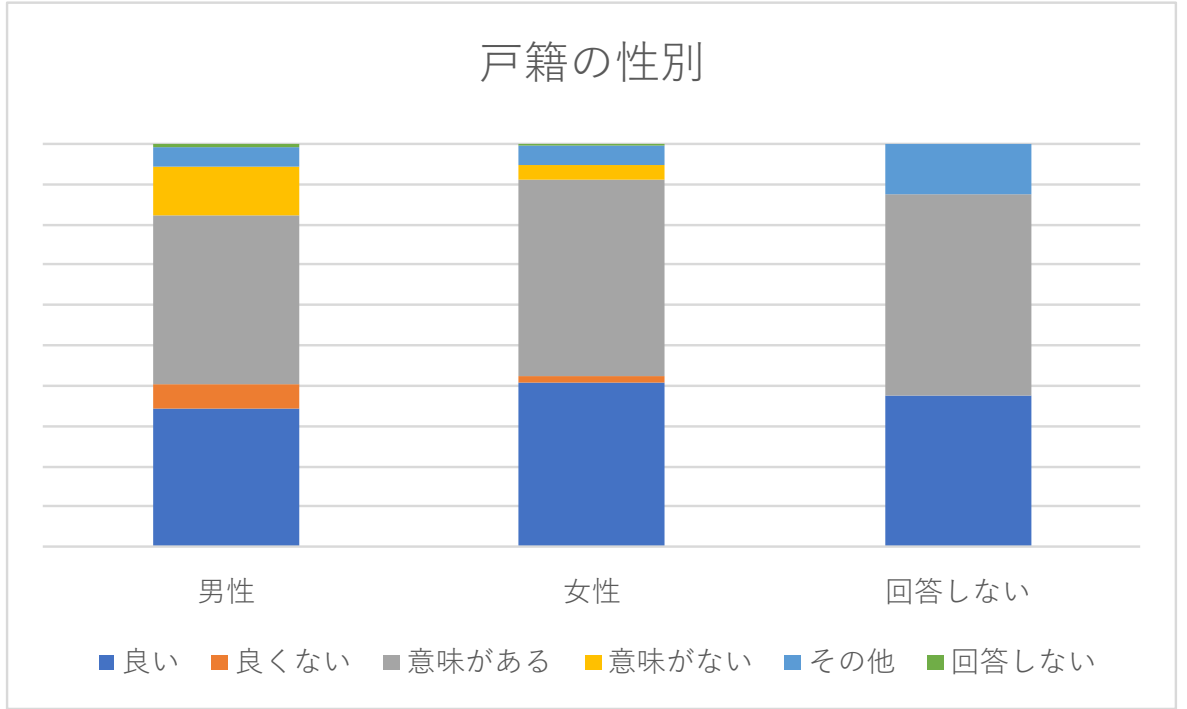
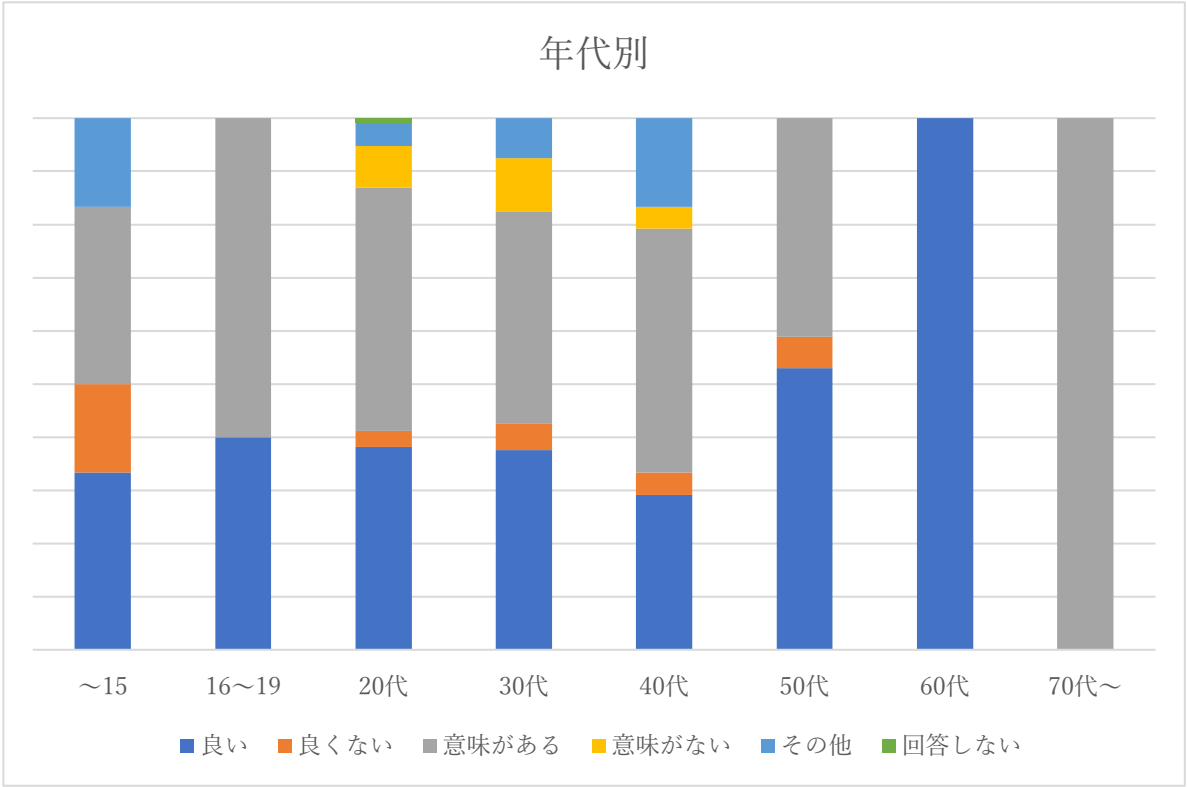
選択しない

図四 性別欄のスクリーンショット(COSTCO WHOLESALE)

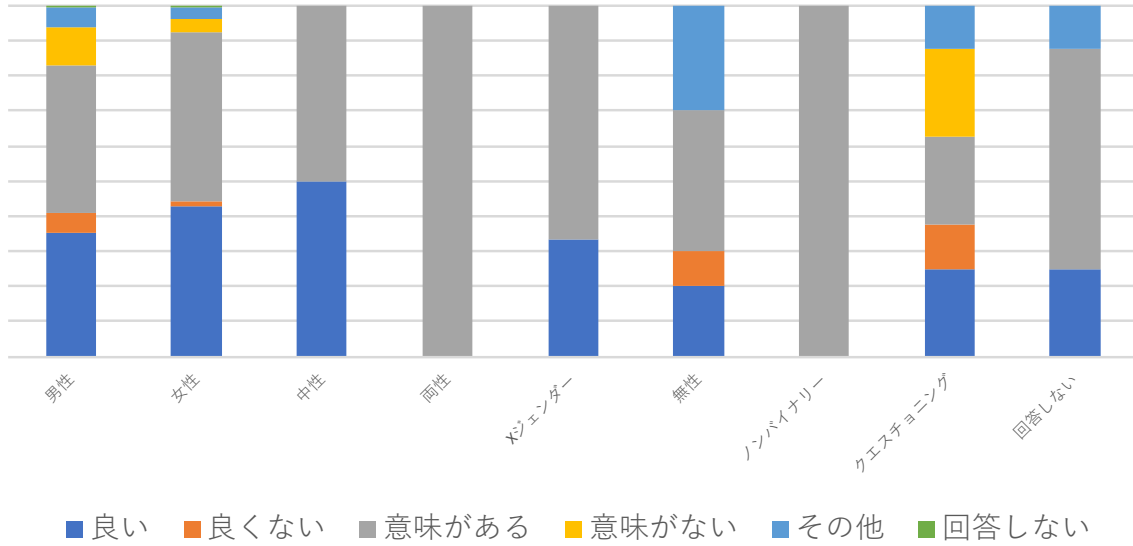
図四のようにどちらかの性であると明言することを避けられる仕様になっている。また、その他といった選択肢が設けられていることもある。そのように任意で自由に書き込むことはできないものの、男女以外の選択肢を設けることについてどう感じるのか、インターネットを活用したアンケート調査を行った。この性別欄という問題に向き合う姿勢をより考察することで、セクシュアルマイノリティに向き合う姿勢を知ることができると考える。

実施したアンケート自体の性別欄は任意記載の形式を採用しており、「戸籍上の性」と「自認している性」として社会的性と性自認の二つを回答してもらった。問うている性別を明確にすることで、どの性を答えるべきかという問題を解消することができる。加えて任意記載とすることで自身の性を自由に表現できる点で、決められた選択肢から選び取るものよりも意志を尊重できる形式であると考える。

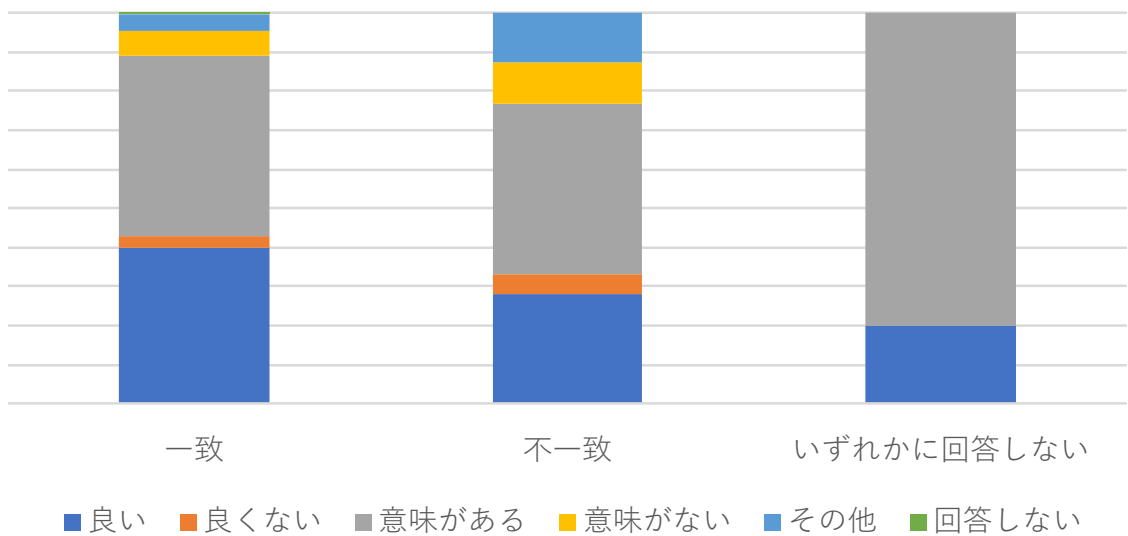
回答数二八九件のうち有効回答数は二八七件であり、年代は一五歳以下から七〇代以上までと広い世代から回答が得られた。ただし六七・八％は二〇代の回答であるため、世代に偏りがあることは留意すべき点である。設問一に対する回答を①年代②戸籍の性③自認の性④性の一致不一致(②と③が一致しているか否か)に分けて集計を行った。結果は以下の通りである。



自認の性別



二つ性の一致・不一致



全体において「意味がある」の回答数が最も多く、次いで「良い」が多くなる傾向が見られた。男女以外の設問を設置することに對して肯定的な回答をした理由は主に三つに分類できた。

まずセクシュアルマイノリティに配慮するためあるいはその姿勢を示すことができることや、性別は男女の二つではないからという意見があった。これらはセクシュアルマイノリティの存在を受容する姿勢が窺える積極的な肯定である。

次に時代や社会の認識が変化したため、そのような選択肢も必要であるといった意見も見受けられた。これらはセクシュアルマイノリティ自身に対する関心は低い、社会全体の多様性を受け入れようとするジェンダー感や社会規範には従いたいという、正義感に基づく消極的な肯定であると言える。

そして自身がセクシャルマイノリティであるか否かに関わらず、個人の情報を秘匿とする目的や、性別でイメージづけられたくないという理由から男女以外に「未回答」や「回答しない」を設けることは意味があるといった意見もあった。これらはその回答によって性役割を割り当てられたくないため自身の性について回答することに抵抗があるといった感情に基づいており、これは通俗的なジェンダー規範に対する拒否反応である。

肯定的な回答の理由の中には「自分には関係ないからどちらでもいい」といった意見も少数ながらあった。これらの真意は選択肢を設けることへの肯定ではなく、事象自体に関心がない。そのため肯定する人々とは異なる無関心の人々と考える。否定的な回答をした人々の中にも同様の理由を述べた人々があり、それらも同じく無関

心の人々であると考ええる。その為この人々は、肯定／否定のどちらでもない存在と考える。

一方で「良くない」・「意味がない」の否定的な回答をした理由はこのように分類できる。

最も多く見られたものが、そもそも性別を問う理由がないとする性別欄そのものを否定している意見だ。正しく利用されるのであれば性別欄を設置しても構わないが、聞く意味があるのか分からないといった性別を問われる意図を疑う回答である。性別欄で問われている問題が不明確であるが故に起る感情であり、性別欄を背負うことや慣習的に問われることに對する嫌悪や懷疑だと言える。この人々は肯定派の通俗的なジェンダー規範に對して拒否反応を示す人々と同様に、現状ある規範や慣習に對して拒否反応を起している。この人々は性別欄に對して否定的な感情を抱いているため、セクシャルマイノリティや多様性に對する姿勢は不明だ。

次に多かったものはアンケートの信頼性が損なわれることや、二者択一である必要性があるため選択肢を増やすべきではないという意見だ。医療現場や肉体労働を例に挙げ、二者択一である必要性を述べていた。性別欄に多様性を持ち込むことを拒否しており、性を二分化する姿勢が見て取れる。そのためこれらの回答は通俗的なジェンダー観を信ずる（多様性への）積極的な否定である。あえてこれらの意見に言及するとすれば、医療現場で求められている性と向けられている視線については前述した通りである。「場面に応じてその時間われている性別を答えれば良い」といった意見にも同様のことが言える。肉体労働の職場においても同様のことが考えられ、身

体的性から性役割を見ている。アンケートへの信頼性に対しては、何の性別を求めているのか不明なまま回答することが不審な結果を産むと説明がつく。例えば、シスジェンダー女性と、ノンバイナリーの社会的性が女性を一括りに女性としてしまうことは、両者の違いを無視しており、あまりに暴力的である。

このような否定の層の中には「二つのうちどちらかを問うているだけなんだから答えるべき」であるや、「(LGBTも)自分がどちらの性なのか、自覚・知覚する必要」があるといった意見もあった。セクシャルマイノリティをはじめ、自身のなんらかの性を明言することに苦痛を感じる人々にとって、性別欄での選択がいかに自身の存在を傷つける行為であるかは想像に容易い。この「男女のどちらか」が何の性別における「どちらか」であるかは特定できないが、身体的性・社会的性・性自認の三つの性を混同していると推測される。シスジェンダー中心の視線で人間の性を捉えた時に、人間は必ず男女のどちらかに振り分けられる。その上で各個人のセクシュアリティを持つと考えられていると言える。事実として現在の日本では戸籍の性は男女の二つであるなど、「どちらか」に分類される性も存在する。しかしそれが全ての性を決定付けないことは繰り返し述べてきた通りだ。また、セクシャルマイノリティの中でも自身の性別に違和感を持っている人々たちが自身の各性別について自覚的でないとは考えられない。

他にもいわゆる当事者のみ(男女以外を)回答するため、その存在を際立ててしまうため意味がないといった理由が挙げられた。これについては肯定派の意見の中で見られた自身の性別を隠したい人々がいることで否定される。さらにこの際立てるといふ考え

は、セクシュアルマイノリティを男女と同じ性にまつわることであるという認識の欠如によるものであると考える。回答を扱う人間が、シスジェンダーにもこの七つの要素が存在し、セクシュアルマイノリティと区切りのないグラデーションの存在であるという知識を持ち合わせていけば解消する。この回答をした人々は、セクシュアルマイノリティに対して無関心ではないが、知識や理解が十分ではない層であり、表面的な共感といえる。

回答理由をまとめると以下の七つに分類できる。

- ① 積極的な肯定
- ② 正義感に基づく消極的な肯定
- ③ 表面的な共感
- ④ 通俗的なジェンダー規範に対する拒否反応
- ⑤ 積極的な否定
- ⑥ 無関心

これらの集計を行なってわかったことは、性別を明らかにすることによって自身がカテゴリー化されることに対する理解に差があるということだ。通俗的なジェンダー規範に対する拒否反応を示す人々は、性別欄に記入する性別が自身の身体に課す役割を自覚している。それに対して、表面的な共感を示す人々は「答えたくない／未回答／その他」を選択した場合に課される役割を意識しているが、その他の選択肢による効果には無自覚である。無関心の人々についてもジェンダーについて無関心なことで、自身に与えられる役

割に対しても無関心な態度をとっている。七つの要素は全ての人
が有しており、それらによって性は決定づけられるという認識の有無
がわかる。セクシュアルマイノリティの問題が報道で見受けられる
ようになった昨今においても、その概念が正しく理解されている訳
ではないことを象徴する現象であると考ええる。

ジェンダーやセクシュアリティは人間全てに関与する問題である
ため、日常を送る上で避けられない問題である。これまでの本論考
の中でその問題を引き起こすものは知識と理解の不足であるとい
うことは幾度となく述べてきた。

では、実際にその知識や理解を促す教育には本当に力があるのか
考察する。

第四章 教育のこれから

○意識調査と効果量

知識や理解を促すための教育として学校での授業や講義の効果を検討する。

「セクシュアル・マイノリティに対する大学生の意識と態度」第1～2報（須長・小倉・堀川・倉田・正木、二〇一七～二〇二〇）（以下「意識調査」）では、二〇一六～二〇一九年にかけて首都圏の医療系のA大学の一年生を対象に「18歳から20代前半の男女の、セクシュアル・マイノリティに対する意識や態度を明らかにする」ため行われたインターネット調査の結果を報告している。

第一報では「全国調査に比べて平等志向、共感的な態度を強く示して」おり、「学部の違い（将来の職業的志向）や性別などの属性よりも客観的な知識量が意識や態度に関係していることを示すものである」とした。この結果が「教育や啓発活動の可能性」を示唆することになり「態度や偏見が知識量に影響を受けるならば、学校による教育や組織的な啓発活動が問題の克服に道を開きうる」と述べている。第二報では「全国調査の結果に近いもの」となった。この要因になり得るものとして、第一報の調査は「差別や人権をテーマとした必修科目の授業後の休み時間」であったのに対し、本調査で

は「その授業が開始される前の週に調査が実施」されている。授業を受けた後の学生は「授業を受けずに調査に回答した学生と比べて、平等志向が高く、その男女差が少な」い。これは「授業を受けた学生には、授業の影響があらわれること、それも男子学生にそれが顕著にあらわれることを示すもの」であり、「一般にその効果が男子学生に顕著に表れる」ということは、性差別問題に対する男性の意識の低さに対する処方としても示唆的である」と述べている。

女子学生と比較した際、男子学生の方がマイノリティに対して不寛容であるのは、「公的空間では、男性の異性愛の属性的な側面やその自然性は問われることなく保持され」（村田、二〇〇九）る環境が影響していると考えられる。

これらの報告から教育によりセクシュアリティやジェンダーに対する知識や理解の改善を促せることがわかった。加えてこの調査の回答者は医療系の大学に通う学生であり、将来志望する職業が医療関係である。知識や理解を持った医療関係者の姿勢を保つことができ、先に述べた医療現場における問題の解消に近づくと考えられる。

○指針と現実

この調査は大学生に対する調査だが、中高生に対する教育の効果として、認定特定非営利活動法人ReBitが行った出張授業に

この調査は「性的マイノリティについての全国調査(2016年)」の報告会資料を参考に制作されている。

ついでに調査報告がある。同団体の「多様な性に関する授業がもたらす教育効果の調査報告」によると、高校生よりも中学生の方が授業後の効果量が多い。高校生と中学生ではもとより持ち合わせている知識量が異なることは留意するべきだが、早期に教育を行うことでより効果が発揮することがわかる。

一方で教育現場では指導要領により授業で取り扱う内容が規定されている。中学校・高等学校で身体的性や精神の健康などは保健体育で取り扱うため、保健体育の指導要領（文部科学省 online）を参照する。

中学校学習指導要領（平成29年告示）―保健体育

内容の(2)のイについては、妊娠や出産が可能となるような成熟が始まるという観点から、受精・妊娠を取り扱うものとし、妊娠の経過は取り扱わないものとする。また、身体の機能の成熟とともに、性衝動が生じたり、異性への関心が高まったりすることなどから、異性の尊重、情報への適切な対処や行動の選択が必要となることについて取り扱うものとする。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）―保健体育

思春期と健康、結婚生活と健康及び加齢と健康を取り扱うものとする。また、生殖に関する機能については、必要に応じ関連

付けて扱う程度とする。責任感を涵養することや異性を尊重する態度が必要であること、及び性に関する情報等への適切な対処についても扱うよう配慮するものとする。

どちらの指導要領においても「異性への関心」や「異性の尊重」と表されていることから、その他の性的指向に関する指導は想定されていないことがわかる。また、ここでは性は男女の二つであると考えられ、性のグラデーションは想定されていない。さらに、「関心」を寄せる対象は異性であり「尊重」するべき相手であると想定されている。中学校教育の時点で性を男女に二分するシスジェンダー中心の異性愛主義に則り教育されるため、多様な性の存在を無視した思想を植え付けることとなる。教育が逆効果となる状況であると言え、授業内容や要領自体の見直しが必要な状況である。

今後の性教育について中央教育審議会は「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会これまでの審議の状況―すべての子どもたちが身に付けているべきミニマムとは？」にて、「子どもたちの性行為については適切ではないという基本的スタンスに立つて、指導内容を検討していくべきである」。「性教育を行う場合に、人間関係についての理解やコミュニケーション能力を前提とすべきであり、その理解の上に性教育が行われるべきものであって、安易に具体的な避妊方法の指導等に走るべきではないということについ

「思春期には、内分泌の働きによって生殖に関わる機能が成熟すること。また、成熟に伴う変化に対応した適切な行動が必要となること。」（同書参照）

ておおむね意見の一致を見た。「身体の成長や性感染症等の科学的知識については保健で扱い、性に関する倫理的な面や人間関係の重要性などについては、道徳や特別活動できちんと教えるべきではないかという意見が出された」と述べている。性にまつわる問題をどの程度扱うのか慎重に検討するべきという姿勢をとり、各科目にまたがる教育が必要であるとしている。「性に関する倫理的な面や、人間関係の重要性」を取り扱うとされている、中学校での道徳の指導要領 は、二〇〇八年時では「男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する」とされている。ここでも異性愛以外の性的指向や男女以外の性はないものとされている。

しかしながら二〇一七年に告示された道徳の指導要領では「主として人との関わりに関すること」の項目から消去されている。その他の要素は文言を変えて残っているのに対して消去されたのはこの要素のみであった。二〇一七年は東京五輪を三年後に控えた年であり、多様性をテーマの一つとしていた東京五輪を意識していた可能性もある。二〇一七年当時は、前年に株式会社LGBT総合研究所の調査が始まるなど、LGBTをはじめとする性に関する問題が認識されていた。人々の関心が高まったことで、男女と二分する文言を削除した可能性もある。けれども、その要素が消去された場合には、道徳でなされるはずであった「性に関する倫理的な面や、人間関係の重要性」について取り上げる機会が設けられないことが懸念される。

男女で二分する思想を植え付けることは問題だが、性にまつわる問題を取り扱わなければ、全ての人間が有している性の要素について扱う機会を失うことになり、一層無理解が加速すると考えられ

る。その知識を得ないことは自身が常に差別者―被差別者としての当事者性を見えなくすると考える。自身が差別的な視線を差し向ける存在であり、反対に差し向けられる存在である。この関係は常にマジョリティー―マイノリティーだけではないということに自覚的になる機会が失われている。教育は「意識調査」や出張授業の調査報告にあるように、人々の意識に影響を与える。そのため、この問題を解消することで無知や無理解のもたらす差別や偏見の改善のため、大きな一歩となる。

おわりに マイノリティとは

ここまで、性を決定づける要素や日常で抱える問題について注目しながらその解決法を探ってきた。教育の持つ効果を発揮するために現状の改善が必要である。

この論考では常に問題の中心的存在としてセクシュアルマイノリティを設定してきた。その定義づけは冒頭に述べた通りである。

現在のセクシュアルマイノリティの割合について民間の調査を参考にする。電通が二〇二〇年に実施した「LGBTQ+調査 2020」によると、LGBTQ+層に該当すると回答した割合は八・九%と発表している。

株式会社LGBT総合研究所の調査（LGBT意識行動調査 2019）では全国の二〇～六〇代の一〇・〇%が性的少数者に該当すると報告した。これらの調査から約一〇人に一人がセクシュアルマイノリティとされることがわかる。（ただし、両方の調査がインターネット調査であることや、二〇～五〇・六〇代を対象としており、それ以上の年代、また一〇代が対象に含まれていないことなどは考慮すべき点である。）一〇人に一人のセクシュアルマイノリティは、各個人が多様な性のありようを持っている。そのため、その一つ一つを見ると数として少数であることは事実だと言えよう。セクシュアリティはどこまでも細分化していき、全てを定義するこ

電通は「ストレート層（異性愛者であり、生まれた時に割り当てられた性と性自認が一致する人）」と答えた方以外を「LGBTQ+層」と定義して」いる。

とは不可能であろう。そんな膨大な数の性が想定される世界で、性を男女の二通りに区分するのは、不自由なことだと言える。

一方で森山至貴はセクシュアルマイノリティとは「性に関して社会の想定する「普通」ではないあり方を生きる人々を指す総称」

（森山至貴、二〇一七）であるとした。家庭にいるべきとされた女性の社会参加が推奨されるようになったように、この「普通」すなわち「典型」は文脈や時代とともに変容するものであると言えらる。パフォーマティブなこの「典型」が変容していくとともに少数派も変化させる。女性性や男性性も繰り返し使用される文脈の中で変容する不確定なものである。そのため現在マジョリティと呼ばれる人々とセクシュアルマイノリティの境界は曖昧なものだと言える。地続きの両者を曖昧な基準では分断することは不自由なことであると考える。セクシュアルマイノリティの解放を訴えることも重要であるが、全ての人が性に関する問題に自覚的になり、二分する視線から解放されることが根本的解決には必要不可欠である。

2021/11/27 18:50 性別欄に関するアンケート

3.あなた自身は「男・女・答えたくない/未回答/その他」があった場合、どれを選択しますか？※答えたくない場合は無回答(「回答しない」を選択)で問題ありません。*

男

女

答えたくない/未回答

その他

回答しない

4.3の選択について、どのような感情、考えによってその選択をしましたか。*

回答を入力

ご協力ありがとうございました。

送信 [フォームをクリア](#)

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

このフォームは 近畿大学 (@kindai.ac.jp) 内部で作成されました。不正行為の報告

Google フォーム

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLS4dwFdu2NGBujk4DZVjgSN6N4BMWHL_o9ypDm9Rv7TChQ/viewform 3/3

2021/11/27 18:50 性別欄に関するアンケート

自認している性別(自分ほどの性別だと思っているか)※答えたくない場合は空欄で問題ありません。

回答を入力

1.性別欄に「答えたくない/未回答/その他」という選択肢を設けることについてどう思いますか？(複数選択可)※答えたくない場合は無回答(「回答しない」を選択)で問題ありません。*

ニックネーム 20文字以内

性別 女性 男性 その他 無回答

メールアドレス

パスワード

パスワード確認

良い

良くない

意味がない

意味がある

回答しない

その他:

2.1で答えた理由をお書きください。(「回答しない」を選択した方は、「回答しない」とお書きください。)*

回答を入力

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLS4dwFdu2NGBujk4DZVjgSN6N4BMWHL_o9ypDm9Rv7TChQ/viewform 2/3

2021/11/27 18:50 性別欄に関するアンケート

性別欄に関するアンケート

現在「性やセクシュアリティが直面する日常の諸問題について」というテーマで研究を行っています。このアンケートは研究の資料として活用します。ご協力よろしくお願いいたします。※アンケートは匿名であり、メールアドレス等個人情報は公開されません。

(共有なし) [アカウントを切り替える](#)

*必須

様々な書類 履歴書 コーゼン登録 アンケートなど の性別欄に関するアンケート

https://docs.go

テキスト・参考文献リスト

「LGBT法案提出されぬまま閉会 当事者ら抗議の会見」、朝日新聞 DIGITAL、一二月七日取得

<https://www.asahi.com/articles/ASP6L7JFP6LUT1L01M.html>

「LGBT意識行動調査 2019」、株式会社LGBT総合研究所、一二月七日取得

https://www.daiko.co.jp/dwp/wp-content/uploads/2019/11/191126_Release.pdf

「【LGBT】と違う？」セクシュアルマイノリティ・セクマイとは？【定義や種類まとめ】」『JobRainbow』一二月七日取得

<https://jobrainbow.jp/magazine/whatissexualminority>

「多様な性のあり方（性的マイノリティ、LGBT）について」仙台市、一二月七日取得

<https://www.city.sendai.jp/danjo-kikaku/kurashi/manabu/danjo/torikumi/tayounaseinoarikata.html>

「性的マイノリティ（LGBT等）に関する正しい理解を」神奈川県、一二月七日取得

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/cnt/f430243/index.html#>

「性的マイノリティって知っている？」、横須賀市、一二月七日取得

<https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2420/seitekimainoritehanai.html>

「性的マイノリティについて」、奈良市、一二月七日取得

<https://www.city.nara.lg.jp/soshiki/23/54053.html>

「性的マイノリティ（LGBT）に関すること」、福岡市、一二月七日取得

<https://www.city.fukuoka.lg.jp/shimin/jinkenkikaku/life/lgbt/lgbt.html>

村田陽平『空間の男性学 ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会、二〇〇九

「【当事者監修】LGBTとは？【2021年度最新版】」『JobRainbow』一二月七日取得

<https://jobrainbow.jp/magazine/what-is-lgbt>

「TRPチャンネル#03 「LGBTQとは？」 TRP2022 TOKYO RAINBOW PRIDE」一二月七日取得

<https://tokyorainbowpride.com/lgbt/>

「【LGBTは4種類じゃない】セクシュアリティやSOGIハラスメントの意味も。」、オクです。一二月七日取得

<https://sabaoku.com/2017/07/15/sogi-lgbt/>

「全国初の性分化疾患（DSD）センターを開設しました」、
KOMPAS' 二月七日取得

https://kompas.hosp.keio.ac.jp/sp/contents/medical_info/presentation/201909_02.html

「DSDs（性分化疾患）について」、nextsd JAPAN' 二月七日
取得

<https://www.nextsd.com/dsd>

「スッキリ」、日本テレビ、二〇二二年九月一七日

「『ブラック校則』ポニーテールはだめ?」、FBS福岡放送、一
月一八日取得

<https://www.fbs.co.jp/news/news96jdcglowebzujzcnp.html>

「性別の取扱いの変更」、裁判所、二月七日取得

https://www.courts.go.jp/saiban/syurui/syurui_kazi/kazi_06_23/index.html

「GID（性同一性障害）学会 認定施設一覧」GID(性同一性障
害)学会、二月七日取得

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/jsgid/ninteishisetsuiran.html>

「診療のご案内」、岡山大学病院ジェンダーセンター、二月七
日取得

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/gendercl/medic.html>

「性別適合手術、昨年は3人保険適用に『制度の壁』」、朝日新聞
DIGITAL' 二月七日取得

<https://www.asahi.com/articles/ASM3R3CV0M3RUBQU004.html>

「性別適合手術の健康保険適用について」、gid.jp 日本性同一性
障害・性別違和とともに生きる人々の会、二月七日取得

<https://gid.jp/article/article2018113001/>

吉野鞆『誰かの理想を生きられはしない 取り残された者のた
めのトランスジェンダー史』、青土社、二〇二〇

「履歴書の性別欄廃止を」経産省に「万人分の署名提出」、日
本放送協会、二月七日取得

https://www3.nhk.or.jp/news/special/news_seminar/syukatsu/syuka_tsu488/

「性別欄を無くしてほしいとの要望を受けて、JIS規格の履歴書
の様式例が削除されました」、PRIDE JAPAN' 二月七日取得

https://www.outjapan.co.jp/pride_japan/news/2020/7/19.html

「履歴書の様式例の作成について」、厚生労働省、二月七日取
得

<https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/000769679.pdf>

「履歴書に性別欄がなくて困りました。LGBT当事者の体験」、株式会社ニジリクルーティング、一二月七日取得

<https://niji-recruiting.com/2020/03/13/1126/>

一般社団法人性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会「性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト（第3版）」、二〇一九

「企業から消える「性別」ユニバーバ、KDDI……コクヨも履歴書の変更を検討」、BUSINESS INSIDER、一二月七日取得

<https://www.businessinsider.jp/post-217554>

須長史生、小倉浩、堀川浩之、倉田知光、正木啓子「セクシュアル・マイノリティに対する大学生の意識と態度第1報—インターネットを活用した調査研究—」、昭和学士会誌 第七七巻 第五号、二〇一七

須長史生、小倉浩、堀川浩之、倉田知光、正木啓子「セクシュアル・マイノリティに対する大学生の意識と態度第2報—インターネットを活用した調査研究—」、昭和学士会誌 第七九巻 第六号、二〇一九

認定特定非営利活動法人 ReBic「多様な性に関する授業がもたらす教育効果の調査報告 2019」、二〇一九

「中学校学習指導要領(平成29年告示)」、文部科学省、一二月七日取得

https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」、文部科学省、一二月七日取得

https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf

「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会これまでの審議の状況—すべての子どもたちが身に付けているべきシニママとは?—」、中央教育審議会、一二月七日取得

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/roushin/05091401.htm

「学習指導要領「生きる力」、文部科学省、一二月七日取得

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youyou/chu/dou.htm

「LGBTQ+調査 2020」、電通、一二月七日取得

<https://www.dentsu.co.jp/news/sp/release/2021/0408-010364.html>

森山至貴「LGBTを読みとく——クイア・スタディーズ入門」、ちくま新書、二〇一七

ゼミ生のコメント

小島

アンケートの、性別回答欄枠を増やすことに意味があるの意見が多数だったのに驚いた。生活している中で考える機会がない人もいるが、意味があると思っている人が多いのはとてもいい傾向だ。

教育については先生が言うことは知識だけである。道徳や性を教えることができる人は少ないのかなと個人的に思った。

芸能人でオカマタレントおねえタレントは影響力があるのでその人たちが性差別などをなくしていける第一歩なのかなと思っただ。

加害者や被害者になるなんて思っていないのが問題である。

佐藤

人間と他の動物との違いを様々な場面で感じる現代社会で性はその中心にある。その性を取り上げ、まとめあげたこの論は現代社会が抱える問題を表面化し、その先の未来を考えさせる。

羽田

ストレートで生きる私は今までLGBTQという問題に関心を持つことはありませんでした。しかし、この論考を読みLGBTQに当てはまる人たちの悩みや不安に触れて、むしろストレートで生きる私たちが関心を持ち理解を深めることが必要なだと考えさせられました。この問題だけに限らず、あらゆる問題はマジョリティ側がマイノリティ側を理解する姿勢をとることが常に必要である考えさせられました。

「限りなく透明に近いブルー」から始まる

70年代若者文化と今

佐藤也於

目次

はじめに

6 5

第三章

一節 衰退した70年代文化

7 3

二節 80年代における学生運動

7 4

第一章

一節 「限りなく透明に近いブルー」でのリュウの言動

6 5

・ドラッグ

6 5

・リュウの過去

6 6

第四章

一節 ヒッピー文化の今

7 5

二節 現代に残る学生運動

7 6

二節 「限りなく透明に近いブルー」での友人たちの言動

6 6

・セックス

6 6

・周りからの視線

6 7

おわりに

7 8

三節 リュウたちの言動の現実性

6 8

第二章

一節 70年代文化

6 9

・学生運動

7 0

・反抗する文化

7 1

・若者文化

7 2

はじめに

1976年第19回群像新人文学賞を受賞し、同年7月5日に第75回芥川賞を受賞した村上龍「限りなく透明に近いブルー」は文学界に衝撃を与えた。その衝撃は芥川賞作家石原慎太郎のデビュー作であり、出世作でもある『太陽の季節』以来の衝撃であったとの声もある。ではその衝撃はどこにあったのか。「それは若者風俗の描かれ方が反倫理的で、それゆえに刺激的であったから」であったとさやわか自身もこの作品を読み、噓せ返るような内容に衝撃を受けた。

私自身もこの作品を読み、噓せ返るような内容に衝撃を受けた。そしてそれと同時にこの当時の主人公リュウたちの生活、村上龍が描いた若者たちの日常に興味を持ち、この卒業論文で70年代の若者文化を読み取っていきたいと考えた。

そこで第一章では「限りなく透明に近いブルー」でのリュウたちの姿を読み、第二章で発表当時である70年代の若者文化を追い、第三章でその先の時代である80年代の中で70年代文化はどのような変化を遂げていったのかを見ていく。そして最終章では現代に生きる70年代の若者文化を読み取っていきたい。

第一章

さやわか(2016)『文学の読み方』星海社

村上龍(1978)『限りなく透明にブルー』講談社 ページ数は講談社文庫第27刷による。

一節 「限りなく透明に近いブルー」でのリュウの言動

ではまず初めにこの作品の主人公であるリュウの言動から彼らの生活の実情を読み取っていく。

・ドラッグ

序章で示した通り、この作品は若者風俗の描かれ方が反倫理的で刺激的であったということとで文学界に大きな衝撃を与えたのだが、その象徴的な事柄がドラッグの存在であろう。モルヒネ、ヘロインなど様々なドラッグが登場し、それをリュウたちは日常的に服用している。

その中で最初にドラッグを刺す言葉が出てくるのがp9 「リュウ、あなたジャクソンのハウスでモルヒネ打ったでしょ？おとといよ」というリリーのセリフからである。これにリュウは明確な返答はしないまでもその後の会話から暗に服用を認めている。このようにリュウは何度も作品内でドラッグの服用、いや乱用を続けている。しかも彼はp18にレイ子とオキナワにヘロインを注射された際には「もうヘロインは指の先まで駆け巡り、鈍い衝撃が心臓に伝わってきた。視界に白い霧のようなものがかかりオキナワの顔がよく見えない。僕は胸を押さえて立ち上がった。息を吸いたいが呼吸のリズムが変わっていてうまくできない。」というようにドラッグ

2に同じ

グの乱用によって意識混濁の状況にすらなっている。それでもなお彼はドラッグの乱用を止めようとはしなかった。

・リュウの過去

リュウは19歳の未成年でありながら作品内に家族という色を出すことはほとんどない。それだけではなく、生い立ちや過去などをあまり語ろうとはしない。その中で数少ない彼の過去と家族関係を描いている部分を抜き出す。

まず彼が家族を語るのがp38のヨシヤマの「家族の人はみんな元氣してる？」という質問に対する「元氣にしてるよ、俺のこと心配してさ、いろんな手紙が来るよ」という返答である。この点では彼の家族が彼に関心を寄せているのがよくわかる。しかしこれ以降彼の口から家族に対する言及がされることはなかった。それに加え、これ以降に彼が過去について語ったのはp90での旧友との再会とp114でのフルートを過去に吹いていたことそしてp139での小さい頃怪我をした際に薬を塗ってもらうのが好きであったということだけである。限られた場面での話だけであり、ここから彼らの姿、そしてそれに繋がる若者文化を読み取ることは難しいように感じた。そこでフルートというトータルカルチャー的な側面を持った存在をリュウが愛好していたわけを考察してみることにする。リュウが過去にフルートを吹いていたことが解るシーンはp1

2に同じ

16のオキナワとの会話である。そこで彼がオキナワの誕生日にレイ子の店で吹いていたことが明かされる。そのフルートはヘロインに舐まれるオキナワを救う何かがあったほどオキナワに刺さった。そんなフルートはリュウたちが普段聴いている音楽はp28の「イツ・ア・ビューティフル・デイ」やp35の「ローリングストーンズ」などサイケデリックバンドやロックバンドなどの音楽とは異なる何かがそこにあったということがわかる。それはジャズなどのフルートを用いたサブカルチャー的音楽ではなく、吹奏楽やオーケストラに存在するフルートであり、そのフルートをリュウは愛好していた。それは彼がかつてサイケデリックバンドやロックミュージックなどのサブカルチャーとは違い、トータルカルチャーの中で生きていたことを示しており、そこから今のような状況になったということであろう。そのためリュウは過去を語らないまでも以前はトータルカルチャー側にいた過去があったということである。

二節 「限りなく透明に近いブルー」での友人たちの言動

二節ではリュウの友人である非行少年たちの言動を読み取っている。しかしドラッグとの関係は個人差がありながらも皆が乱用をしているため、ここでは割愛させていただく。

・セックス

2に同じ

この作品が反倫理的で刺激的であったという評価を受ける要因となつたのは大きく分けて二つの要因があると考えられる。一つは一節で書いた「ドラッグ」である。そしてもう一つは「セックス」である。発行元である講談社の講談社BOOKS倶楽部では「米軍基地の街・福生のハウスには、音楽に彩られながらドラッグとセックスと嬌声が満ちている。」と書かれており、世間での評価を一心に受けているのはこの二つであることは公然の事実であろう。そのためここからはこの作品のもう一つの花とも言えるセックスについてまとめていく。

セックスと言ってもこの作品に出てくるセックスとは性交というただの性の交わりという意味以上に不特定の人物との時には複数での乱交といった意味合いが強いように感じる。その証拠にリュウの友人たちのほとんどがそれぞれを相手に性行為を行っている。また作品の舞台である福生には米軍の基地である横田基地が存在し、アメリカ的世界観、文化の流入と共に米軍関係者との性的関係をも持っている若者が大勢いたことが作品内には描かれていた。そこでここからはリュウの性的な関係を中心に数か所彼らのセックスに着目していく。

この作品内で性を直接的に表現しているのはp45～p52とp60～p68にかけて描かれるジャクソンやボブなどの米軍関係者

「講談社 BOOK 倶楽部 限りなく透明に近いブルー」

<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000205060>

(2021年12月2日)

との乱交パーティーである。ここでリュウは友人であるモコやケイをパーティーに誘うパーティーの主催者側の立場として存在している。そのためか、あまり積極的ではなく、ケイやモコが乱れ狂うのを傍目に見ている場面が多い。しかし彼もモコやケイだけではなく、男女や人種関係なく乱交を行っている。

また部屋にはハシシという大麻の一種が香炉で炊かれ、それぞれ行為を行う間に注射でヘロインを打っており、ドラッグとセックスというこの作品を語る上では外せない二つの要素が同じ場面で登場する。これ以外の場面にもドラッグとセックスの関係は密接であり、p21ではレイ子とオキナワがドラッグ乱用後に性行為を行う描写が描かれている。

ここまでのようにこの作品にはセックス、乱交などの行為が日常的に行われていることがわかり、その行為にはおおよそドラッグの存在が見え隠れする。

・周りからの視線

では彼らのように当時の価値観的に結婚までのモラトリアム期間をドラッグやセックスなどに身を投じ、固定された職に就くことのないような若者たちを世間はどのように見ていたのだろうか。この作品内にはリュウの友人や米軍関係者以外の人物はあまり出てこない。し

かし数少ないながらも大人、もしくは他者と言われるような人物は登場し、彼らに視線を向ける。そのような人物たちの登場からリュウたち若者がどのように見られていたのかを見ていく。

初めに登場する大人はP84で朝早くに玄関に現れた3人の警察官である。彼らはリュウに「お前らここで何をやってんだ？」と言ったことを皮切りに部屋に入ってくる。そして乱暴にカーテンを開け、令状なしに家宅搜索を始め、小声で豚小屋やマリファナのよなことを言った。それだけではなく、ハンドバックの中を無造作にテールにばら撒き、リュウたちのことを嘲笑し、「お前なんか自分のオヤジとでもやるんじゃないのか？」とケイに向かって大声で言った。このように彼らは終始リュウたちを嘲笑い、人を見るような目では見ていないことが言動から読み取れる。

次の場面は日比谷野外音楽堂でのバーケイズの講演を観に行った帰りの電車の場面である。この場面でヨシヤマが車内で嘔吐をし、彼らの車両には人は近寄らなくなった。その後、酩酊するヨシヤマが車両の端に座る女に乱暴をしようとし、ヨシヤマから逃亡する女にリュウが足をかけ、キスを迫る場面がある。ヨシヤマにしてもリュウにしてもこの行為は犯罪行為である。しかしこのような場面に遭遇しても誰も女を助けようとする者はいなかった。それに加え、

2に同じ
2に同じ
2に同じ

この様子を「ガラスの向こうの乗客は動物園の檻を覗き込むような格好で」見ていたと表現されている。この表現からわかるように彼らのニブロールや酒によって酩酊し、迷惑行為を働くような姿は人ではなく、動物のような存在であると認識されていたことがわかる。

この二つの場面に共通するのは彼らのような若者は誰とでもセックスをし、ドラッグを日常的に乱用し、他人に迷惑行為を行うという言動から同じ人間ではなく、人間以下の動物として見られ、ある種存在しないものとして扱われていたことがわかる。このような状況が彼らをよりセックスやドラッグに依存させていく要因の一つとなったと言えるのかもしれない。

三節 リュウたちの言動の現実性

ここからはここまで挙げたリュウたちの姿がどれほど現実性を帯びていたのかを見ていく。まず彼らはヒッピーと言われるような集団であった。ヒッピーとは「1960年代後半にアメリカのヴェトナム反戦運動や公民権運動を中心とする反体制運動から生まれた、「ラブ&ピース」を提唱し自然回帰を目指す若者の総称およびそのムーヴメント」のことであり、「コミュニティと呼ばれる共同体を作

高城梨理世「artscapel[アートスケープ] Artwords(アートワード) ユニバーHippie」

「<https://artscapel.jp/artword/index.php/%E3%83%92%E3%83%83%E3%83%94%E3%83%BC>」 (2021年12月3日)

ったり、マリファナ等の薬物の使用で精神解放を目指すなど、自然回帰的な思想」を持った。このような特徴はリュウたちのドラッグ、セックスへの考え方や固定の職に就かない、大学に行かないなどの生活スタイルとの合致が見られる。また「アメリカ空軍横田基地周辺に点在する洋式住宅、いわゆる米軍ハウス。1970年代半ば、ベトナム戦争が終わり大量に空家になったそのハウスに、日本人の若者が住み始め」、「1960年代後半からのヒッピームーブメントの流れの中で自由を求め、独自のライフスタイルを模索する若者」が集まった。このような姿はリュウたちそのものであるため「限りなく透明に近いブルー」に存在するリュウたちのような若者は実際に存在していたということになる。

では彼らが大人から向けられた目線は実際にはどのようなものだったのだろうか。当時の福生の若者への目線を象徴する事柄を福生市議会的一般質問を引用し、新井智一は以下のように語る。

「基地があるために生活環境も悪く、青少年の非行も他市に比べて多い。あの歓楽街をなくせという声も聞く」(1978年第一回定例会)、「東福生公園(東福生駅近辺引用者注)は基地や歓

10に同じ

「フジテレビ NONFIX過去に放送した番組 福生、最後の米軍ハウス〜自由に生きるといふこと」

【<https://www.fujitv.co.jp/nonfix/library/2004/437.html>】

(2021年12月2日)

12に同じ

楽街に近く、非行の温床になりやすい。夏場になるとあそこは基地からアメリカの若者が出てきて不穏だ」(1978年第二回定例会)といった一般質問があった。これらは共産党議員の一人によるものであったが、こうした質問も横田基地や歓楽街と非行とを結びつけるものであった。

こうあるように実際に福生市民の中には米軍ハウスに住み、ヒッピー文化に生きる若者たちを嫌うような雰囲気があったことがわかる。これ以外にも「議会で「ハウスは得体の知れない若者の悪の巣だ」という発言がでるほどの鬼っ子扱いを受けた。」とあり、リュウたち若者をあまり歓迎するような雰囲気ではなかったのだろう。そのような中、社会からドロップアウトした人々が集まり、共同生活を行っていた事実が福生にはあった。

ここまで「限りなく透明に近いブルー」の中に存在する若者とその若者の現実性を追ってきた。そこで私はこの世界観は現実そのものであり、この作品はリアルな福生の状況を描いた作品であるということが分かった。そしてここからは「限りなく透明に近いブル

新井智一(2005)「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる「場所の政治」」『地学雑誌』114巻5号767-790

【https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgeography1889/114/5/114_5_767/_pdf】

12に同じ

「・福生を離れ、日本という範囲で70年代の若者の姿を追っていくこととする。

第二章

一節

ここからはリュウたちが生きた70年代がどんな時代だったのかを読み取っていききたい。しかし日本という大きな範囲で若者の姿を追うにはいささか難しいものがある。そこでまずキーワードを設定した。それが「学生運動」「反抗する文化」「若者文化」である。これらの言葉は70年代を語る上で欠かせない言葉となっており、この言葉を中心に追っていくことで若者の姿を読み取っていくことができると考えている。それではまず「学生運動」から始める。

・学生運動

学生運動と聞くと令和に学生として生きる我々には縁遠いことのように感じる。それもそのはずで現在このような運動は表舞台には

「文部科学省 一 学生運動 学園紛争の鎮静化」

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318395.htm

(2021年12月2日)

なく、文部科学省の学生運動の紹介にも「昭和三十年代においては、日米安保条約反対闘争などをめぐって運動が過激化した」と書かれており、1955年から始まる10年間の間に出現し、過激化していったことがわかる。その運動はリュウたちが生きた70年代にもきちんと存在し、依然として発言力を確保していた。では70年代の学生運動とはどのような形だったのだろうか。

70年代の学生運動は70年安保を中心に語られることが多い。では70年安保とは何なのか。それにはまず安保闘争を知る必要がある。安保闘争とは「世界が冷戦の真っ最中だった1959年から1960年、そして1970年の二度にわたって日本で起こった、「日米安全保障条約」をめぐる大規模なデモ運動」のことであり、70年安保とは1970年に起こった安保闘争のことを指す。この安保闘争は「1960年にワシントンで締結された「日米安全保障条約」の期限を迎えた1970年に条約の自動延長を阻止し、条約破棄を通告することを目的に行われた学生運動であった」と言われ、日米安全保障条約に反対する国会議員、労働者や学生、市民などが参加した。大規模な抗議運動となった。

しかし70年代の学生運動はこれだけでは語ることはできない。

「ホンシェルジュ 5分でわかる安保闘争！いつ、なぜ起こったのか、学生運動等わかりやすく解説(更新2021年11月22日)」

https://honicierge.jp/articles/shelf_story/8789 (2021年12月2日)

142回

一月（1968年・引用者注）の研修医問題に端を発した東大紛争はの月に安田講堂が占拠され、東大全共闘が結成された。東大のみならず全国の国・公・私立大学で封鎖やストライキが行われた。それぞれの大学がそれぞれの「問題」によって紛争となったが、背景には、大学の大衆化があった。大学の規模拡大による教育環境の悪化に対する抗議である。

とあるように大学の劣悪な教育環境への反抗という側面を持った運動でもあった。また70年代には国立大学の授業料大幅値上げが起こり、このような状況の積み重ねによって大学という権力への眼差しの変化を呼んだのかもしれない。

さらにこのような劣悪な教育環境が学生運動に拍車をかけたという側面も存在する。その根拠として佐藤優は自身のコラムで大岳秀夫の著書を引用し、

日本の大学は一旦入学すれば単位の取得と卒業とが容易であることも、学生運動の活発化に貢献した。（中略）そもそも授業にあまり出席しなくても、一夜漬けで単位を取れる日本の大学の

システムがあつてはじめて、活動家によるほとんどフルタイムの政治活動が可能であつたことも見逃せない。

と語る。このように当時の学生運動は戦中戦後から続くマルクス主義思想、社会主義思想に代表される左翼思想、戦後の不安定な状況下でのアメリカとの関係、そして東大紛争や東大安田講堂事件に端を発した大学環境の改善を求める活動の結果起きた運動であり、1955年から続く大きな流れを持った権力や社会への反抗であつたと考えられる。

・反抗する文化

反抗する文化が存在する上で必要不可欠な存在がある。それは反抗するに値する相手である。それが70年代の若者にとっては、学生運動の発端となった権力やハイカルチャー・メインカルチャーと言ったものを志向する大人たちであつた。それらに反抗するように若者たちは学生運動やヒッピー文化、フォークソング、ロックミュージックなどのカウンターカルチャーを志向していくようになり、1960年代から1970年代は若者文化の時代であつたと言われ

「志望校が母校になる代々木ゼミナール 大学入試の戦後史 第二回(更新2018年8月20日)」

【https://www.yozemi.ac.jp/yozeimi_journal/1808_01/】 (2021年12月2日)

「年次統計 国立大学授業料(2017年10月31日)」

【<https://nenji-toukei.com/n/kiji/10037>】 (2021年12月2日)

佐藤優「生きる意味」を無くした若者たちは、なぜ学生運動に没頭したのか ポストモダン思想の源流にあるもの(2020年5月31日)」

【<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/72769>】 (2021年12月2日)

るほど大きな力を持っていった。そしてそれらの運動はどこか「左翼的な運動と繋がっていたととらえる傾向があったとしながらもそのすべてが左翼的だったわけではない」と堀井憲一郎は語る。

そして彼はそれに続くように

フォークソングはすべてが「間違った社会に異議申し立てをおこなうための歌」だったわけではない。そういう歌もあるが、ラブソングもある。どちらかといえば反抗ソングのほうが少ない。しかしフォークソングに対するイメージは「反抗する歌」というふうにとらえられることが多いようにおもう。ロックミュージシャンが、みんな社会を否定していたわけではない。彼らがみんな現政権を打倒するために歌ってはいない。サイケデリックなファッションやミニスカートによって自由経済を否定したかった、という若者もあまりいないだろう。かっこいいから着ていただけだ。

と語り、最後に「『反抗する文化』という側面もあったが、そうではなく『ただ新しい文化』という部分も多かった。」と語った。

堀井憲一郎「なんとなく反体制…現代につながる「1970年代の呪縛」とは何か 若者文化が反抗的だった時代(2019年1月29日)」

【<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/59606>】 (2021年12月2日)

22に同じ
22に同じ

このように当時の若者たちの文化は学生運動に代表される衝撃的な行動の影響もあり、どこかすべての文化が反抗的であるというような印象を与える結果となっている。しかし堀井が語るようにその当時のすべての文化が反抗的であったというわけではない、ただ単にそのかっこよさ、新しさによって獲得していった文化であったという理解もできるであろう。そしてビートルズやボブ・ディランなどが人気を博した要因も「大衆的な芸能の世界の約束を否定し、ことさらに私生活やスキャンダルを誇示し、国際・政治・宗教問題に積極的に発言し、意思表示のためのイベントを演出した」ことによる新しさにあったのではないだろうか。

・若者文化

ここまで追ってきた「学生運動」、「反抗する文化」は若者文化の一部である。そのためここでの「若者文化」はこれまでのような内容的な話ではなく、「若者文化」とは何なのかという根本的な側面から読み取っていくこととする。

「青年文化／若者文化／ユースカルチャー(youth culture)」

【http://anemura.la.cocacn.jp/re3_index/6H/hu_culture_youth.html】

(2021年12月3日) (中野収(2001)「若者文化」867 - 868の孫引きとなる)

それではまず若者とは何かを考えたい。城戸秀之は若者を「社会の構成員として年長世代(若者に対する「大人」)の視点によって同時代的経験を背景に若年世代の特徴として評価され、抽出された一種の仮想敵存在である。」と定義づけている。ただ単に大人と比較し、年齢が若いということではなく、大人の視点によって定義づけられる存在であるとした。また中野収は若者と対比するものとして青年期を出し、青年期を「幼年期の終了と本格的な社会参入期の間のモラトリアム期間」と定義し、「青年文化はトータルカルチャーあつての青年文化であり、ある年齢に達すれば等しく青年文化を離脱し、トータルカルチャーの住人となった」とした。しかし「1960年代に先進諸国に頻発した「青年の異議申し立て」には、従来の青年文化・成人文化の関係・構造を超えるものがあり、(中略)従属的でない、独自性・異質性をもった文化の(中略)創造者であつたのが若者」とした。このように若者の定義は論者によって変化する。しかし青年という存在の先に誕生した枠組みであつたということは確かであろう。

城戸秀之(2007)「現代日本における若者イメージー豊かな社旗における若年世代認識の変化について」『社会分析』34号75-91

http://jsasa.org/paper/34_5.pdf

20に同じ

20に同じ

「青年文化／若者文化／ユースカルチャー(youth culture)」

青年文化は前述の通り全体文化(トータルカルチャー)へと続く中に存在するものであつた。しかし若者文化はそれとは対照的に全体文化から離脱し、独自性を持った文化となつた。そのため若者文化は「反抗する文化」で述べた新しさやかっこよさといった新たな価値観によって形成されていったのであろう。また若者文化は青年文化とは異なり、自立した存在であるため「生涯にわたつてこの文化の中で生息することも可能になつたのである。」と中野は考える。しかし実際はどうだろうか。確かに当時のロックミュージックを代表するビートルズは今でも一定の人気を博している。しかし現代において当時の若者文化を生きる人々は衰退していったように感じる。ヒッピー文化やサイケなファッションは表舞台から姿を消し、学生運動は大学の教育環境の改善や日本経済の発展によって下火となつた。このように若者文化は姿を変え、存在し続けてはいるが、就職によるモラトリアム期間の終了を皮切りに、若者文化の中に生きる人々は減り、生涯にわたつてこの文化の中で生息することは難しいのではないだろうか。

http://fanemura.la.cocacn.jp/re3_index/6H/hu_culture_youth.html

(2021年12月3日) (中野収(2005)「ユースカルチャー」904の

孫引きとなる)

ここまで「学生運動」「反抗する文化」「若者文化」をキーワードに70年代の若者文化を追ってきた。その過程で私はこの時代の文化は反抗と新しさによって形成されていると考えた。「学生運動」は左翼思想を根底に大学の劣悪な教育環境や日米安全保障条約への反抗であり、フォークソング、ロックミュージック、ラブ&ピース、サイケなファッション、ヒッピー文化はこれまでの文化への反抗という側面とその新しさに惹かれたという側面によって形成された文化であった。また青年文化・全体文化からの脱却を伴う自立は反抗や新しさといった強い魅力によって形成された文化だったからこそ行われたと考えられる。

第三章

ここまで私は「限りなく透明に近いブルー」から始まる70年代の若者文化を読み取っていき、その時代は一区切りを迎えた。そして迎えるのが、80年代である。80年代は1987年から始まるバブル経済の影響で80年代Ⅱバブルという印象を持っている人も多く存在する。そんな状況下で70年代文化はどのような姿になっただろうか。まずは全体の構図から読み取っていく。

一節 衰退した70年代文化

「出版社 河出書房新社のオウンドメディア Web河出
斎藤美奈子／成田龍一編著『1980年代ってどんな時代だったの?』」

「反抗する文化」・「新しい文化」によって形成された70年代の文化は80年代に入り、勢いをなくした。70年代の文化を堀井は「真剣な文化」であり、その担い手たちをみんなまじめであったと語った。しかしそのような人物たちは軽やかに行動する連中が牽引する文化から相手されなくなっていく、見放されていく。そしてまじめ文化に対する反動で80年代の文化は「軽チャー(軽く、チャラくやろう)」とさえ呼ばれるようになった。そのような文化は好景気に支えられる形でさらに大きくなっていった。

こう堀井が語るように好景気に支えられる形で現れた軽さを持つ80年代文化によって70年代文化は蚊帳の外に追いやられていく。60年代に登場し、70年代までは辛うじてあったヒッピー文化に代表されるカウンターカルチャー的な思考は80年代に入り鳴りを潜め、ついには語られなくなっていく。では具体的にはどのように衰退していったのだろうか。二節で「学生運動」を取り上げ、具体的に読み解いていく。

二節 80年代における学生運動

左翼の活動家や学生などを中心にした学生運動は60年安保、68年〜69年の全共闘運動、70年安保でピークを迎えた。その当時は前述の通り、大きな発言力を持っていた。しかし80年代に入

「<https://web.kawade.co.jp/bungei/414/>」 (2021年12月3日)
18に同じ

るとその力は急速に衰退していき、代表的な運動は法政大学の「黒ヘルのリーダー」と呼ばれた中川文人の運動だけであると言われて

いる。
ではここからは本題であるなぜ衰退していったのかを考えていく。そこで重要となるのが、実は70年代から徐々に学生運動は下火になっていったということである。その契機となった事柄を文部科学省は「四十四年八月、長期間の紛争校に対する教育等の停止・休止措置等を含む内容とする大学の運営に関する臨時措置法が成立」としている。しかし1969年には東京大学で始まった全共闘運動が全国に広がるなど学生運動は継続的に行われており、一概にこの法律の制定が学生運動を鎮静化させたとは考えにくいのではないだろうか。そこで私はこの法律の影響をより強め、学生運動を衰退へと導いたのは70年代以降の一般学生を放置した極左過激派組織による暴力行為であると考えた。文部科学省は先ほどの引用箇所の後で臨時措置法の結果、鎮静化が進み、「孤立化した過激派の暴力的党派抗争が多発して死傷者も数多く出た。また、四十七年には学生を

「excite ニュース 80年代にも学生運動があった? (2018年5月13日 18:00 更新)

「https://www.excite.co.jp/news/article/B_chive_science-history-japanese-history-80s-studentactivism/」 (2021年12月3日)

13 2回

13 2回

含む過激派集団によって連合赤軍リンチ事件や浅間山荘事件などが引き起こされ、社会を驚かせた」と語っており、このような状況下で学生運動は下火になったのではないだろうか。また池上彰は日本経済新聞の自身のコラムで学生運動が停滞した要因は「連合赤軍事件」にあり、この事件を目標とした一般学生たちが過激な運動にはついていけないと考えるようになったと語っており、極左過激派組織による一連の事件が一般学生を置き去りにするような結果を招いたと言えるだろう。また正確な記述はないまでも70年代後半に入り、経済が比較的好景気になったことにより若者の政治離れが進んだという意見も存在した。

ここまで具体的な学生運動の衰退を80年代辺りであると考え、取り上げてきた。しかし70年代にはすでに衰退は始まっており、80年代に消え去ったと捉える方が正しいという結果となった。60年代に始まったとされる学生運動は過激化による多くの命と引き換えに一般学生の忌避を生み、こうして衰退していった。

「日本経済新聞 若者たちの反乱 「学生運動」と経済成長 現代日本の足跡に学ぶ(11) 東工大抗議録から(2014年1月6日 3:30 更新)

「https://www.nikkei.com/article/DGXNASGH20000_Q3A221C1000000/?unlock=1」

(2021年12月3日)

しかし現代でも学生運動は姿を変え、存在している。そのことについては第四章で触れることとする。

第四章

「限りなく透明に近いブルー」のリユウの言動に始まり、80年代の学生運動まで追ってきた本稿もこの章が最終章である。この章では、はじめに述べた通り、現代に生きる70年代の若者文化を読み取っていきたい。しかし実際には70年代の若者文化はメジャーには存在しておらず、追うことは難しい。そこで70年代の若者文化の影響を受けている事柄や70年代の若者文化の価値観の現在の姿について考えていきたい。

一節 ヒッピー文化の今

「1960年代後半にアメリカのヴェトナム反戦運動や公民権運動を中心とする反体制運動から生まれた、「ラブ&ピース」を提唱し自然回帰を目指す若者の総称およびそのムーヴメントである」ヒ

100に同じ

「BS朝日 町山智浩のアメリカの今を知る TV in Association With CNN

バックナンバー#81知られざるアメリカの歴史 60年代ヒッピーカルチャーとは何か?」 https://www.bs-asahi.co.jp/machiyama-now_cnn/lineup/prg_081/

(2021年12月3日)

ッピー文化はカウンターカルチャーとして存在し、リユウたちのようにコミュニケーションと呼ばれる共同体を作り、ドラッグを使用した精神の解放を推進した。もちろん現代と同じようにドラッグは違法行為であることに変わりはない。しかし彼らは「ラブ&ピース」の社会の実現のために60年代、70年代からフリーセックスや同性婚などの性の自由を社会に求めるなど現代的な価値観を体現する活動を行っており、ヒッピー文化の発祥の地とされる「サンフランシスコ郊外のハイトアッシュベリー地区」のあるカリフォルニア州では同性婚が認められるなどの動きを見せている。

またヒッピー文化のファッションが現在再評価されており、「グレイオール」の2021年2022年秋冬コレクションではヒッピーファッションを現代的にアレンジした「ネオ・ヒッピー」と呼ばれる服装が発表されるなど注目を集めている。さらに低予算で海外旅行へ行く人を差す「バックパッカー・ツーリズムの原点はヒッピー(drifter)の放浪旅行にあると考えるのが妥当であろう」と須藤

「WWD JAPAN ファッション セレブに学ぶ 70年代ヒッピースタイルのアレンジ術(2021年8月30日更新)」

<https://www.wwdjapan.com/articles/1250292>

(2021年12月3日)

須藤廣 2008 「消費社会のバックパッカー 日本人バックパッカーの歴史と現状」

北九州市立大学文学部紀要(人間関係学科)第15巻47～66

廣が Cohen Erik の言葉を参照し語るように現在でも数多く存在するバックパッカーの原点はヒッピー文化にあると考えることができる。

このようにヒッピー文化は数多くの影響を現代に残した。それはヒッピー文化が時代の流れに乗り、姿を変えながら現代にも存在していることを証明し、この先も続いていくことを示している。

二節 現代に残る学生運動

第三章二節で述べた通り、70年代に起こった過激派による一連の事件によって学生運動は衰退の一途をたどった。しかしその後も規模は小さいまでも学生運動は死んではいなかった。そして2015年安全保障関連法成立を目指す安倍政権への批判を行うある学生運動グループが注目された。それが「SEALDs」である。

「SEALDs」は「自由と民主主義のための学生緊急行動」の英訳 (Students Emergency Action for Liberal Democracy) の略称であり、日本の自由と民主主義の伝統を尊重し、従来の政治的枠組みを

https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=205&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1

(Cohen Erik 2003 「Backpacking: Diversity and Change.

Tourism and Cultural Change Vol. 1, No.2.」の孫引きとなる)

「withnews 話題 SEALDsとは何だったのか? 「大半が年配

の方でした…」デモ後の人生 政治に参加する「余裕がない」

現実(2021年3月17日更新)

越えたりベラル勢力の結集を求め、行動を起こし、2021年現在は解散している。2015年9月に実際に「SEALDs KANSAI」に参加した服部涼平は「安全保障関連法の話が出てきて、一人でデモに行くようになりました。7月の衆院での強行採決に問題意識を持ち、『ここで何もなくなっていくのか』と思いました」と語った。そして彼は学生運動衰退後、政治離れが叫ばれる中で「政治に若者の意見を反映するために、若者こそ声を上げるべきだと今となって感じています」と語った。

そしてこの「SEALDs」の活動には学生運動の衰退を呼んだ過激な暴力は存在しない。むしろ「集会では、地元で人気のDJ

「Chabe」がレゲエやリミックスを流し、終盤にはラップグループの「スチャダラパー」が参加し会場を沸かすなど、高いファッション性を印象付けた。「また毎週の集会後には清掃活動を行うなどクリーンなイメージをつけることに成功し、メディアをうまく利用することができた。

<https://withnews.jp/article/f0210317000qq00000000000000000000000110101qq000022634A> (2021年12月3日)

40と同様

マイク・スンダ「BBC NEWS | JAPAN」【視点】日本の学生運動に新時代か 政治とファッションが混合(2015年10月22日)】

<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-34600456>

(2021年12月3日)

しかし服部は実際に参加する若者の少なさを感じたと言う。

「SEALDs」は若者の運動とメディアでは取り上げられるが、実際は大半が年配の人であった。そのためメディアで取り上げられているほど実際に参加している人が周りにはいないという状況を生んでいるのだろうか。そこで服部はより若者が声を上げるべきだと主張するのだった。

「SEALDs」が解散して5年が経ち、社会は変化したのだろうか。

依然として若者の政治離れはあるだろう。しかし彼らの活動を「新しいスタイルのデモは政治参加のハードルを下げた」と評価する声は多い」。彼らはこの社会の中で声を上げ、行動を起こした。その結果何を生んだのかを結論付けるのは難しい。しかし以前の学生運動にはあった過激化などの暗いイメージを払拭し、誰もが参加者となる運動へと変える第一歩となったのではないだろうか。

ここまで現代の学生運動に迫ってきた。2015年に突如として表舞台に現れ、嵐のごとく去っていった「SEALDs」であったが、その運動は効果的であったと言える。また私はこれらの運動と60年代70年代の学生運動とで決定的に違う部分があると考えられる。これによって過激化によって忌避していった一般学生などの動きはなくなり、服部のように「SEALDs」解散後も活動を行っていくような継続的な運動ができるだろう。これこそが学生運動の本

来の姿であり、それはもう学生という立場を越えた運動は若者文化を越えた運動となると私は考えている。

おわりに

「限りなく透明に近いブルー」から始まり、若者たちの70年代を追ってきた本稿も終わりを迎える。私は70年代の文化の今を見た。そしてそれは時代の変化と共に姿を変えながら存在し続ける文化であった。文化は回り続けるのだろう。ヒッピー文化が2021年のファッション界に現れたように、学生運動が2015年に突如現れたように文化は常に周り続け、消え去ることなく、陽の目を見るその日を待っている。

参考文献

- ・さやわか(2016)『文学の読み方』星海社
- ・村上龍(1978)『限りなく透明にブルー』講談社
- ・新井智一(2005)「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる「場所の政治」」
- 『地学雑誌』114巻5号767-790

「朝日学生新聞社 NEWS WATCHER 解散、学生団体「SEALDs」残したものの(2016年9月4日更新)」

「<https://www.asagaku.com/chugaku/newswatcher/7464.html>」
(2021年12月3日)

- 「https://www.jstage.jst.go.jp/article/igeography1889/114/5/114_5_767_.pdf」
- ・城戸秀之(2007)「現代日本における若者イメージー豊かな社旗における若年世代認識の変化について」『社会分析』34号 75 - 91
「http://jsasa.org/paper/34_5.pdf」
 - ・須藤廣 2008 「消費社会のバックパッカーー日本人バックパッカーの歴史と現状ー」
北九州市立大学文学部紀要(人間関係学科)第15巻 47～66
「https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=205&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1」
 - (Cohen Erik 2003 「Backpacking: Diversity and Change. Tourism and Cultural Change Vol. 1, No.2.」の孫引きによる)
 - ・高城梨理世「artscapel[アートスケープ] Artwords(アートワード) ユニバーヒッピー」
「<https://artscapel.jp/artword/index.php/%E3%83%92%E3%83%83%E3%94%E3%83%BC>」 (2021年12月3日)
 - ・佐藤恵子「朝日学生新聞社 NEWS WATCHER 解散、学生団体「SEALDs」残したも(2016年9月4日更新)」
「<https://www.asagaku.com/chugaku/newswatcher/7464.html>」 (2021年12月3日)
 - ・佐藤優「生きる意味」を無くした若者たちは、なぜ学生運動に没頭したのか ポストモダン思想の源流にあるもの(2020年5月31日)」
「<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/72769>」 (2021年12月2日)
 - ・堀井憲一朗「なんとなく反体制：現代につながる「1970年代の呪縛」とは何か 若者文化が反抗的だった時代(2019年1月29日)」
「<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/59606>」 (2021年12月2日)
 - ・マイク・スンダ「BBC NEWS | JAPAN」【視点】日本の学生運動に新時代か 政治とファッションが混合(2015年10月22日)」
「<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-34600456>」 (2021年12月3日)
 - ・宮田理江「WWJD JAPAN ファッション セレブに学ば、70年代ヒッピースタイルのファッション術(2021年8月30日更新)」
「<https://www.wwjdjapan.com/articles/1250292>」 (2021年12月3日)
 - ・講談社 BOOK 倶楽部 限りなく透明に近いブルー」
「<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000205060>」 (2021年12月3日)
 - ・「フジテレビ NONFIX 過去に放送した番組 福生、最後の米軍ハウスへ自由に生きるとうとう」
「<https://www.fujitv.co.jp/nonfix/library/2004/437.html>」 (2021年12月2日)
 - ・「文部科学省 ー 学生運動 学園紛争の鎮静化」
「https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318395.htm」 (2021年12月2日)
 - ・「ホンシェルジュ 5分でわかる安保闘争ーいつ、なぜ起こったのか、学生運動等わかりやすく解説(更新 2021年11月22日)」

- 「https://honcierge.jp/articles/shelf_story/8789/」 (2021年12月2日)
- ・志望校が母校になる代々木ゼミナール 大学入試の戦後史 第二回(更新2018年8月20日)」
 - 「https://www.yozemi.ac.jp/yozeimi_journal/1808_01/」 (2021年12月2日)
 - ・年次統計 国立大学授業料(2017年10月31日)」
 - 「<https://nenji-toukei.com/n/kiji/10037/>」 (2021年12月2日)
 - ・青年文化／若者文化／ユースカルチャー(youth culture)」
 - 「http://tanemura.la.coocan.jp/re3_index/6H/hu_culture_youth.html」
 - (2021年12月3日) (中野収(2001)「若者文化」867 - 868' 中野収(2005)「ユースカルチャー」904の孫引きによる)
 - ・「出版社 河出書房新社のオウンドメディア Web河出 斎藤美奈子／成田龍一編著『1980年代ってどんな時代だったのっ。』」
 - 「<https://web.kawade.co.jp/bungei/414/>」 (2021年12月3日)
 - ・「excite ニュース 80年代にも学生運動があった。(2018年5月13日18:00更新)」
 - 「https://www.excite.co.jp/news/article/B_chive_science-history-japanese-history-80s-studentactivism/」 (2021年12月3日)
 - ・「日本経済新聞 若者たちの反乱 「学生運動」と経済成長 現代日本の足跡に学ぶ(11) 東工大抗議録から(2014年1月6日 3:30更新)」
 - 「https://www.nikkei.com/article/DGXNASGH20000_Q3A221C1000000/?unlock=1」 (2021年12月3日)
- ・「BS朝日 町山智浩のアメリカの今を知る TV in Association With CNN
 - バックナンバー#81知られざるアメリカの歴史 60年代ヒッピーカルチャーとは何か?」 「https://www.bs-asahi.co.jp/machiyama-now_cnn/lineup/prg_081/」 (2021年12月3日)
 - ・「SEALDs」 「<https://www.sealds.com/>」 (2021年12月3日)
 - ・「withnews 話題 SEALDsとは何だったのか? 「大半が年配の方でした…」デモ後の人生 政治に参加する「余裕がない」現実(2021年3月17日更新)」
 - 「<https://withnews.jp/article/f0210317000qq000000000000000000000000110101qq000022634A>」 (2021年12月3日)

ゼミ生のコメント

小島

タバコやドラッグの流行が来ることはないのかと思う。

当時の時代背景を知れた。

時代とともに学生運動やら淘汰されていく文化もありつつ、ファッションなどの流行り廃りが回り続ける文化が存在することを知れた。

羽田

ドラッグ、若者文化、学生運動など「限りなく透明に近いブルー」では注目するテーマが多い中、一つの論考でここまで作品のテーマを網羅して考察を深めていける能力は素晴らしいと思いました。構成もわかりやすく非常に読みやすかったです。当時の若者像と現代の若者像は根本の部分から変わってきているのではないかと考えさせられました。

古川

『限りなく透明に近いブルー』から出立し、学生運動をはじめとする過去の若者の生態とその評価について、地道に語られました。

七〇年代、ないしは過去の“若者”を検討することで、現代に生きる私たちの姿を振り返るきっかけになりました。

世間のイメージとホストクラブの実態

羽田敬史

研究の目的と背景

歌舞伎町の伝説的ホスト“ローランド”が一躍有名になった今でも、周りの人間から「ホストとして働いている」「ホストクラブに通っている」という旨の話題を口にした時、世間はあまり良い反応を示さない。私の母も私が大阪ミナミでホストやっていることを告げた時、ひどく取り乱したものだ。確かに、ホスト業界は「暴力、強姦、詐欺、酒、薬物、刺青」といったアウトローな要素を背景に持っていた時もあった。だが、令和になった現在ではそんなイメージとはかけ離れた大変興味深い業界になっている。だがしかし、研究という観点から見たホストやホストクラブ自体に関する論文や資料がまだ数少ないのが今日の現状である。もしかすると、この業界の理解が未だ進んでいないのはこのことに深く関係しているかもしれない。以上の理由から、今回のこの論考を通して少しでもホストという暗い業界のイメージを払拭することがこの論考の一つの目的である。

また、ホスト業界は金銭感覚がぶっ飛んでおり月数十万からようやく「細かい客」認定される。そんな業界だからこそ、一回のお会計で百万を超えることもザラにある。では、なぜそんなことが起こりうるのか。それを解明するために、接客業の頂点とも呼ばれるホストの接客について深く考察していこうと思う。これから大学を卒業し、社会人という大きな枠組みに所属する中で、ホストの接客を解明することは非常に有益なものをもたらすと予想している。よっ

て、ホストの接客を解明することで接客や人間関係に関して新たな視野の獲得をすることがこの論考のもう一つの目的だ。

先行研究の概観と課題の設定

『女性の主体性に関する一考察』「ホストクラブ」という場から『』という志田氏の論文では、現代の性に関して、性に対して価値を付与するものを“主体”と位置づけ、付与される側を“客体”とし、女性は性に関して客体である状況が多いと主張しており、ホストクラブは主体としての女性の欲望を叶えることが数少ない空間の一つだといっている。そして、女性がホストクラブに訪れる要因として、①現状への不満・既存の価値観への反抗 ②不安定なアイデンティティ ③理想の女性性の追求の三つがあると結論づけた。

そして、もう一つホストに通う客側の研究として、『「ヲタ活」に見る若者の消費行動と心理』という日本マーケティング学会が「ヲタ活（ヲタク活動）」という消費行動に焦点を当て、若者が何かの対象に「ハマっていく」構造について分析した資料を取り上げて考察を深めてみた。内容については後から語っていくことにする。

上記に挙げた先行研究から、「高額会計を生み出すホストの接客の解明」という課題に対して最初に注目したのは、ホストクラブに通う女性のニーズである（便宜上これを課題①とする）。それを調査するために、大阪ミナミのホストクラブが密集しているスポット 宗右衛門町周辺で路上調査を行った。

しかし、これだけでは高額会計を生み出すホストの接客の解明としては不十分である。このニーズに対してホストがどのようなアプローチ（接客）をして高額会計を生み出しているのか。それを考えるために、ホストグループ「ユグドラシル」のオーナーを勤めている社美緒（やしろみお）さんのYouTube上の動画資料と自身の職場体験から高額会計を生み出すホストの接客を解明していく（便宜上これを課題②とする）

ホストクラブに通う女性のニーズ（課題①）

はじめに

先行研究の志田氏が付けた「女性がホストクラブに訪れる要因」というのは、深層心理に近いものがあり、その心理から具体的にどのようなもの（行動）を求めているのかが不明瞭であった。今回調査する“ホストクラブに通う女性のニーズ”とはその部分を対象とする。

調査方法

大阪ミナミ宗右衛門町周辺にいる「すでに通っているホストクラブがある女性五十名」を対象とする。「なぜ通うのか」という質問をし、そこで得られる回答からホストクラブに通う女性のニーズを調べる。

補足

質問に対する回答として「担当（自分が指名しているホストのこと）が好きだから」という回答が目立ったため、「具体的にどこが好きなのか」という質問をした。また、調査テーマとは脱線するものの、協力していただいた女性全員に「月に大体いくらくらい使っているのか」という追加の質問してみると面白い結果が得られたのでこちらにも注目していただきたい。

※なお、この調査は2021年8月24日から2021年9月3日かけて行われたものである。

インタビューでの主な発言

「担当が好きだから通っている。顔も好きだし、性格も好きだし全てにおいて可愛くて好きだから」

「稼いだお金を担当に使ってあげられることが快感だから」

「通ってお金を使わないと、相手にしてもらえないから。シャンパンを卸すと店外もしてくれる」

「いってあげなきゃいけないからいってただけ。担当とは喧嘩中だけど、付き合ってるし私がいないと担当の売り上げがないから…」

「お店が好き！ヘルプもたくさんついてくれるし、シャンコもかっこいいから」

「わいわいできる場所で飲むお酒が好きだから。バーもいいけど、通ってるホスクラの方がノリがいい奴が多い」

以上の調査結果を終えて、ホストクラブに通う女性のニーズが浮かび上がってきたのでまとめていく。

ニーズ① 担当ホストのブランドに惹かれていて、ホストを「推し」として応援したい

ニーズ② 担当ホストに真剣な恋をし、その人を近くで応援したい
ニーズ③ 担当ホストやヘルプといったお店の空間とお酒が好き

以上のようなニーズが浮かびあがってきたものの、インタビューの女性たちの発言から、ホストクラブにやってくる女性はこれらそれぞれのニーズにピッタリ当てはまらないことに気がついた。故に、これらの分類に当てはまりながら、その中でどのニーズが強い女性(客)なのかで分けられるという風に仮定してみた。この仮定で街頭調査に協力していただいた女性30人の内訳を示すと以下のようになる。

| | |
|--------------|-----|
| ニーズ①を強く求める女性 | 10名 |
| ニーズ②を強く求める女性 | 7名 |
| ニーズ③を強く求める女性 | 33名 |

宗右衛門町五十名調べ

さらに、「月に大体いくらくらい使っているのか」という追加で質問した回答から面白いデータが見えてきた。実はこの質問には

「自身の経験則の証明」という意図があった。その経験則とは、「ガチ恋感覚(付き合ってる等)でホストに通っている女性」よりもアイドルなどと同じような「推し感覚でホストに通っている女性」の方が高額会計をしやすい傾向があるというものだった。そして街頭調査の結果、この経験則は証明されることになる。“ニーズ①を強く求める女性”(以下、①の女性)十名のうち、八名が担当ホストのエース(一番お金を使うお客さん)であることを告白したのだ。最低でも10万円を月にホストの会計として使っており、中には月200万円ほど使うという猛者もいた。以下は私の推論なのだが、①の女性は高額会計をする上に、長く通う人が多い(いわゆる太客)。“ニーズ②を強く求める女性”(以下、②の女性)は、気持ち(恋心)を持続することができず、働くモチベーションも大金を使う勇氣も無くなってくる。ゲリラ的に高額なお会計はあったとしても、すぐに関係がきれやすい。ニーズ③を強く求める女性(③の女性)は、お金を使う目的(お金を使いたい気持ちのベクトル)が自分に向いているため、①や②の女性に比べるとお会計がやや低

い傾向がある。(いわゆる細客)①の女性は、ホストに使うお金の感覚がブランドものの服やアクセサリーを買うのと同じであり、自分がお金を使うことでその担当ホストの価値が上がるということで、気持ちの面でも完全な恋心だけではなく、推すことへの快感等の気持ちがあるためストレスがかかりにくいのではないだろうか。事実、過去にメンズ地下アイドルなどを推していた経験がある女性は大客になる傾向が多い。

今回のこの論考では「高額会計を生み出すホストの接客の解明」というのがテーマであるわけなので、①の女性についてさらに掘り下げようと思う。そこで参考になるのが、先行研究の部分にあった『「ヲタ活」に見る若者の消費行動と心理』である。この論文を通して、なぜ彼女たちが生活のほとんどを投げ出してまで、ホストに貢ぐことができるのか、恋心以外の原動力を調べることができた。この論文では、ヲタク活動(以下、ヲタ活)という消費行動に焦点を当て、若者が何かの対象にハマっていく構造について分析していた。因子分析及び重回帰分析の結果、ヲタ活に対して「献身」「蒐集」「帰属」「創作」「布教」「浪費」という9つの潜在的な効用を求めて、若者が対象にハマっていく姿が検証された。(この論文内では、単に対象を応援することに喜びを見出しているというよりも、より献身的に推しの活動を支え、成長や活躍を実感できることに効用を見出していると考えられている。)

若者はなぜヲタ活にハマるのか、背景要因を探ったこの論考では「イマココ」の生活を楽しく、豊かに過ごしたいという背景から献身的にヲタ活をおこなっている様子が見られる。また自分自身が周囲から大切にされているからこそ、他者である推しに対してでも尽くすことができるのかもしれないと考えられている。一方で他人を信用しすぎることはできないからこそ、好きな推しのサービスマンや成長を期待してヲタ活に励んでいる様子も考えられる。更に周囲から認められたい、気にかけてほしいという承認欲求が影響していることも特徴的である。周囲や社会に認められたいがなかなかうまくできない若者が、その想いを献身的に応援する推しの成長や大きなステージでの活躍で社会的に認められていく姿を見ることで、自身の承認欲求を代替的に満たしているのではないかと推察している。アイドルやアニメのヲタ活とホストに通って、担当ホストを応援することは近いものがあり、①の女性はこういった心理のもとでホストクラブに通っているものだと理解することができた。

ここからは、①の女性に対して、ホストがどのようなアプローチ(接客)をして高額会計を生み出しているのかを考えていく。そこで十分な資料になってくるのがYouTube上でアップロードされている、『社塾／モチるためのセミナー』おやしろうくんTVの動画集だ。これらの動画は主に歌舞伎町に存在するホストグループ「ユグドラシル」のオーナーを勤めている社美緒さんをはじめとする一流ホストが、従業員に対しての講習や教育を行なっている姿の動画

で、そこでは一流ホストになるための様々なヒントが語られている。

今日のホストクラブ

まずは簡単に「歌舞伎町ホストクラブで世の本質を見た話」という「黒子の記事」を参考にしながら、ホストクラブの基本情報を整理しておこうと思う。

ホストクラブとは、いうまでもなく男性従業員が女性を接待する社交飲食店である。基本的には、キャバクラのような時間制限はなく、フリータイム制で楽しむことになる。そして、他の水商売の世界にはあらず、ホストクラブにしかないのが永久指名制だ。

永久指名制は建前上「ホスト同士が客を奪い合って争うのを防ぐため」の制度だが、本質は別にあるのではないかと指摘されている。キャバクラでは、同じ店でもその都度別のキャストを指名することができる。だから、場合によっては「アフターしてくれないなら君のライバルのあの嬢に乗り換える」みたいな駆け引きも可能でキャストを刺激して楽しむ客もいる。

関係性を提供する水商売の世界では男性客は「女性を交換できる立場に立つ」という欲望を、女性客は「交換不可能な相手と一途な関係性を築く」欲望を実現させる構造になっていると考えられている。また、2021年10月17日時点では、大手ホストクラブ情報サイト「ホスホス」の掲載店舗 866 店、掲載人数 17,798 名であった。ホスホスに掲載されていない店舗があることを踏まえると、2021年において約 900 店舗程のホストクラブが営業を行っており、全国で約 18,000 人のホストが存在することは容易に想像できる。

ホストの仕事

ホストの仕事といえば、どんなイメージを抱くであろうか。自分がホストを始める前のイメージは女の子とワイワイ酒を飲んで盛り上げたり、女の子に恋心を抱かせてイチャイチャしたりといったイメージだった。

社美緒はホストの仕事を「関係性を提供する仕事」だといっており、ホストは「お金を払うと日常に無い関係性を演出してくれる存在」「お金を払ってでも会いたい人間」であるべきだと語っている。その関係性を大事にすることで、自身のブランディングに応じた会計が生まれてくると語るのだ。関係性を提供するのは、「信頼を裏切らない」とか「相手が求める像として存在し続ける」などといった行動をすること。実際に、ホストとの関係性と一言でまとめると、単純なもののように思われるかもしれないが、具体例を見てみるとかなり複雑になっている。

例…「片想いをする女性と振り向いてくれないホストとの関係」「絶対的信頼をする女性とホストもまた絶対的信頼をしている関係」「自分の生活を徹底管理して欲しい女性と徹底管理するホストの関係」

これらの関係性を提供した場合、お客さんが求めるものを満たしてあげるけど、満たし切らないことが大事だそうだ。「好きだけど、もっと先が見たい。もっと距離を縮めたい。」などそういった感情に行動とお金が発生してくる。

関係性を構築

関係性を提供する前に、まずは関係性を構築しなければならぬ。そのためには、信頼を得ることと相手のこと（ニーズ）を知ることが必須になってくる。このことに関して、歌舞伎町のホストグループ“ユグドラシル”Artemisの草摩由希さんがしたツイートが一時期話題になっていたので紹介しておく。

仕事や、年齢や

どれくらい稼げるか

どれくらいの頻度で来れるか

どれくらい使えるか。

そんな数字よりも

どんな色が好きで

デートに行くならどこで

最近悲しかった事や

最近嬉しかった事や

僕のどんなところが好きか。

に僕は興味があります。

姫の好きな色知ってますか？



→草摩由希

関係性をうまく構築するには、相手の好きな色から性癖まで知ることが一番大事で、その上で相手が嫌な思いをさせないことが大事だという。↓女の子がお店に来るときは、来てからただ一緒にお酒を飲んで話すだけではなく、前々から女の子が好きなキャスト（ホストでは、基本的に客である女の子と、女の子が指名するホスト（通称担当）と担当ではない第三者的従業員（通称ヘルプ）が一緒につくことが多い。ここでのキャストとはヘルプのことを指す）・話・お酒を予習して一緒につくであろう、ヘルプに共有しておく。確かに、自分の経験則ではあるが、中々売れていないホストは女の子が求めているアプローチができていなかったり、女の子が求めるものを満たしすぎている節があったり、嫌われることにビビって毒にも薬にもならない接客をしているイメージがある。初めは、とにかく質問をしながら、相手のことを知ることが大事なのである。似たような話の例で、他の有名ホストの発言の一部を紹介しておこうと思う。

「魔法ってのは記憶のことなんですよね。なんで魔法って言ってるかという、誰でもできるからなんですよ。でも、それができるのは俺しかない。っていうことに気づいて…。落ちている情報をかき集めて、そこから何かを錬成できたのが俺だけ。言っしまえば、女の子が言った発言とか情報ってのはMPなんです。それを集めて自分がその情報を参考にし、女の子に行動を起こすと絶対に効力があるので僕は魔法って呼んでます。」

「僕、ジャニーズ」まで全部わかるんですよ。ヴィジュアル系も勉強しました。当時はそういう雑誌も全部読破して、曲も暗記してましたし。ホストには「ラスソン」って文化（※「ラストソング」の略。その日の売り上げが一番良かったホストが好きな曲を歌うこと）があるんですけど、女の子から「これ歌って」って言われたら歌えるようにしてました。女の子が好きなアーティストの曲は全部覚えて。「え、この曲なんで知ってるの！？わかる人初めて！」って喜べれます。女の子に寄り添う努力をしていくと、必然的に他のホストより対応できるお客様の数が多くなるんです。他のホストにハマらなかった子たち全部、僕が受け皿だったんで。その結果、去年は歌舞伎町で指名本数一番多かったです。」

ホストクラブで起こる全ての価値ある瞬間それは、その場に居る全ての人にとっての『財産』です 僕の目に焼きついた 歓喜、涙、怒り、勝利、敗北 その全ての景色が自分というホストの『原風景』

草摩由希さんの話題を出したので、ここで彼が提唱するホストの「つのステータス」というものを紹介しておく。

1 SNS

2 自己投資 （見た目）

3 基礎力

- 4 営業力
- 5 見極め
- 6 育てる
- 7 管理能力
- 1、2 ブランディング（外面を磨く）
- 3、4 ホスト力（内面を磨く）
- 5、6、7 関係性

ホストとは以上の「1つのステータスで構成されており、上から順番に磨いていくことでホストとして成長できると草摩由希は語る。このステータスを磨いていないと初回で来てくれた女の子を自分のお客様として抱えていくことが不可能だということを分かりやすくまとめている。

ここまでで「相手のことを知る」ということを書いてきたが、それは草摩由希さんの「1つのステータスで言うところの、“3、4ホスト力（内面を磨く）”に該当する。ホストに来る女性に対して、どのようなアプローチ（接客）をして高額会計を生み出しているのかを考えていくというのが目的であるからして、やはり“1、2ブランディング（外面を磨く）”についても説明する必要がある。

ブランディング

「ホストとは、お金を払う価値を感じられる言動、身だしなみをしているもの。関係性を提供する仕事。お金を払ってでも会いたいと思う存在。非日常を演出してくれる存在。

一緒にいたらお金をもらえるとかな、女の子を好きにさせちゃえばいいとききくという時代は終わってきている。その理由は、SNSが発達して、ちゃんとした男とだらしのない男が一目瞭然になってきているから」——社美緒

前述した通り、今日でホストという存在は約18,000人ほど存在している。それは極端な話、ホストを続ける限り、容姿や接客態度・営業方法を他のホストと比較され続けることを意味する。そこで必要になってくるものがブランディング。自分のブランディングがちゃんしていると、客は「ーがいい」から「ーでいい」の考えにシフトしてくるという。

自己投資で自分の外見と内面を磨き、SNSなどで発信し、良い口コミを集める。これが大まかなブランディング活動と考えていいだろう。そう、つまりホストとはセルフプロデュースなのである。そうやって、自分が価値のある存在として扱われることと関係性を大事にすることを両立させることで高額会計が生まれて来るのだと私は資料から理解した。高額会計を生み出すホストの“接客”という部分にのみスポットを当てた場合、以上が結論として考えてもらって問題ない。

研究を進めていくうちに生まれた考えるべきもう一つの課題

ここまで、一流ホストの根幹部分として関係性構築とブランディングという二つの大きな要素を発見することができた。しかしながら、刹那的ではあるものの、関係性構築やブランディングを大してしていないにもかかわらず、100万以上の高額会計をするホストを私は何人もみてきた。もちろん、私の知らないところで担当と女性の間で複雑な関係性構築等があったのかもしれないが、それでも「出会って3ヶ月目でシャンパンタワー（推定20万円ほど）をする子」や「出会って1ヶ月目とかで高級ボトル（ラーセンやドルフィンといった15万円以上のボトル）を卸す子」などは確かに存在する。ホストの営業方法に正解というものはなくて、ホストの数だけ営業方法が存在するのだと私は考える。だとしたら、さまざまな営業方法でも女性がお金を異常なレベルで使うというこの空間自体を考えるべきなのではないか。そんなことを考えていた時に『「男らしさ」の快楽…ポピュラー文化からみたその実態』という資料を見つけた。この本は、今日の「男らしさ」というものの崩壊や新たな「男らしさ」を提唱しているものである。この資料の中で、木島氏が書いた「男らしさ」の装着・ホストクラブにおけるジェンダーディスプレイという第9章の部分が非常にホストクラブという異常空間を考えることの指針となりそうなので、こちらを参考に紐解いていく。

「男らしさ」のアイデンティティ

今日では「男らしさ」というものの正体が不明瞭になってきていることを指摘している。しかし、そんな時代のなかで「男らしさ」を演じる職業“ホスト”が存在し、彼らは何を演じ、どんな感情を抱き働いているのか。それを考察している。

そのホストが演じる「男らしさ」であるが、論者の筆者である木島氏は「演技的なものであるため、そう見えるかどうか問われている」と述べている。有り体に言えば、それが本当に社会にとって「男らしい」かどうかはどうでも良いのである。なぜなら、社会全体で不明瞭とされているのだから。（社会全体で不明瞭になったことの原因は、従来までの「男らしさ」とはすなわち「強い男」という概念が脱ぎ捨てられ、「男らしさ」というもののアイデンティティが拡散したことに起因する。）

ホストにおける「男らしさ」とは

ホストクラブの特殊さは、まずその非日常な空間にある。店には百万単位の高級酒がゴロゴロしており、客である女性はドレス・アップして意気揚々と店の門を潜る。つまり客は、ホストの働きぶりを眺めるだけでなく、その場にあう女として映るように、店の中で精一杯背伸びをしているわけだ。“背伸び”というワードが出てきたので、もう一つホストクラブにおける背伸びに触れておく。それは未収である。未収とは俗にいう“カケ”や“ツケ”を意味する。この未収制度があることで、客は現在持ち合わせていない金額のシャンパンやボトルを卸すことができるのだ。未収の際、客

である女性は個人情報のコピーをとられ返済期限を指定される。この返済期限までに間に合わせるため、風俗のハードな出勤や出稼ぎを繰り返す。返済期限を過ぎると、実家にまで連絡がまわったりするため必死である。ホストの中には、この未収を女性に半ば強制的にすることで自分から逃れない一種の束縛をかけるホストもいる。こういったことが黙認されていることもかなり特殊な場所だと言えるだろう。

そして、ホストクラブでは、高額なお酒を卸した時、シャンパンコールというものが存在する。キャストとして働いている全従業員が接客を一旦辞め、お酒を卸した女性とその担当ホストのテーブルに集合するのだ。そこからの流れは店によって多種多様であるので、具体的な流れを書き記すことはできないが、大体はメインの二人を主役にマイクパフォーマンスが行われる。二人を主役にする記者会見のようなものだとさえいわれりやすいだろうか。「内助の功」という言葉が存在するが、あれは妻が縁の下の力持ちとして作用することを指すので、支えている女性が明るみに出ることはない。しかし、このシャンパンコールは(ホストの世界では)支えている女性が見るみに出るのである。筆者はこれを「外助の功」とよんでいる。よって、ホストは女性にとって自己承認欲求、自己顕示欲を満たす術(げんじ)的消費のオブジェクトのようなものとして存在することができるのだ。

「ホストの萌え」

ホストにおける「男らしさ」の一つとして、女性にとって術示的消費のオブジェというものを資料から読み取った。ホストは、楽なことしたり、悪いことをして大金稼いで煌びやかな生活をしているようなイメージがあるかもしれないが、これまでにみてきたように通常のお店の営業時間だけではなく、一日中女の子との関係性やブランドインクを意識して生活しなければならぬ。そうした水面下で見せる「一見するとマッチョのようで実は繊細」といった役割の二面性が、女性の側からすれば、少女漫画で描かれる男性ヒロインへの幻想(例えば雨の日に一人濡れた子犬を抱き上げている不良のような)などと合致して「萌える」のであり、またホストの側からしても、自尊心を満足させる「快楽」の源泉なのだ。木島氏は主張している。木島氏の論考は確かに現役ホストである私にとっても思い当たる節があり納得がいくものであった。しかし、ホストにおける「男らしさ」が術示的消費のオブジェだけなのかというところでは違ふ気がする。私は今日に至るまで、色んなホストに出会ってきた。しかし、自分の姫のことを「金」としか見てないホストってある程度まで伸びるが結局中途半端な位置で終わることが多い気がする。このことから、相手をひとりの「人間」として見られない人が、誰かしらに好かれるのは難しいんだらうなということを感じている。木島氏の主張に付け加える形で私の主張も述べておくと、人間力や社会性というスキルを最大限に伸ばしつつも、術示的消費のオブジェに徹することこそがホストにおける「男らしさ」の答えなのだと思える。

ホストという世界と今後の課題

最初にも述べたように、本論考の分析・検証は、ホストの接客を解明することで接客や人間関係に関して新たな視野の獲得をすることを目的としている。そして、ここまで高額会計を生み出すホストの接客という部分に注目をして、深く考察した結果、一流ホストの根幹部分として関係性構築とブランディングという二つの大きな要素を発見することができた。一般的に女性から貢いでもらって生計を立てているというのがホストのイメージだと思うが、一方的に女性からの搾取をしているわけではなく、そこには戦略的かつ泥臭い数々のドラマがあるということをなんとなく理解していただけたから幸いである。そして、今現在歌舞伎町や宗右衛門町を中心にたくさんさんのホストクラブとホストが増えてきている。ここで、ホストの実態を紹介してきたが、ここには当てはまらないホストも登場してくることであろう。時代とともに変化していくホストクラブという業界の研究者がもつと増えれば社会的にも受け入れやすい業界になってくると思う。そのためにはまず、一般の方々にホスト業界について興味を持っていただくことが最大の課題であると私は考える。

ゼミ生のコメント

小島

ホストの教育の良さが分かった。

一般の人にイメージを払拭、興味を持ってもらうには、また、コロナによるホストのイメージがどうなったのかが疑問になった。

一流じゃないホストがイメージを引っ張っているのかなと考えた。

佐藤

ホストの世界とは縁遠い私にホストの世界の実情を教えてください。この先も続くホスト業界を羽田さんがどう考えるのかを聞きたい。

古川

ホストの持つ能力や業務を紐解く点で悪いイメージの払拭を図っており、ホストという職業・役割について細かく分類されていたと思います。そしてどこから悪い印象が来たのかにも興味を持ちました。その方面からのアプローチも面白そうだと感じます。

卒業制作

r
o
o
t

小島諒太

人生で二度死にかけたことがある。

一度目は小学二年生の時。家族旅行で海に行った時にはしゃぎすぎて深い方へと泳いで行ってしまった。気づいた時には足がつかずにブクブクと口から泡が漏れ、意識が遠のいて行ったのを覚えている。目を覚ますと砂浜に横たわっており水を吐いていた。どうやら母親が助けてくれたらしく、大事には至らなかったのもそのまま旅行を楽しみ何事もなかったかのように家に帰った。二度目は車で事故をした時だ。その頃は連日大麻を吸っていたせいもあってぼーっとしていた。大阪のストリートで金を稼ぐ「仕事」をしていた僕は毎日揉め事や傷が絶えなかった。いわば、風俗やガールズバー、キャバクラ、セクキャバ、フィリピンパブ、ショー、ホストクラブ、闇カジノに客を入れてマージンをもらおうキャッチをしていた。全てを奪ってやる。よくこの頃の僕はそう口にしていた。金さえあればなんでもできるしどこにでも行ける、そんな気がしていた。日頃の行いが神様に見られていたのか、僕は軽自動車の運転中、百二十キロのスピードでカーブを曲がりきれず、完全にハンドルを取られ車体がスリップした。その日は雨上がりで路面がツツツと濡れていた。車体が二回転したあとにガードレールに突っ込んだ。ハンドルをとられる、とはよく聞くが実際にはハンドルが粘土のようなもので固められ全く動かない状態に近い。ガードレールをへし曲げ、車は止まり、エアバッグがお餅のように飛び出した。あ、死んだ。と思ったが我にかえるキーンという耳鳴り

と心臓がドクドクと動いていた。手足もあつたし、感覚的には全身をボクサーに軽くジャブを入れられたようだった。生きてる、と思いい曲がったドアを蹴飛ばして外に出ると、車体からは煙が出ていて配線が剥き出しになっており、車内のプレーヤーから歪んだ音楽が流れていた。脳みそを回転させ警察と弁護士に電話をかけた。こういう時に僕はいつも冷静でいられるのが怖かった。体の後遺症は残らなかった。生きててよかったと思えた。

その時に「仕事」を辞めろという神様からのメッセージだったのかもしれない。僕はそれを無視ししばらく仕事を続けた。

ある日のことだった。いつも通り路上に行き交う人に笑顔で声をかけている時だった。三人組の男に声をかけ、セクキャバに行きたいとのことだったので僕は iPhone で店に値段交渉をした。一人七千円ということで話がまとまり、三人組に向かって

「交渉できました、さあ行きましょうか。」

と言うと、三人組はびたつと足を止めたまま先頭の一人がパチッと指を鳴らした。

「よし、GO」

その三人組は横並びの陣形を取り出し、僕は囲まれた。しくった、私服警察だ。と思うと同時に僕は全速力で逃げた。五十メートルは逃げたものの、やはり警察は足が速い。僕は二人に体を強引に捕まれ、自動販売機に叩きつけられた。

「地面に頭叩きつけたろか！」

と大声で怒鳴られ、僕は両手を上げ、降参のポーズをとった。

「はいはい、もう動かんから。わかったわかった。」

僕は戦意喪失し、諦めの言葉を口にした。

…よくある話だ。僕はヘマをした。この仕事には警察と鬼ごっこをすることがよくあるが今回はしくじったな、と思い大人しくパトカーに乗った。パトカーに乗る前にミナミの空を見上げた。

空はどす黒く、欲望と金が渦巻いているミナミの空を目一杯吸い込んだ。

それからしばらくしてこっちの世界、格好つけた言い方で言うと娑婆に戻って来たわけだが裁判や車の事故の件や「仕事」を辞めるやらで借金を負った。本当は辞めたくなかったが、親に迷惑をかけたし、出所してミナミの街を見上げた時に、この街はもう僕を受け入れてくれないと悟った。なぜかはわからない。留置所の退屈さや虚無感や閉塞感はこの仕事を辞めるのに十分な理由だった。それだけだった。甘い汁を吸ってきた分、現実には重く僕にのしかかった。一週間ほど家に籠り、僕は傷を癒した。もう大麻を吸わないことを決め、その欲望と戦った。それから夜勤の飲食のバイトを見つけ、連日連夜僕は働いた。借金を返さなければならなかったし、じっとしているのにも限界が来たからだ。鶴橋にあるその職場は社員がアル中だったり、包丁を向けてくるやつがいたり風俗嬢や前科者など変わった

たやつのおんパレードだった。僕は金のためにそいつらの感覚に合わせながらなんとか働いていた。悪いことはきっぱり辞めたがタバコだけはどうしてもやめれずに自分の傷を塞ぐように、もしくは自分を傷つけるように煙を吐き出す毎日、募る借金。いつまで耐えるのか、口座の残高とにらめっこしながらとにかく毎日を乗り切った。退屈で心の隙間を埋めることが出来ずに灰色の毎日、大阪の街は僕を受け入れてくれないように思えたしこれからの未来を考えると不安で堪らなかった。

一年くらい働いただろうか、僕は周りの人となんとかうまくやれるようになったしほぼ社員のような形で給料も年齢の割には貰えるようになった。徐々に借金を返していき、普通で平凡は幸せなことだと気づけるようになった。思えば僕はいつだって自分を偽り、嫌われることを避けてきたように思う。未来への不安はあったが、僕を僕で居させてくれる友達や家族や先輩には感謝してもきれないくらいだ。そんなある日、僕の異動が決まった。新しい店舗を出す、とのことだった。オープニングスタッフとしてみんなを引っ張って行って欲しいと上司に言われたので僕は首を縦に振った。わくわくしながらまた、連日連夜働いていた。僕の異動が決まってから二週間後の六月十三日、新しい女の子がバイトで入ってきた。

「はじめまして、コウセイです。よろしくお願ひします。」
と背後から声をかけると女の子は振り返り、
「あっ、ユウです。よろしくお願ひします。」

と少し恥ずかしがっている様子で丁寧な挨拶をしてくれた。年は二十六くらいだろうか。目には茶色のカラーコンタクトを入れていて唇の赤いリップが印象的だった。髪は茶髪でロングヘア。少し面長で大人の女性を代表したような美人だった。素直に可愛いな、と思うと同時に水色のオーラが見えた。たまに、僕は人のオーラみたいなのが見えることがある。目に赤色の光を宿している人もいれば黒色の邪気オーラを纏っている人もいる。留置所の中では目に赤色の光がある人が多かった。危険な人、というのが僕の中でのイメージだ。この女の子の場合水色だった。水色のオーラは僕の中では寂しいけれど、素直にそれを表現できない人という僕の中では勝手な解釈があり、それは当たることが多かった。それと同時に夜職特有の雰囲気を感じた。昔、夜職をやっていたんだらうなと勝手に洞察した。

「めっちゃ丁寧な人ですね、よろしくです。」

と僕はユウちゃんに笑顔を振りまいた。坊主頭の社員に

「コウセイ、すぐ女の子行くからなあ、ユウちゃん気をつけや。」

と冗談めかした。僕は

「いや、僕シャイなんでそんな無理っす。でもユウちゃん可愛いです。」

とふざけながら言った。

「ユウちゃん、コウセイと同じで新店舗のオープンングスタッフだから、ここで色々教えたってな、手出すなよ。」

「あつ、新店舗いくんすね。一緒に頑張りましょう。」

その日はそんな会話をし、店が忙しくなったので雑談する暇もなくユウちゃんは夜の十時に上がり、帰って行った。

「今日の新人のユウちゃんめっちゃ可愛かったっすね。」

僕は主任のカワカミさんに言った。

「そやなあ、ええ子やし仕事できそうやわ。」

「要領よさそうですし、やる気あるの見てわかるんですけど育つと思いますよ。でもね、僕思ったんすけどめっちゃ夜職の匂いしません？」

「あー、まあまあ、わかるわかる。髪の毛の感じとか話し方やろ？」

「そうっす、風俗かなあ思うんですけどね。今度聞いてみますわ。」

その日も僕はタバコをめいっばいふかしながら業務を終わらせた。家に帰ってもすることがなかったのでストロングゼロを飲んで気分良く鼻歌を歌っていた。なんだか、次の出勤でユウちゃんと被るのが楽しみになっている自分がいた。

次に出勤するとまたユウちゃんがいた。僕よりも早く出勤していたユウちゃんはレジをしていた。接客は丁寧で愛想もいいが、お会計を間違えていた。

「あああ、すいません。」

とテンパっているのを見て結構ドジな人なんだなと思った。

「ユウちゃんおはよう、大丈夫？」

僕はホールに出で声をかけた。

「おはようございます！はい！お客さん怒ってなかったのだから助かりました、、コウセイさん今日も出勤なんですね。」

「うん、ほぼ毎日やなあ、忙しいと思うけど何でも聞いてな
ー。」

「ありがとうございます。本当に忙しいですね。もう何がなんだか、、」

「わかる、ここの店のホールめっちゃ難しいよな、意味わからなくらい注文されるもん。」

「そうなんですよ、泣きそう。コウセイさん優しく教えてくださいね？」

「うん、優しいかは知らんけど教えるわー。」

僕は笑いながら答えた。人との距離の詰めかたが上手い子なんだな、と思った。なんだか仲良くなれそうだったしどんな子なのかもっと知りたい。僕はユウちゃんに興味を持った。

「ユウちゃん、新店舗のライングループ入った？」

「まだです！」

「じゃあライン交換しよー、招待しとくわ。」

「ありがとうございます！あとみんなユウチンって呼んでくれるからコウセイさんもそう呼んでくださいよお。」

「ユウチン？えー、年上やろーし馴れ馴れしいからええわあ、やめとく。」

「えー。」

ラインを交換した。アイコンは犬のアップの写真だった。名前は星印のマークだけで、ユウとかユウチンではなかった。なかなか変わってる子なんだなと思った。

「じゃあ、招待しとくからー。また入っというて。」

「わかりましたあ！」

そんな会話をし、また店が忙しくなったので特に雑談もせずユウちゃんは十時に退勤していった。その日も僕はタバコを吸いながら業務を終わらせた。ユウちゃんと話した以外は普通の日だった。僕は朝の四時まで働き、家に帰った。帰りにはタバコがなくなっていたのでセブンイレブンに寄りタバコとストロングゼロと焼きそばを買った。いつもの目が細い店員さんが対応してくれた。僕は思い出したようにユウちゃんに、「おつかれさまです。改めてよろしくです。」という内容のラインを送った。家に着いてストロングゼロを飲んでいと携帯が振動した。画面には星印のマークから「おつかれさまです。今日もめっちゃ忙しかったですねー朝の四時までお疲れ様です。」とメッセージが来ていた。こんな時間も起きてるのか、夜型の人なんだなあと思ひ、少し酒が回ってきた僕はしばらくメッセージをやり取りしていた。三十分くらいやりとりしていただろう

か。「寝れへんねんやったら電話しよう。」という主旨のメッセージを送ると、向こうから電話がかかってきた。

「もしもし。」

彼女の声は店で聞く元気な声というよりは、プライベートな素の声という感じがした。

「もしもし、時間大丈夫？」

僕は少し緊張しながら話した。

「うん、私あんま夜寝れへんねんなあ、ちょっと話そう。」

「そうなんやあ、おれも夜型やからなあ。朝の九時ごろまでいつも起きてる。」

「起きすぎやろ、ちゃんと寝やなあかんでえ。」

「せやな、てゆうかユウちゃん前の仕事何しとったん？」

「うーん、コールセンターで働いてたよ、ノルマめんどくさくなつて辞めたけど。」

「へえー、ノルマとかあるねんな。大変よなあ電話捌くの。あのさ、めっちゃ失礼やったらごめんやから先謝るけどさ、ぶっちゃけ夜の仕事やってたことある？なんとなくやけど。」

「え、なんでわかったん！ミナミのキャバで働いてたよー。もう二、三年前の話やけどね、ルナカナっていう店、安キャバやけどね。」

「やっぱり？なんとなく雰囲気とか話し方とかでそう思った。ルナカナいまもあるよな、最近人あんま入ってないかもやけどなー、おれもミナミで働いてたから一緒やなー。」

「やっぱりバレるんやなあ、なんでなんやろ。ルナカナは客層悪いからなあ、スカウトとかしてたん？」

「ううん、キャッチ。色々あつて警察のお世話になったけど。」

「ミナミも面白い街よなあ。」

「面白いよなあ、でもキャッチの人よくパクられるよね、こんな話通じるのも面白い、なんか前科持ちの人って面白い人多いよね。」

「まあ、おれ前科はついてへんけどな、なんか夜職の雰囲気ってぬけへんよなあ。」

「よなあ、よく言われる。」

僕は会話に詰まった。次は何を話そうかなあと頭を回転させていた。それと矛盾しているが、なんだか話していて心地が良かった。言わなくてもいいことを言っているのは事実だが、仲良くなりたいたいと思っていた。

「ユウちゃんって彼氏おるん？」

「おるよー。」

「そうなんや、どれくらい付き合ってるん？」

「三年くらいかなあ、遠距離やけどね。」

「ふうん。」

なんだか僕は少し気持ちが沈んだ。いい女の人にはいつだって彼氏がいるだろうし、そんなものだろう。現実はいつだってそう甘くはないのだ。

「でもねー、うーん。コウセイくんはね、なんか話したくなっちゃうねんな。秘密なんやけどね、聞いてくれる？」

「うん、言わんよ。」

「ほんとに？」

「約束する。」

「まあ、付き合ってる人はいるんやけどね。それは今の職場の人にも聞かれて彼氏が転勤で福岡ですって言ってるんよ。」

「うん、あー店長とかそういうのめっちゃ聞いてくるやろ。」

「そうそう、転勤っていうのが嘘やねんな、実は。一年半前くらいかなあ？彼氏と喧嘩して募ってるものがあつたんやろなあ、首絞められて失神してん私。気づいたら一日くらい時間経ってて。友達に連絡したら、警察に電話してくれて彼氏逮捕されたんよ。」

「え？う、うん。」

「ほんで出所してきて、裁判なってんけど警察の人がもう離れなさいってなって。彼氏の出身福岡なんよ、それで今福岡の実家に帰ってはる、いつかは大阪戻ってくるみたいやけど。」

「なるほどね、うーん、うん。なんも言えへんわ。」

「そうよね、あんまり人に言わんねんけど。なんか話しちゃった。秘密ね。」

「わかった、秘密やね。すごい過去やね。」

僕は驚いたというよりは唾然としていた。こんな時にどう言っているかわからなかったし、闇の深い女の子なんだろうなと思

った。僕もその闇の中に引きずり込まれるような気がして少し怖かった。漫画や小説のようなことは現実でも起こり得ているのだ、ニュースで見る殺人も自殺もなんら関係ないものではない。全ては現実であり自分たちの身の回りの出来事なのだと改めて実感した。

「そう、過去はそんな人多いんよなあ。彼氏はよく刃物出す人やからなあ、刺す勇気もないくせにな。」

「あかんで、殺されたら。」

「まあ大丈夫よ、いつか帰るから待っててって言われたから待ってるけどもう情になつていっているとか好きなんかわたらのよな。」

「待ってるってすごいな、殺されかけてもそう思えるのはすごいと思うよ。」

「そやなー、てゆうかめっちゃカミングアウトしてもーたわ。」

「コウセイくんが聞き上手やから。」

「まあ、そういうやばい話嫌いじゃないよ、よく相談されるし。」

「やばいよな、ほんまね。てゆうかコウセイくん大学生やんな？」

「そうそう、」

こんな感じで三時間くらい話しただろうか。好きな食べ物や映画や服や犬の話をした。朝日が登ってきたのでお互い寝ようか、ということになり電話を切った。なんだかすごい経験をし

ている人も世の中にいるんだなあと思い、僕はタバコを吹かした。生きていると色々あるし、この女の子と僕は友達でこれからも普通に仲良くできればいいかなと思った。僕が抱いていたほんの瞬間の恋心のようなものは消え去り、あっけなく散って行った。タバコの煙のように空気と一体化し、やがては消滅したが、強烈な残り香が部屋に染み付いていた。

次の日、ユウちゃんは休みだった。僕はいつも通りにまたタバコを吹かしながら業務を終わらせ、いつも通り家に帰って行った。ユウちゃんとはたわいもないラインを続けた。いつも通りに終わっていく今日。誰かが死んだニュース。灰皿に溢れる吸い殻。切れかけのハンドソープ。少し暑くなってくる午後。缶コーヒー。スーパールの特売のチラシ。僕はいつも通りの日常を自分の歩幅で歩きながらカレンダーを見た。明後日からは新店舗に異動だった。環境の変化が訪れる。僕はそれに備えていつもより多く眠った。

僕は一年働いたこの鶴橋店では最後の出勤だった。明日からは京橋の新店舗に行く。みんなに別れの挨拶を告げ、タバコを吹かしながらいつも通り業務を終了させたかったが、その日はとんでもなく忙しかった。くたくたになりながら、

「なんでおれが最後の日に限ってこんな忙しいん？」
とみんなに冗談を言いながら頑張っていた。なんとか業務を終了させると朝の四時半になっていた。バイトの人と社員に別れ

の挨拶とお礼を告げ、僕はお酒と缶コーヒーとチョコレートをもらった。みんなは新店舗でも頑張ってるねと送り出してくれた。

新店舗では、新しいスタッフと仕込みがあったので昼の十二時に京橋店に集合するように言われていた。現在の時刻は午前四時四十五分。コウセイは最後の出勤が夜勤なので、遅れてきてもいいよ、と言われていたが、一応十二時に行こうと思い、家に帰り風呂を済ませ僕は眠った。

昼の十一時にアラームによって起こされた。寝た気はしなかったし、遅れていこうかと思ったが準備をした。とりあえず制服と財布をリュックに詰め込み僕は家を出た。駅に着くまでにタバコを一本吹かし、眠気を覚まそうとしたが頭はぼーっと霧がかかったように何も考えることができなかった。電車で揺られ、京橋で降りた僕は新店舗に向かった。新店舗には貫い物の花束が豪華に飾られており、広い店舗だなど思い中に入ってしまった。社長と見覚えのある社員が二人と新しいスタッフが十人くらいいた。その中にはもちろんユウちゃんもいた。

「おはようございます！コウセイです。」
といい、みんなと初めましての交流を交わした。見たことある顔も何人かいたのですぐに馴染めた。僕は仕込みを、新しいスタッフはホールのルール決めなどを行っていた。作業をして

いたら昼休憩になったので僕とユウちゃんはテーブルに座った。

「コウセイくん、昨日寝れた？」

「全然、めっちゃ忙しかってんなあ、最後の出勤やったのに。」

「らしいね、あんま寝れんかってんなあ。お疲れ様やで。」

「ありがとう。」

「今日の準備終わるの何時ごろやろ？」

「夕方には終わるらしいけどなー六時ごろちゃう？」

「そかー、長いなあ、頑張るかあ。」

「やなあ。」

そんな会話をし、社長が買ってきてくれたたこ焼きを食べながらまた作業を続けた。

結局午後六時過ぎに仕込みが終わり、僕は寝不足もありへとへとになっていた。

新店主長が、「みんな帰っていいよー。お疲れ様。明日はプレオーブンなんで頑張ろう。」

という言葉葉を皮切りにみんなは帰る準備を始めた。僕もタイムカードを切り着替えていた。正直、すぐく疲れたし帰ってとりあえず眠ろうかなと考えていた。再びみんなに挨拶をし、京橋店を出た。近くの喫煙所でタバコを一本吸ってああ、疲れたなあ。と思っているとユウちゃんから着信があった。

「もしもし、コウセイくんもう帰った？」

彼女の声は少し慌てていた。

「おつかれ、近くの喫煙所でタバコ吸ってるよー。なんで？」

「私も今着替え終わったし、二人でご飯行かへん？」

「いいよー、店で左側の駅の前の喫煙所おるー。ネカフェあるところ。」

正直、帰って寝たかったがせっかく誘ってくれたので、僕は無下に断ることができなかった。

「わかった！すぐ行く！」

と言って電話は切れた。しばらくするとタツタツと足音が聞こえ、ユウちゃんが現れた。

「おつかれー。疲れたなあ、私、家帰ってもご飯ないし良かったらどうかなーって。」

「おれも帰ってもなんもないし、どっかいこか。難波出る？」

「うん、いこいこー。」

「焼肉食べへん？」

と僕が言うと彼女の目はキラキラ輝いた。

「お肉！ええやん！最近食べてなかったしいこいこー。」

彼女は子供のようにはしゃぎ着ている白色のカーデイガンをつわふわとさせた。

コロナ、という時期もありお酒が飲めるかはわからなかったが、僕たちが入った焼肉屋はお酒の提供もしていた。焼肉でテンションが上がった僕たちは生ビールを二つ頼んだ。

「いやー、お疲れ様。乾杯。ぷはあ。」

ユウちゃんはごくぐくと一気に半分ほど生ビールを飲んだ。酒が強いタイプなんだなーと思い僕も負けずにごくぐくと生ビールを飲み干した。昨日と今日の疲れがあつてか、アルコールは身体中に染み渡りとても美味しかった。夏という季節もあり、火照った体が冷えていくのを感じる。思えば外でお酒を飲むのも久々だった。

「めっちゃお酒飲むやん。よっしゃー、いっぱい食べよ、適当に注文するわ。」

「私、ほんまに女の子なん？つてくらいよく食べるから引かんといてな。」

「おれもフードファイターの端くれくらい食べるから大丈夫やで、コロナのせいで外でお酒飲めへんかったやん？めっちゃ久々かも。」

「ほんまに久々。」

そうやって僕たちはカルビやロースやタンやキムチや雑炊やサラダなどおよそ二人分とは思えない量のご飯を食べお酒も七杯ほど飲んでいった。

次第にアルコールが回った僕たちはお互いの生い立ちや過去の出来事を話していた。彼女の過去は笑えないものが多かった。母親がいないこと。父親に育てられたが、家庭の環境は悪く父親の新しい彼女には暴力を受けていたこと。以前にも聞いたが彼氏に殺されかけたこと。最近のニュースの詐欺罪で捕まった二人の男と関わりを持っていったこと。ホストにハマっていたこ

と。高校を出た後は職を転々とし、一番長く続いた事務の仕事では嫌がらせを受けていたこと。昔なんらかの事件があり、知り合いの男が刑務所にいること。夜は眠れず、睡眠薬を服用していることなど。明らかに「普通」という道からは外れている女の子だった。思えば電話をした時から何か影があるのはわかっていたが、予想以上だった。僕も様々な経験をしてきたので驚きはしなかった。ただ、この子には死なないで欲しいと思つた。僕がユウちゃんに抱いているのは哀れみや悲しみではなかった。ただ、救われて欲しかった。

僕の過去は笑えるものが多かった。男二人でラブホテルに入ったこと。飲み物と間違つてマジックリンを飲んでしまったこと。真夜中のプールに全裸で入っていると警察が追いかけてきたこと。彼女は弾けるように笑い、こんなに笑つたり思いを口にしたのは久しぶりだと言つた。

彼女はとても可愛かった。見た目は大人の女性だが、心にはどこか子供っぽさを持っており僕はなんだか癒された。

そんな話をしているとユウちゃんは僕の隣に座つて食べ物をあーんと言いながら僕に食べさせた。

「ちょ、やめて、恥ずい恥ずい。」

「ええやん、はい。」

僕は赤面しながらご飯を食べさせられ、年上に少し甘えた。彼女がお手洗いに行ったタイミングで僕はお会計を済ました。彼女が化粧を直して席に帰ってきた。

「さっ、出よか。」

「え、お会計は？」

「食い逃げしよう。」

という僕が何十回も女の子に言ったことのあるパターンの言葉を口にし、店を出た。

「コウセイくん、ごちそうさま。」

「ううん、全然。楽しかったあ、また行こ。」

「またいこー、、、あのさあ、、、今からうちくる？」

と突然言われたので、僕は戸惑った。

「あ、終電まだあるかな？帰れる？」

彼女は確認してきたので

「あ、もうないわ。」

と僕は携帯を見るふりをして嘘をついた。

手を繋ぎながら彼女と歩いた。彼女は気分がいいのかスキップをしながら、髪の毛をふさふさと揺らしていた。何かの歌を口ずさむ彼女は夜の街の明かりに照らされていた。生ぬるい風が僕たちの間を吹き抜けた。この時間がずっと続けばいいのに、と思いつつ彼女の手を強引に引っ張りキスをした。彼女はそれをすんなり受け入れた。赤色のリップが少し剥がれ僕の唇に付着した。

五分ほど歩き、彼女の家に到着した。黒いデザインーズマンションは一三階立てで治安が悪そうな場所だった。僕たちは七階で降り、彼女は部屋片付けるからと言い僕は五分ほど708号

室の前で待たされた。少しアルコールが抜けてきた僕は考えた。この人には彼氏がいる、理性は保たなければならぬ、わかってる。わかっている。なんだかわからないけれど後戻りできないような気がした。

「どうぞ。」

「お邪魔します。」

と扉が開いた。中は思ったより狭かった。ものが多く、すごく散らかってるわけではないが部屋が狭くなるほどぬいぐるみが並んでいた。机の上には睡眠薬とおくすり手帳が広がっており、足元には靴下やレギンスが転がっていた。

「汚くてごめん。」

「ううん、めっちゃぬいぐるみあるやん。」

「そう、もの捨てられへんねん。」

「なるほど。」

僕は部屋着を貸してもらい、彼女はメイクを落とした。すっぴんでも顔立ちはよかったが、眠れていないのか目のクマが少し目立った。少し話をしてから二人でベッドに横たわった。シングルベッドなので狭かった。僕は気を使って体の方を寄せた。お互い疲れていたのもう寝ようかということになり電気が消えた。彼女は睡眠薬を二錠飲み、僕はそれを横目で見ながら携帯を開け、アラームをセットした。

「おやすみ。」

「おやすみ。」

お互いに言ったあと、僕は眠ろうとした。だが、はじめての人の家でなかなか眠ることができず、彼女の方を見ると目は瞑っていたが、まだ寝てはいないようだった。五分ほど経ち、僕はぼーっとしていた。あと少しすれば眠ることができようだろう。天井を見上げ僕は今何をしているのだろうという気持ちになった。すると彼女が瞼を重そうに開けこちらを見つめながら「ねえ。」

「ん？」

「私のこと好き？」

と聞かれたので

「うん、好き。」

と答えた。

あまりに突然だったのでそれが本心かと言われれば定かではないが、僕は反射的にそう答えた。そう言わなければいけないような気にさせられていた。

「じゃあ愛情分ぎゅってして。」

…この子はきつと愛情が何かわからないまま、ここまできたのだろう。僕の勝手な憶測でしかないが、親にも彼氏にもみんなに愛されたかったのだらうな。僕は勝手にそんな気持ちになり、彼女を壊れるほど抱きしめた。全力で抱きしめたので彼女の肩は締め付けられ、うっ。と苦しそうな声をあげたが僕はや

めなかった。彼女は嬉しそうな顔をし、垂れ目で口角の左端を上げながら

「一緒に死ぬ？」

と聞いてきた。僕は別に驚かなかった。驚かないくらい、リアルな言葉だった。

「いいよ、死ぬ？」

と答えるもそれは本心ではなかった。僕は何よりも生きていたかったし、自殺なんて最後はごめんだった。ただ、彼女が言うて欲しいような言葉を投げたにすぎない。それで救われるなら別にそれでいいと思った。彼女とキスをし、体が絡み合った。僕は本能と罪悪感を天秤にかけながらそれを振り払おうと必死だった。行為が始まりそうな寸前で彼女は僕の手を振り払った。パシっという乾いた音が室内に響いた。

「いま、しちゃったら今日で終わりそうな気がする。」

と彼女は言った。僕ははっとした。上がった心拍数を落ち着かせ、彼女の言葉を反芻した。

「たしかに。そうやね。ごめん、、寝ようか。」

そう言って抱きしめ合ううちに僕たちは眠った。

昼の十二時にアラームで起こされた。ここはどこだろう、と記憶を辿ると瞬時に僕は起き上がった。彼女はよだれを垂らしながら気持ちよさそうに寝ていたのでなんだか少し笑ってしまった。彼女を起こし、

「今日はブレオーブンやから頑張るぞ。」
と言い、僕たちはまた準備を始めた。

ここから、僕たちの半同棲の生活が始まった。僕は彼女の家に転がり込み、ほぼ毎日一緒に居た。相手に彼氏がいることも分かっていた。それでも毎日お互いがお互いを必要としていた。僕たちは付き合っているわけではないが、海遊館に行ったり、公園で花火をしたり、お洒落なカフェに行ったり。くだらないことでよく喧嘩をしたが、すぐに仲直りした。食べるのが好きな彼女は焼肉や寿司を食べに行くと笑顔を絶やさなかった。バイト中もバイトが終わってからはずっと一緒だった。一日に数回もお互いの身体を求めてしまうのは寂しさから来るものだろうか。僕はその行為に罪悪感を抱かなくなっていた。いつか、この関係に終わりが来るかもしれないことは分かっていた。ただ、言葉にするのが怖かったので僕も彼女も暗黙の了解で触れなかった。季節はうだるような熱気の真夏を超え、九月になった。夜になると少しだけ肌寒かった。僕は今日もタバコをふかしていた。僕は彼女といううちに、将来の不安とかそんなことを考えるのをやめていた。それは彼女が樂觀的だったからだろう。あまり何も考えていないと公言する彼女は実際その通りだった。予想や筋道を立てて物事を考えることができない彼女は感覚と持ち前の笑顔で日々を乗り切り、僕はそれを見ながら考

えすぎることに何の意味もないと思うようになったし、不安なことを考えていても何が起るかはわからないと考えるようになった。これからどうなるかよりも自分がどうあるべきかの方が大切だ、そんなことに僕はこれまで気づけなかったのだ。京橋のネオン街は怪しく光っていた。外国人の女がカタコトでマツサージ、キモチイイヨ。と声をかけてくるのにも慣れ、援交現場や酔っ払いの喧嘩を見るのにも何も思わなくなってきた。

この世は綺麗事だけでは乗り切れないのだ。少しは大人になったのだろうか、僕はよく分からなかった。そんな九月のある

日、マサからラインが来た。マサは中学、高校と同じだった腐れ縁で僕がキャッチをしているときによくミナミに遊びにきていた走り屋だ。噂ではマサは悪い走り屋のグループに入り、ドラッグを摂取し、大学は二回留年したと聞いていた。マサからのラインは

「コウセイ、今から会える？」と言うものだった。僕は「四時にバイト終わるから、京橋のファミマで待ち合わせで。」と送った。僕はなんの用だろうと思いつつも、業務を終わらせ四時にファミリーマートの前で待った。三十分ほどして白いポロポロのバンに乗ったマサが現れた。最後に会ったのは一年半前だろうか。顔は痩せこけ、目つきがギラギラとしていた。

「おう、コウセイ。」

「マサ、久しぶりやな、どうしてん。」

「まあ、乗れよ、ドライブ行こ。」

「ええけどこのバン、ボロすぎやろ。タバコ買ってからでええ？お前来るの遅いからタバコ無くなったわ。」

「あっ、おれも買うわ。」

マサが白いバンから降りてきた。以前より痩せこけ、歩き方が変わっていた。なんらかの薬物をやっているの是一目瞭然だった。マサはやたら背後を気にしながら歩いていた。ファミリーマートでタバコを買い、僕とマサは白くてボロいバンに乗り込んだ。

「コウセイ、どこ行きたい？」

「うーん、そやなあ、海みたい。」

「南港行くか。」

「せやな、行こう。」

マサは慣れた手つきでバンを発車させた。ブオオンと古いエンジン音がかかった。

「ほんで、マサ。何があってん？とりあえず聞かせてくれ。」

「んーまあそやな。とりあえずシンプルに言うとな薬物がやめられへん。」

「まあ、噂では回ってきてった、大麻ちゃうやろ？」

「大麻もやけど、MDMAやな。」

「おまえ、あんなんやったらあかんって。あれだけはあかんって話とったやん。」

「そうやけど、もうあれないと震えるねん。」

「お前やばいって、普通に。ダルク入れよ。」

「あほか、まあでも幻覚は見えるわ。なんか虫とか。あれな、薬の効果切れた瞬間絶望するねん。まじで病む。」

「幸せの前借りやろ？やめとけやめとけ。てゆうかお前大学は？」

「大学はもう二回留年したな。」

「そうか。走り屋は？」

「そう、走り屋やねんけどおれ、その走り屋のトップのやつの手下で、そいつの元でドラッグディーラーやってん。」

「はあ？お前きしょいって。まともに金稼げや。」

「いや、一週間で十三万とか手にしたらもう感覚わからなくなる。」

「お前が売った薬で誰かの人生壊れてるねんぞ？お前やめろってそういうの。」

「まあ、ディーラーてか、このバンで薬運んでるねん、それがおれの仕事。」

「あーね、まあ普通やなアウトやわな。ほんでやってん、って言うたよな？今はやめたん？」

マサは運転しながら泣きそうな顔をした。

「やめた。ってかな、おれ発狂してもうてん。京都の川沿いでいつも通りやばい量の薬を運んでたんよ。そしたらもうなんやろ、罪悪感とか一気に溢れてもうて車止めて川に薬全部ほかしてん。もう無理やおもてな。」

「やばいやろ、大丈夫やったん？」

「まあそれで逃げ回ってたけど実家に半グレが来たんよ、走り屋のトップのまださらに上のやつやな、ほんで詰められてとりあえず薬代の八十万払えって話になって、俺のおかんが払った。」

「お前まじか。やばすぎるやろ。」

「まあおれもマグロ漁船乗らされかけたけど、それはギリ回避してなんとか金だけできるとは済んだ。悪い仕事もやめた。けど薬ないとやばい。なあ、コウセイ、やめたいんよ。」

「おう、わかった。ほんだからとりあえずまともな仕事せーよ、現場でもなんでもええわ。金稼いで親には返せ。大学もとりあえずは卒業しろよ。」

「まあ、卒業するの二年後とかやけどな、怖いねん。学校行くのも。もうわからん、全部わからん。」

「とりあえず、」

と言っているところで南港に着いた。夏とはいえ海の近くは涼しかった。

「いつ見てもただの海よな。」

マサがタバコをふかしながら言った。

「おん。」

と僕もタバコに着火する。BIGのライターのカシャという音がやけに響いた。

それから僕とマサは無言で何本かタバコを吸った。時刻は五時半になり、日が登ってきた。

「マサ。」

「なに？」

「飯食うてる？」

「食うてへん、食えん。」

「食わな死ぬぞ。飯いこ。」

僕は強引に僕の家の近くのなか卯に誘った。マサは眠そうな目を擦りながら運転してくれた。なか卯に着くと僕は卵とじとうどんを、マサは卵とじを単品で頼んだ。マサは食欲がないと言いながらも卵とじを半分は平らげ、あとは僕が代わって食べ終えた。

「飯食ったん久々やわ。」

「飯うまいやろ？まあ当たり前やけど、食わなあかん。」

と言って外に出た。外には完全に太陽が登っていた。僕はバイクの疲れと空腹を満たしたのとで眠気が少しきっていた。マサはドラキュラのように太陽を嫌がり、目を細めた。

「マサ、お前なんでもええからとりあえず薬やめろ。いつでも相談乗るから。まともにならず働いたらええやんか。」

「まあ、そやな。やめれるかはわからんけど、実はここ四日はやめてるねん。お前にとりあえず会える状態にしたくて。」

「そうか、まあやめろ。お前次やったらほんまにボコボコにするで？」

僕はマサを睨みつけ威嚇した。僕はマサに捕まってほしくなかったし、危ないものはやめてほしかった。

「わかったわかった。ありがとう。また連絡する。」

そう言っただけでマサは白くてポロイバンに乗り込み、クラクションを二回鳴らして別れの合図をした後にどこかに去っていった。

僕は数日後、マサのことが気になり連絡をしようとしたがアカウントが消えていた。マサの友達に連絡するとあいつは葉まだやってるよ、コウセイには絶対言うなって言われてるけど、と告げられた。結局、僕は何もできなかったのだと諦めることにした。葉は最後死ぬか警察。そんな言葉通りなのだと思う。僕はやりきれなさを感じつつ、またタバコに火をつけた。

十月になった。

僕とユウは半同棲しながら今まで通りに過ごしていた。いつも通り、ご飯に行ったりセックスをしたりドラマを見ながらお酒を飲んでた。京橋の街はいつも通り汚く、グランシャトービルは自信なさげに立っていた。近くの立ち飲み屋ではサラリーマンが酔って暴れていた。僕はいつも通りの道を通り、またユウの家に戻って行った。肌寒くなったのでスウェットを着だし、秋が来たのだなあと感じていた。

「なあ、聞きたいんやけど。」

と、突然珍しく真面目な顔をしながらユウは尋ねてきた。

「ん？どした？」

「私らの関係ってなんなん？」

「んー、なんやろ、わからん。」

「セフレ？」

「違うと思う。」

「じゃあコウセイは彼氏？」

「うん。」

と僕は即答した。実際にはユウには彼氏がいるわけだが、頭のかかではわかっていっても知らないふりをしてきた。関係が終わるのが怖かったし、かといって福岡にいる彼氏と今すぐどうにかできるわけではないことが分かっていたからだ。いつかは言われると思っていたが、今その時なのだろう。

「でも、私には彼氏がいるわけで。コウセイはどうしたいの？」

「今までお互い言わないようにしてたし、触れてこなかったと思う。やけど、おれはユウのこと好きやで。付き合いたって思ってるけど、彼氏がいるやん。それは分かってた、しかも遠距離になった理由も理由やから決着はつけないとあかんと思うねん、いづれにせよ。おれはセフレと違ってないし、本気やな。」

「うん、正直私もコウセイが好き。あんまりこんな言われるの嫌かもしれへんけど、彼氏にないものをコウセイは持っている。ただ上からやねんって思われるやろうけど。けど、コウセイが言ったみたいに決着はつけなあかんわけで、このまま

やと私も、彼氏に対してもコウセイに対しても失礼やと思う。けど今すぐに判断、っていうんかな、どうこうできる訳じゃないと思う。ほんで、私はあんまり人を信用してない。三年付き合ってる彼氏にも浮気ばかりされてきたし、ずっと信じてた人には裏切られてきた。ずっとずっと。だから、もう何を信用していいのかわからへん。コウセイみたいなまっすぐな人を見たことないから、どうせ裏切られるんちゃうんかなって思ってる。ごめん、私は自分に自信がない。自信がないから色んな男の人に体を求められたらそれに応えちゃうような女やねん。クズってことは分かっている。そういうのが原因で私は彼氏に殺されかけたし、今までズルズル生きてきてしまった。もう後戻りはできひんし、性格もそんなすぐに変えられるもんちゃう。私はこんな最低な女やねん。それでもいいん？」

「別に、最低っていうか、最低なんが人間なんじゃないん？家庭環境のこととか色々あったんはわかるよ。けど過去は過去やし今は今やんか。おれは六月に出会った時から好きやったしそれは今でも変わっていない。」

「でも私はどうしていいかわからへん。もう全部考えることを放棄してどっかに逃げてしまふかもしれへん。自信がない。誰かを信用したり好きになるのが怖い。」

ユウが生きてきた傷はそうやすやすと癒えるものではなかったのだなと改めて感じた。何もかも信じれない人にかける大丈夫だよ、なんて言葉はどれだけ安いのだろうか。言葉がこんなに

も出ないのは初めてだった。言葉がこんなにもちんけに思えたのは初めてだった。僕がマサを言葉では変えれなかったように結局僕は何もできないのだろうか。今まで無視し続けてきた僕はユウの彼氏ではないという事実は僕の体をがんじがらめにし、離さなかった。僕はもうどうしていいかわからなかった。これから何年こんな関係が続く？いつか帰ってくるかもしれない彼氏に怯えながら？いつまで耐える？そして、その先には何がある？そもそも僕がマサを変えれなかったように人を変えるなんておこがましかったのだ。僕の脳内はぐるぐると回り、結局、無力という二文字が僕の心を踏みつけた。

「わかった。かと言っておれは諦めきれへんかな。ユウのこと裏切ったりせえへんよ。言葉ではいくらでも言ってしまうけどね。そんなこともわかってる。」

「実はね、」

ユウは思い切って吐き出すように言った。顔はうつむき、前髪は割れて右目にかかっていた。

「実は、昨日彼氏から連絡があって。派遣社員の期間が終わったから、大阪に帰ろうかなって連絡が来たんよ。もちろん明日とかそんなじゃないけど。待っててって彼氏が言ったし、その約束を守るために帰ってくるんやと思う。けど、もう私は彼氏に対して好きとかじゃないし、上手いいかへん気がする。ずっとラインしてるけど向こうも向こうで長く待たせすぎたし、上手くいくかはわからへんなあ、ってぼやいてて。まあでも一

度やってみないとわからへんし、帰ってくるってなったらコウセイとは今みたいな半同棲はできひんけど、待っててくれる？都合がいいのはわかってる。それはわかってるねん。」

「まあそやな、やってることは最低やし、彼氏に対しておれは罪悪感あるよ。でもどんな理由があれ女の子に手出して殺しかけるなんてやつは許せへんな。悪くいうつもりはないけどおれはその彼氏ってやつ大っ嫌いやで。だから、待つよ。わかった、耐えるよ。」

もちろん、僕は彼氏に対して罪悪感があった。人の女を抱いているのは事実だ。キャッチをしているときに師匠から教えられたことがある。世の中は奪い合いだ。奪うか、奪われるかしかない。やったらコウセイはどっちになりたい？と。もちろん僕は奪う方を選択する。事実、野生の世界で起こっていることは命の奪い合いだ。人間はそうではない、と果たして言い切れるだろうか。強者は弱者から奪い、政治家は国民から奪い、人間は生きるために動物から奪う。そんな上で成り立っているのがこの世界だ。綺麗ごとなんてヴィーガンとか宗教とかそいつらでやってればいい。みんな奪い合って生きているのだ。それがない世界なんてどこにもない。ならば、僕は奪う方を選択するし、強くなりたい。僕は良いやつではない、だがそれでいい。僕は僕と大切な人を守る強さがあればそれでいい。そのためには全部奪ってやる。それが僕の考え方だった。

「彼氏はいつ頃帰ってくるん？」

「うーん、十一月には帰ってくるらしい。」

「わかった、どうなるかわからんけど耐えてみる。」

「ありがとう、信じて待ってて。」

彼女は力強くそう言った。僕はそれを信じることにした。

十月は特に何もなくて、僕が二十二歳の誕生日を迎えたくらいで何の変哲もなく過ぎて行った。家に帰り、バイトに行き、休日と一緒に寝て過ごしたりと普段と変わらない日々だった。僕は新しい会社の研修もあったので少し忙しかった。彼女も彼女なりにやるべきことをしているようだった。

あつという間に、本当にあつという間に十月の終わりがきた。きてしまったものは仕方がない。僕は後には引けなかった。彼女の家にある荷物を僕の家に持って帰る準備をし、彼女は僕の歯ブラシを一旦捨て、証拠を隠滅した。

「明日は十一月一日やな、明日の夜に帰ってくるらしい。」

「せやな、来てしまったな。この一ヶ月早かったわ。とりあえず明日はおれら仕事休みやし彼氏帰ってくるねんからゆっくりし。おれは家おるわ。また連絡して。」

「帰ってくるの夕方やから、私も心の準備できてないし朝まで一緒におってくれへん？」

「うーん、わかった。」

そう言ってもう一泊だけ僕は彼女といることにした。これが最後かもしれないと思うとなんだか切なかった。そしてこれから

自分は彼女がいない生活に耐えるのかと思うと複雑な気持ちだ
った。

その夜は居酒屋に行き、お酒を飲んだ。あえて、寂しいとかそ
ういう話はせずにこれまでであったことをお互い話していた。深
夜に僕と彼女は居酒屋を出て、少し散歩した。

「将来ね、私は犬飼いたいなあ、コウセイと二人で守るものが
欲しい。」

僕は彼女の言っていることがわからなかった。未来とは何なの
だろう。そんな未来の話に何の意味があるのだろうか。これから
どうなるかもわからないのに、その話は不毛すぎると思った。
正直、気づいてはいたが彼女はよくわからないことを言うこと
が多かった。頭の中はどうなっているのだろうか。

「まあ、それは彼氏とちゃんと別れてそのあとやろ、どうなる
かわからんやん。あんまりこんな言うのも男らしくないけど
不安やねん。めちゃくちゃ。もうどうしていいかわからんくら
い。」

「ごめんな、私のこういう発言がいつもコウセイを苛立たせた
り傷つけてるんやんな。ほんまにごめん。でも一回だけ彼氏と
住んでみて判断する。ほんまにこんな女でごめん。ちゃんと白
黒つける、逃げへん。」

「うん、もうええよ、わかった。まあ待ってるわ。」
僕とユウは黒いデザイナーズマンションに帰り僕たちは眠っ
た。ユウは睡眠薬を四錠飲んでた。

ピンポーン。僕はアラームではなく、インターフォンに起こさ
れた。ユウが飛び起きた。

「え、宅配頼んでないねんけど。」

「俺出るわ、えっ、めっちゃロン毛の人がキャリーケース持っ
てるけど。」

「うそ、待って待って。」

ユウは寝ぼけた目でインターフォンの画面を覗き込んだ。

「うそ、今何時？まだ朝の九時やんな。夜に帰ってくるって言
ってたのに。ごめん、彼氏帰ってきた。」

僕はうまく頭が回らなかった。

「どういうこと？」

「多分、サプライズとかそういうので新幹線とか乗って帰って
きたんちゃうかな。え、どうしよう。」

ピンポーン、ピンポーン。

音が部屋中に鳴り響いた。僕はこれはドラマなのか？と思うと
同時に動揺し、少し体が震えた。

幸い、ここは七階でエントランスまで距離があったのでどうに
でもなる。僕はこういうときに冷静でいられるのが怖かった。

「とりあえず無視しよ。」

「うん、今着信入ってるけど寝てたことにするわ。」

「おけおけ。とりあえず俺一旦帰るわ。別に普通にエントラン
ス出ても怪しくないし。」

また連絡する。」

僕は何度もドアスコープから外を確認する。エントランスにいるものの、誰かがマンションから出れば奴はここまで来れる。そうなるのも時間の問題だった。僕は荷物を確認し、ドアを開けた。開けるのに二秒費やした。誰もいないのを確認し、ただの通行人Aとしてエントランスに出た。エントランスには銀髪でロン毛のイケメンがいた。キャリーケースを片手に持っている。間違いない、奴だ。僕はニューエラのキャップを深く被り、通行人Aになりきり、何事もなかったように黒いデザイナードマンションを後にした。振り返りはしなかった。何やら犯罪をしているような気分になったが、僕はそのスリルを少し楽しんでいた。「大丈夫、何もバレずに横通った。今から自分の家帰る。」とユウに連絡を入れ、僕は家に帰った。ユウは「バレへんかった、まあバレるはずはないけどね、今から連絡返す。」と返信が来ていた。

それ以降、その日はユウから連絡が返ってこなかった。僕は不安と恐怖に襲われた。何をしていても彼女の顔が浮かんだ。僕は気が狂いそうなのを必死に堪え、タバコに火をつけた。もう今日で二箱目のタバコだった。僕はとりあえず眠ることにした。

次の日に起きるとユウから返信があった。「コウセイごめん、昨日連絡返せんかった。とりあえずは色々な話してたよ、また今日もバイト頑張ろ。」

僕は「ええよー、めっちゃ寝てた。がんばるかあ。」とラインを送りそのまま京橋に向かった。

僕が店に着いて着替えているとユウが更衣室に入ってきた。

「おはよう、コウセイ。」

「ユウ、おはよ。」

僕は必要以上に明るく振る舞った。正直不安でいっぱいだったが、これは僕が選んだ道なのだ。

「ごめんなー、昨日は奴が帰ってきてから荷解きしたりしててんだけど、話してたらすぐ寝よったわ。」

「そっかあ、まあ色々募る話もあるやろうな。」

「うん、久々帰ってきたからハグは？って言ってんだけど、そんなんええねんっていわれて萎えたわ。」

僕は複雑な気持ちだった。結局のところ、二人は上手くやっていくのだろうか？そんなことは考えても仕方のないことだったが、僕は気になった。

「そうかあ、まあまたなんかあったら教えて。」

「わかった、今日も忙しいかな？」

「多分な。」

僕はそっけなく返事し、彼女もそれを悟ったようだった。お互いになんだか気まずい空気が流れていた。それから十日間ほど、そんな日々が続いた。僕は頭で考えても仕方がないと思いい、大学の卒業制作に打ち込んだ。しかし卒業制作をする以外の時間は彼女のことを頭に浮かんだ。彼氏とやっているのではないか、もう二人はヨリを戻したのかなどそんなことばかりを考えていた。なんだか生きている気がしなかった。バイトで会える時間が唯一の楽しみだった。彼女の方は何も変わらず、明るくバイトをこなしていた。僕は

「最近、どうなん？」
と聞くと

「うん、別になんもないかな。彼氏っていうより友情なんかなって思う。」

と答えた。僕はいつこれが終わるのだろうと思うとそろそろ気が狂いそうだった。早めに決着はつけてほしいが、そうはいかないのだろう。限界を迎えた僕はとうとう

「もう、こんなことやめへん？いつまで経ってもこんなんやん。もう限界やわ。」

と口にしてしまった。彼女は至って冷静に

「待っててくれるって言ったやん？我慢とか無理させてるのもわかっているよ。でもそんなすぐに福岡に帰れって言うのもかわいそうやねん、約束を果たしにきたわけやし。まあでもお互い

色々話す時間あってんけど、もう恋人同士じゃないっていう話になってる。だからもうちょい待ってて。」

と諭すように言った。僕は

「ごめん、わかった。」

と言い、男なら言ったことは守るべきだと思いまた耐えることにした。状況はうまく行っているのか行っていないのかよくわからず、心の中はぐちゃぐちゃと音を立てていた。それから二日間、ユウから返信は来なかった。ユウはバイトも二日連休で、僕はついに絶望した。不安というより諦めに近い感情を抱き始めていた。僕は奪われたのだ、奴に。どうせ、二人でこれから生きていくのだろう。気持ち悪い。死ねばいいのに。ユウも帰ってきたやつも。僕はこれまで我慢していた何かがとぼとぼと溢れた。その正体はもし、自分が用済みになったらどうしようとか、このまま彼氏とうまく行ってしまったらどうしようとか、今まで心の隅に追いやってしまったらどうしようとか、その不安は僕を発狂させるには十分な量が蓄えられていた。堰を切って溢れ出た不安は憎悪に変貌した。

あ。あ。あ。

僕は僕が壊れる音を聞いた。その音はなんとも奇妙な音だった。

僕は我を忘れて部屋にあるテレビを投げつけ、発狂しながら叫び狂った。ゴミ箱を蹴りつけ、洗濯物をナイフで切り裂いた。枕を床に投げつけドアを殴りつけると。パリンとガラスが割れ

た。右手の拳からは血が出ていたが構うことはなかった。僕は自分でも聞いたことのない声で奇声を上げ、はあはあと目を充血させながら泣いていた。頭の中は真っ白というより空白で埋め尽くされていた。

ピンポン

とふいにインターフォンが鳴った。管理人が来たのだろうか。インターフォンの画面を覗き込むとそこにはユウが映っていた。マイクをオンにするとユウの声が聞こえた。

「コウセイのマンションからすごい奇声が聞こえてきたけど、大丈夫？もしかして変になっちゃった？この二日間本当にごめんね。彼氏とは別れたよ。全てを終わらせてコウセイに会いに来たよ。家に入ってもいいかな？」

僕は血の涙を流しながらドアを開けようとした。――

「No. 203、スズキコウセイの様子はどうか？」

「はい、完全に精神が壊れてしまっています。今、若者に流行っている粗悪なドラッグが原因でしょうね。クロコダイルという名前の。幻覚と妄想に襲われて最後は廃人になるってやつですよ。スズキコウセイはそれをタバコに混ぜ、服用中車で事故を起こしたようですね。本人もそれを覚えてないらしく、「俺はキャッチをしていた。約束を守るためにユウに会いに行く、ドアを開けてくれ」とそんなことをずっと話しています。落ち

着いている日もあるんですけどね。ただね、この患者の面白いのが話していることがとてもリアルなんです。筋道があると言うか。私も興味を持ちましてね、街にうろつくキャッチに聞いてみたんですよ。この患者、本当にミナミの街のキャッチで生計を立ててたみたいですよ。営業マンのようにほいほい客を捕まえるもんだから、相当腕があったんだと思います。クロコダイルもその夜の世界のルートで手にしたのではないのでしょうか。

ただ、ある日を境に姿を消したと。」

「君も暇だな。わざわざ警察に確認まで取ったのかい？」

「はい、この機関の名前を使えば警察も動きますよ、なんてつてここは掃き溜めですからね。重度の薬物中毒者や裏社会で消された人間の処理を行う、表向きには精神病棟ですが、実態は政府公認の死体処理場ですからね。」

「そうだねえ、人体実験からなにからなにまで。コロナのワクチンもこの患者で実験してたからね。」

「でね、この患者が言っていたことのもどこまでが真実か確かめたんですよ。キャッチをしていたのは事実。クロコダイル服用中の事故で搬送。ほぼ無傷だったが意識はなく、薬物反応があったので医療機関で診断。数日後に目を覚ましたものの幻覚や妄想が治る見込みは全くなく、ほどなくここに搬送された。警察に捕まった経歴はなし。鶴橋で働いていたという飲食店の名前

もヒットせず。その系列の新店舗と語る京橋店も存在しない。マサという友人がいた経歴もない。

黒のデザイナーズマンション、、、なんですがここね、住所を検索すると墓地だったんですよ。

それですっと名前を連呼するユウなんです、、皮肉なもんですね。スズキユウ。七年前に交通事故で亡くなっているスズキコウセイの姉です。その墓地に眠っているのがおそらくスズキユウなんでしょうね。僕も怖くなってそれ以降は調べてませんよ。」

「ドラッグで人格や意識が壊れ、幻覚を見るときにでも記憶の底に刻み込まれた名前はそのままシフトされ別のものにすり替わる、か。今度なんかの研究で使えるんじゃないか？」

「そうですねえ、ま、それだけの話です。いつ処理します？」

「そうだなあ、実験用に回せ。」

「はい、あれ、またなんかスズキコウセイが言ってますよ。」

「ドアを開けてくれ。ユウがいる。」

スズキコウセイは目から血の涙を流し、繰り返し繰り返しそう呟いた。

あとがき

マサくんへ。

違法な薬物は辞めましたか？今度バーに行く約束をしたよね。そこではたらふくお酒を飲もうと思うんだ。いつも君はウイスキーを一気して吐くって言う芸をしていたね。あれは急性アルコール中毒になるからやめたほうがいいと思うんだけど面白かったなあ。君が死なずに生きていくことを選択できるようなればいいなと思ってる。君がしてきたことに口を挟むつもりはないけれど、人を傷つけると自分にも返ってくるんだ、それだけは確かなことだから。また会おうね。

ユウことミナミちゃんへ。

君と僕は過去に死にかけたけど、今実際に生きているんだからそれは奇跡のようなものだと思う。何かきつと役割があるはずなんだ。それを見つげよう。いや、役割なんてなくても君と僕はお互いに気付かされたことが多いよね。幸せに生きていけたら何もいらなと思うんだ。とりあえずは生きてみようか、これからも。

スズキコウセイことカイトへ。

元氣？君の話をまとめてみたけど、なんだか上手く表現できないし、ケータイ小説みたいになってしまった、ごめんね。君は沖繩に行ってサーフィンの講師になるって言ってたけど、そう

なったら僕にもサーフィンを教えてほしい。沖繩はいいところだと思ふよ。最後に飲んだ時は勝手に帰ってしまったごめん。なんだか気乗りしなかったもんだから。よく君とは遊んだけれど最近は何をしているのかな、体調には気をつけてね。あとラッキーストライクは僕が勧めた煙草だけど、僕はあの味の美味しさがわからなくなってしまっただけで今は吸ってないよ。

あの頃の僕と君は無敵だったと思うんだ。ラブホテルの前に止まってる自転車を全部蹴り飛ばしたと、覚えてる？あとバンジージャンプも一緒に飛んだね、楽しかった。君の友達のガールズバーに行った時はなぜか二万円くらい取られたよね、あれはやられたね。そういえば君のお母さんの具合はどう？結構心配してるんだ。君も僕が大阪に引っ越したあたりから人が変わっていったよね。僕は十九歳頃の君が好きだったな。また、いつかちゃんと大人になってから再会できればいいと思ってる。カイト、またどこかで会おう、僕はきつとこれからも大阪にいるから。沖繩くらいの距離だったらいつでも会えるさ。

ゼミ生のコメント

古川

メンヘラについて考察する中で得た知識が創作に現れたのではないかと感じます。「ケータイ小説」を彷彿とさせる語り手は、徐々にその信用性を失っていき、作品の色を作っていました。

羽田

若気の至りというか、若者特有の恥ずかしさや青臭さのようなものが客観的に表現されており、非常に惹き込まれた作品でした。地の文も素晴らしいが、セリフ一つ一つから繊細さが伝わってきました。

佐藤

惹きつけられる内容と言葉選びの上手さによって生まれる滑らかな語りが心地よかった。

主人公の持つ人間関係に特化した作品の良さを存分に感じられた。

過ちて徒然に

古川美優歩

目次

過ちて徒然に

125

淀み切って透明の

146

過ちて徒然に

月は今宵も街を平等に照らしている。雲やビルがその光を遮ろうと、照らす相手を選ばず、全てのものが照らされるようにと動くこともない。月明かりは平等に降り注がれている。

光がささない雑居ビルの埃っぽい空気を払うように、そのバーのライトは煌々と光を放っていた。店頭のネオンも、店内のLEDも毒のある植物を彷彿とさせる色をしている。

類はその光にさらされながら、どうせ今日もあいつは帰らないだろうとパートナーに想いを馳せていた。二四歳の瑞々しさは感じられない、掠れた表情をしていた。バーカウンターの内側から独特の親密さが漂うフロアを眺める。昨夜はあいつと今宵は誰と、といった言葉が彼の耳に届く。そしてその中に「濱 浩輔」の名前が登場しないことに少し安堵し、それじゃあ——と考えそうになるのを無理やり押し込めた。

「また帰ってないんでしょ、ハマ」

オーナーがもう何度目になるかという問いを類に投げた。その度に類は今ね、とあくまで一時的なものだと主張した。月の半分以上類の元に帰らない時でも。彼はいつも、一人で冷たいシーツを温め、無色の空気に淀んだ呼吸を溶かしていた。

「あんたハマ以外にも男っているの知ってる？ 次いきやいのよ次」

オーナーは今日何杯目か分からないウォッカを呷る。

オーナーは類にとって友好的な人であった。彼女は陰湿な自分と違って快活で、くだらないことで物事を測らない人だと、彼は思っていた。けれどもその快活さがやはり自分とは違う部分なのだとこんな時にはよく考えていた。

「そう簡単にはいかないよ。こんな狭い世界なんだから」

「この店で探すからでしょう。今時ゲイ向けのマッチングアプリなんかもあるんだし」

ゲイとバイなんて絶対にうまくいかない。類とパートナーを見て多くの人はそういった。それは些細な問題であるはずだった。実際類にとってそれは些細な問題であった。ハマにとってはそのうじゃなかっただけであって。

それでもやっぱり、もう少しあいつを待ちたいんだ。その視線を落とす彼に、オーナーはほどほどにねとだけ返した。オーナーのジッポが鉄くさい匂いを撒き散らす。二人の間に煙だけが漂っていた。

入れ替わり立ち替わり見知った顔が来店しては飲んで管を巻いて、運が良ければ連れ立っていく。類はその背をシエイカー片手に見守り続けていた。ゲイ、ビアン、バイ、パン……。こんなに狭い店ですら、これだけ様々に人がい

る、その事実は類を慰めこそすれ癒しはしなかった。彼は一人ではなくとも独りでは生きていけない人間だった。

扉から入り込む外気が涼から寒に変わる時間帯に、また見覚えのある客が顔を出した。類はその人をよく覚えていた。いつもカウンターの本真中でただグラスを傾けている。誰と話す訳でもなく、誰かを探す訳でもないその人は、この場所では珍しい存在であった。

オナーの「随分と久しぶりじゃない？」と問う声に苦笑いを返して、なんでもいいから美味しいの、とだけオーダーを出した。以前この人物が店を訪れたのはいつだったか、思い起こせないくらいのことだった。類の記憶の端には、黙ってグラスを傾ける姿と、ミントの香りが残っていた。

「美夜あんた髪伸ばしてるの珍しいね。趣味変わったの」「相手の趣味だよ。自分ではね、短い方が楽しいんだけど」

長く伸ばされた不自然な黒髪と病的に白い肌が、美夜から違和感の塊となって浮き上がっている。長い髪をかけるに似つかわしくない金属がひしめき合う耳があらわになった。彼はそこによくやく美夜の人間らしさを感じた。

美夜の前にグラスが置かれる。コリンズグラスとミントの香りが潔く、好ましかった。半透明の冷えた液体が、顔

よりも黒い喉を通り、胃に落ちると熱を発する。その感覚を啜っていた。オナーも店員も口を出さない。その時間を体に染み込ませていく。その間、目の前の店員が美夜から目を逸らさないことには気づいていた。

じつと耳元に注がれる視線がくすぐったく、珍しく、美夜の方から声をかけた。耳を埋め尽くすピアスを物珍しげに眺める視線には慣れていくはずだった。

「気になります？ ピアス」

「いや、まあ……そうですね。耳見えないなって」

美夜は耳を触る。皮膚よりも、異物の方が多く指の腹に触れた。顔が動くたびに冷たい音を立てる金属が、自分を主張しているといつも考えていた。奇怪なものにぶつけられる警戒と軽蔑も、その音を聞くことで浄化させる。

「ピアスをつけると、強くなれるんですよ」

口癖のように繰り返してきた言葉を投げる。そういうもんですか、と首を傾げる店員は幼い印象を与えた。一人カウンターでアルコールを流し込んでいた時には、見えなかった表情だった。

酒気を帯びた息と喧騒に溢れる店内、カウンターを挟んで二人は互いにだけ聞こえる言葉を交わす。親しい店員と常連客として十分に和やかな空気を醸していた。

美夜はカウンターで一人背を丸めていたイメージとは違い、存外話上戸な人である。そう類の目には映っていた。巨大な違和感は沈み込み、彼の口と気を緩ませていった。

「お姉さんの彼氏はどんな人？」

空気中の糸が一気に緊張したのを感じた。オーナーが類を視線で刺す。類の何気ない一言はここでは最も恐れるべき言葉だった。彼は言い放った後に、言葉が巻き戻らないことを嘆いた。砂利を噛んだ時の居心地の悪さが場を漂う。ざらつく口内に嫌な苦味とも酸味とも言えない味が広がっていく。類は顎を引いて棒立つことしかできなかった。

オーナーは美夜の手を取り、しきりに謝罪の言葉を述べた。にこやかに返す美夜のは笑顔は乾いている。もう、慣れている。これに尽きた。幾度となく交わされてきた応答に、怒る気力がなかった。

何が不味かったのか彼に話すべきか、美夜は類の顔を見やる。「本当にすみません」と彼から絞り出された声が揺れていた。話してやってもいいと、自分でも随分偉ぶったことを考えているのが気持ち悪く感ぜられた。

「私、性別ってないんだ。好きになる性別も特に決まっただけでなく」

彼方(かなた)のあげた口角が、類の後悔を加速させる。頭を垂れる彼からひしひしと滲み出るその念に、美夜の内臓が焼け焦げた。オーナーの手を解いてチェイサーを頼むと、類に向き直る。

「美夜って呼んで。あなたは？」

類は視線を泳がせ霞程の音を足元にこぼした。なんとか聞こえた類の名前を口の中で数回転がす。音にして胃に落とし込む。「いい名前だ」彼方は満足して彼の顔を見やる。眉の下がった情けない顔が彼方のお気に召したようだった。彼方は仕切り直しだと類と自分に同じ酒を頼んだ。なぜこんなにも上機嫌なのか、美夜はわかっていなかった。

類は美夜に誘われるままに次から次へと注いでは空け、シェイカーを振り、注いでは飲んでを繰り返した。それで自分の失態を薄められるならなんでもよかった。機嫌が良さそうな彼方を見ていると、硬く締まっていた筋肉が少しずつ解かれていった。一杯二杯と開けるたびに美夜の言葉数は増えていく。それが彼の不安を消し去っていくことを確かに感じていた。そして再び美夜への興味を沸き立たせるのだった。類も美夜と同様に浮いていた。

寂れた雑居ビルも眠りに着かんとする頃美夜は席を立った。電飾で色とりどりに照らされるフロアに人影はない。

見送る目と去っていく背中との距離が少しずつ開き、扉で遮られた時、二人はいつになく終わりゆく今宵の味を噛み締めていた。

*

数日ぶりにあの店に足を向けた美夜の足取りは逃げるようだった。耳の後ろにこびりつく恋人の怒声を勢いよく閉まる扉の音でかき消す。フロアの騒音が彼方の胃に溜まる。温度のある息が口から漏れた。歓迎の声に口角だけで答える。彼方はいつも通り真ん中の席に腰を下ろし、長い夜へ身を投じた。

この世には二種類の人間しかいない。男か、女か。その筈だ。

そう信じて疑わないパトナーの見識が狭いのか、自分の生きる世界が狭いのか。美夜は薄暗いバーカウンターから、赤や青に照らされるフロアを眺めていた。

この日はずいぶんと客の入りも少なく、飲んでばかりいるオナーの姿もなかった。カウンターの向こうには黙々とグラスを磨く類だけだ。彼は何かを悟り声をかけることもない。

「類さんはこの世に男と女しかいないと思う？」

顔を上げた類はそんなことないと首を振る。彼方と彼の生きるこの世界ではそれは至極当然のことであった。その当然の理解が彼方の欲求を満たす。けれどこの世界はあまりにも狭かった。大きな闇を前に声はあまりにも小さい。

「私のパトナー、ストレートで」

美夜は訥々と語り始めた。闇に首を絞められるあの背筋の感覚を知る人に吐露したかった。

美夜のパトナー須崎慎は異性愛者だった。異性として彼方を愛し異性として生きることを求めた。服装や言葉遣い、自認に至るまで女性としての自覚を望んでいた。彼方は決して彼女になることはできないと思っただけでも、彼女を演じ続けていた。

「この髪もメイクもあいつがいうからなんだ。俺っていうのもダメらしくてほんと……」

その嘲笑は自分に向けられていた。そこまでして慎でないといけない理由など、もうとつくにわからなくなっていた。美夜は耳の金属を指で弄りその音を精一杯取り込む。いくら言われてもそのピアスだけは塞がないままだった。それだけが彼方の輪郭を保つ細い糸だった。

類は彼方はこんなにも小さかっただろうかと考えていた。一人で飲んでいた時も、初めて話した日も、彼方はどこか自我の強い人だったと。彼方の抱える問題はこの世界

の住人にとってよくあることであつた。よくある、全員が経験する痛みであつた。彼もまた、このビルから踏み出せば杵を充てがわれる。二人が背負う闇は常に彼らの足や首を掴んで不自由さを与えた。

類とて、ハマとの関係に悩む身だつた。くだらない色恋沙汰がこの空間では最も深刻な悩みの一つだ。肩身を寄せ合う相手の乏しい彼らの距離を縮めるものは、そんな共通点でよかつた。

*

類が重い瞼を開けると部屋を二つに切り裂く陽の光が見えた。昨夜閉めたはずのカーテンには隙間があり、昼の空気が覗き込んでいる。類は太陽光が嫌いだった。絶対的な希望のような顔をして細胞を蝕むその光に腹がたつ。なによりそれを知っていながら少しだけカーテンを開けていくハマには一層腹を立てている。

ハマは類も寝付いた朝方に帰宅して、自分とその夜を残さずに部屋を出る。それが完璧であれば類を幾度となく失望させることもなかつただろう。期待をせずとも落胆はするものだと、類は痛いほど知っていた。

乾いた無色の空気が部屋を満たしている。類から吸い上げられた空っぽの何かがそれに混じり合い、また類の中へ

帰っていく。二人分のものがあるこの部屋を類はいつも持て余していた。

空っぽにも関わらず鉛のようなその体を無理に動かし、鬱陶しい太陽を遮った。口からもシャワーヘッドからも水分をとる。そして床の冷たさで季節を感じ、着なれたシャツの袖に手を通す。目を閉じてもできる単調な日々は、冷蔵庫の唸る音とうっすら聞こえる外界の音の和声が繰り返される。空っぽの部屋からひと一人分の質量が吐き出されるころ、街はあるべきところへ帰ろうと急ぐ人々の背を押している。類はハマの背も蹴飛ばしてはくれないかと思いつながら、あるべきところに帰る時自分はいつもないことに気がつく。引き結んだ唇が白い。

陽の傾き始めた街の中には未だ熱が残る。その奥から冷やかな季節の手がぬらりと伸びていた。

*

最近では毎日のように美夜と類はカウンター越しに互いの苦を述べては、夜が明けけるようにと酒を煽った。美夜のピアスは、最近また太くなった。少しずつ肉を割る鈍い痛みと熱、その後にできる異様な穴が彼方の気を紛らわせていた。重くなった金属が、波をかき消すことを望んでいた。

美夜は自分の胸の内に湖を湛えていた。白く霞んだ世界の中に広がる湖は澄み切っていて、けれど何一つその湖面には映さない。その湖面は何も映さない代わりに美夜が受けた煽りを一身に受け、彼方以上に揺れ動く。そして波の振動が胸の内から全身へと巡っていく。

凪いだ湖をもう何年も見ていないと溢す美夜は、空になったグラスの縁をなぞる。グラスの表面を滑り落ちた水滴が布製コースターにしみを付けた。

「随分ロマンティックな言い回しだね」

類の指がマドラーを回す。軽妙な氷の音が合わせて鳴った。

「そんなんじゃないんだ……そんなんじゃない」

彼方の不自然な長い髪が顔を覆う。溢れ出そうな波は既のところ堰き止められ、吐き出されずに高さを増す。しみ出てしまえば内側からの圧迫が軽くなることもあるだろうと、美夜は知っていた。しかしそれも彼方にはままたまらないのであった。波が鎮まるようにと祈りながら、彼らは小さな金属の音に耳をそば立たせていた。

この日もまた、街の眠る時が来る。アルコールが回っているはずの美夜の顔はひどく青い。類はこのまま外の冷たい闇の中に送り出す気にはとてもなれなかった。近頃の類は、彼方の吐く細い息が絶えることに恐怖していた。この

カウンターのの上に滴る言葉を、何一つ溢さずにいたいし、そうするべきだと息巻いていた。だからこそ、家に上げた。

そのことで美夜とパートナーとの間に何があるのか、想像つかない訳はなかった。けれども何も見えないフリをして、その小さな手を取った。それは美夜とて同じだった。

二人は確信した共犯関係を、同情で覆い隠した。

乾いた空気の部屋はやはり冷え切ったままだった。一瞬よぎった顔は酒の熱と共に姿を消す。二人はただ自分を害しない存在の息遣いに安堵し眠った。その部屋を彼らの呼気が乾燥を少しだけ和らげていた。カーテンは一筋の隙間もなく閉められる。

*

アパートの外から、窓を見上げる。美夜は部屋のカーテンが開け放たれていることと、ベランダの洗濯物が残されたままなことに気づいた。朝日はサーチライトとなって彼方を照らしていた。階段を一段ずつ登っても時間稼ぎにもならない。美夜のあるべきところと言われる場所は扉を隔てて向こう側に迫った。ドアノブは無機質な冷たさを伝えた。

鍵の回る音を慎は聞き逃さなかった。部屋と廊下を仕切る戸を勢いよく開け放す。見開いた目は彼方を捉えると陰

しく釣り上がった。彼方の喉は水分を失い焼けた粘膜が引き攣る。なるべく音を立てないように部屋に上がった。猛獣に睨まれた兎にできることはそれくらいだった。

「誰だよ」

「え？」

「どこの誰といたんだって聞いてんだよ」

「夜勤だよ……」

脆い嘘を吐いた。あまりにも苦しい嘘は慎の精神を逆撫でする。卓上のマグカップが薙ぎ払われて床に落ちた。ぶつかつた鈍い音と破片になる音が美夜の肌から染み入り、湖面に大きな波紋を立てた。握り締めた手に彼方の短い爪が刺さりいくつも半月を作る。

「他に男ができたんだな」

「違うよ！ ただの友達だよ」

「友達ってどうせ男だろ！」

美夜は類を男だと思ふことはなかった。正確にいうと彼方は人間を性別で捉えることができなかった。関わる相手が自分や美夜をどう捉えていようと、性別をその人間の要素として認めることはなかった。だからいつも男が女がと声を荒げる慎の言葉の末端も理解することができないのだった。美夜はこれまで繰り返し、慎にその意味を説いてきた。ましてや相手は類だった。例え彼が美夜にとって理解のできない男という区別だったとしても彼と私の指向が交

わる訳はない。美鈴、と彼方が嫌う「女」の名前が呼ばれた。

「いい加減お前は女で相手が男でそれがどういうことか理解しろよ！」

言葉は湖に墜落する。それを飲み込み水面はまた大きく揺れる。波に煽られ美夜は頭を振り乱す。

「俺は女じゃないって——」

美夜の右の頬が払われた。回る視界。マグカップと目線が同じになった。美夜が学生時代に買ったギターが埃を被って棚の下に隠されているのが見えた。猫の額ほどしかないこの国で、その世界は膝を抱えて蹲っている。殴打を拒絶するのではなく、その鈍痛がどうか胸を貫かないように、と。両手を振り上げ咆哮する闇から逃れられずとも喰い荒らされないために、得た唯一の手段だった。

慎の手が止むと美夜に背を向ける。その背に縋る手は、いとも容易く引き剥がされる。縋る理由もない手であった。彼方は反射で何かを掴んだだけにすぎない。

けれども閉まる扉の音にいかないで、いくなど声を震わせるのだった。

床に転がり患部の熱を感じながら、美夜は自分は彼女なんだと繰り返しい聞かせ、その言葉に水面が反応しなくなることを待った。しかし彼方の望むような日が来ること

はない。それができてさえいれば、彼方はこれまでの二十数年を苦難が襲うことはなかったからだ。

美夜はこの身体に違和感を持ったことはなかった。けれどもこの身体が自分に属性を付与することを受け止められなかった。そんな彼方に世間は時として性同一性障害、時にトランスジェンダー、クエスチョニングと属性を与えた。どこにいても彼方は何者かであることを強いられ、それは湖面を波立たせるのだった。

いくら波から逃れようと躡いても余計に飛沫をあげるだけだった。特段彼女になりたいはずではなかった。けれども闇は彼方は彼女というまやかしを追わなければならないと背を押していた。

開け放たれたカーテンから風と光にさらされて自我なく揺れる洗濯物が見えていた。干され続けてたシャツには皺が付き、その溝にそって幾筋も灰色の影が方々に走っていた。

*

類にはカウンターの向かいの美夜が日に日に色をなくしていくように見えた。髪は一層不自然に真っ黒く染められ、白いメイクは首との色の違いが際立っている。オーナーの人間なんて腐るほどいるんだからの談義は、彼方が来

ると繰り返される。それが意味をなさないことを類は知っているはずだった。にも関わらず、その度に肯定し、自分と慎の理解の違いに憤りを感じていた。

「まあ美夜だけじゃなくてあんたもね」

叩かれた肩に想像以上の衝撃がきた。突かれた拍子にハマのためにとっておいたはずの感情の箱が空っぽで、何の音も立てないことを知った。

その衝撃は帰りの暗い夜道でも類の脳を揺さぶっていた。痺れた感覚を拭えないまま乾いた空気の入りを開けた。そして明かりが灯るリビングに眉根を寄せ、その真ん中で足を伸ばす男を見た。顔を見ることもなく飛んでくる「おかえり」が類には煩わしかった。久しく戻らなかった人間が毎日そこに戻る人間を迎え入れた時、先に「ただいま」をいうべきはどちらか、言うべきことや問いただすことは他にもあるが、類はそれに腹を立てていた。ハマを無視して類はいつも通りの一人の夜を再現する。

「おいおい怒ってる？」

「怒ってない」

もう今更、は喉元で留めた。怒りの温度を保ち続けることは難しく、冷めてしまうと石となってただ胸の内を揺れる障害となる。ハマの存在がその石を蹴飛ばし、再び粘度の高い流動体に戻そうと熱を与える。あえて意識しないこ

とで彼はその存在を注視していた。苛立つ指先が、額を打ち始める。

「久々に帰ってきたんだからもう少し歓迎しろよ。帰ってきて欲しくないわけ？」

「そんなことは言っていないだろ」

帰ってきて欲しいと願った相手が目の前に現れたというのに、湧き上がらない喜びや、恨言を類は諦めのせいにした。実際類はもう戻ることを望んではいなかった。ハマがカーテンの一筋を開いていくことよりも、乾いた空気を潤すことがあると、知らず知らずのうちに知っていた。

「もう悪かったって、な」

類は初めて見た時にハマの大きな手を好きだと思った。手を大切にすることからか、人の手を好きになることが多かった。その好きだった手が類の頬に触れた。途端に粟立つ肌と転がり始めた石が嫌悪となって競り上がり、その手を払い除けた。

「類いい加減にしろよ。いつまで拗ねてんだ」

「いい加減にするのはどっちだよ。散々放っておいて今更なんだよ。どうせ男が食いたくなって帰ってきたんだろ。

探す間もなく手軽だから」

類の下脛が痙攣する。類の口は止まることなく、ドロドロと灼熱の流動体を吐き出す。人たらしで女とも恋愛できるハマはゲイの類を下に見ている。もう忘れ去ったはずの

感情も次から次へと溢れ出ていった。「ハマは最初、同性だから分り合えるって言ったけど、今は同性だから煩わしいんだ」言い切った後に、どうしようもない敗北感を感じた。類はその感情とともに家を出た。ハマが悪いと思っていながら、敗走する自分の存在をこのまま夜に消散させたかった。

街はすっかり眠った後だった。類の住む部屋の周りは、住宅地やマンションの立ち並ぶ人が住むための街だからこそ、一層そう感じさせていた。止めどなく吐き出した熱の残り滓が再び冷えて小石となった。

胸の中に小石がある。小石が歩調に合わせて転がる。寂しい、寂しいと言って。

宵闇の街は彼以外の生命を隠す。街灯と、道の端で唸る自販機。小石と共鳴するのはそれだけだった。

靴底を擦りながら、彼は辺りを徘徊する。生温い空気が、シャツを抜けて、皮膚に染み込む。この時間の空気はすっかり冷たくなっていく。類はがらんだ胸と同じく、空っぽのポケットに手を突っ込んだ。何を掴むこともなく空回る指先に少しだけ力を込めた。

何もない街を歩きながら類は美夜の顔を思い起こした。美夜にこの小石の振動を止めて欲しかった。聞いてほしいではなく、会いたいという感情に驚きつつも類はどこか納

得していた。美夜と過ごしたあの隔絶された夜のことを思い出しながら冷たい空気で肺を冷やす。体内が冷まされ頭を占めていた顔が美夜に置き換わる頃、街は少しずつ動き始めた。新聞配達員の自転車が走り、駅の入り口が口を開く。来た時よりもほんの少し遠回りをして帰ると、部屋はもぬけの殻だった。だが、虚無感ではなく充足感が類を満たしていた。

*

この頃から類はハマが帰らずとも、何も言わなくなつた。美夜は慎を避けるようになり、飲んでは類とただ眠つた。二人は夜が終わり闇が姿を隠すまで何者にも害されない空間と微睡みを味わつた。

目を背けたとて、彼らの背中にはぴつとりと闇が張り付いていた。

開店準備を進める店内は作業の音のみが響き、普段との温度差で暗く見えた。淡々と準備をする類にオーナーは視線を注いでいる。類は一瞬その視線を捉えたものの、再び手を動かし始めた。

「類、あんた美夜のこといいように使いすぎなんじゃない」

聞き流せない問いに類は勢いよく振り返る。いつもの酒で惚けた目ではなく、彼を律する硬い視線が差し向けられた。真意を問う返答にオーナーはわかっているでしようという口を開く。

「あんたは美夜を慰めることで自分を慰めてるのよ。二人でいても、何も解決しない。いい友人の域を超えてるわ」
何を言っているのかよくわからないまま、類の中にその音だけが溜まっていく。薄い液体が全身を駆け巡る。不思議と、苛立つことはなかった。

「類はハマの穴を美夜で埋めたいだけじゃないの？」

「そんなことないよ、ただ美夜といただけだよ」

頭を振る類の顎をオーナーの手が捉えた。そして類の乾いた口を吸った。酒気はなく、煙草の香りが鼻腔から体内へと滑り落ちていった。類の血管が膨張する。オーナーの目は冷え切っていた。掴まれている顎に爪をめり込ませ、立てた爪を首から胸へと滑らせた。

「ほらね。安い心臓」

離れていく背を見送る類の中はやはり空っぽなままだった。負荷を大きくした心臓も、今では元に戻っている。そして、美夜に会いたいと零した言葉が空気を漂っていた。

類の目に映る美夜が憔悴すればするほど、類は美夜をそばに置こうとした。美夜は前後も分からないままに、慎以

外の抛り所に安堵した。仕事が終われば店に行き、夜が更ければ乾いた空気に溶け込む毎日。しかし現実はそのにあり、慎はついに美夜の足首を捉えた。バーに向かう美夜の腕を掴み、あの小さなアパートへと引き込んだ。彼方が体制を崩そうと、その膝がアスファルトに擦り下ろされてもその足は止まらなかつた。彼方は一段ずつ時間をかけて上っていた階段を顔と頭を守りながら上る。投げ込まれた部屋で、美夜はただ耐えることしかできない。慎の言っていたことは大体いつもと同じことだった。

女が夜に遊ぶな、バーに入り浸って何をしていたんだ、毎晩違う男と遊んでいるのか、それとも店員と浮気しているのか、もっと女だと自覚しろ、お前は俺の彼女なんだ。美鈴、美鈴と呼びながら、闇は牙を剥き声を荒げ、力の限りその腕と足を振り下ろした。叩いても、形の治るわけでもない。それが彼には理解できないことだった。美夜は離れていく痛覚と交換に、侘しさを手にした。二種類の内の一つとしか捉えない人間の言い分は、片隅で蹲ることも許しはしなかつた。

嵐が過ぎた後、目を開くと橙の明かりが部屋を満たしていた。夜が去ったのか夜が訪れるのか、彼方には判断がつかなくかつた。気温と痛みの冷やかな感覚が全身を包む。起き上がるまでに数分の時間を要した。地面を這いながら

玄関に出る。スニーカーは触れるだけで膝まで電気が駆け上がったために放ったままだ。ドアノブに手を掛け立ち上がろうとしても力がこもらず、ポストに強く顎を打った。腫れ上がり狭まった口の中で舌を噛む。身悶えながら、自力ではここを出ることもままならないと悟った。ポケットの中の板が割れはしても故障していないことが幸いだった。受け取りはしたものの一度も鳴らしたことがない番号を呼び出す。そんなことは今まで必要なかつた。なんの約束をせずともあの場所が彼方らを繋いでいた。

美夜は数コールの間、唇を噛み締めて待った。鈍色の味が口内からも口外からもする。繋がった時には慎のつけた傷か、それとも彼方か分からないほどだった。その痛みも、類に託してしまえばなんとかなるだろうと、一切をそこで放り出した。朝焼けが燃ゆるアパートの一室に電話越しの声広がっていった。

恐れたことが起こったと類は思った。アパートの玄関で倒れる美夜を見て、彼は一度そう信じた。けれども美夜のその細い息はまだ絶たれてはいなかつた。抱えた身体は完全に力つき、彼が動くたびになんの抵抗もなく揺れた。

類は、ここはあるべき場所ではないと確信した。義務を果たすべき向かう人々に逆行して隔絶された世界へと戻るべくタクシーを止めた。彼は運転手の驚きと訝しむ視線に

気づかない。ただ世界を照らす太陽が美夜を侵食しないように、その目を手で覆っていた。流れて行く時間と景色は二人にとっては何も関係のないことだという事実が、彼方を癒すだろうと類は目を閉じた。

車の揺れは心地よく二人の身体を揺すり、あるべき部屋へと送り届けた。類は美夜の目が覚めればここがあるべき場所だと伝えようと決めた。なにせここには二人で使うには十分な用意があった。美夜のあるべき場所がここになれば、類にとってもここがあるべき場所として潤いを取り戻すだろうと感じていた。

目を覚ました美夜は依然困惑したままで、何もかも刺激に怯えていた。類はこの部屋の空気がその感情を吸い上げることを祈った。大人しくしていると思うと次の瞬間には苦痛に喘ぐ彼方の姿はあまりに痛々しく見えていた。「何も……チグハグなんかじゃない。間違ってる。このままでもいいだけ」と震え、金属の鳴る音に耳を澄ませる。類は何人も触れさせないその背を見つめていることしかできなかつた。美夜の湖面は、今も揺れているのだろうか。彼にはその猛り狂う波が彼方を押し流さないことを祈っていた。

「生きてるだけで間違ってるって言われる人間の気持ちなんて分からない」

彼方らは常に間違えている人間として指をさされた。その痛みは狭い世界の中にいれば知らないふりができた。けれども闇はまざまざとその指を向けてくる。

「僕だって、いつも間違えてる人だよ」

身体をよせ合い体温を分け合い、その傷を共有した。その傷の舐め合いだけが彼らの気を休めた。美夜の口ずさむ救いようのない歌が、その周りを漂っていた。

手放した意識が戻った時、美夜はまだ深い眠りの中にいた。類は人の流れに逆行する時間だった。彼は躊躇われたが、その部屋を後にすることにした。いつでも彼方が連絡できるように割れた板を充電器に挿し、メモを残す。アスファルトに靴底を擦り付けながら、どうか何者も彼方のひと時の逃避を妨げず、揺り起こすのは自分であるようにと祈った。行き交うエンジン音や人間のたてるざわめきが、騒音に聞こえた。

肺が浮かび上がるような数時間を過ごし、つんのめりながら戻った部屋で美夜は肩を抱いて何かを繰り返して呟いていた。類はいつも詰めが甘いと他人に再三言われてきたことを今更思い出していた。

美夜の顔をゆっくりと覗きこむ。彼方の目は揺れながら、ここにはない何かを映していた。

美夜は思い出したように立ち上がると虚な目とは対照的に迷うことなく鉄を見つけ出した。そしてその顔を覆うだけの長い髪に鉄を入れた。勢いだけで動かすのでは、どうにもならなかった。数本落ちただけの毛髪を彼方は手で叩いた。握り過ぎた手は白く色が変わっていた。両の手で柄を持ち直す。

美夜はその柔らかく薄い肉に刃をたてた。視界が明滅する。喉が引き攣って叫ぶこともままならない。意識が抜け落ちそうになるのを捉えておくので精一杯だ。しかし依然としてそこに肉はあり、そぎ落ちた様子もない。持ち主を縛るその肉は手放そうとしても尚、どこにも行かないとしてみついで泣くのだった。それでも彼方は泣くこともままならない。漏れ出す体液が居心地の悪い温度を伝えていた。

類は美夜の痺れた腕を掴んだ。類のものよりもきめ細かい肌は粟立っていた。その手から鉄を取る。抵抗はされなかった。彼は美夜の少し焼けた肌の上に筋をつける血液が、あまりに悲壮な色で唇を噛んだ。

この腕を切れば同じ色の血液が流れるだろう。ハマ、慎だつてその筈だ。これ以上に、僕らと彼らが同じである証明がいるだろうか？ 震えているのは美夜の手だけではな

かった。救急車を呼びながら、彼は決してその腕を離さぬようにと握りしめていた。

美夜はその長い一日だけで何度目覚め、手放した目覚めたのだろうか。ここに運び込まれる前も目覚めたばかりだった。

目覚めた時に誰かがいなくなっている感覚は幾度経験しても慣れないものだった。美夜はもう一人分の体温が消えたベッドから抜け出す。電気のスイッチの場所は既に知っていた。彼方は分厚いカーテンをほんの少し開け、嗅ぎ慣れた夜の匂いを取り込んだ。

静かな夜だった。夜にそよぐ人々の足音すらも聞こえないほどに、静寂は街にまわりついていった。美夜はそのせいで大きく聞こえる湖面の揺らめく音に眉間に深い皺を刻み、イライラと足を揺すっていた。その静寂を割く電子音はたばりと水面に落下した。

画面に表示された名前に戦慄した。美夜は触れなければ良いその板に表示された、文字をわざわざ視界に入れた。その惨たらしい文面は今の彼方には重すぎる一撃だった。

今度はすぐ隣に類がいることが美夜を救った。彼の目が赤いことには触れない。類は数日で帰れることを告げた。「あの閉じ切った部屋に帰ろう」今の彼方には十分すぎる一言だった。

*

少しずつ穏やかな時間を取り戻す美夜の腕の傷は随分と薄くなった。あざと切り傷に塗れたその肌が完全に塞がるまでの時間、二人はその部屋だけで空気を吸っていた。夜になれば窓を開け、凜とした外気に身を委ねる。そして夜と共に眠りにつく。朝日を見ることはなかった。

美夜と一日を過ごすようになって類は美夜が存外音楽が好きだということに気がついた。ギターが好きだと語りながら、硬い指の皮を撫ぜる仕草が随分と人間らしく感じた。廃人と化していた肉体が、生命と色を取り戻していく様子は類の機嫌を良くさせた。仕事に出た際に上機嫌のままギターを担いで帰ると彼方は、顔一杯に喜びを浮かべた。彼には今はそれだけが全てでよかった。

「ねえ、なんか弾いてみてよ」

ブランクがなんだと言いながら、美夜は満更でもないと思っていた。彼方は他人の曲を通してなら語れると常々思っていた。他人の言葉だからこそ、言える真実もあるのだった。

美夜は所々突っかかりながら、あの救いようのない歌を歌っていた。救いようのないと思った歌の最後には救いの手が差し伸べられていた。その音の子守唄に類は睡魔の中

に沈み込む。彼方の声を抱き込み、夜と一体化するのはかつて望んだ消散かもしれないと最後に思い浮かべた。

類は最後に残された現実と向き合う必要があった。美夜が仕事に復帰したその日に類はハマを部屋に呼んだ。もうこの空間に彼の匂いは残されていなかった。「もう終わりにしよう」月並み以下の言葉を放り投げる。ハマの右手に力が入るのがわかった。手の甲に太い血管が浮き上がる。納得いかない食い下がるハマはもう使わなくなったお玩具を捨てられそうな子供と同じだった。その瞬間類は無意識に彼のことを低く位置づけた。そうすることで可哀想な彼を憐れむ優位な自分を形成していた。

「たまには帰ってくるから適当なこと言うなよ」

「適当じゃない。ずっとハマはいつでも普通になれる自分と、男しか抱けない俺を比べて見下してたじゃないか」

ハマの口から返答はなかった。彼自身自覚していることだった。その狭い世界の中でも、闇と迎合できる存在は闇に触れることもできない人間を片隅へと追いやる。狭い世界の中にも影は差すのだ。

凶星をつかれたハマは類の襟首を掴む、机を挟んでいるため、太ももに天板がめり込んでいた。

「類お前バカにしてんなよ」

「バカにしてるのはそっちだろ！ もうこの部屋にハマは要らない」

ハマは予期していない自分を襲う言葉にその顎を捉えられた。冷静な思考回路は焼け切れた。今度は類の頬をハマの拳が捉えた。後ろに飛んだ身体と椅子の背もたれが接触し、派手な音を立てて弾け飛ぶ。

「ふざけんなよ、お前みたいなのやつ誰もいらねえよブス」
勢いよく飛び出していく足音には怒りがこもっていた。

もう、その靴が玄関に脱がれることはない。

類は痛む背中に手を当て立ち上がる。この時間にこの部屋でハマと二人顔を合わせたのはもう随分と昔のことだった。本当にもう戻らなくなると、以前より少し部屋が広く見えた。湧き上がるざらついた感情を抑え込むためにゴミ袋を手を取った。四五十リットル分のその袋にハマのものは三分の二ほどしか入らなかった。彼の痕跡などないに等しかった。彼らがこの部屋に住み始めた頃買ったスリッパは一足はくたびれ、一足は真新しいままだった。その数年分の何もかもを詰め込んだ袋をゴミ捨て場に捨てた。彼の指が離れることを拒むのが分かって、わざと投げるように放り込んだ。店に向かう道はすでに暗く、夜はこの街の風景になる類を飲みこんでいった。

美夜と類は久しぶりにカウンターを挟んで対面した。以前までは彼らの確固たる境界線だったものが取り払われた今、それはもどかしい壁となった。異様なまでに酒を煽り、額をトントンと叩く姿は多くの人の目に異常に映った。精一杯通常を振る舞おうと努めているのが、また、人々の目には痛々しかった。ネオンが消えるその瞬間まで美夜はその顔をじっと見ていた。

締め作業もそこそこに放り出された類の腕を掴み、向かうではなく帰る道を歩く。頭を支えきれないほどに酔った彼を見るのは初めてだった。美夜は自分の身体に不満はなかった。けれど類を凭れかけさせられるだけの体格があれぼよかったと自分よりもずっと上にある肩を眺めた。

部屋に戻り、座り込む類を無理やり着替えさせながら、飲み過ぎだと小言を吐いた。消え入りそうな大丈夫を美夜は拾い上げた。同じように座り込み、その先の言葉を待っていた。

「ハマとはもう会わない」

その一言に全てが詰まっていた。彼方はそうかと呟き頭を抱え込むように抱きしめる。先日の胸の傷口に顔が触れると腰にまで痛みが走る。それでもなお、力は弱まらなかった。類の手が裾を掴む。美夜は柔らかな髪に頬を寄せ、これからは二人だと呟いた。

その夜二人は初めて抱き合つて眠つた。身を寄せ合うだけだった頃とは違う心音の聞こえる距離が新鮮でありながらも懐かしく、くすぐったくも愛おしかった。

二人は他の人々がそうするように、二人のもので部屋を埋め、時間を捧げ合つた。美夜の髪は短く明るい色になり、不自然な白い肌は自然な褐色になった。類は夜カーテンを開くようになった。彼らの生きる暗く色のない空気を部屋に流し込むのを好きになった。

二人部屋の中、昼の眩しさから逃れていた時、類は美夜の耳の金属を指先で数えていた。こそばゆさに鼻を噉る彼方に、このピアスが欲しいと、一番シンプルなシルバーのボールを指さした。彼は自分の耳と彼方の耳を触り比べながら、同じ穴が欲しいと強請る。彼方は本当に？と子に問うように尋ねる。類がうなずくと、ならと眩しい外界へ出る準備を始めた。陽の光を浴びたくはなかったが、少し上機嫌な美夜を見るとそれも気にならなかった。

一番近くのピアスショップへと二人は歩を進める。彼らの姿は以前よりこの明かりの下に溶け込んでいた。

小さな白い機械だけが入った袋を持って二人は帰宅した。美夜に開けてくれと頼むと、いそいそと準備を始める。その顔はどう見ても浮き足立っていた。

アルコールの冷たさが類の皮膚を湿らせ、アイライナーの毛先がつんと触れた。

類の薄い耳たぶに小さく点が打たれる。左耳の耳たぶの真ん中より少し下、黒子ほどの点を鏡越しに確認すると、類は軽く頷いた。美夜は幾度も大丈夫かと問う。その不安そうな顔が彼には何よりも愛おしく感じられた。白い、プラスチックの物体が耳元に寄せられる。この機械が彼の耳に穴を打つ。類よりも二回り小さい手は少し汗ばみ、微かな振動を伝えていた。

「そっちこそ、大丈夫？」

「ごめん、なんかわかんないけど、緊張してる、かも」
美夜は鼻を擦る。指についた皮脂を裾で拭いて、ピアサーを握り直した。鋭い金属が今度こそ類の耳に触れた。類は瞼を閉じ、美夜の背に白い腕を回した。美夜の手に力が込められる。

パチンと軽い音を立てて金属が類の耳を貫く。数秒するとじんわりと熱を持ちはじめる。美夜が握りしめていたピアサーを恐る恐る類から離す。プラスチック片が転がり落ちていく。そして至極小さく息を吐いて、その類の薄い耳をみやる。銀色の直径三ミリほどのボールが突き刺さっていた。

類は思いの外強く掴んでいた美夜の背と服を手鏡に替え、自分の体内を通る異物に触れた。

少し、痛い気もするが悪くない。満足げな類を美夜は物言わず見ていた。

「よかった」

「そっか。なら嬉しい」

美夜は類の言葉でやっと息を取り戻した。彼の手にこもった力が、恐怖と後悔を表しているのではないかと震えていた。けれども彼はそのような感情を抱いてはいない。そのことに彼方はそっと胸を撫で下ろす。美夜はもう一度彼の耳を見た。自分にもあるその穴が類にあること、その穴を自分が作ったことは、湖面を静かに吹き渡り、砂を洗う波を立てた。

美夜は横たわる類の耳殻を指の脇でなぞっている。類はただ黙ってそれを受け入れる。人肌の温度が部屋を満たしている。このような空気がかつてこの部屋に流れたことは一度もなかった。この空気はどこかところみがある。二人はヘッドライトが筋となって飛んでいく外界から隔離され、肺いっぱいその空気を吸って、吐いて、互いの息が混じったそれをまた吸っていた。

*

密封された部屋の空気は徐々に煮詰まり、無色透明の乾燥は色づいて甘ったるい香りを抱えていた。外界との交わりは玄関で払い落とされ、唯一流れ込むのは毎日一度だけ開かれるカーテンの隙間をぬった夜の生命とは無縁のものだけだ。閉ざされた部屋と二人分の世界の中で共に彼らは肺を腐らせていった。この部屋でしか息ができない彼らは、鉢に揺蕩う金魚だった。

壊死の進んだ肺から息を送り震わせた声帯で類は言った。

「誰にも見られないで」

到底叶えられない駄々っ子の願いを彼方は叶えてやりたかと思つた。できぬ約束を彼らは結んだ。その呪縛は彼らに絡みついて足をもつれさせ、腕を上がらなくした。

類はその約束を胸に部屋の中で待っている。待ち倦ね飛躍する思考と湿度の高い慕情は焦燥と憂慮を連れてくる。彼方のクローゼットからトレーナーを引き出してそれを抱いて世界を突き放した。

彼方が戻る音を類は聞き逃さなかった。埋めた顔を上げ、その扉が開かれるのを待つ。待ち望んだ者の目に彼が映ったことが喜ばしくも、外界の彼方の姿が誰の目に止まったかが脳内を占領する。

部屋の真ん中で長い四肢を丸める彼を美夜は抱きすくめ、この世界を脅かす存在は何もないと訴える。その言葉

は一度類の喉を通って胃に落ちた後、消化される前に再び吐き戻される。毎日のように繰り返されるそのやりとりは徐々に彼方の水面に砂を運んできた。湖を蓋するようにそれは積まれていった。

「美夜が誰かに見られるのが許せないんだ。美夜は決まりがいいから。だから外で誰と何をしているのか分からないのも、その場に僕がいなくても何かも嫌だ。頼むから忘れないで」

「わかった、わかったよ。僕も気をつけるから。類のところに帰ってくるよ」

類の心配は些末な問題だった。男が全ての女に惚れるわけではないことと同じだった。いつも穿った目を向けられる彼も言われ過ぎてきたことだった。けれども、酸素の行き届かない脳ではそれを到底思うことはできなかった。巨大な塊となり転がるそれを美夜に砕いて欲しかった。以前にも増して陽の光を嫌い、街ゆく人々の顔を認識できないようになった。

彼方に課す枷の数も増えていった。湖は今や砂泥となり、底のないままに引き込んでいった。服装から話し方、立居振る舞い。類は他人の視線を遮るために努力し、美夜は類の不安を断ち切るために努力した。けれども顔まで迫った泥の圧から逃れたいと思うのは人間の性だ。そして何

より、疑われ続けると人間は形を保てなくなる。砂泥に沈み、輪郭を失った美夜は部屋の床の上に溶けた。そんな彼方に類は今までにない慈愛を見せた。再び形に戻るまで、泥を捏ねその背を撫で続ける。体温と自分の息を分け与え再び立ち上がると何にも変えがたい満足感を得た。

拭いきれない不安と繰り返される破壊と形成が脳を痺れさせ、口からたらたらと胃液を吐き出し続ける日々を綴る。自立を失った美夜の支柱になることが類の望みだった。自分以外からの視線を遮り、自分がいるから大丈夫と囁く姿を咎めるものはそこにいなかった。

その日、部屋に美夜の姿はなかった。濁った空気に酒臭い類の息だけが混じる。待てば帰ると分かるのなら、彼も立ってもいられただろう。ただあるべきところに帰る時自分はこの世にいられるように、その決心だけが彼の意識をこの世に繋ぎ止めていた。

夜の街に身を投じる美夜の影を部屋の中で何度も求めた。一人で抱えるには痕跡はあまりにも匂い立っていた。一晩中相手だけを待ち望む夜はこれまでも幾度となくあった。その時の臓器の抜け落ちる喪失感よりも、細胞に染み渡る触感の方が痛かった。夜が眠ってもその扉は開かれることはなかった。

いつぞやと同じように美夜は太陽に炙り出された。違うことと言えば、重い頭と身体、隙間なく閉められたカーテン。部屋の中に潜る。朝日の入らないそこは夜が続いている。

類は幻と見紛うほどに薄く、枯れた色になっている。息が止まっていたのはほんの一秒のことだが、彼には人類の歩んだ歴史と自分の生きた人生が収まるほどのものだった。

類はその冷たい外気を纏った彼方に抱き縋る。彼方がここに戻ってきた事実が彼には何より重要であり、彼が彼方からの思いを確信するのに十分な要素だった。拙く子供じみた懺悔と求心が美夜にとってはここにある理由であるように。そんなものが彼らの世界を担う核だった。

部屋の中は暗いままだ。ここには二人の痕跡と吐いて腐った甘い息がある。美夜の背には類の爪痕が。類の耳には美夜の開けた穴が。持っているものは多くない。だからこそ、彼らは離すまいと必死に掴み続けられるのだ。

彼らの恐れていた闇はそこにはなかった。そして朝は来ない。朝が来ないままの部屋でなら二人息をしていられた。

彼らは同じことを繰り返すのが好きなのだ。幾度となく形を失いまた形づくり、取り返しては融合する。その繰り返

返しの中で、彼らは失った。美夜の砂泥となった湖はどうに干上がった。類の小石は吐き出され何も残っていない。互いに溶け合った空気だけを詰め込んだ体は、境界のないものに変わった。

ひどく穏やかな日は美夜の爪弾くギターの音色に類は流されるままに眠りにつき、美夜は白い頬を慈しむ目で撫ぜた。彼の耳にも金属は増えた。共鳴する音が彼方の平安だった。カーテンの隙間かた見える月の光が差し込むのを疎ましく感じないほどに凧いでいた。

乱気流に飲まれた毎日の中で、彼らは本当に世界にこの二人ぎりなら、と囁き合った。

*

雨が降りしきっている。立ちすくむものにも、横たわるものにも、分け隔てることはない。この街の全てのものに雨は降りしきっている。

灰色に霞んだ街を満たす濡れた空気は、肺を満たして熱だけを奪っていった。水滴はつむじから髪をつたい、頬を濡らし、顎の先へと滑り落ちる。類は視界を溼ませているのは何か考えていた。彼には張り付いたシャツが粘膜のように感じられた。外界と彼を隔てる膜が酸性の水でふやけて溶けていく。迫り上がる不快感を濡れた手で払った。飛

沫が指の先から灰色の世界に消えていく。そして飛んだ以上の水分が彼に染み入る。

彼は小さく、本当に小さく息をついた。その息は視線と共に、アスファルトに吸い込まれていく。水溜りに新しい波が生まれては次々にかき消されていった。波が邪魔をして、彼の姿は映らない。

唐突に雨が止んだ。顔をあげた類の眼前には、ビニール傘に守られた彼方の姿。直径一〇〇センチの世界の中に彼は匿われる。類は低い天井に背を丸める。ゆっくりと踏み出す美夜の肩に必要以上に寄りかかる。美夜のパーカーが湿って色を変えていく。美夜は冷える半身に彼の息遣いを感じていた。彼の水浸しの手に服の裾を掴ませてやった。

雨は無色の膜を叩き弾かれる。彼の為に高さは変わらず、彼方の為に離れはしない。二人の視界はどこまでも灰色で霞んでいる。

淀み切って透明の

彼女とは同じ美術史の講義を取っただけの仲で、何なら事前に振り分けられたペアワークの相手で、名前も知らないような子だった。出会い、なんて求めていなかったから、綺麗な顔の子だなんて思うこともなかったし、あわよくばと期待を持つこともなかった。この展示会が終われば、名前を呼ぶこともないんだろう。早く鑑賞を終えて、別れるべきだと思っていた。

展示会のシーズンにオープンキャンパスを合わせてくるのは、いつだって芸術に溢れた大学であるとイメージ付けたい戦略が見え見えで気持ち悪かった。自分自身もそんな雰囲気にもまれて入学したというのもあって余計に。

音楽系とかデジタルアートとか、華やかな学部は人も集まるし、学舎も綺麗で演出も派手だ。僕らのような静物ばかりを扱う学科はこういう時に不利だと思う。文学とか工芸とか、学長たちからしたらライブ性が無くて集客力の低いもの。

実際、僕らの学舎は学生すらいなかった。休日でも学校に入り浸っている寮生の姿も、制作に追われるゼミ生の姿もない。無駄にかっこつけた台座の上で凛々しく座っている学生の制作物たちは、誰が見染めてくれるんだ。

「これって増やすんですか、減らすんですか」
「え、」

身長半分はあるガラスのモニュメントを見ながら、彼女が呟いた。透明で、駒込ピペットの膨らんだ部分のようなそれは、窓から射し込む太陽の光を反射して薄暗い学舎の天井を照らしている。

突然の問いに僕は言葉を詰まらせていた。彼女の聞き方も特殊だと思う。どう作るんですか、なら聞かれたことあるのに。

「素敵な惑星ですね」

惑星、彼女がそう称したそれに目をやった。無色で透き通ったモニュメントは、内部にできた気泡だけが浮き上がる過程を切り取られてそこにある。僕には到底惑星だと思う事が出来なかった。どちらかというところ、

「ラバーランプ」

「え？」

毀れたに近い言葉を拾われて、落ち着きかけていた頭がまた乱れ出した。取り繕う言葉は一つも出てこない。音も出ないんだからもうどうしようもない。困惑で視線を彷徨わせると、その度にガラスを透過した陽の光が目端に刺さる。

学舎とはこんなに静かだったのだろうか。廊下の静寂が僕の肌に染み込んでくる。

「ガラスは惑いがなくて良いですね」

長い髪がふわりと浮き上がり、彼女は僕に背を向けた。そうしてコツコツと靴の音は遠ざかって行って、廊下の突き当たりの階段を降りた。今まで呼吸を止めていたのかと思われるほど、突然息が肺に入りこむ。安堵でも呆れでも、何でもないため息が漏れた。

そして遠ざかって行く彼女の足音を追いかけた。

確かそのモニメントの名前は「みなもと」だった。

これが、彼女との出会いだったと思う。

彼女は清廉という言葉を体現した様だった。絵画から飛び出してきたと言われても納得してしまいそうな雰囲気を持ち合わせていて、淡くてガラスみたいな人だと思った。

僕が彼女にそういう印象を持ったように、彼女も常にそうありたいと祈っている。それが彼女にある種の神聖さを与えているけれど、周りからしたら異質に見えていたようだ。

彼女が横切るとあの子って、と誰かが囁く。なんとなく存在が認知されて、疎まれるでもないが近寄らない。遠目から未知のものをそっと観察している。とんすけもその一人だった。毎度見かけては「あの子ってなんか浮いてるっていうか、不思議ちゃんって感じだよな」そしてその後、でも顔は綺麗だよなと品なく笑うんだ。

彼女がお昼は学食にいると知ったのは、展示会から二週間が過ぎてから。毎日同じ子と一緒に同じ席で食べているとわかったのは、更に数日が経ったころだった。

「おー今日もいるじゃない不思議ちゃん」

「やめろよその呼び方」

けけと笑う声を聞き流し、彼女のことを見ていた。彼女の向かいに座るアザレ色の髪をした女の子は、明るそうな子という印象。ずっとその子だけが話しているように見える。静かに食べる頷くを繰り返す彼女と、コロコロと表情を変えながら話すその子の組み合わせは、違和感が感じられた。

「実は展示会、あの子と一緒に回ったんだ」

「は？ なにデートじゃん。お前そういうことは早く言えよ」

「そんなんじゃないよ」

そんなんじゃない。課題の一種だし、会話もほとんどなかった。あれを会話と呼んで良いのかって感じだけど。

「よし、行って来い」

「何が？」

「ばか、分かるだろうがよ」

分かっているからとぼけているのに。背中を肘でおされて、渋々行くしかなくなった。数歩歩きかけて振り返ると、とんすけがニヤニヤしながら顎をしゃくっている。

彼女までの数メートルを詰めるのが本当に辛かった。出した足をもう一度引いてしまいたかった。なんて声をかけるんだ、そもそも覚えているかも分からないのに。迷惑だ。考えを巡らせて台詞を決めるには距離が短すぎた。テーブルの真横に立ち、あぐねていると、訝しげに僕を見る目が四つ。

「……おはよう」

絞り出してこれかと、自分で呆れた。あまりにも頼りない声にもっと呆れた。背中を指先でなぞられているような居心地の悪さを感じる。次の声がどうにも出ない。

「おはようございます。けど、もうお昼ですよ」

「あ、そうだね。えっと……久しぶり」

「毎週講義でお会いしていますよ。でもお話しするのは久しぶりですね」

全てが上手くいかない。もう何も言わない方がましじゃないか。じゃあって立ち去った方がいい気がする。だけどもう引くに引けないのも確かだ。

「二人は友達なの？」

アザレ色の女の子が彼女と僕の顔を交互に伺いながら問う。僕たちの関係にはそんな大それた名前はな。顔見知り程度のもので。美術史で同じなんだよ、以外のことは何も言えない。

「隣、座られますか」

はい、以外の返事ができるほど無礼でもなかったし、邪魔しちゃダメだからって返せるほど気も利かなかった。だから彼女の横に座るしか無かった。そこからはあれよあれよとアザレの子のペースに飲まれるだけだ。あとからやってきたとんすけは、ノせられてペラペラ喋っている。盛り上がるのとんすけとアザレちゃんの前で、ノイズキャンセリングで弾き出された側の気分だった。

でも話せたのはそのくらい蚊帳の外だったからでもある。

「この間は、ありがとう」

「いえ、こちらこそ」

「……ガラス好きなの？」

「ええ。純粋で澄み渡っていますしね」

「ガラス工芸じゃないよね？」

「はい、陶芸です。土は、その身一つで全てを包んでくれると、そう思うんです」

いかにも美大生らしい答えだ。僕にはそんなアーティストイックな言葉は天地がわからないほど醜陋していても言えない。やっぱり彼女は神秘的な人なんだ。

だからこんな人と毎日お昼を共にするようになるなんて思ってもみなかった。彼女は一般的な大学生の行動が似合わないような節があったから。僕みたいなんでもない奴といるのはそれこそ違和感しかなかった。けど、僕の横に

いる時彼女が人間らしいものになる気がして、なんとなく嬉しかった。今思うと悦に浸ってたんだ。皆が触れる事のできないものに近付けて。

僕は夏にはそれらしく夏祭りになんかも行った。二人つきりで。

駅から出たら同じ目的の人が辺り一面で蠢いていて、まるで火に集まる虫だと思った。蚊柱の中に突っ込む趣味は無いので、柱に背を預けて大きな人の流れから距離を置いた。視界には艶やかな飾りをつけ高く盛られた髪がいくつもある。毒のある虫や植物って目を惹く色をしている気がする。僕はそんなじゃなくて、月の光が一筋さしたように、手折ったら昇華してしまいそうなものもいい。あんな感じで。

月光は僕の前へ降りてきた。人混みと一緒に電車から吐き出され、改札から真っ直ぐにこちらへ寄ってくる。浴衣の地は藍色で花は朝顔、古風でシンプルなデザインがいかにも彼女らしかった。不思議なものでも見るように大軍の流れを見渡して、ゆっくりとその中から抜け出して来た。

「お待たせしてしまいました」

「ううん。電車人いっぱいだったでしょ」

「はい、若い方いっぱいでした」

自分だってその若い方なんだけどなあ。そこかしこにいる女子大生と同様に、浴衣を着て髪を結い上げ花火会場に足を運んでいる。

行こうか、と声をかけて手を差し出す様な爽やかなことはできなかった。二人で一緒にゆっくりと会場まで人混みを流れていった。

そこそこ大きな花火大会とあって、活気で溢れている。屋台から張り上げられる声、あれが欲しいと騒ぐ子供の声、高い笑い声。明るい声で満たされていた。

祭りに来たのはいつぶりだろうか。ずいぶん昔な気もする。屋台なんて対して代わり映えのするものでもないだろうと思っていたが、チーズハットグとかハリケンポテトとか、意外と流行のものも並ぶものなんだな。道の両脇をずらっと並ぶ屋台に感心しながら、行き先もなく、人並みに押されるがまま歩いていた。ちらりと横に視線をずらせば、彼女の頭が視界に入る。今僕の隣に彼女がいる。

「なんか、食べたいものある？」

やっとなんか声が出たと思った。

「そうですね、お祭りっぽいものが食べたいです」

お祭りっぽいもの。じゃあさっき見た様な新しいものじゃなくて定番な屋台を探した方が良さそうだな。彼女の好みに合うものがあるだろうか。屋台のテントの屋根に書かれ

たカラフルな文字を追う。イカ焼き、たこせん、りんご
飴、焼きそば、チョコバナナ、かき氷……。

かき氷とか？ と口を開きかけた時に服の裾を引かれ
た。彼女が綿あめの屋台から僕の顔に視線を移す。

「はい」
「ありがとうございます」

綿あめを受け取ってじっと見つめるその目は、初めて手
にした絵本の表紙をなでる子どもようだ。

「私綿あめってあんまり食べたことないんですよ」

「僕はお祭りの時よく買ってもらってたな。ほら戦隊モノ
のヒーローとかが描いてある袋に入ってるでしょ？ あれ
が欲しくてさ。結局全部食べれなくて母さんにブツブツ言
われたりしたよ」

いつもより饒舌だと、自分でも思った。ああ浮かれてい
るんだな。僕は認識してしまった。

そこからは彼女の一挙手一投足が気になって仕方がな
い。垂れた一筋の髪を耳にかけたり、そのふわふわした綿
あめが口の中に消えていくのも。鼓動と一緒に視界までぐ
らつく様だった。

彼女は綿を口の中で溶かして少しの間じっとそれを見つ
めていた。

「甘い、甘いだけです」

無機質な口調とは裏腹に、手の中の雲に向けられた彼女
の視線は憂いと羨望を帯びていた。僕は、普段はおろした
長い髪が隠しているうなじと、いつもより大きく早く打つ
心臓の音すらかき消してしまいたいような喧騒に浮き足立つば
かりで、彼女が見せたほんの少しの感情に気が付かなかっ
た。

遠くから火薬の燃える音がして、周りから歓声が上がっ
た。

彼女の横顔を照らしたのは白く清廉な月光ではなく、鮮
やかで色とりどりの花火だった。

この夏休み、僕が出かけたのはこれくらい。あとはずつ
と家か学部の工房に籠もっていた。用事もないのに毎日毎
日十時過ぎから教室を放り出されるまでデッサンをして過
ごす。彼女が毎日大学にいるからというだけで、特段描き
たいものも作りたいものもなかった。目につくものを順に
紙に落とし込んでいった。

それも夏も終わりに差し掛かると描くものもなくなって
きて、ひっくり返した工具箱のようなこの部屋が閑散とし
て見える。ビー玉を口に含んだところで涼やかな味もきつ
としない。彼女は一体毎日何をすることがあるのか。

僕たちは専攻が違うから、大学にいても別々だ。お互い
ずっと籠りきりで行き来することもない。なのに僕は毎日
何をしているんだろう。

——よし。

夏休みの終わりがけに、やっと大袈裟な覚悟をして、この一月半見続けた工房を出た。陶芸の工房はガラス工房よりも日陰で涼しいところ。山に面している裏口を出ると窯がある。

古い鉄製のドアを引いた。中は彼女一人で、こちらに背を向けている。

彼女は轆轤の前でじっと土に向き合っていた。この空気を僕は知っている。彼女は結界の中に自分の空気を充満させて、血管へと送り込んでいた。

僕はその結界の外で彼女を見つめる事しかできない。僕は彼女と同じ空気を吸うこともできなかった。

僕はそっと工房を後にした。僕には世界なんて何にもないんだ。

肺が空っぽなのに引きずられるような重さを感じた。夏場は日が沈まない。ギリギリと世界を照らす太陽に焼き殺されながら帰路を辿った。

それから彼女に会うことも、大学に行くこともなかった。

それでも夏休みが明けたら、やっぱり同じ学部だし会うこともある。それに休みが明けても僕ら四人はなんとなく、また同じ席に集まって話していた。その習慣は僕を彼女に再び近づけた。久しぶりに見た彼女は、以前と変わら

ず、静かにそこに居るだけだったけど、それが僕を安心させた。残暑厳しい初秋の頃、まだ蝉は大声で鳴いていた。

「ふわぁ、」

「眠そうだねえ。最近寝不足？」

大きな欠伸をして恥ずかしそうに笑うアザレちゃんの髪は、今はシアンブルーで、眼の下には濃いクマができている。影のようにくっきりと、三日月型。

「うん、最近彫像が本当に楽しくてさ、寝ずにやっちゃうの」

女の子が彫像なんて珍しいないつも思う。あんな力仕事、僕ならきつと嫌になる。ガラスみたいに繊細なものが僕は好きだ。

「最近大学の近くにガレージを借りて、そこで作品を作ってるんだ」

「めっちゃいいじゃん！ 遊びに行かせてよ」

是非是非、なんてとんすけと二人で盛り上がってるけど、これは僕と彼女も行くのだろうか。

ちらりと横に座る彼女の方を見やると、キュッと口を結んだまま黙っていた。

アザレちゃんのアトリエであるガレージは、作品と道具と、それ以外は何にもなくて、床に石材の破片が飛び散っていた。真ん中にある像はまだ未完成で、今後の姿も僕に全くわからなかった。

それからしばらくして、彼女がコンテストで受賞した。アザレちゃんが言うには「好きなものを作っただけ」だろうだ。

僕は学内誌を閉じて彼女の方に差し出した。彼女はなんの反応も示さない。ねえ、と声をかけて初めてこちらを向いた。そして、ええ、とそれだけ声を発してまた黙ってしまった。

その日のお昼、彼女はアザレちゃんから振られる話に一つも返事を返さなかった。いつも静かである彼女でも不自然な対応。とんすけは、やっぱり不思議ちゃんだなあ、なんて笑ってたけど、僕には彼女の中に静かに渦巻く何かを感じた。

分厚い雲が空の色ごと変えていく。途轍もないスピードで辺りは暗くなった。突然の大雨が夏の終わりを知らせに来た。

アザレちゃんの一件以来、なんでもない装いだけど、今まで見られなかった、淀みのある感情がその顔に映るようになった。澄み渡った彼女の中に、一滴の泥が落ち、浄化できずに苦しんでいるような顔。

一方で、アザレちゃんは次々と作品を作っているようだった。先生たちの話によるともちろんいい作品もあるが、とても褒められた物じゃないのも多いんだそう。そんな評

価は気にもせず、私は作りたいたいものだけ作ると、アザレちゃんはまた濃くなったクマを擦りながら言った。

吹き抜けていく風がすっかり秋に変わる頃って、何に対してもやる気が出ない。大きな行事も無いし、中弛みの時期になる。そんな頃に僕や彼女のいる工芸学科は、地域住民向けの市を開催する。地域との交流とかいう体裁の為に、工芸品は使いやすいなと思う。

簡易で建てられたテントの中にコース毎の商品が並ぶ。作るときは作品なのに、ここに並ぶと途端に商品。僕にはそれが劣化にしか思えなかった。

接客なんてしたくないので、僕は在庫の運び出しの係。仕事のないときは裏でひっそり隠れていた。彼女はと言うと、客の質問に丁寧に対応していた。最初は裏にいたそうだが、学部の意向で前に。綺麗な彼女が品良く対応していれば、確かに評判が良くなりそうなものだ。

休憩がてら戻ってきた彼女にお疲れさま、と声をかける。作品の入った段ボールを押して、隣を開けた。

話題に困ってしまうのはいつもの事で、視線をただ彷徨わせていた。

「アザレちゃん、最近すごいね」

共通のことで、出せる話題がこれくらいしか見つからなかった。あの子は教授陣の言うとおり、毎回極端に変わる評価を受けながらも、学生ながらにして個展を開くところ

まで成長した。確か、前に行ったあのギャラリーは引き払って、もっと大きなところを借りたそうだ。

「今度は有名な作家と共同で展示会するんだって」

明らかな成功。芸術家なら誰もが憧れること。けど僕にはいまいちピンと来なかった。売れるってどんな感覚なんだろう。自分の商品価値が上がるといふ事だろうか。けれど、商品になったら、作品がそうであるように、自分の価値も下がってはしまわないのか。でも、

「あんな風に作りたいものがあって、それを純粋に追い求められるのは、羨ましいよ」

自嘲的に笑った僕の横で、この世で一番嫌いな音がした。

隣に目をやると、彼女がガラス性の皿やらグラスの入った段ボールに、片足を突っ込んでいた。今日は珍しくスニーカーを履いたその足を、もう一度浮かせ再び振り落とす。中に敷いた新聞紙と段ボールが擦れる音を裂いて、砂の碎け散る音。

ぱきき、じゃりん、ぴき。

その音は酸素の送られなくなった脳を、するりと通り過ぎていった。

熱で溶かして再び固められた物が再び分子に戻っていく。作品が破片へと帰す。箱から出された靴についた小さな粒子が光を反射する。足首に赤い筋が流れる。

彼女は段ボールをひっくり返し、何度も踏みつけた。子供が地団駄でも踏むように、感情を乗せて。

積まれた箱をなぎ倒し、中から雪崩出すグラスを一つ掴んで叩きつけた。粘度のないそれは、地面に当たると床一面に飛び散った。ミルククラウンと同じく綺麗にはいけな

いけれど。
長い髪を振り乱し、彼女が腕を振り上げ、足で踏みつける度に、光を反射した砂が輝く。高い悲鳴と共にガラスは碎けていった。

彼女の周りに出来たガラスの砂漠の上に、彼女は伏した。尚彼女はガラスへとその手を振り下ろす。柔軟で、ぬめりのある、土を捏ねていた美しい指に亀裂が入る。砂は赤く色付いた。

これだけ物音を立てれば流石に人も集まってくる。そして普通ならば止めに入るであろう状況で、僕と同様に見つめる事しか出来なかった。

大学職員が呼んだ警備員が彼女を連れて行くまで、そのままずっと、僕は彼女を見ていた。

彼女が謹慎処分で済んだのは、自身以外の怪我人が出なかったからとか、親が大金を積んだからだとか、様々な噂が流れたけど、実際のところはわからない。

皆はやっぱり頭可笑しいんだよ、何て言うけど僕はとてもそうは思えなかった。けれどあの日見た彼女の中の穢れ、粉々に崩れ去ったガラスたち。その衝撃は悲しみとも怒りとも言えない感情を生み、僕の中で浮遊感にも似た居心地の悪さになった。

それでも月日は流れ、十二月の下旬、芸大生の僕たちには年度末の制作課題が課される。何も作る気など起きる訳がなかった。工房にいても、家にいても、食べていても、寝ていても、彼女のこと頭が一杯だった。

教授には頭の中にある物を全て絞り出したら、何かは生まれると言われた。

切っても絞っても、今出てくるのは彼女のことだけ。

じゃあそれを作ればいいと、教授は言った。

彼女のことなら、確かに幾らでも考えられる。

僕は夏休みぶりに、工房に籠るようになった。彼女のことに想いを馳せるには、何もないここが都合良かったし、何か作るには全てが揃っている。

これだけくつきりしたものを描くの、存外時間がかかった。考えれば考えるほど、ビー玉を覗き込んだみたい

に、彼女の輪郭がぼやけていった。彼女の背格好を思い出せない。そんな苦しみが僕の背に重く重くのし掛かった。けれど天啓というのは悩むものの前には降りてくるようだ。

僕はテーブルの上に積み上がったアイデアメモを全て払い落とし、新たな一枚の紙に鉛筆を走らせた。これが生み出せれば、僕にも世界が持てるかもしれないと思った。

それからは本当に寝ずの作業だった。家にも帰らずつと工房に泊まり込んで作業をする。周囲の心配する声が煩わしくて、連絡を絶った。

一人きりの世界でただ純度と彼女だけを追い求めた。出会った頃の淑やかで純粹を追い求める彼女の姿、けれどその中には特段の醜さが詰まっている。そんな彼女のことを。

型取りもサンディングも、普段の数倍時間を要した。少しでも、曇りがあつてはいけない。燃え上がるといよりは、深い深いところへ沈みこむようだった。凍てつく冬の寒さを炉の熱でしのぎながら、僕は世界の中で息を吸った。

年も変わるかという頃、やっとそれは完成した。

そう言えばこの辺りがあの日見たオブジェに似ている気がする。

増やすか減らすかなんて、彼女もよく知っているだろうに。

彼女に完成品を見せられたのは、彼女の謹慎が開けた新年のことだった。

久しぶりに見た彼女は少し痩せた気がする。けれど、以前と同様、澄んだ顔をしていた。ヒソヒソと囁く生徒たちの声にも動じず、まっすぐと前を見ていた。

「久しぶりだね」

「……お久しぶりです」

「元気だった？」

「………今は」

「あのさ、僕の作品を見て欲しいんだ」

彼女はぎりっと歯を食いしばった。眉間に深い皺がい。出会った頃の僕がだったら、この光景を受け付けられないだろう。目を白黒させて驚いたはずだ。けど今の僕は君を正面から見据えている。だから君にも、ほんの少しでいいから見て欲しい。

彼女の水晶体が僕をとらえた。

僕は彼女の手を取った。その細い肩が跳ねて黒髪が落ちる。以前のような艶やかさはない。先に目を逸らしたのは僕の方だった。引いたその手には何の抵抗もない。学生の話し声で満ちた学舎を、空気を、僕らは無言ですり抜けた。

彼女の手を引いている時よりも、工房の扉を開ける時の方が手が震えた。もう一度閉じてしまいたいと思いつつ、ジリジリと開くことしかできなかった。遂に戸を開け放つと、ガラスが全身に光を浴びる。

工房の真ん中に置いた女性の肢体の像は、台座を合わせると僕よりも少し背が高い。天からさす光に両手を伸ばし、背はほんの少し反っている。肉付き柔らかな足はつま先までしなやかだ。

どこのパーツを取っても美しくなだらかな曲線で作られたこのガラスの体は、光を反射しない。眩く光ることはなく、光を透過させる。

彼女がモデルというよりも、これは彼女自信を表した。彼女という清らかな人間を、僕はここに写し取りたかった。

無色の下腹を指先で撫でた。

「目指す純粹とは反対に、醜い自分を知る君が、それでも望む姿ってとてつもなく純粹だって、僕はそう思うんだよ」

僕の人生最大の愛の告白を、彼女は僕の後ろでただ黙って聞いていた。短い沈黙の後、扉が音をたてて閉まった。二人で潜った扉を一人で出た。

彼女はあの時なにも言わなかったけど、それはいつだってそうだった。冷静に考えれば分かることなのに、舞い上がった僕にはわからなかった。

制作課題の時期、学舎の中には意欲と疲労で満ち溢れる。遅くまで灯は消えず、そのまま朝を迎えることもある。べ切が近づくと、膨れ上がった感情が学生を圧迫して、それを過ぎると一気に爆発する。成績が出るまでの間、学生は気楽な春休みを過ごす。

春休み初日、学内に展示された、と言っても机の上に置かれただけの作品を見ていた。僕の作品はそのサイズも相まって、とつても目立っていた。張り切りすぎたみたいで恥ずかしくもあるが、出来には自信があるから実は喜んでいたりする。「生まれ」っていう名前も気に入っている。

陶芸の作品は色や形に縛りが多く思えるが、それでも個性的な作品ばかりだ。彼らの発想には感心する。その中には当然彼女のものもあった。工房に引き籠って、話しかけても答えないほど、根詰めて作っていたと聞いた。

彼女の作る作品の特徴は全体が真っ白で、表面が滑らかなこと。この作品もそう。純白で何の凹凸もない、清らかな骨壺だった。

彼女の作品はその異様さからとても目を引いた。形状も色味も全てが彼女独自のものだった。あの世界の中にいる彼女を想像して、僕は胸が高揚した。

僕に世界を与えてくれた彼女とその世界は僕の中の絶対になった。僕にとって彼女は絶対的な宗教なんだ。

——とまあ、僕の作った君の姿が世に出ることになったら、こんな風に語りたいたいと思うんだけど。君はどんな。

ゼミ生のコメント

小島

文章の艶と美しさが伝わってきた。

ものづくりをする苦惱切り取った小説では、みなもと、うまれなどなにかの始まりを示唆する作品名が繋がっていた。

羽田

ノンバイナリージェンダーの三人称を造語で描こうという試みがまず面白かったです。使い慣れていない、このような造語を使っている限りそういった部分は伝わって来ず、作品に綺麗にフィットしていたかのように思われます。

佐藤

「過ちて徒然に」

感情に名前を付けるのは無粋ではないか。そんな思いになるほどこの作品には複雑な感情が登場する。その一つ一つが生きていて、それが登場人物を輝かせていた。

「淀み切って透明の」

言葉・小説を出しにした作品であった。そこが面白く、最後の一節がこの作品を表現していた。

「青い風と扉」

佐藤也於

太陽が人々を優しく照らすなんてそんなの嘘だ。

幼少期に読んだ物語にそんな一文があった。内容はおろかタイトルも全くもって覚えていない、しかしこの一文に心が少し救われたのを今でも覚えている。

幼少期を振り返ってみるといつも誰かに怯えて生きていた気がする。先生やクラスの人々、両親に至るまでどこか他人というものに怯えていた。それは今も変わらないことだが、当時に比べるとややその気は軽減したように感じる。このように昔話みたいに振り返ることができるようになったのもその証拠だろう。

大学の一室に一人いた。慣れ親しんだこの一室は私に変わらぬものが存在するのだと告げるように数か月前と同じ匂いを漂わせる。窓に面した席に座った。久しぶりのパイプ椅子にやや違和感を覚えた。少し硬い。この椅子に違和感もなくずっと座っていた過去の自分に悲しみを覚えた。

この時間に必ず日差しが照り付けるこの教室では多くの授業が行われ、その多くに参加した。しかしそのすべてにあまりいい思い出はない。特に一年生のころは、ろくでもない講義をする人間やろくに学びもしない人間を見て辟易とし、このような人種と共に生活をしていくことに怯えることもあった。しかし今ではそんな連中の一人になり下がったように感じている。大昔には学生運動とかいう血気盛んな連中が青い思いを暴力という形で訴えていたそうだが、私はそれをいつどこで失ってしまったのだろう。若さとは青い思いを

正義感という悪魔に雁字搦めにされながら声高々に誇り高く叫ぶことであるように感じる。しかしいつの間にかそれはダサイという文字で切り捨てられ、社会の端っこに追いやられてしまった。

冴えない顔をした人たちがぞろぞろと教室の中に入ってくる。その中に見慣れた顔があった。そいつは他の席には目もくれず私の目の前に座り、すぐ後ろに振り向き、

「久しぶり！元気してたか？」

と言った。正直私は戸惑った。こいつは大学からの付き合いで仲は悪くはなかったが、特別仲が良いという印象もなかったからである。私は戸惑いながらもなんとか返事をした。

「ああ、元気にしてたよ……」

「それはよかった！」

彼はそう告げるとすぐさま立ち上がり、荷物を置いてその場を後にし、授業が終わるまで帰ってくることはなかった。

授業が終わった。目の前の席は終始空席で見通しの良いままに授業を受けることができた。授業終わりで騒然とする中、そそくさと席を立ち教室を出た。昼下がりの廊下は強い日差しが照り付け、季節外れの暑さを感じたが、人の多さがそれ以上のあつさを放っていた。

外に出ると先ほど消えたはずの彼に会った。

「もう授業終わったの？」

「私はうなづく。」

「マジか！まあいつか。ところでさ、進んでる？」

私は見当がつかず、少し頭を傾けた。すると彼は食い気味に、「就活だよ」

と言い、私は歯切れの悪い返事をした。

「お互い頑張ろうぜ」

そう言うのと彼は私の右横をすり抜けまたどこかへ消えていった。私は一人呆然とした。正直就活という言葉の人から聞くことを恐れていた。この言葉を恐れていたのでは決まっていた。ただ他人から言われ、この言葉をより現実味を帯びて理解することを恐れていた。この言葉を聞いたからには何かしらの行動を決めなくてはいけなくなる。何かをするのか。何をすればいいのか。はたまた何もしないのか。私の頭の中をこれらの考えが一瞬にして駆け巡った。もちろん何もしないという選択はすぐに消え失せた。何もしないままに空虚な時を過ごせるほど自分に自信はない。しかし通過儀礼を行わないという道の一つの選択肢として持ちたかった。そんなことはできないと理解しているのにも関わらず、人とは違う何かになりたいと思いつける自分に少し嫌気がさし、君ならどうすると気軽に相談できる存在を私は求めた。

大学構内を歩く。将来とか未来とか意味だけは簡単に理解することが困難な言葉を考えながらただ漠然と歩いていた。すると左手に新興宗教のような出で立ちの建物が見えた。なぜか私はそちらに進んでいき、その建物の全容が見える位置まで来た。変な建物である。金と白の配色で刺々しく厳格な雰囲気醸し出し、正直少し怖

い。だが、どこかそれに惹かれる自分がいた。扉の前まで来た。扉やその周辺にはこの建物について少しぐらい書かれていてもいいものなのに何も書かれていない。無駄に大きな扉は真っ白でそれに似合わない小さな鍵穴が三つもついていた。ドアノブはなく、押して開ける仕様になっているらしい。私は躊躇なくその扉を押した。開かない。当然であるのだが、私は少々苛立ちを覚えた。周りに人がいないことを確認し、乱暴に押ししてみた。しかし3メートル以上はある扉は軋むような変な音を出すだけでびくともしなかった。この先にまだ見ぬ冒険がなごと思ひ、勝手にBGMを頭の中で再生していたのだが、心高鳴りと共に消え去った。そして扉を開ける件を数回やったのち、その扉と全体の写真を撮り、その場を後にした。

私は親の脛を齧り生きながらえる大学生である。青春の風はいつの間にか過ぎ去り、成人という漠然とした印だけが残った。性懲りもなく今日も大学への道をひたすらに歩く。

この道にも慣れてしまった。最寄り駅までの美しくも汚くもないただなだらかな上り坂。途中に大きな公園がある。この公園では様々なことがあったらしい。一年前にあった成人式でそんなことを同級生が話していたのを耳にした。喧嘩や不審者の出没、最近では二次元でしか聞かなくなった単語が数年前まで日常に存在していた。

その公園を今日も通る。午前中ということもあり、人はまばらだ。老後の全盛期といったおじいさんとおばあさんがベンチに座っ

て話をしたり、何か体を動かしている。なんの規則性もない動きで理解できないが、老人の間で流行っているのだろう。数人がそれぞれ似たような動きをしている。しかし誰一人として揃った動きをしている人はいない。その様子を見ながら、私は50年後にはこのような姿になるかもしれないことを理解しながらも、どこか夢物語のように感じていた。

最寄りのA駅に着いた。4月になりこの距離を歩くと若干の暑さを感じる。行きかう人々は涼しそうな顔をしているが、その人々を見ると余計に暑さを感じた。

A駅は寂れている。何も無い。この駅から数十分行った駅にはチェーン店のカフェや有名パン屋さんはあるのにこの駅にはなにもない。強いてあるとすればコンビニとこの場違いにきらめき続けるパチンコ店だけである。春夏秋冬季節を感じさせるものは何一つもなく、時代に取り残されたようなこの場所が私の最寄り駅である。

A駅から大学に向かうため上り列車に乗った。特に課題を追われているというわけではないが、カバンから課題用の小説を取り出しひたすら読んだ。内容は面白くなかった。しかし表紙のデザインがなんとなく気に入った。カバーをつけているから普段は気づくことすらないと思うが、気に入った。私は青を基調とした色合いが好きみたいだ。

そんなこんなで向かいの座席の腐った目をしたおばさんに意味もなくにらまれ、人が結構な数乗ってきたのになぜか私の隣だけ空席という状況がありつつも、大学の最寄りのK駅に着いた。

この駅は栄えている、チェーン店のカフェや有名パン屋さんがあり、カラオケもある。やはり大学の近くというのは学生の消費が多いから自然と栄えていくのだろうか。うちの大学は私立だから生活に余裕のある裕福な大学生が多いということも理由になるのだろうか。群衆の中の一人を演じながら私はふとそんなことを考えた。

大学に向かう通りはいつも通り混みあっている。行き交う人々はそれぞれ思い思いの格好をし、4月という新たな風に乗遅れないように気を張っているかのように見えた。

前を歩く男は身の丈に合っていない派手な色のジャケットを着て果敢に前を歩く茶髪の女に話かけようとしていた。その者たちの間に人物はいないはずなのに、どこか遠く感じる。男には何度かチャンスがあったが、横からやってきたその女の友人であろう質素な女が女に話かけると彼女たちを抜き去り、足早に大学の方に向かっていった。

私はなんの気なしにその男を追いかけた。その男は先ほどまで付いていなかった白いイヤホンをつけていた。この白いなんの特徴もないイヤホンがこの男の本来の姿を表しているようで明るい親近感がわいた。そして私は彼を追いかけて、そそくさと歩を進めた。

本当に代り映えない大学である。寂れた草木もセンスのかけらもない建築物も全く持つて変わる気配がない。唯一変わったとすれば、気付いたときに目の前にあったこの金と白の厳かな建物とその先鋒を務める無駄に大きな真つ白な扉である。ここは毎日のように変化がある。昨日にはなかった南京錠が扉に付き、関係者以外立ち入り禁止と赤字で書かれた看板が設置されていた。昨日の私のせいかなんて思いながら強く扉を押した。もちろん開かない。しかし昨日より開きそうな気配がする。一瞬間があった後、扉の向こうから何か物音がした気がした。私は急に怖くなり、その場をあとにしよと後ろ振り返ると先ほどまで大勢いた人が物音と共にいなくなっているのに気が付いた。こわ。そう思い元の道に戻ろうと走った。先ほどは歩いてきた道を走ると数秒で元の道に戻って来られた。しかし先ほどまで降っていなかった雨が降っていた。私はリュックから折りたたみ傘を取り出しながらいつから雨が降っていたのかとふと思った。そして走ってきた道を振り返り、道の先に白い扉があるのを見ると、あの物音が何かの聞き間違いなのではないかとなぜか自分の耳を疑った。しかしもう一度むこうに行く勇氣はない。今度にしようと雨の降る中を学部 of 校舎に向かつて歩いた。

正直この話を誰かにしたかった。でも私にはそんなことができる相手はいない。そんなことを考えていると急に尿意を催した。恐怖映像だけではなく、恐怖体験でも尿意を感じるのかと内心笑いな

ら用を足していると隣に昨日話しかけてきた彼がやってきた。これはいけると思い、初めて私から声をかけた。

「なあ」

彼がこちらを向く。

「さっきちょっと面白いことがあったんだけど」

もちろんちよつとどこの騒ぎではない。彼は興味津々に、

「なにになに？」

と顔を紅潮させながら聞いてきた。そして私はことの顛末を順序立てて彼に話した。彼の反応には少し物足りなさはあったが、話を終えると彼は有益な情報を教えてくれた。それはあの建物は大学の宗教の教会で時々祈祷が行われているということであった。近日中に一度行ってみるかと思いつながら教室に帰ろうとすると彼に引き留められた。まだ私の話を聞きたいのかと、

「どうした？」

と上機嫌で聞くと、彼は、

「俺もいいことあったんよ！」

と私よりも上機嫌で答えてきた。私のターンだと思い、

「なにになに？」と言おうとするとその「な」を遮るように、

「俺内定一社出ました」

とこの世の誰よりも上機嫌に語った。私はその一言で夢の世界から引き剥がされ、現実世界に引つ張り出された。その後は彼の独擅場である。その後は一つも有益のないことを大きな声で時には裏声になりながら語った。私は今度だけは歯切れの悪い返事すらできな

った。数分間話続け、気が済んだのか目の前を去っていった。私の方が話は面白かったなと思っただが、そんなことを考える暇もなく、現実を生きることを強いられた。

カーテンの隙間から注ぐ太陽の光で起きた。その光はベッドの傍の机においてあったコップの水に反射し、輝いている。私は輝きを放つその水を飲み干した。部屋は冷え切っている。太陽の光に元気はなく、暖かみもない。加湿器は65パーセントを示した。加湿器を止め、窓を開けた。空気が澄み、雲が遠くに、そして海を隔てた岸がここから見えた。普通しか止まらない駅に電車が止まり、大勢の人が乗った。学校のチャイムが鳴る。コンビニに人が入り、新聞の手にすぐに出てきた。小太りのおじさんはマフラーを巻いている。多くの人が駅に向かう中、一人の女子高生が向かい風に顔を歪ませながら反対に歩き、ここから見えなくなるまでただひたすらに北へ進んでいった。

時刻は8時45分である。自室から出て、リビングに向かった。コーヒーを飲み、支度をする。食卓には新聞の朝刊が無造作に置かれていた。日付は今日だ。大企業のスクランダルの記事が大きく一面に取り上げられている。おじさんがおじさんを叩き、その記事をおじさんがおじさんのために書き、それをおじさんが読んでいるのだと思うと少し興味がわき、見出しとリードだけ読んだ。そして新聞を除け、そこにコーヒーの入ったコップを置き、テレビをつけた。新聞と同じニュースを放送している。そこでもおじさんが話を

していた。今度のおじさんの話は少しわかりやすかったが、CMに入るタイミングで消した。そしてコーヒーを飲み干し、戸締りを確認し、玄関に向かう。左足から靴を履き、外に出た。

案の定外は寒く、風も強い。上から見ると駅は近いが歩くとなると話は別だ。めっきり人通りの少なくなった道を進む。太陽の光は依然として地に降り注いでいる。駅に近づいていくにつれて人は多くなってきた。パチンコ店の前にいつもある無数の煙草が綺麗になくなっていく。しかし数十メートル前を歩くおじさんが吸い終わった煙草を捨てた。それを反対から歩いてきたゴミ袋を持った中学生集団がトンングで拾いゴミ袋に入れ、行き交う人一人一人に挨拶をする。なぜか私は少し緊張していた。そしてついに私の番になった。7、8人の中学生がこちらを向き、「おはようございます！」と挨拶をした。引率の先生は会釈だけであった。私も挨拶を返した。自分でも思っていた以上に声が出た。中学生の中の一人が少し驚いたようにこちらを見たが、すぐに歩いて行った。その子は丸坊主だった。

私にも彼らのような時代があったのだろうかと思いついてみても、たった数年前なのにろくに思い出がない。部活には入っていたが、いつの間にか行かなくなり、最初は気にかけてくれた先生もいつの間にか挨拶されることもなくなった。その先生の名前やその場面は鮮明に覚えているのに顔だけに霧がかかったように思い出せない。数年前のことでのこのような状況なのだからいつの日にかそんな

ことやそんな先生がいたことすら忘れていってしまうのかとも思う。そして今この一瞬もいつかは過去となり、だれの記憶にも残らない現実でも夢でもないものになっていくのだろうか。そう思うと私はなんだか救われた気がした。

太陽が頂点に達し人々を燦燦と照り付ける時、私はアルバイト先である個人塾にいた。塾長に軽く挨拶をし、授業準備を始める。いつもと変わらぬこの作業がここ数日の荒波だった心を幾分か静めてくれた。授業が始まり、私は意識しないようにしていた昨日のあの怪奇について考えていた。相当顔が強張っていたのだろうか生徒の一人にそれを言及され、こんなことをしている場合ではないと授業に集中した。しかし少し時間ができるとふとそのことを考えてしまう。本当に物音がしていたのか、何かの聞き違いではないだろうか、というか彼のあの情報はあっているのだろうか。そんなことを数回繰り返すうち、今日の勤務は終わった。生徒を見送り、帰途に就く。

もうその時にはすっかり日は沈み、街灯の灯りが怪しく灯かっていた。見えなくなるほど先まで等間隔に設置された街灯には所々点火していないものがある。目の前にある街灯がそうだ。長い間そこに存在しているのだろうか。重たい埃が目立つ。住宅地を通る。数多の家から温かい灯りが溢れ、この通りを彩った。小さな庭には小さな木が植えられており、そこに生気を感じさせない数枚の葉がつい

ている。その葉は風に揺られ、ここの存在を誰かに訴えかける。しかし助けを差し伸べるものは誰もいない。家の中から溢れ出る灯りと笑い声によって照らされる中、その葉は飛び立ち、数メートル飛んだ後、徐行を示す標識の下に落ちた。住宅街を抜けるとそこから先は闇が辺りを飲み込み、少し先にあるパチンコ屋のネオンサインが凄まじい主張をしていた。それは住宅街にはない主張であり、どこか悲しみを持った主張に感じる。一人の女性がそこから出てきた。二本赤のラインの入った黒い色のジャージに同じ色味のよれた長袖のTシャツを着た姿はお世辞にも綺麗とは言えなかった。髪の毛は黒く、長い。彼女は浮かない顔のまま店の前で赤い箱から一本の長い煙草を取り出した。青色のライターで手慣れた様子で火をつける。しかし風のせいではなかなか上手く火がつかない。手で壁を作り風の侵入を防ぐなど悪戦苦闘する中3度目にやっと火がついた。そして彼女は念願の煙草を吸った。携帯を取り出すでもなく、何かを見るでもなく、ただ煙草だけを見つめ吸っている。その間風が長い髪をなびかせ、何度か目元にかかるように見えたが、それをも無視する。1分後には煙草は持ち手だけになっていた。それでもなお彼女は吸おうと口を近づけた。しかし手に火があったのか、その場に煙草を落とすと、それを踏みにじり、こちらに歩いてきた。すれ違う一瞬、煙草の匂いと共に香水の香りがした。煙草と香水。それらの匂いが交互に僕を包み、颯爽と通り過ぎて行った。パチンコ店が燦燦と光り輝く中、踏みにじられた短い煙草は火も煙も匂いもなく、ただそこに放置されていた。その周りには長短さまざまな無

数の煙草が踏みにじられ、無法地帯と化したかのような異様な空気がそこにあつた。なぜか私は遠くへ消えていく彼女に昨日のあの大きな扉を見た。なぜなのか私にもわからない。しかしもう消え失せるほど遠くをとぼとぼと歩く彼女の哀愁はあの白く大きな扉にもあつた。あの大きな扉には哀愁があるのだ。どこか哀しくどこか懐かしいそんな思いをあの扉に感じていたのだと私は気付いた。

私の自宅にはいつも灯りがない。家にいるときはたいてい一人である。親が家に帰ってくることもなければ、友人を家に呼ぶこともない。玄関に靴が散乱するといったことも兄弟が家を出た4年前から見ていない。いつも私が履く白いハイカットのスニーカーだけが左右並んで玄関の中央にある。私を毎日出迎えてくれるのは物心ついた時から家にある大きなモンステラだけだ。小学生の頃から気が付いたときに水をやるようにしているが、一度も弱つたところを見ることがない。いつだれがどこから持ってきたのかわからないが、気付いたときにはこれが私の一番近くにあつた。何度か母が邪魔だと言つて伸びた葉を切っていたが、もうここ数年は何も言われなくなった。私が伸びた分を切っているわけではない、ただ以前に比べるとやや伸びるスピードが遅くなった気がする。それでもなお緑が鮮明で何も無い家に少しの明るさを与えてくれる。

靴を脱ぎ、廊下を歩くと真つ暗なリビングの方からソースの香りが漂つてきた。リビングに面する扉を開けるとその匂いはより顕著になり、左手にあるキッチンを覗くとそこにはラップのかかった焼きそばがあつた。お腹が空いた。視覚が脳に与える影響は凄まじい

ものがあるとその時初めて理解した。私はリュックをその場に下ろし、電子レンジで一分間温めた。ラップを外すとソースの匂いが全体を包んだ。しかし期待した湯気はあまりない。顔を近づけるとまだ少し冷たさが残る。電子レンジでもう一度一分間加熱した。しかし一分が待ちきれず残り13秒で電子レンジを開けた。ソースの香りが蒸気と共に襲ってくる。もう大丈夫だと目の前のカウンタールにお皿を置き、一度目の加熱中に用意した箸を取り食した。最初はソースの香りが口いっぱい広がる。しかしそれだけではない。次に麺自体の味と野菜の甘みが噛めば噛むほど味わえる。手が止まらない。はじめは熱さを感じたが、二口三口食べ進めるうちに熱さにも慣れた。一度キッチンにおいてあつたコップに水を入れ、それを飲み干す。その後も止まることなくものの数分で完食した。量があつたというわけではなかったが、それだけで満足できた。もう一度水を飲む。この水がなぜか美味しい。透き通る水の美味しさを感じ、私は一言「ごちそうさまでした」と言った。お皿とコップを隣の流し台で洗い乾燥をかけようとした。しかし食洗器の中にはまだ食器が数個残っている。すでに熱さはなかった。それを食器棚に直し、お皿とコップを入れ乾燥をかけた。ソファに座る。カーテンが数十センチ開いていたので右手で閉めた。ベランダには洗濯物は一つもなく、目の前にある街路樹が風で揺れていた。テレビをつけ、BSやCSも含め数局ザッピングをし、そして消した。リモコンを所定の場所に戻し、ソファの歪みを整えた。

大学に着き、いつものように私は白く大きな扉の前に行こうと、通りを曲がるといつもと違うことにすぐに気が付いた。

あの白く大きな扉が開いているのである。

中が見える。そのことだけで私は興奮し、お！と声をあげ、顔を紅潮させた。走って駆け寄る。周りにはいつも通り人はいない。私は躊躇なく、その中に入ってしまった。以前の恐怖体験などこの時は頭の片隅にもなかった。むしろ閉ざされた扉が開き、その先の秘密の空間に足を踏み入れることができることに高ぶっていた。

一歩一歩足を踏み入れていく。何度も門前払いを受けてきた扉の裏には何もなく、前面と同じ作りになっている。案内建物の奥行きは狭く、廊下を挟んでその先の扉を開くと、正面に後光が差す小さな石像が置かれ、それ以外は何もなく床、壁、天井すべてが白で統一され、そして天井に裸体の男女の西洋絵画が大きく描かれていた。

目に飛び込んでくるすべてに興奮し、本当にここが宗教施設であるのだと初めて理解した。私は気づくと石像の前にいた。石像には顔はなく、体だけがあり、女性的特徴と男性的特徴の両方を持っていた。豪華絢爛という印象は一切なく、質素で素朴な印象を全体から醸し出していた。刺々しく厳かな雰囲気を持つ建物とは似ても似つかないそれは後光を刺されながらひっそりとそこに存在していた。

私は時が止まったかのように石像を見つめていた。しかし不意に誰かに見られてはまずいと我に返り、足早にその場を後にした。

しかし私はこの醒めぬ興奮をどうすることもできなかった。なぜあれほどのスペースに石像が一つだけなのか、なぜ石像とは相容れない西洋絵画が天井に書かれているのか、なぜ和も洋も東も西もすべてが混ざったカオスな空間になっているのか、数多の謎が頭の中を駆け巡った。そのすべての始まりであるあの白く大きな扉にも依然として謎が残っている。それはなぜ今日だけ扉が開いていたのかということである。ここが現在最大の謎である。確かに彼が言っていたように時々行われているという祈祷が今日行われるという可能性もある。しかし自分以外誰もいないというのはおかしく、関係者すらいないというのはいとおかしい。私は居ても立っても居られずもう一度あの場所に向かうことにした。

いつもの角を曲がり、扉が開いていることを確認し、扉の前までやってきた。そこで何か中で謎の音楽が流れていることに気が付いた。キリスト教や仏教とは全くもって違う音楽である。緩やかなテンポで落ち着いた印象があり、それを外で聴きながら高鳴る胸を一度落ち着けることにした。曲が終わり、深呼吸を2回した。そして中に入ることを決意した。

廊下を進み、閉ざされた扉を開けようと押した。しかし開かない。先ほどはスムーズに進むことができたため勘違いしていたのかと思ひ、今度は引いてみる。しかし開かない。入る前まで鳴っていた音楽はとうの昔に止まっており、静寂の中に扉を開けようとする音だけが響いている。この時私は疑問に思った。音楽が鳴っていた

ということは人がいたということである。しかしこの音が建物中に響いているのに、だれもここに来ないのはおかしくはないだろうか。一度扉から手を放し、冷静になってみる。そこで私は人の気配がないことを知った。そしてそれは私に人がいない中勝手に音楽が鳴っていたという可能性を考えさせた。しかしすぐにそんなことはあり得ないと自分に言い聞かせた。おそらく先ほどは気づかなかつた。別の扉のようなものがこの先の石像がある部屋にあるのだ。そこから人が出入りしたに違いない。そうと分かれば、この扉を何とかしてでも開かなければならない。再度扉を押す。開かない。今度は引く。開かない。ここで初めて右に引いてみた。すると不快な音を立てながら、扉は開いた。中は薄暗く、案の定人はいない。私は恐怖で足がすくむ中、一歩一歩中に入っていた。石像の後光は消え、不気味な顔だけがこちらを見ている。光が消えるだけで与える印象が全く違っていった。部屋の中央まで進み、携帯の灯りを使うことを思いついた。それにより、周りを詳しく観察できるようになり、右から左、下から上へと何度も周りを観察した。しかし入ってきた扉以外に扉はない。この事実到现在まで頭の片隅に辛うじて存在していた探求や冒険という言葉が消え、恐怖一色となった。そうになると人は動けない。振り返ろうにも何かいたらとかそんな余計なことばかり考えてしまうものである。数刻沈黙があったと思う。いきなり携帯が鳴った。数分間も続いていた静寂が機械音によって一瞬にして破られた。最初は何が起きたのかわからず、一通り驚いた後、呆然としていた。また少しの静寂が走ったが、その音によって

急に現実を引き戻された気がして、幾分か恐怖が減った。それにより体が動くようになり、後ろを振り向いた。そこには扉以外何もない。恐怖によって作り上げられる幻想もクソもなかった。正気を取り戻した私は携帯の光を頼りに一歩一歩踏みしめながら部屋を出た。短い廊下には灯りがあった。

外はすっかり暗くなり、少々雨が降っていた。建物内の沈黙とは打って変わって、風で木が揺れる音、雨が地面を打つ音、葉に雨が当たる音。数多の音が存在していた。その音の存在が先ほどの出来事をより異常性を帯びたモノにした。

大学構内には人が大勢歩いている。たった数時間ぶりなのにとっても安心した。私は足早に大学を去り、家に帰った。家に帰った後、私を救ってくれた着信音の在処を探すとただの広告メールであった。少し拍子抜けしたが、消さずにお気に入り設定をした。

そこからはあまりあの建物のことを考えることはなくなった。いや、意図的に考えることをやめていたという方が正しいような気がする。大学にはもちろん行っているが、近づくことすらせず、もう数日見ていない。

昼下がりに私は大学を出た。大学を出て駅へ向かう道すがら私はあの建物のことを頭から消すかのように卒業後の進路について考えていた。20分もあれば着く道を30分以上の時間をかけとぼとぼと歩きながら、答えのない問いを考え続けた。最初はイヤホンから流れる歌を連れて歩いていたのだが、気づいたときにはどこかに置

いてけぼりにしてしまったようで駅に着いた時には聴いたことのないどこかの国の言葉がひっそりと私の耳に入ってきていた。私はイヤホンをとった。駅はいつものように活気に溢れている。その節操のない音を今は無性に聴きたかった。無数の若者のしゃべり声、自転車を漕ぐ音、電車が通過する音。そのすべての音を私は聴きたかった。そして聴いた。そして私は歩を進めた。

数時間ぶりの最寄り駅は閑散としている。人がいないのではない、人はきちんと存在している。スーツを着た人や作業着を着た人が大勢いる。しかしそこに力がない。皆の目線は下がり、綺麗に舗装された道路を見つめ、肩を下ろし、ただ歩いている。会話もない。いや会話をする人は存在しているが、なぜかその音が入ってこない。静かだ。私は夢を見ているのではないか。すぐリアルな夢。現実感溢れる夢。私は夢の中を駆け出した。ひたすらに走った。風で木々が揺れることで風が吹くことを感じ、家々の灯りの眩しさに人々の生を感じた。日常が非日常になっていくのを見て、聞いて、嗅いで私は感じた。そしてそれを怖れた。ただ逃げた。その夢から逃げた。逃げて、逃げて、逃げて。しかし私はどこに向かえばいいのだろうか。私の心の安らぐ場所はあるのだろうか。私のこの恐怖を理解してくれる人はいるのだろうか。そんなことに私は怖れた。

私は思いのままに走り、ゾウの滑り台のある公園にたどり着いた。ここは幼少期によく来ていた公園らしい。先日親にそう告げられた。私はこの公園で皆が遊ぶのを見ていた覚えがある。それがい

つの時の記憶なのか定かではないが、私はジャージを着ていたのを覚えている。夕方で西日が眩しい中私は公園の真ん中よりやや右にある黄色いベンチに座り、同級生と上級生の子たちが走り回っているのをただ眺めていた。するとその中の一人が声をかけてくれた。私は嬉しかった。しかしそれを白い目で見る上級生を見て私は拒否した。どうして拒否をしたのか。何を思っていたのか。それらはすべて抜け落ちている。しかしその情景だけが私の脳裏に焼き付いており、今でもその上級生の西日に照らされた醜い顔を思い出す。そんな思い出のある公園で私は以前と変わらず真ん中よりやや右にある黄色いベンチに座った。私は子供時代を生き抜いたことで今、存在している。それは本能のままに子供の中にしか存在しない特殊な関係性を理解し、それに合わせた処世術を子供ながらに実践してきたという証拠である。しかしこの歳になってみると、いや子供だったということを一度でも忘れ、自分自身がもう子供ではないと理解すると一瞬にして子供という存在が純粹無垢で穢れのない真っ白なモノであると感じてしまう。そんなことを考えていると目の前を元氣いっぱい走る子供たちの顔が少し陰って見えた。それは沈んでいく夕日のせいなのかもしれない、と大人の仲間入りをする私はふと思った。西日が眩しい。

私は数日大学を離れ、小旅行に出ることにした。行先は決めておらず、もちろん一人である。ここ数日は様々なことがあり、心身ともに疲弊していた気がした。その気分転換も兼ねてこの旅行を決行

した。しかし外はあいにくの雨である。決めたことなのだからと気合を入れて旅を始めた。いつもの駅に向かう。この時間は人も少なく、パチンコ店だけが人の出入りを頻繁に行っていた。下りの電車に乗った。外の景色を眺めていると見慣れた景色が段々となくなっていく。1時間ほどたった頃だろうか、暗く長いトンネルに入った。そこを抜け、数分行ったところがこの電車の終点であった。扉が開き、外へ出る。

そこでまず私を驚かせたのが、匂いであった。田舎の匂い。土や草の匂い。この匂いは私が生まれ育った土地とは全く違った匂いを持つていた。生命の匂いとも言えるべきそれは、田んぼが一面に広がるこの町の隅々から発せられているように感じた。たった1時間移動しただけである。それなのに一つとして同じモノがないというところを感じた私はこの旅が成功だったと理解した。

駅の外へ出るとそこにはなにもなかった。大きな道の割に車は数台しか通らず、車の数より、駅の前で集会をする猫たちの方が多かった。私はこの空腹を静める場を探したが、何も無い。少し歩いてみることにした。右を見ても左を見えても何も無く、上を見ると太陽が燦燦と陽を地上に降り注いでいた。舗装された道路は新しく、ガムや煙草の吸殻は落ちていない。

数分歩いた先に食堂を見つけた。そこに入り、定食を食べた。味は普通だった。店内はぼろく、引き戸は強く引かないと開かなかった。そこに別れを告げ、道なりに歩いた。ここまで何もないことを想定しておらず、いきなり手持ち無沙汰になってしまった。駅の反

対側にある海岸に向かい、誰もいない防波堤に座った。水平線の向こうに一つの島が見える。それ以外は何もない。ただ波だけが規則性をもって動き、音を鳴らしていた。

数泊する予定でいた。しかしこんな近くにこんな地を持った場所があり、それを知り、それを見たことになぜか満足し、帰ることにした。滞在時間は数時間だけである。次に来る上り電車は数十分後だった。

数時間ぶりの自宅には灯りがついていていた。消し忘れたのかと思いい、小走りで家の中に入っていった。すると中から物音がする。数か月ぶりに家に人の気配を感じた私は安堵した。リビングに入ると母が仕事の準備をしている。

「ただいま」

驚くほど久しぶりのこの言葉に少し声がうわずった。母は忙しそうに、

「おかえり」

とだけぼそつと呟き、高級そうなバッグを片手に私の右側を通っていった。

「何時ぐらいに帰ってくるの？」

と普段なら絶対に聞かないことを聞いてみた。すると母はそんな私に少し驚いた表情を見せたと思うとすぐにいつもの冷静な顔に戻り、「夜勤だから朝方になるかな」と答える。

「そっか。仕事頑張つてね。いってらっしゃい」

と自分でもスムーズに言葉が出てきた。母は、

「うん。行ってきます」

と少しの笑顔で家を出ていった。私はどっと疲労感を感じ、ソファに座った。そこにはこれまでなかった人のぬくもりがあり、幾分か私を元気づけた。そして西日が強く照り付ける中カーテンを閉め、自室に戻った。

今日の経験がそうさせたのかは不明だが、その晩はここ数日考えないことにしていたあの扉のことを考える余裕があった。様々なことが頭に浮かんでは消えを繰り返し、何の結論も出ないままにもう一度あの場所に行くことを決意した。そこからは楽しみなのか不安なのか全く眠ることができず、散歩に出た。

風はなく、静かな夜である。月は欠け、全く雲を寄せ付けない。そのため比較的明るい夜であり、明るい闇を感じる事ができた。自宅付近にある公園に着いた。公園には案の定人はおらず、ひっそりとしている。この季節は夜だけ冷える。しかしなぜかこの寒さが心地よかった。住宅街にある人工的に作られた小さな自然は田舎の自然とは全く異なるモノであるが、こちらにも良さがあるように感じる。空には相変わらず欠けた月が一人で輝きを放っている。そこへ一つの雲が近づいていき、それを覆った。辺りはそれによりやや暗くなる。私は不安を感じた。もう月を見ることができないのではないかと。そんなことはない。しかしこの一つの雲がそれを成し得

てしまうのではないかと思った。数秒後、月は再び輝きを放った。そこに私は安堵と落胆を感じ、足早に自宅に帰り、床に就いた。

昨夜の思いを形にするべく、私はあの扉の前に行くことを決意した。大学へ向かう1時間の間に私はこの選択は果たして正しいのだろうかと何度も考えた。もちろん答えなど出るはずもなく、ただ漠然とした不安だけがそこに存在しているような状態である。しかしこの時間によって私は一つ気づいたことがある。それはあの建物を心待ちにしている自分がいるということである。いや、あの建物ではない。あの建物を支えるあの扉を心待ちにしているのであり、私はあれに少しづつ心を奪われていたのである。その事実には深い衝撃を受けた。

電車は無情にも大学最寄りのK駅に着き、人波が改札へ向かう中、少し後ろを一人歩いた。あの衝撃がまだ残っていた。そうと分かれば、一瞬でも早くあの扉の前に行きたいものである。しかしこの人波の中をかき分けていくほどの勇氣と氣概が私にはなかった。1, 2分後には人の数は減り、私も改札を出た。

風が強く吹いており、不吉な暗示を私は感じた。先ほどの人波は形を変え、依然存在している。風や寒さに負けず、彼らは一步一步進んでいた。私も負けてはいられない。そう感じ、その中に身を投じた。そこには本当に様々な人がそれぞれの歩幅でそれぞれの速度で歩いている。速い人は遅い人を抜き、その速い人もより速い人

に抜かされていった。社会の縮図のようであり、人というモノを表している気がした。そこで私は5人を抜き、2人に抜かれた。

そんなことを考えている時はいつだって早く着くものである。私は大学の門をくぐると足早にあの場所に向かった。心を高鳴らせ、息が浅いのを感じる。一步また一步と踏みしめる足と少しでも速くと急かす手が交互に前に出る。景色に色がついてきた。興奮する。通りを曲がった。

ここからでも扉が閉まっているのが見えた。風が吹き、周りの木々たちが不規則にそれぞれの音を鳴らす中私は扉の前にやってきた。3つの鍵がしっかりと閉まり、大きな南京錠もつけられている。これではどうやっても開けることはできない。私はそう思ったが、ここから去るという選択はなかった。私の心の中は充実していた。建物の中に入り、もう一度中の構造を観察するためにここに来たことは確かである。しかし待ち焦がれたこの扉の前にそんなことは私の中から抜け落ちていた。美しい。周りの緑がこの白さをより強調させているのだとこの時気づいた。純粹無垢とは子供ではなく、この白さのことであると私は思った。そしてそつと扉に手を着いた。冷たい。そして私はこれを私の一部にしたいとすら思った。それほどまでにこの扉に心酔しきっていた。

どれほどの時がたったのだろうか。気づくと夕焼け空が一面に広がっていた。私がこの地にいることを誰も私を邪魔するモノはいない。いつも私は一人でこの楽園を楽しむことができる。ここで感じ

た期待も興奮も恐怖も私一人のものである。誰も経験することのできないモノである。

私はある種の敗北を感じた。それは大自然の前に我々人類が感じざるを得ない種のモノであり、清々しい敗北であった。

私にはもうどうすることもできないと心の底から思った。何一つとして身動きができないような感覚に陥る。木々たちの声がより一層耳の中に入ってきた。それと同時に世界から色が失われ、この扉にだけ色が存在する。ここであつたすべての経験が蘇ってきた。そのすべてが私だけの経験である。私は呆然と立ち尽くす。

木々たちの声に紛れた猫の鳴き声を契機にすべての色が勢いをもって戻ってきた。扉の右奥から一匹の猫がこちらを見ていた。黒い毛並みの痩せた猫である。そいつはじつとこちらを見つめ身動きを取らない。私も動かない。そして数回全身を使って息をした後、その猫は建物の裏に進んでいった。これにはついて行かなければならぬという思いがわいてきて、恐る恐るついて行った。扉の横には道はなく、人間が通るにはいささか狭すぎる。猫はそんなことお構いなしに道なき道を進んでいった。数分歩いただろうか。森の中の空き地に出た。自然に作られたにしては不自然な円をしていた。猫はそこへ来ると進むのをやめ、一度伸びをして小さくなった。案内はもう終わったようだ。と言っても何もなく、何が起きることもない。私も腰を下ろした。するとこの約1時間の異常な時間の疲れが突然押し寄せてきた。ただ森を眺める。様々な色があり、その大半が緑であるが、緑にも数多の色があり、私はその違いを区別してい

った。何も考えることはなく、ただ目の前の木々たちと会話を楽しむかのような時間を過ごした。依然として猫は手を伸ばせば触れる位置にいる。私は手を伸ばし、背を撫でた。生き物の温かさ、そして一つ一つの呼吸を感じた。こいつは生きているんだ。とそんな当たり前のことをここで理解した。数回撫でると居心地悪く感じたのか、猫は来た方向とは反対に走っていった。追いかけてようとも思っただが、こんな別れもまた良いなんて思ったりもした。

帰ろうと思う頃、雨が降ってきた。私は傘を差し、先ほどの道を戻っていく。建物が見えてきた。初めて見る後面は前面に比べ弱く小さく感じた。私は再び扉の前に舞い戻った。そして別れを告げた。もうここへは来ないような気がしていた。それは理屈とか存在しない世界のことでも私にもわからなければ、誰にもわからない。そこで私は扉に感謝の念を伝え、少し涙した。扉は常に非情で何かを語りかけることはしない。その姿に少し安心し、雨の音と雨の匂いに包まれる中、私はこの地に別れを告げた。

カーテンの外は昨日の雨を否定するほどの快晴であった。鳥のさえずりが私の部屋まで聞こえた。いつも通りの朝食を食べ、アルバイトに向かう。暑さすら感じるほどの快晴に嫌気がさす。前を歩く女性もその前を歩く女性も皆日傘をさしていた。教室に着くと塾長が一人事務作業をしていた。私は、「お疲れ様です」

と言い、返事を待たずに準備に入った。手持ち無沙汰な時間ができ、昨日のことを考えないようにいつも通りの生活を送ることに躍起になっている自分を馬鹿らしく感じた。しかしどうすることもできないとこの場を乗り切った。

夕暮れ時を一人歩いて家に帰った。西から照り付ける太陽は私が持つ就活への隠している焦りを見抜いているような感じがした。それから逃げるように帰途を急いだ。自宅へ帰ると素早く食事を済ませ、パソコンを開き、就活についての情報を得ようとした。しかし何から行えばいいのかわからない。とりあえず就活情報サイトへ会員登録をし、そこからは手当たり次第にそのサイトを見た。様々な業種、様々な職業があることを知った。そのサイト曰く自分が何になりたいかが重要らしい。しかしそんなものがあつたらこんな悩むことすらしないだろう。そのアドバイス自体が的外れな気がする。パソコンを閉じ、ひっきりなしに来る就職活動の情報が載ったメールを一つ一つ消していった。

いきなり手詰まりになってしまった。どうしようかと思いつながら、何気なしに就活のことならと彼に連絡を試みることにした。「就活どんな感じですか？」

すぐに既読になり、返信が送られてきた。

「普通かな。1社内定は出てるけどって感じ。お前は？」

私は少し驚いた。彼に一社から内定が出ていることは知っていた。しかしそれを知ってから1か月以上経つのに進歩がなかったのでは

る。私はそんなことよりこいつに聞きたいことがあって連絡したんだと思ひ、

「いや、最近始めたんだけど、正直何からすればいいかわからなくて、正直色々聞きたいかな」と送った。

「そうか、やっと始めたか。そうだなあ。まずはお前が何がしたいか考えることだな」

と来た。こいつもか。みんながみんなこんなことを思っているのか。そんなことを聞きたいんじゃないと内心思った。

「なるほどね。でもそれってどう考えるの？」

自分でも抜群の返信をしたと思う。

「俺は自分が好きなことから考えたかな」

「なるほどね。そうやって考えるのか。ありがとう！その方向で考えてみる！」

携帯を閉じ、自分の好きなことを考えた。しかしそれも難しい。自分は何が好きなのか。アニメや漫画は見るけど胸を張ってそれが好きと言えるほどの自信もない。電車や車には興味はないし、音楽はただ漠然と聞くだけである。好きなこととはこれほどまでに難しいものなのかと初めて思った。その日中に答えが出るとは思えなかった。

気分転換にカーテンを開け、空を眺めた。考えてみると私は良く空を見ている気がする。空が好きなのか。いやただ単に地から逃げているだけかもしれないと思う。しかし一つ好きなことが見つかる

った。そこからは空に佇む月を見ながら漠然と考えた。するといつもの行動の中からいくつも見つけた。風や木が好き、虫は苦手だけど動物は好き。それらは特に意識したことではない。しかし自然と自分が行動する時には常にともにある存在のように感じる。少し笑みがこぼれた。私にはこんなに好きなモノがあったのか。何か自分が自分に認められた気がして嬉しかった。好きなモノを考えることは初めての経験だったが、結構楽しいモノである。今日はここまでにすることにした。いい気分で眠りに就くことができそうだ。

そこからは時が経つのが早かった。様々なことが決まっていき、多くの説明会にも参加した。私は好きなモノという軸をもって就活を進めていった。彼は幾分か躓いたようだが、何とか自分の思い通りに就活を終えられたらしい。あの日から頻繁に連絡を取るようになり、最近そのことを聞いた。

最終面接を控えた朝はいつもと変わらず、太陽が燦燦と照り付ける朝だった。今日は母が作った朝ごはんを食べ、身だしなみを整え、家を出た。約1時間の移動時間は気が気でなかったが、見慣れた景色が私を落ち着かせた。その会社の最寄り駅は大きな駅でチェーン店のカフェや有名パン屋さんがあった。駅に着いてから自然と落ち着くことができていたし、なぜか自信があった。そして私は胸を張って会社へ向かった。

面接の後は徒労感に襲われ、気付くと駅の3番線にいた。正直手ごたえはない。しかしこんなものだろうという謎の納得感が私を包んでいた。駅には大勢の人がおり、その中には就活生と思しき人も数人いた。その姿を見るだけで薄い仲間意識を感じ、お互いの幸運を心の中で祈った。電車はなかなか来なかった。駅のアナウンスだけが永遠と流れ、その途切れるタイミングで誰かの話し声が聞こえた。

最寄り駅は相変わらず何もなかった。しかしいつもと変わらぬということも一つの価値だとんだか達観した思いを抱くようになってきた。パチンコ店には昼夜問わずに人が出入りしているし、そのほとんどの顔は暗い。そんな暗い顔やパチンコ店の前の煙草も今はなんだかこの街の醍醐味のように感じる。

私は卒業後おそらくこの街を出る。そんな予感はどうの昔からしていたし、私自身もそれを願った。それからはこの景色の一つ一つに意味があるように感じ、人間というのはいとも簡単に価値観や考え方が変わるものであるとこの時改めて思った。

今日の結果は一週間以内にはわかるそうだ。少し他人事のように感じている自分がある。圧倒的に自分事なのにこの他人感は何なんだろう。君はこんな感情を抱いたことがあるか？と私は彼にメールを送った。

大学生とは意外に忙しいものであると誰かが言っていたが、私はそれを今実感している。卒論とはこれほどまで精を出して行わなければならぬことなのだろうか。就活を終えたのは数週間前である。そんな私を待っていたのは新たな地獄の始まりだった。テーマ選びから難航し、何度も頭を掻きむしった。今度も好きなことから選ぶことが最善策だそう。そうやすやすと好きなことなど出てくるはずもなかった。しかも今回は所属する学部に合わせてという規制がついている。なかなか思うように進まなかった。考えては消え、考えては消えを繰り返し、ついには別れを告げたはずのあの白く大きな扉のことまで考えるようになっていた。もちろんあの扉を完全に忘れたわけではない、しかしあの日から一度も訪れたことはないし、近づいたことすらなかった。ただ私の中であの扉の存在が少しずつ擦り減っていくのを感じ、すべてが終わったらもう一度あの場所へ行くことを誓った。

卒論がなかなか進まない中、時間だけが嫌に早く過ぎ去っていった。いつしか青々とした木々が紅葉へと変わる季節になり、卒業後にこの街を出ていくことが決まった。私はその連絡が来た際、ただ青すぎる覚悟を決めただけだった。しかしそのことを母に伝えると表情が暗くなったのが見えた。私はそれが少し意外で少し嬉しかった。正直母を残し、この家を離れることに不安はある。しかし私はここから去り、一人で生きていくことを決断しなければならぬと以前から思っていたし、それがこの機会だったただだと伝えた。母

は何も言わず、ただ私を見つめるだけだったが、その眼は終始赤かった。

モラトリアムの終わりはいつか訪れるものである。その時が冬の風と春の風を交互に吹かせながら私の元にもやってきた。

久しぶりの大学は成人式や結婚式と似た空気感でそこに少しの惜別の寂しさを味合わせるモノであった。皆が思い思いの格好で広い通りを闊歩している。私は入学式の時に来た紺色のスーツでこの後ろを一人歩いた。卒業式とは案外簡素なものであった。ホールに集められ、入学式の時にしか来ない格好だけ綺麗なおじさんの話を聴くだけであった。

私はこの式に出ることに何の意味合いも感じていなかったが、一つの目的の遂行のついでに参加した。その目的とは再びあの扉の元へ行くことである。その時がやってきた。規制退場をスムーズに抜け、小走りであの地を目指す。大きな通りに出た。

その時聞きなじみのある声が後ろから聞こえた。振り返る。彼である。彼は笑顔でこちらに歩いてくる。私は急いでいるが、無下にできない。

「卒業おめでとう」

彼が言う。

「そっちこそ」

そんな会話を数度交わし、なぜ小走りだったのか尋ねられた。私はすべてを伝えた。彼はあのことかという表情を浮かべ、一緒に行くうぜと前を歩きだした。私はあの地での経験を他人と共有するのを恐れたが、彼は私の静止を振り切りひたすら歩いた。

しかし彼が行く道は私の知る道ではない。どこだ、ここは。彼に尋ねる。

「お前がいつも行っているところだろ、久しぶりで忘れたのか？」

私は納得できず、ただ後ろを歩いた。すると右手の奥にプロテストの小さな教会が見えてきた。私には全く見覚えのない建物である。目の前までやってきた。彼は中に入ろうと扉に手をかけた。開かない。彼は何度も開けようとするが、開かない。私はただ呆然とした。

「……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？」

彼の一言に我に返った。

「いつもこうなの？」

再び彼は口を開いた。

「いや……、わかんない」

戸惑いながら答えた。私はとりあえずあの扉の元へ行かなければならないと思った。そして走った。

そこからいつもの道は近かった。彼が後ろで大きな声で何かを言っている。私はあの扉が私を待っているとただひたすらに走った。いつもの通りを曲がり、そして愕然とした。

私が待ち焦がれたあの扉がない。いや、あの建物自体がない。そこは何もない更地となり、周りにあった木はその片鱗すら感じさせない姿をしていた。

何が起きているのかを理解することが出来ず、色を失っていくのを感じた。白黒の世界。動きだけがある世界。風を強く感じた。私は更地の真ん中、あの扉のあったところへ歩いて行く。すると以前に遭った黒い猫が丸くなっていった。そいつは私に気づくと大きく伸びをし、私の左を通り過ぎていった。私には追いかけれない。そんなスピードだった。その場に私はしゃがみこんだ。するとあの扉の匂いを感じた。遙か彼方へ消え去っていきそうなほど微かな匂いだった。

彼がこの地に来て、何かを言って近づいてきたが、すぐにその場を去った。私には彼が何を言ったのか、そしてなぜこの場を去ったのかわからなかったが、この地が私一人のモノとして守られたことに安堵した。

冬の空は澄み渡り、太陽が遠くに見えた。そしてそれを私は私のためだけの太陽のように感じた。しかし光り輝く太陽によって形作られる影はもうここにはない。ただ寂寥だけが漂い続け、私はその地にとどまることを拒絶された。そして私は吹き抜ける冷たい風と共にこの地を去り、振り返ることなく群衆の一部と成り果てた。

ゼミ生のコメント

小島

描写する力がすごかった。

感情というよりは日常を切り取る描写力が得意という印象を受けた。個人的に乾いたり雨の日を思い出す小説だった。

シーンとしていて無機質な感じがこの小説の魅力なのではないかと考えた。

一枚の絵や情景が浮かんでくるので面白かった。

羽田

今まで読んだことのないテーマの作品でした。就職活動中の若者の心の動きがよく描かれてよかったです。それ故に、所々リアルな部分がちよつと胸が痛みました。誰しもがどこかで抱く感情をちゃんと表現できているように思えます。読み終わった後は、なんとも言えない重たい気持ちが残る印象的な作品でした。よかったです。

古川

現代の若者は、さとり・Z世代と称され過去の若者と同様に眉をひそめられる存在なのでしょう。その意識が、主人公によく現れていたと感じられます。

細かに人を馬鹿にしながらも突発的に素朴な感情を見せるなど。主人公の像をしっかりと意識されたのだなとわかりました。

卒業制作

羽田敬史

目次

秋
桜

夜

|

192

|

181

秋
桜

重い足を引きずって歩いていると、涼しい風が吹き抜けた。うだるような暑さも、五月蠅い蝉も消え、日が暮れるのが早くなるのを実感した。子ども達の笑い声が聞こえたので、そちらに目を向けると、駄菓子屋のベンチの前で輪になって携帯ゲームをしているのが見えた。確かに世界は動いている。動いているんだ。だけど、毎日毎日止まっている感覚におそわれる。この息苦しさの正体はなんなんだろう……。自宅への帰路、身が裂けそうになる。

一人暮らしをするアパートに帰ると、うす暗い玄関が僕を迎えた。十帖ワンルールの部屋はカーテンからわずかに差し込む夕日の色でドス黒い橙色に染まっている。僕が最近で一番安らぎを感じるのがこの空間だ……。同じ日々を送っているわけじゃない。似ている日々だけど、少しずつ変わっている日々を過ごしている。今仕上げている作品も確かに完成へと近づいている。けれども、なんだか自分だけが世界に取り残されている気がするんだ。この感覚が嫌で嫌で仕方ない。そんなことを思いながら、自分で作った昼飯用の弁当を食べた。暗い部屋の方が落ち着くので電気はつけない。弁当に詰まった肉や米を口の中で咀嚼していると、どんどん空腹が満たされていく。味はしない。お茶を飲もうと、テーブルの上に置いてある二リットルのペットボトルを取ろうとした時、ドス黒い橙色の空間の中、ポツポツと小さな赤色のランプが点滅しているのが見えた。固定電話の留守ランプだ。バイトを終えて帰ってくると基本的に点滅しているんだが、それを見るたびにイライラする。留守ランプが点滅しているということは、留守時の伝言メッセージがはいって

るということだ。伝言を残しているのはどうせ母さんだろう。僕はどうせ何も用がないのにかけてきた電話だとは思いつつも一応、伝言メッセージを再生してみた。

「ハヤト。元気かい？母さんだよ。お前の漫画の方の仕事はどうだい——」

人気作品を連載して、花の有名漫画家生活。そんな夢のまた夢。現実はこの狭いアパートから抜け出せない日々だ。連載がなければ、ただのフリーターでしかない。どうせ僕は漫画家にはなれないと悟った僕は数ヶ月前に漫画を描くことをやめ、フリーイラストレーターへと転身した。

空腹が満たされた僕はすぐにシャワーを浴びた。そう、ただいつもの日常を再生するかのよう。そういった日常行動に刹那的な感情は湧いても、すぐに忘れる。みんな一緒だろう。シャワーを終えて、水滴まみれの身体をタオルで拭いていると、タブレットをはじめとする仕事の用具が散らばったデスクが目に入った。三日後に締め切りが迫った仕事を再認識する。バイトを辞めてしまった今、現在の大まかな収入源はこれしかない。僕は背中が熱くなるような焦りを感じた。パジャマ用のジャージに着替え、ドライヤーで髪を乾かし、即座に仕事に取り掛かる。

ロックのかかかっていない仕事用のタブレットを開くと、作業途中の自分の絵が出てきた。依頼主からギャグテイストでアニメキャラの二次創作を依頼されているが、全く良い表情が描けない。本来僕の作品はもっとシリアスでリアリティあふれる作品ばかりなんだ。

ギャグテイストなんてどうやって描けばいいのかもわからない。それでも、無名のフリーイラストレーターである僕にこんなふうに住事をくれるのは有難いと思い、いつも通り、液晶ペンで下書きを開始した。自分の生活のために必死にいろんな表情を描いてみる。作業を始めて数十分、数時間が経過していくけど、なかなか作業が進まない。というより、描いては消してを繰り返すが全然自分の納得いくものができない。いつものことだ…。

ピンポンとインターホンのなる音がする。タブレットの時計を見ると、朝の七時。どうやら仕事をしているうちに寝落ちしてしまったようだ。それにしてもこんな朝早くに誰だ…。椅子から立ち上がり、猫背になった腰を叩きながら玄関の方へいくと、またピンポンとインターホンが鳴った。するとすぐに「朝早くにごめん。起きてるー?」と聞き覚えのある女性の声が扉の向こうから聞こえてきた。姉ちゃんだ…。僕はすぐに扉の鍵をあけて外に出た。

「何時だと思ってるの?てか、何しにきたんだよ」
扉の前には化粧をしたスーツ姿の姉ちゃんがいた。重そうなりリュックを背負っている。

「だからごめんって言ってんじゃない。それよりあんた…今日暇?」

「暇じゃねえよ。仕事だよ」

「仕事って絵の仕事でしょ?ずっと家いるよね?」

「まあ、そうだけど…。なんなの?」

「この子預かってよ」

姉ちゃんの名前は桃井奈津子。二十八歳。高校卒業後、職場の上司と結婚をし、息子の彼方を産んだが価値観の違いにより夫と離婚。彼方の親権を得て一人暮らしをしている。親を頼ろうとしないなど責任感が強い人ではあるが無鉄砲な性格でよく周りを困らせる。

「いやあ、ホント急に来て悪いね。じゃあ、彼方のこと頼んだよ。」

ファッションデザイナーとして働く姉は、出張の機会がよくあるそうだが、そういう時に關しては前日に実家まで帰り、彼方を預けていくらしい。

今回はたまたま出張先が僕の家近くらしく、「しよっちゅう、ママたちに頼るわけにはいかないから」という理由でこちらに預けて来たという。

僕と彼方はそんな姉を見送った後、二人部屋に取り残されていた。彼方と最後に会ったのは、正月に実家に帰省した時だ。だから約十ヶ月ぶりということになる。それにしてもどうしよう。僕、この子とあんまり話したことないんだよな…。

基本、帰省した時も部屋にこもりがちだから親戚とコミュニケーションをとることに僕は苦手意識を持っている。とりあえず、徹夜作業と朝からのドタバタに腹をすかせたので「彼方、お前朝ごはん食ったの?」と朝ごはんの提案を試してみた。

「まだ!食べてない!」

子どもと会話をしたのはいつぶりだろう。曇りのない純粋な綺麗な瞳を見ているとその眩しさのため息が出た。

「じゃあ朝ごはん作るから待ってる」

僕は炊飯器に残った米を茶碗に取り出す。こんな自堕落な生活をしていても、料理だけはするようにしている。というのも、外食や出前に頼ってしまうと、食費が嵩むことを懸念してなだけなんだが…。

「ねえ、何作るの？」と彼方の小さな身体が僕の懐へと飛び込んできた。この落ち着きのなさは間違いなく姉ちゃん譲りだ。

「おにぎりだよ、嫌いか？」

「えー、嫌いじゃないけど、なんでお茶碗にお米いれてるの？」この純粋な好奇心には感心させられる。黙って座って待ってれば良いのに。

「こうやってお茶碗に米を入れて、これより小さいお茶碗で蓋をするだろ。それから、軽く振ったら熱さを感じないで綺麗なおにぎりが作れるんだよ」

「おじさん、おにぎりは熱いまま握った方が美味しいんだよ」

「うるさいな。腹に入ったらなんでも一緒だろ」

「ねえ。僕もおにぎり作っても良い？」

「ああもう、勝手にしろ」

僕は面倒くさくなって、彼方に料理を手伝わせることにした。彼方は慣れた手つきでしゃもじで炊飯器からお米を取り出し、手の平に乗せた。

「おい彼方。熱いから気をつけるよ」

彼方は僕の言葉に「わかってる」と軽く反応して「あつっ、あつっ」と声を漏らしながらおにぎりを握った。彼方は三分ほどで小さなおにぎりを三個作った。小さくて綺麗な三角型のおにぎりだった。

「おじさん、海苔はどこ？」

「あーごめん、ないからフリカケかけてくれ」

僕が適当に味を選んだフリカケを渡すと、彼方はそれを受け取り、おにぎりにふった。僕は一瞬だけ黙り込み、その間に耐えられず「お前何才だっけ」と聞いてみた。どうやら五才になったばかりらしい。五才にしては随分しっかりしてる子だ。僕がこの歳の時にここまでではできなかった。最近の子どもはゲーム依存だとか、スマホ依存だとか聞くけど、この子はしっかりしてる。僕は姉ちゃんを少しだけ見直した。おにぎりをテーブルに運び、席に着くと彼方も後ろをついてきて椅子に座った。腹を満たすべく、さっそくおにぎりを手に取ろうとすると、彼方が静かに手を合わせている姿が目に入った。僕も慌てて手を戻し、合わせる。

「「いただきます」」

僕よりも随分しっかりしている子どもに感じられた。

「おじさん、今日はお仕事休みなの？」

食事中に平気で触れられたくない話をしなきゃがる。姉ちゃんから僕のこと何も聞いてないのか…。

「仕事だよ、お前らが来たから途中でやめたんだよ」

「どこか行かなくていいの？」

「フリーランスのイラストレーターだからな。基本自宅で作業すんだよ」

「ふりーらんす？いらすとれいたあ？」

「ああもう。とにかくどこにも行かないってこと」

彼方は満面の笑みでおにぎりを頬張りながら「そうなんだ。よかった」とつぶやいた。姉ちゃんが忙しいから誰かと一緒にいられたら嬉しいのか。まあ、僕には関係ないことだが…。

それにしても、ある程度関係を築く前の沈黙が苦手なのは僕だけだろうか。人がいるのに、沈黙が続くと落ち着かない。僕は「お前は大人になったらどんな仕事したいんだ？」と沈黙がやってこないように適当に話しかけた。こういう時の気疲れは半端ない…。

「んーとね、魚屋さんとパイロットとサッカー選手と保育園の先生とコンビニの店員さんと警察官と…」

「おいおい。どんだけやりたいことあるんだよ」

「えー、だって全部楽しそうだし、面白そうなんだもん。ああ、早く大人になりたいな…」

「早く大人になりたい」か…。自分にもそんなふうにしてた時期があった。何でもできて、何にでもなれる気がしていた。でも、現

実はそんなに甘くなかった。漫画家を目指して専門学校に入って卒業したけど、実際の職場の過酷さに絶望したし、そもそも連載枠を獲得するだけでしんどい。わりに会わないと思ったものの、自分が持っている人よりも優れたスキルは、絵しかなかったから、フリーでイラストレーターをやっているけど、全くやりがいを感じない。周りの友人などは一流企業に就職して結婚してる奴もいる。大人なんて疲れるだけだ。だから「そんなにたくさんの夢を抱えたって何も残らないよ。虚しいだけだ」って優しい言葉をかけてあげてもよかったのだが面倒くさくなってやめた。

「ねえ、おじさん！ママはいつ帰ってくるの？」

そういえば、「あずかって」とは聞いたがいつまで預かれればいいのか全然聞いてなかったな。

「わかんね。とりあえずメールしとく」

「はーい」

親が近くにいないことに慣れているのか、あまり寂しそうじゃない。

「彼方、ママいつも仕事で忙しいのか」

「うん、日曜日は家に居てるけど、それ以外は仕事にいつてるよ。だから、僕も保育園行ってるんだ」

彼方のなんともいえない壊れそうな繊細な表情が少し見えた。この子もこの子なりに姉ちゃんに迷惑かけないように我慢してるんだろう。僕は、そんな彼方に少し同情して「そうか」とつぶやいた。

食べ終えた食器を洗い終わった僕は自身の使命を思い出す。

「なあ、彼方。僕も仕事していいか？」

彼方は僕のソファアベッドで退屈そうに手遊びをしながら「いいよー」とつぶやいた。流石に明日に締め切りが迫った仕事に取り掛からないわけにいかないの、僕は黙々と作業の準備を始める。タブレットを起動し、ペンを持つ。ただそれだけの準備ではあるが、確かに気だるさを感じていた。この作品が明日までに仕上がるとは到底思えない。だからって何もしないわけにもいかなかったので下書きの続きを描き始めると「ねえ、おじさんお絵かきしてるの？」と、また彼方が僕の懐へと飛び込んできた。

「ああ、これが僕の仕事だ。悪いけど、大事な絵を描いてるから、むこう行ってくれ」我ながらなんとも冷たい対応だと思うが、こればかりは仕方がない。

「ねえ、僕もお絵かきしていい？」

彼方が大人しくしているのであればと、そそくさと僕は近くにあったA4サイズの画用紙と引き出しの奥に仕舞い込まれた色鉛筆セットを渡した。

「わあ。いっぱい色が入ってて綺麗……」

「それ高いから、絶対なくすなよ」

「はい。ご飯食べるとこのテーブル使っても良い？」

「どうぞ」

彼方はウキウキした表情を浮かべながらテーブルへと向かった。さあ、僕もさっさと作品を描きあげろ……。部屋は沈黙と静寂に包まれ、クーラーの機械音だけが流れた。いつも通り、顔の輪郭線を描くところから始める。次に顔のパーツのバランスを取るために、縦横の線をひき、眼球・上瞼・唇の外側・鼻の先・耳・髪の毛の位置を頭の中で考える。頭の中でパーツを組み合わせたらずは二重瞼の線をつけ、下瞼をうっすらと描く。このような工程をとれば、基本的に失敗しない。綺麗な絵が描ける。全て、専門学生の時に学んだ知識だ。ほんの五分ほどで完成した絵の表情を見ると、自分でも綺麗なものが描けていると思うが、全然納得がいかない。スマホを使ってギャグテイストの絵の表情を試みるが、自分のものと比較してみるとパワーというかエネルギーのようなものをまるで感じない。もう何度この作品の表情を修正したんだろうか。僕は描きあげた顔の表情や輪郭を再び消し、頭を抱えた。

作業を開始してから一時間くらいが経ったところで、僕はあることに気がついた。彼方の声が全くしない。僕は気になって彼方が作業をしているテーブルの方を向いた。猫背になり、真剣な表情で何かを描いている。「どんな絵を描いているんだろう」と気になった僕は席を立ち、彼方が作業をしているテーブルへと歩いていった。「彼方、なに描いてんだ」そう尋ねると、彼方はその小さい肩をビクつかせ僕に振り向いた。

「びっくりした。急に話しかけないでよ」

「悪い悪い。随分、集中してたんだな。どんな絵を描いてるか見せてよ」

「良いよ」

彼方は先ほどまで自身が絵を描いていたA4の画用紙を僕に渡してくれた。そこには人間をモデルにしたキャラクターが描かれていた。赤を基調としたキャラクターで胸の真ん中あたりに小さなライトのようなものがあり、それを中心に放射状に白い模様が広がった左右対称のデザインをしていた。差し色に青色も使われている。

「これって、ウルトラマン？」

「そう！ウルトラマンコスモス！優しくて強くてカッコいいんだ」懐かしいな。僕も小さいころよく見てたっけ。両親が共働きで家にいないことが多かったからウルトラマン関連のビデオを永遠と見た気がする。

僕も大好きだった。

「おじさんもウルトラマン好きなの？」

僕は小さな声で「好きだよ」と呟き、彼方から色鉛筆と画用紙一枚を借りた。赤色の鉛筆を握って鋭いタッチで描き始める。赤を基調とし、菱形の窓のようなタイマーをもち、胸部の黒いアウトライオン、肩と脛に金色のパーツをつけたキャラクターを完成させた。僕は「彼方、これ何かわかる？」と言いながら完成した絵を見せてみる。

「すごい！メビウスだ！おじさんはメビウスが一番好きなの？」

「うーん、一番やつぱりコスモスかな。その次にレオで…」

「ねえ、もっとウルトラマンの絵描いてよ！」

彼方はキラキラした瞳で僕に色鉛筆と画用紙を渡してきた。こんなふうに自分の絵で喜んでくれるとやつぱり嬉しい。僕は夢中になって絵を描き始めた。作業途中、姉から「ごめん、今日帰れそうにない。明日の朝絶対迎えに行く」というメールが返ってきたが、僕は内容だけ確認して返事もせずに絵に没頭した。「おじさん、僕も描いたよ！みて！」「いいじゃん、次は怪獣描こうぜ」こんな会話をしながら彼方と僕はひたすらに絵を描き合った。ふと、窓をのぞけば、陽は落ちて夕方になっていた。

ピンポンと本日二回目のインターホンのなる音がした。彼方に「ちよつと待ってて」と言い、色鉛筆をケースにしまう。重い腰をあげ玄関の扉をゆっくりと開けるとそこには姉ちゃんがいた。

「ただいま」

「あれ？明日の朝帰るって言ってなかったっけ？」

「いやー、思った以上に早く仕事が終わっちゃってさ。ていうか、あんたちゃんとメール見なさいよ」

後で確認したら、やつぱり早めに帰れるようになったから帰るといふ旨のメールが一件未読のままメールボックスに入っていた。

「で、二人ともご飯はもう食べた？」

姉ちゃんは両手にたくさんの食材が詰まったビニール袋を抱えていた。

「食べてないよ」

僕は姉ちゃんが作った手料理を食べながら締め切りが明日に迫った仕事のことを考えていたが、なぜかそこまで憂鬱ではなかった。

「ママ、おじさんとっても絵が上手いんだよ」「そうでしょ。この子、絵だけは本当上手いんだから」「このハンバーグ美味しい」なんていう二人の家族の会話を聞いていると少し心が暖かくなった。久しぶりにご飯が美味しいと感じた。

「おじさんはどうして絵の仕事をやろうと思ったの？」

そういえば、どうしてだったっけ。ただ大学の受験勉強から逃げたかったっていうのもあるけど、小学生の低学年くらいから漫画家になろうとはしていた記憶がある。

「そういえば、あんたって昔から外で遊ばずに絵ばかり描いていたよね」

「覚えてないよ、昔のことなんて」

ただ純粹に絵を描くことが好きになってしまったんだろう。僕は彼方に「絵が好きだったからだよ。彼方も自分が好きだと思うことを仕事にすればいい」と少し無責任の言葉を伝えた。晩御飯をたべて満腹になったからか、彼方はぐっすりと眠ってしまった。何にも染まっていない純粹無垢な寝顔。まだ無色透明な存在の彼方がとても美しく見えた。

「ねえ、ハヤト」

僕は呼ばれた自身の名前に一瞬反応が遅れながら、「なに？」と返事をした。

姉ちゃんは缶のハイボールを片手で揺らしながら「ちよっと付き合いなさいよ」と晩酌を誘ってきた。普段は全く酒を飲まない僕のだがなぜかこの時だけは「いいよ」と返事をしてしまった。

「あら、絶対断られると思ったのに珍しいこともあるものね」

「久しぶりに飲みたいなと思ったただだよ」

僕は冷凍庫の奥に隠れた冷凍の枝豆を電子レンジであつためて缶ビールと共にテーブルに持っていった。缶ビールを開けると泡が溢れ、ツンと麦の匂いが鼻を通り抜ける。

「乾杯」

苦くて冷たいビールが喉をゴクゴクと通り抜ける。酒もジュースも開栓後の最初の一杯目が一番うまい。十分にビールの旨みを味わったあと「ぶはあ」と息を吐き出した。

「あの子と今日一緒に過ごしてみようだった？」

「とっても良い子だと思うよ。素直で明るくて、そして純粹だった」

僕がそういうと、姉ちゃんは少しだけ申し訳なさそうな顔をしていった。

「純粹かあ。だからこそ、私がちゃんと側にいてあげないといけないのにな。私ね。最近、思うんだ。親としても人としても未熟だから、あの子を産んでよかったのかな。って」

姉ちゃんにしては、随分とネガティブな発言だった。

「完璧な人間なんていないと思う。未熟ながらも、もがき続けるしかないんだよ」

「ふふ。そうだね。あんたのこと励ましてこいってママに言われたのに、逆にこっちが励まされちゃったな」

「なんだ。そんな理由でこっちきてたのかよ」

「ママ心配してたよ。一向に連絡返してこないって。あんた漫画家目指すのやめたこと、まだ言っていないでしょ」

「別に言わなくてもいいだろ。僕の人生なんだから」

姉ちゃんはテーブルに上半身をつ伏してだらしない姿勢でハイボールを一口飲む。

「ハヤトはさ、なんで絵の仕事なんかしてるの？」

「晩御飯食べてる時に言っただろ。絵が好きだからだって」

「ふーん」

絵が好きだからか。自分が続けられる仕事がかれしかないからか。今ではもう、なんでこんな仕事をやってるのか正直わかっていない。ただひたすら、締め切りを乗り切るためだけに仕事をしている。

「姉ちゃんこそ、なんでファッションデザイナーなんて仕事やってるのさ。もっと出張が少なくて、彼方と過ごせる時間の多い仕事たくさんあるだろ？」

「私も新しい服とか靴を考えるのが好きだからだよ。私が考えた服を着て誰かが自分をもっと好きになってくれるのが楽しいの。クサイセリフに聞こえると思うけど、私が人を喜ばせることができる仕事ってこれしかないのよ」

テーブルに突っ伏した姉ちゃんは目を細めた。そしてしばらくの沈黙の後に再び話し始めた。

「でもこんなふうに考えられるようになったのは、彼方が産まれてからの。それまでの私は今の仕事を情性でしか続けてなかった。彼方ってね。」

「すぐ何かをやりたがるの。行動力があるっていうのかしらね」

「あの落ち着きのなさには僕も驚いたよ」

「やっぱり、あんたもびっくりしたでしょ」と姉ちゃんが「あはは」と笑みをこぼしながら言った。

「で、何で彼方のおかげなの？」

「彼方って落ち着かないけど、何かしようとするときはずっと全力なんだ。純粹で全力でお手伝いしてくれるし、全力で遊ぶし、全力でいたずらする。そのエネルギーって本当に凄まじいのよ。そのエネルギーをみると、私もなんか嬉しくなっちゃって…。それから私もこのエネルギーを誰かに伝えて喜ばしたいと思ってるんだけど、やっぱり彼方には負けるわ…。私、あんな面白い子に育てた覚えはないんだけどな」

「姉ちゃんは気づいてないかもしれないけど、彼方がそんなふう
に育ったのはきつと姉ちゃんのおかげだよ。姉ちゃんが彼方を喜ばせ
ようと全力で頑張ってる姿を勝手に学んだんだと思う」

「そうだと良いんだけどね…」

再び沈黙が生まれた。姉ちゃんの話し方から察するにかなり眠たい
のだと思う。僕はその沈黙の中で「人を喜ばせるため、エネルギー
を伝えていく」という先ほどの姉ちゃんの話について考えていた。
僕は…自分がイラストレーターとして成功することばかり考えてい
た。でも、そんなことよりもっと大切なことがあったんだ。僕も僕
の絵で喜んでもらいたい。

「ごめん姉ちゃん。仕事してきていいかな」

姉ちゃんは僕の顔をみて「いいよ行っておいで」と懐かしい笑顔を
向けた。

僕はもう一度仕事用のデスクに座り、タブレットをひらく。下書
きの途中で放置してある作品が目に入った。僕はその下書きを全て
消した。誰かを喜ばせる。僕の絵を評価して気に入ってくれた依頼
主さんに喜んでもらうために。僕は全力でタブレットに液晶ペンを
はしらせた。いつもの通り顔の輪郭線から。頭の中でキャラクター
の表情をイメージし、バランスに気をつけながら描いていく。僕は
なんだか自分の作品にエネルギーを込めてるかのような感じがし
た。僕も僕の絵で喜んでもらいたい。僕が受け取ったエネルギーを
伝えたい。僕の絵に期待してくれる人に。時間も忘れて作業に没頭
しているうちに朝陽が昇ってきていた。カーテンの隙間から暖かい

日差しが僕の手元を照らす。朝陽が昇ってからも一時間、二時間と
時間が経過していく。僕はまだ、未熟な子どもなんだと思う。きつ
といつまでも。だから子どものままで純粋に仕事を楽しむことにす
る。

依頼主さんや彼方や姉ちゃんたちに喜んでもらえることを目指して
仕事を続けるよ。気づけば、作品は完成していた。

「できた…」

僕はため息と共にそうつぶやいた。

仕事を無事に終え、メールで作品を依頼主に提出した僕は、疲れた
身体を癒すためにソファアベッドへと向かうとテーブルで爆睡して
いる姉ちゃんが目に入った。

「結局、テーブルで寝たんだな…」

あどけない寝顔をみていると起こす気も湧かなかったので、僕は近
くにあった毛布をそっとかけてやった。風をひかないようにクロー
ーの電源を落とすと部屋に唯一残っていた機械音が消え去り、静寂
が訪れた。明朝の静かな空気を肌で感じた。同時に強い眠気が襲
ってきたため、僕は急いでソファアベッドに寝転がった。目を瞑る
と一気に意識が遠のいていく。起きたら、姉ちゃんたちにも完成し
た絵を見てもらう。

時計は十六時を指していた。疲れが溜まっていたのか、爆睡して
しまったようだ。物音がしない様子から、姉ちゃんと彼方は先に帰
ったことが予想できる。そういえば、絵の依頼主からのメールの返

事は返ってきているだろうか。何か修正があれば、この時間からだとやばい。僕は急いで、メールの確認をすると、依頼主から件名が空白のメールが届いていた。

「ハヤトさん、お世話になっております。今朝方、作品を拝見させていただきますました。本当によかったです。感動しました。自分が期待していた以上の作品です。――」

「どうやら、ちゃんと喜んでもらえたみたいだ。でも、彼方たちにもちゃんと見ってもらって、感想聞いときたかったな……。僕は、「はあ」と小さくため息をつく、寝起きで喉がカラカラになっていることに気づいた。普段使っているお気に入りのコップに水道水を満たし、ゴクゴクと一気に飲み干す。ふと、誰もいなくなったりビンクを見渡すとテーブルの上に置き手紙があるのを発見した。姉ちゃんと彼方からのものだった。「ハヤトへ。まずはじめにお礼を言わせてください。昨日は急だったにもかかわらず、彼方のことを預かってくれて本当にありがとう。彼方がとっても楽しかったと言っていました。帰り際に、彼方があなたの絵がすごいから見ていけってうるさいので、タブレットの絵を見せてもらいました。勝手に見てごめんなさいね。でも、仕事のものだからロックくらいはかけておきなさいな。まあ、そんなことは置いといて……。絵、とってもよかったです。こんな絵が描けるんだったらママも安心ね。ちゃんと連絡返してあげなさいよ。じゃあ、私たちは帰ります。お礼にオムライスを作っておいたから、お昼ご飯にでも食べてください。冷蔵庫に入っています。草々不」

僕は手紙を読み終わると、部屋の電気をつけた。昼白色の光が部屋に広がる。姉ちゃんからの手紙を無くさないように小物入れの引き出しにしまおうと部屋を移動すると、ポツポツと小さな赤色のランプが点滅しているのがみえた。固定電話の留守ランプだ。多分いつも通り、母さんからの伝言メッセージが入っている。僕は、一応それを再生してみた。

「ハヤト。元気かい？母さんだよ。お前の漫画の方の仕事はどうだい――」

いつもの母さんの声が聞こえる。僕は、いつも通り聞き流そうとしているけれど、今日はやけに耳に母さんの声が残る。そういえば、自分の絵をいつも褒めていてくれたのは母さんだけ。

夜

自分以外のセックスの生々しい表現なんて、気持ち悪いから聞きたくもないし、言いたくものないけれど、その行為の最中で何を感じたのかは少しだけ興味がある。快感か。虚無感か。孤独か。「好きな人以外とセックスするなんて考えられない」なんていうことを言う人がいるけれど、私からすれば、「好きな人以外とセックスできかないなんて考えられない」

世間では多数の男に股を簡単に開くことをヤリマンだの、ビッチだの、売女だのと卑下するきらいがある。まあ、確かにセックスってゴムをつけていようが、いまいが、子作りであることは変わりはない。すぐにセックスに至っている女がいれば、世間からバッシングを受けるのも当然だろう。だから、彼らの主張も十分わかる。だからこそ、私だって毎回全力でセックスに挑んでいる。そもそも、多数といっても、不特定ではない。セックスに至るまでの選別はちゃんとしている。だけど「そこに愛はあるんか？」と聞かれた場合、答えはノーだ。そこに愛はない。あるのは、ただの空虚な性欲だけだ。昔から、よく真面目そう。落ち着いた感じ。遊んでなさそう。エロさない。ってよく言われてきたけど、そうなんだよ。ただ真面目に気持ちいいことが好きだけなんだ。

「竿くへば、膣が鳴るなり、挿入時」
私は大学構内のカフェでツイッターのタイムラインに記された一件のツイートを読みあげた。めちゃくちゃ語呂がいい。声に出して読みたい日本語だ。

「ねえ、やめなよ。時と場所を考えて」

正面に座る黒髪の女が口を尖らせる。肩下まである真っ黒な髪とバラバラと切り揃えられた前髪はまるで清楚な日本人形のようなだが、ピンクのアイシャドウに火照ってるかのような赤いチークとプルンとした唇がかなりビッチ臭を漂わせている。

「悪い悪い。だけど、そんなこと言うならあんたも大学にその地雷メイクしてくんなよな」

私がそう言うと、「なんでよ、これ可愛いじゃん」と頬をぶくつと膨らませた。同性である私でさえ、可愛いと思うのだから、男からすればたまったもんじゃないのだろう。ちなみに、私はこの地雷ビッチのことをマノと呼んでいる。マノというのがファーストネームなのか、ラストネームなのか誰かからつけられたあだ名なのか。私にはわからない。「なんて呼べばいい？」と聞いた時に彼女はマノと答えたのだ。ただそれだけ。群れるのが苦手で、一人の方が気が楽な私の空間に唯一入ってくる人間だ。彼女は私のことを「あくびたん、昨日の休み何してたの？」とこんなふうにおかしな呼び方をしてくる。

「昨日？別にセクアポも課題もなかったから、のんびりツイッターしてたよ」本当に昨日はツイッターのタイムラインを眺め続けることくらいしかしていなかった。最近、好きなアカウントを見つけたのだ。マノは「ふーん」とコンビニで買ったフルーツゼリーをパクパク食べながらつぶやいた。

「私の話なんかどうでもいいでしょ。どうせ、昨日マノになんかあったから昨日の話題を振ってきたんでしょ」

「別にあくびたんの話がどうでもいいわけじゃないよ！気分悪くさせちゃったんならごめんね」とマノは泣きべそをかいた。

「私、そんな面倒臭い性格じゃないよ。で、何かあったの？」

マノは先ほどの泣きべそから、すぐに「よくぞ聞いてくれた」と明るい表情に変えた。

「実はさ、昨日クラブにいったの…」

「また行ったんだ…」

一度だけマノに連れて行ってもらったことがあるが、あのバカでかい音楽とテキーラをはじめとするアルコールの匂いがたちこめる空間が本当に無理だった。だから私はクラブに関してあまり良い印象がない。

「それでね、いつもみたいに前の方で踊ってたら超イケメンに話しかけられたの」

話すマノの表情がだんだん明るくなっていく。

「はいはい、それで？」

どうせ、いつものようにそのままラブホに行っちゃって話だろうと私は興味もないがマノの話に相槌を打ってやる。

「そのイケメンと話してるうちにめっちゃくちゃ酔っちゃって、気づいたら裸でホテルにいたのね。私もめっちゃやりたかったから、そこまではよかったんだけど…」

マノは眉を少しだけ顰め、微妙に暗い表情を作った。

「どうしたの？」

「そいつ生で入れてようとしてきたんだよ」

ホイホイとついていくマノも悪いが、男も男だな。どうやら、マノが「ゴムつけて」といったことで、男はゴムをつけたらしいが、セックス中のピストンで酒がまわりマノはほとんどそれ以降の記憶がないらしい。「ゴムつけて」なんて女の子に言わせるなよ…。

「大丈夫なの？妊娠してない？」

「うーん。大丈夫なんじゃないかな。多分最後までゴムつけてくれたと思うし、危険日じゃなかったし…」

危険日じゃなかったら妊娠もしないってわけでもないでしょ。と言いつつ返してやりたかったが、マノもそれくらいわかっている。

「それに、一応ピル飲んだから大丈夫！」

マノは八重歯を見せてはにかんだ。私はマノの壊れそうなこの明るい表情が大好きだ。とても愛しい。私が言えたことではないが、もっと自分を大切にすればいいのに。本当にバカなやつだ。

「女を酔い潰したらセックス出来る！って言ってる奴なんなの？店潰れたら買い物出来んの？」

風呂から上がった私は、髪をドライヤーで乾かしながら今日のマノにピッタシなツイートが目に入ったのでイイねを押しといた。夕飯も食べ、特にやる事がなかった私はいつものようにツイッターの世界に引きこもる。裏アカウンとして、始めたこのアカウンとも気づけば開設から一年でフォロワーが九千人にまで達していた。これではもう、何が裏か表かわからない。元々、性癖や趣味嗜好を悪戯に呟いたり、自身の承認欲求を満たすため自撮りを投下しているだけの小さいアカウンだったのだが、鍵をつけずにそんなことをしている、「ヤリモク」と呼ばれる男性からのフォロワーが増え、性癖に共感したらしい女性たちから共感のイイねが増えて気づけばここまで成長していた。今日の一五時からに私がしたツイートの既にリプライが九件、リツイートが二件、そしてイイねが百三十一件きていた。ツイート内容に関しては秘密。マノは私のアカウンのフォロワーの一人だったらしく、自撮り写真をヒントに私の正体を特定してきた。

「あの…」

「はい？」

「間違いだったら申し訳ないのですが、もしかしてあくびちゃんですか？」

「違います」

「でも、この写真の人とお姉さんそっくりですよ！」

という大学の大教室で地獄のような会話をしたのがマノとの出会いだ。まさか同じ大学の同じ専攻のやつがフォロワーにいるとは思わなかったし、まさか声までかけてくる奴がいるとは思わなかった。全くインターネットというものは恐ろしい。こんな出会いだったからこそ、私は最初ずっとマノのことを避けていたのだが、最近気付けばずっと近くにいる。嫌悪感はない。むしろ倫理観と何か貞操観念がぶっ壊れたあいつがちよっと好きだ。私にないものを持っている。

私は火照った体のままベッドに寝転んだ。裸で寝た時に、毛布のこの柔らかい質感が直接肌に伝わるのが好きだ。ツイッターを一旦閉じ、ホーム画面に戻るとラインに二件の通知が来ていた。二件ともマノだ。「これ見て」という文章と誰かとのトーク内容のスクショが送られてきていた。

「マノちゃん、ほんと可愛い。今週の日曜空いてない？ご飯たべてシーシャとか行こうよ」

と例のクラブの男からのメッセージにマノは困惑しているらしい。既読をつけてしまった手前上、無視するわけにもいかなないので私は文章を作り始めた。

「行けばイイじゃん。かっこいいんでしょ」

「えー、この流れセフレになりそうじゃん笑」

「私もどうせ今回もセフレ止まりだと思っよう笑」

「あくびたん、ひどい」

「付き合いたいなの？」

「うーん、イケメンだったし。そろそろ前の彼びと別れちゃって寂しくなってきたし…」

孤独嫌いのマノ。だから大学でもかなり友達が多い。たぶん、多少顔が良ければ誰でも付き合える。マノも私と同じくらい簡単に男に股をひらくが、その理由は少し違う。純粹に身体的な気持ち良さのためにセックスをするのが私だとしたら、マノは孤独を埋めるために、精神的な気持ち良さのためにセックスをすると考えて良いだろう。もちろん、私だって精神的な気持ち良さを埋めている節もあるし、マノだって同じだ。私とマノはかなり性格が違う。そんな私たちの唯一の共通点がセックスへの強い関心だろう。気持ちいいし、人肌恋しさ満たされるし、竿と穴さえあれば別に付き合ったり結婚したりしなくてもできるし、大体誰でもある程度はしたい共通の行為だし、人によって色んな癖とかやり方があってどんだけしても飽きないし面白いし楽しいしセックスは最高のコミュニケーションだということでお互い納得がいつている。まあ、究極の怠慢生活の末にセックスという強制自己肯定の手段をとっているだけかもしれないが。

「好きなの？」

「好きかも」

「じゃあ、セックスしないほうがイイかもね。セックスするからセフレ扱いされるんだから」

「好きなのかな？」

「あんたのことなんだから、知らないよ」

「もうわかんないよ（泣）好きってなに？」

「めんどくさ笑」

「えーん、あくびたん（泣）」

「好きかなーって思って、好きだなーって感じて、好きだってわかる。そんな感じらしいよ」

「何それ？」

「私の好きなアニメのセリフの引用」

「そういえば前に、サークルの子に映画誘われたとか言ってなかった？その子とは付き合わないの？」

「全然タイプじゃないもん笑」

「あっそ笑 とりあえず例のクラブ男と付き合えるように頑張れば？付き合って、なんか違うなって思えば別れればいいし」

「そだね。そうする」

「うん、じゃあおやすみ。また明日ね」

「あくびたん、ありがとね。おやすみ」

「ホイホイお金や見せかけの優しさをくれる男はたくさんいます。けれど、ホイホイと持続する気持ちや裏切らない態度やをくれる男ってのは希少です。」

朝、眠ぼけまなこを擦りながら起きた私はすぐにツイッターを開き、このツイートにイイねをそっと押した。私が今一番好きなアカウントのツイートだ。そして、溜まりに溜まったDMの通知欄をふと覗いてみる。ここにはヤリモクの男性たちから、ゴミのようなDMが溜まっている。私がツイッターから誰かと会うことはほとんどない。基本的には出会い系アプリで知り合った男性で性欲を満たす。だから、DMの返事もほとんどしない。私は朝からそんなゴミのようにくるDMを流し見していると一件のアカウントに目が止まった。このアイコンにこのID…。間違いない。さっき私がイイねしたばかりのあのアカウントだ。DMがきている。「どうも初めまして。せっかくフォローしていただいていたのにも関わらず、フォロバが遅くなってしまって申し訳ございません。いつもイイね有難うございます。」

私は一気に目が覚めて返事の文章を作り始めた。

「こちらこそフォロバしていただきありがとうございます。いつも不さんのツイートを楽しみに拝見させていただいております。これからどうぞよろしく願います」

私は胸に込み上げてくる熱い高揚感のようなものを感じていた。嬉しい。体が震える。時刻はまだ八時十分。おそらく、昼職の社会人であろう彼からこんな時間に返事がくることはないと思し、私は

寝癖のついた髪をとかし、大学に向かうための身支度をした。「そういえば…」と思いつき、普段は切っているツイッターのDMの通知をオンにして私は自宅のマンションをでた。大学まで徒歩五分とかららない通学路をいつもより陽気な気持ちで歩く。

一限目のための教室に着くと、まだ授業まで時間があるにもかかわらず何人もの優秀な生徒が着席していた。土曜の一限という変わり者か単位が足りてないやつしか取らない授業故に、個性的な外見の人間が多い。その中に一人、大学には場違いだが、この授業では普通の格好をした女子生徒がいた。マノだ。私はマノが着席している前の席に行き、「おはよ」と声をかけた。

「あ！あくびたん！」

私に気づいたマノはいつもの明るい表情を私に見せた。

「朝から五月蠅いなあ。それよりもマノがちゃんと一限に来るなんて珍しいね」

マノは頭を左右に動かしながら「あくびたん！早く会いたかったからさ」と明るい声で言っている。まるで子犬のようだ。

「何かあれから進展あったの？」

「うん。セフレ扱いはいやだよってちゃんと伝えた」

「そうなんだ」

「そしたら、当たり前だ。俺はお前のことが好きだから会いたかったとかおっくってきたの。これって信じてイイのかな」

私は今朝イイねしたばかりのツイートを思い出した。

「ホイホイお金や見せかけの優しさをくれる男はたくさんいるけど、ホイホイと持続する気持ちや裏切らない態度やくれる男ってのは希少らしいよ。私は、その男に会ったことないからなんともいえないけど、簡単に信用しちゃダメだよ」

「うん、わかった。とりあえず、明日会うことになったから会ってくる」

「気をつけてね。何かあったら連絡して。面白そうだし」

マノと会話をしていると、教室のドアがガラガラという音を立てた。同時に、白髪の腰の曲がったメガネの老人が入ってくる。これがこの授業の担当教授だ。私は「ふわぁ」とあくびをし、授業のための準備を始めた。

「クソムカつくねり消しを作った」

一限目の授業が終わり、別の授業のためマノと別れた私は空き教室に入ってこの文章とともに授業中に作ったねり消しの写真をアップ

した。一時間後にはリプライが三件、リツイートが二件、いいねが七十件きていた。もはや何をやってもそれなりに注目を浴びる…。この七十件のいいねの中の一つが不さんだ。DMの返事が数分前に返ってきていた。

「嬉しいです。そういうえば、あくびさん東京にお住まいなんですよ。普段のツイートから実は凄くきになっていたので、よかったら今度ご飯でも行きましょう」

まさかこんな展開になるとは思っていなかった。一応、不さんも自撮りを載せているため、なんとなく雰囲気はわかるが実際会って見た時にブサ男だったらショックだ。とはいえ、一度会ってみたい気持ちもある。私は空き教室で一人、返事の文章を作る。

「是非。学生なので、夕方からなら基本的にいつでも大丈夫です。私も不さんとお会いしてみたいので、気軽にお誘いしていただくと幸いです」

ここまできて会わない方が、後々モヤモヤすることだろうと考えた私は不さんの誘いに乗ってみた。当たり前だが、普通のヤリモクの男からこのようなDMが来ても、会おうとは思わない。不さんだから会うのだ。

返事をして五分も経たないうちに私が送ったメッセージに既読がついた。私は返事を固唾を呑んで待つ。

「そう思っていただけで嬉しいです。では、急ではありますが明日の夕方などはいかがでしょう？」

まさに急展開。こんなに早く会うことになるなんて思わなかった。以降、私たちは簡単に集合時間と集合場所を決めるやりとりを交わした結果、十九時に鶯谷駅に集合し、彼が行きたがっている肉料理店に行くことになった。

「都合よく使われたっていい。でも、少しずつでいいから優しさや愛を分けてほしい」

「デートって共に心を震わせたり、感動を共体験する時間だと思っています。だから観劇にしても食事にしても深く強く感動できる場所に行くのが好きです。そして、自分が相手に、相手が自分に感動してくれたら最高です。」

「なぜカメはウサギに勝てたのか。それはウサギはカメを見ていたけれど、カメはゴールを見ていたからである。」人との比較ではなく自己の目指すところを意識すること。同じありふれた話でも違う視点から学びを得ること。」

私は不さんのデートの前夜、彼のツイートをまた読み返していた。やっぱりどのツイートも良いことを言っている。大好きだ。ス

マホの画面をずっと見つめていると、着信のバイブが鳴り始めた。マノからだ。電話は苦手だが、私も少しだけマノと話したい気分であったため「もしもし」と電話に出てやった。

「あくびたーん、今大丈夫？」

「もう寝るところだけ。ちょっとだけならいいよ。どうしたの？」

「よかったあ。なんか明日のこと考えたら緊張して眠れないのお」

マノの猫撫で声が耳に残る…

「明日どこ行くんだっけ？」

「なんかとりあえず、夕方から日暮里でご飯食べに行くことになったよ」

明日の私の約束の時間と場所に近すぎる…。明日私が男とデートに行くことを今のマノに言うと話が長くなりそうなので黙っておくことにしよう。

「そっか、気をつけてね」

「ありがと。あくびたんは明日何か予定あるの？」

「うーん、読みたい本が溜まってるから明日はそれ読もうと思ってるよ」

「へえー。良い本あったら教えてね」

「とりあえずマノは『人間失格』から読んでみたら？」

「太宰治でしょ？難しい言葉が出てくる本やだ」

「意外と読みやすかったよ。主人公がマノと正反対の性格すぎて面白いかもね」

マノは笑い声とともに「何それー」とつぶやいた。こんな毒にも薬にもならない会話を三十分ほど続けたのち、睡魔がやってきたためマノとの電話を切った。

「変な男に引つかからないようにするには自己肯定感を高めるしかないということですよ。ただ、その方法はわからない」

不さんとは違う私が好きなアカウンターの好きなツイート。マノに紹介してやればよかったか。昼頃に起きた私はベランダでそんなことを思いながらタバコを吸っていた。近くの小学校のグラウンドから聞こえる小学生たちの声が聞こえる。毎日学校とかそれなりに忙しいのに酒もタバコもセックスもしないし、お金もないのに割と幸せそうな彼らに関心する…。そんなことを考えながら風にあたっていと、「ピンポーン」とインターホンが鳴る音が聞こえた。私は途中でまで吸ったタバコを地面に押し当て火を消した。私はボサボサの髪を隠すために近くにあったニット帽を深く被り、インターホンのモニターを確認すると宅配便のお兄さんが立っているのが見えた。玄関の近くに置いてあるボールペンをとりドアを開けると「おはようございます。宅配便です」と爽やかな笑顔を見せた。韓国系で背が高くカッコいい。

「サインお願いします」

ポケットとしていた私は「は、はい」とポケットからボールペンを取り出した。宅配のお兄さんが大きな荷物に貼ってある伝票を近づけてくる。なんか他の人よりも近くてドキドキする…。サインを書くとき「ありがとうございます」と言い残し、そそくさと背を向けて走っていった。朝からトキメキをありがとう。…もう昼だけだ。

私は風呂に入り、お気に入りのピンクの下着を装着し身支度を始めた。下地とファンデ、コンシーラーを塗り終え、アイメイクと眉

メイクに取り掛かる。すっぴんからどんどん可愛くなっていくので化粧は大好きだ。容姿の美しさは心の余裕だと本気で思う。リップを塗り、最後にハイライトなどをつけると私じゃない私の顔が完成した。ストリートアイロンの温度を上げて、髪を巻いていくと完全に別人になれる。もちろん、自撮りは忘れない。＼さんとの約束の時間が近づいてきたため、私は白シャツとブラウンのカーデイガン、そしてホワイトパンツを履いて外に出た。いつも大学に行く時のスニーカーではなく、黒いローファを履いて。

最寄駅から鶯谷駅に行くまで私の脳内は＼さんのことと同じくらいマノのことについてばいだった。ちゃんと起きたのか。遅刻せずに家を出れたのか。考えれば考えるほど不安になっていく。ラインの一件でもすればよかったのだが、いつすれば良いかわからなくなったためできなかった。とりあえず、このままでは自分のデートにも支障がでる可能性があるので、「ファイト」を意味する豚のスタンプだけを適当に送った。マノに関して一旦落ち着いた私は山手線に揺られながら、＼さんのタイムラインをまた眺めた。やっぱりどのツイートも言葉を大事に使っていて、百四十字で洗練された内容ばかりで良い。自分にとっては、美しいというレベルである。そんなことをしているうちに「次は鶯谷。鶯谷です」という車内アナウンスが流れた、いよいよだ。

「着きました。南口向かいますね」
私がこのようなDMを送ると、「僕もさつき南口着きました。青いブラウスを着てるので、すぐにわかると思います。よろしくお願

します」とかなり丁寧な文が返ってきた。今頃、マノも日暮里で待ち合わせしているのだろうか。

南口についた私は辺りをキョロキョロ見回してみた。すると青いブラウスに黒いストラックスを履いたなんともシンプルで綺麗な格好をした男性が目に入った。ここからじゃよく見えないが身長は百七十五センチくらいはありそうだ。かなり高いと思われる。

「こんにちは。＼さんですよね？」

私がおそるおそる声をかけてみると「わあ、ちゃんと会えてよかった！」と満面の笑みを浮かべてきた。タイムラインに載せていたイメージ通りの人だ。黒いマッシュっぽい髪型に白い肌。骨格のはっきりした顔で優男といった感じの男性だった。

「写真よりも実物の方がかっこいいですよ！」

私は思わず言ってしまった。

「どうもありがとうございます。あくびさんも、写真のイメージよりも可愛いらしい人で素敵です」

これが一目惚れというやつか。声のトーンも落ち着いていて、身体が熱くなるのを感じた。

「では、早速ご飯食べにいきましょう」

「宇垣アナ可愛いし好きだけどあの口元で性格いい女見たことない」

「このツイート好きすぎるんですよ」
「とタイムラインに書かれた私のツイートを見せてきて笑っている。」

「やめてください。自分のツイートをこうやって他人に見られるとめっちゃ恥ずかしいです」と笑いながらではあるが、本気で恥ずかしい。次々と出てくる肉料理をおおぼりながら丩さんと会話を楽しむ。初対面とは思えないくらい緊張しない。どうやら丩さんは現在二十五歳で専門職で働いているらしい。結婚など全く興味はないが超優良物件だ。

「私、あんまり人と話すこととか苦手なんですけど丩さんめっちゃ話しやすいです」

「ほんとですか。大学でお友達とか彼氏は作らないんですか？」

「友達というか、よく話す子が一人いますよ。私はとても好きだけど、あの子は私のこと友達とってくれているかはわかりません。とても社交的で友達の多い子ですから」

「へー、きっとその子もあくびさんのこと好きで大切な人だと思っていると思いますよ。こんなに面白い方なんですから」

「ありがとうございます。彼氏はしばらくいませんね。なんか作っちゃうと他の人とセックスとかできなくなっちゃうし…。丩さんもツイッターやSNSで出会った子とよくセックスするんですか？」

どうせこの後、セックスするんだし、下ネタ話しても大丈夫だと思いき赤裸々に話していく。まあ、そもそもあのアカウントで繋がった時点で私の性癖まで全てばれてるし…。

「実は、こうしてネット関係の人とお会いするのは初めてなんですよ」

「えー、DM送ってきてくれたけど、みんなに送ってるのかなって勘ぐってました。ごめんなさい」

「いいいえ。ただあくびさんにDMしたのは単純にツイートが面白かったり、言葉選びが美しかったりしてとても興味深かったからなんですすよね」

「あんなアカウントのどこが良いのか全然わからないんですけど、ありがとうございます」

「特別な魅力がなかったら、あそこまで大きなアカウントにはなりませんよ」

気づけば、注文した料理は全て食べ終わっていて、かなり時間も経っていた。楽しい時間というのはすぐに流れてしまうものだ。と言っても、これからが本番とも言えるが…。肉料理とともに嗜んだワインを飲みすぎてしまったか、尿意を感じたので「お手洗いに行ってくる」といっ席を立ったトイレの鏡には赤く紅潮した自身の顔が写った。少しだけ酔っている。そういえば、マノは今何をしているんだろう。スマホをチェックすると私が送ったスタンプに既読はついていない。ということは、向こうもかなり熱中して楽しんでることが予想される。私は少し安堵感を覚え、トイレを出ると丩さんはもう店を出る準備をしていた。

「いきましようか」

私も荷物もち丩さんの後ろをついて店を出る。いや、おかしいぞ。私は違和感を覚えた。

「あのお会計は…？」

「払っといたよ」

そうか、料理を食べ終わった後にトイレに行ったら男性はお会計を済ませておくとかいう社会の謎ルールがあるのを忘れていた。

「ごめんなさい。全くそんなつもりじゃなくって。あの…いくらでしたか」

「ええ！やめてよ。気をつかわないで。今回は僕から誘ったんだし払わせて」

「でも…」

「いいから。いいから」

不さんはそう言ってくれているが、私は納得いかない。私がカバンから財布を取り出そうとすると、「じゃあ、次ご飯行くときに奢って」と言ってくれた。

「絶対奢らせてください。ありがとうございます」

「うん、じゃあ駅まで送るよ」

「え？」

「ん？」

今からラブホに向かうんじゃないのか。今までの私の経験ではこの後絶対に行っていたのに。

「その…。まだ帰りたくないです」

自分からこんなことを言ったのは初めてだった。不さんは口をほかんと開けて、かなり驚いた表情をしている。

「僕ももう少し一緒にいたいけどさ、あくびさんいいの？」

「もちろんです。私、今日はその覚悟してきました！」

すると、不さんは夜の東京の街で大声を出して笑った。

「覚悟って大袈裟だなあ。じゃあ、ゆっくりできるところでもいいよっか」

不さんはタクシーを呼び止め、一緒にホテル街へと向かった。車内での沈黙が少し私を緊張させた。

ホテルの入室に入ると不さんがいきなり抱きついてきた。めちゃくちゃ良い匂いがする。この柔軟剤使いすぎましたみたいな匂いする人ってマジで沼。匂いって記憶に染み付く。

「あくびさん、僕はあなたのことが大好きだ。初対面なのにこんな風に思わせるあなたに惚れました」

「私も好きです」

私はそのままベッドへとおし倒された。その後のことは語るまでもない。不さんは私の体をずっと抱きしめていた。私もそっと抱き返した。明けない夜はないけれど、明けてほしくない時も明けてしまふのが夜。

「あなたのことが大好きだからあなたと繋がりたい。これ以上に正当なセックスをしたい理由なんてないと思います。」

テクニクとか体位とかの前に、あなたと1つになることの喜びや幸せをもっと主張したいですよ僕は。お互いがお互いの特別な相手と認め合う行為の最上級なんですから。」

不さんのツイートだ。そんな彼は今私の隣で静かないびきをかいて裸で眠っている。なんだか目が冴えて眠れなかった私はそんな彼の隣でツイッターを眺めていた。マノは今何をしているんだろう。そ

う思いラインの既読を確認するためアプリをひらいた。するとすぐにマノからのラインがはいった。

「あくびたん（泣）」

私はすぐに返事の文章を作った。

「どうしたの？」

「あいつにブロックされちゃった…」

「なんで？会わなかったの？」

「会ったよ。ご飯食べて、セックスもした」

「セックスしないって言ってたじゃん」

「だって、しようってしつこかったんだもん」

「はあ…、でもなんでブロックされたの？」

「多分私が好き好きって重かったからだと思う…」

それから私はマノの失恋話を彼女の気がすむまで聞いてやった。

「メンヘラ女、自分の「好き」はめっちゃくちゃ大事にするのに他人からもらう「好き」は蔑ろにしがちだよね」

ゼミ生のコメント

小島

「秋桜」

純粹さとは、子ども心がストレートに表現されていた。心理描写がシンプルで分かりやすかったので楽しく読めた。

「夜」

性の価値観は人それぞれであり、「Twitter」という現代のテーマ。

大胆な性描写をあえて避けることで秋桜同様に人の心の純粹さが伝わってきた。

佐藤

「秋桜」

純粹な子供の持つ力を見せつけられる作品であった。主人公の彼が少年から受けた力を今度は彼の画を見た人に感じてほしい。

「夜」

内容よりも言葉に重きを置いた作品のようだ。マノが最後までくいかなかったことが主人公のこれからを暗示しているように感じた。この先の彼女も見てみたい。

古川

対照的な二つの世界観を両方生み出せることは素敵です。

大きく方向性の違うものですが、どちらも底に溜まる空気感が意識されていたのではないかと思います。